

兵庫県文化財調査報告 第65冊

半田山

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告IX—

1989. 3

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は、兵庫県揖保郡揖保川町牛田に所在する山陽自動車道建設に伴う「牛田山遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、日本道路公团修路工事事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査を実施した。確認調査は、昭和58年7月25日～7月29日の3日間を、全面調査は昭和59年7月9日～昭和59年12月27日までの74日間を費やした。整理作業は、主に兵庫県埋蔵文化財調査事務所で昭和61年～63年度に実施した。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育文化財課技術職員岡田章一・渡辺昇が担当した。
4. 本書で示す標高値は、日本道路公团設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
5. 遺構の写真は、調査員が撮影した。図版5の航空写真は国土地理院撮影のものを使った。また、図版1～3の空中写真は㈱国際航業ならびに㈱産業航空に委託して撮影したものである。
6. 遺物の写真は、森 昭氏に依頼し撮影して戴いた。
7. 執筆分担は本文目次通りである。
8. 昭和58年度に実施した町屋散布地の確認調査の報告も併せて掲載した。
9. 本報告にかかる遺物・スライドなどは、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630-1）に保管している。

本文目次

例言

第1章 はじめ	渡辺	1
第1節 調査に至る経緯	渡辺	3
第2節 確認調査の経過	渡辺	5
第3節 町屋敷布地の確認調査	渡辺	7
第4節 全面調査の経過	渡辺	11
第5節 整理作業の経過	渡辺	16
第2章 位置と環境	渡辺	19
第3章 弥生時代前期の墓の調査	渡辺	45
第1節 土器棺墓	渡辺	54
第2節 土墳墓	渡辺	58
第3節 その他の遺構	渡辺	61
第4節 その他の弥生時代前期の遺物	渡辺	61
第5節 小結	渡辺	63
第4章 墳丘墓の調査	渡辺	65
第1節 半田山1号墓の調査	渡辺	97
1 立地	渡辺	97
2 外形	渡辺	97
3 主体部	渡辺	100
4 その他の遺構	渡辺	108
5 出土遺物		
(1) 弥生土器	高瀬	111
(2) 鉄器	石澤	125
(3) 青銅器	渡辺	125
6 小結	渡辺	126
第2節 半田山2号墓の調査	渡辺	128
1 立地	渡辺	128
2 外形	渡辺	128
3 主体部	渡辺	131
4 その他の遺構	渡辺	136

5 出 土 遺 物	137	
6 小 結	138	
第3節 半田山4・5・6号墓の測量調査	渡辺.....	140
第5章 弥生時代末の墓の調査	渡辺.....	143
第1節 立 地	147	
第2節 遺 構	147	
第3節 出 土 遺 物	151	
第6章 古墳の調査	155	
第1節 半田山3号墳の調査	187	
1 立 地	岡田.....	187
2 外 形	岡田.....	188
3 主 体 部	岡田.....	188
4 遺物出土状態	小川.....	189
5 出 土 遺 物			
(1) 須恵器	小川.....	193
(2) 土師器	小川.....	206
(3) 鉄 器	石澤.....	207
(4) 耳 環	石澤.....	209
(5) ガラス小玉	石澤.....	209
6 小 結	岡田.....	209
第2節 半田山7号墳の調査	211	
1 立 地	渡辺.....	211
2 外 形	渡辺.....	211
3 墳 丘 桑 成	渡辺.....	214
4 主 体 部	渡辺.....	216
5 遺物出土状態	渡辺.....	217
6 出 土 遺 物			
(1) 須恵器	小川.....	218
(2) 後世の土器	小川.....	222
(3) 鉄 器	石澤.....	222
(4) 玉	石澤.....	223
7 小 結	渡辺.....	224
第7章 自然化学からの遺物の検討	229	

第1節 半田山1号墓の第1主体（箱式木棺）に使用された水銀朱（HgS）総量算出の試み	安田・井村	231
第2節 1号墓第1主体出土の腐食銅鏡細片と焼化銅鏡 片および2号墓第1主体出土の原物不明の銅鏡 付着小片の原子吸光分析法による化学分析	安田・井村	234
第3節 半田山墳墓群の墳丘上ならびに墳丘周辺部の遺構より出土した土器の化学分析	安田・井村	237
第4節 1号墓第1主体出土鐵劍付着鐵物片	角山	242
第5節 半田山3・7号墳、片島1号墳出土須恵器の胎土分析	三辻	244
第8章 おわりに	渡辺	249
第1節 半田山周辺の遺跡分布について		252
第2節 半田山1号墓の主体部について		255
第3節 墓としての半田山について		258

表 目 次

第1表 町屋散布地 出土遺物一覧表	10
第2表 半田山周辺の遺跡一覧表	31
第3表 1号墓出土土器觀察表	123・124
第4表 2号墓出土土器觀察表	138
第5表 弥生時代末の土器觀察表	153
第6表 3号墳須恵器觀察表	199～206
第7表 3号墳土師器觀察表	206
第8表 3号墳鐵器計測表	207
第9表 3号墳耳環計測表	209
第10表 3号墳玉計測表	209
第11表 7号墳出土須恵器觀察表	220～222
第12表 7号墳出土鐵器計測表	224
第13表 7号墳出土玉類計測表	226
第14表 原子吸光光度計の測定条件	235
第15表 半田山墳墓群出土鏡、銅鏡、原物不明の銅片試料中の金属成分の分析値	235
第16表 半田山墳墓群および掛保川流域遺跡出土土器の胎土の化学分析値	238・239

挿 図 目 次

第1図	調査地遠景	3
第2図	山陽自動車道路線内の遺跡	4
第3図	確認調査トレンチ設定図	5
第4図	調査地全景	6
第5図	調査地全景と第3トレンチ	6
第6図	第2トレンチ	7
第7図	調査風景	7
第8図	町屋散布地 遠景	8
第9図	町屋散布地 坪設定図	8
第10図	町屋散布地 土壙断面図	9
第11図	坪2 北壁	9
第12図	坪4 北壁	9
第13図	町屋散布地 出土土器実測図	10
第14図	町屋散布地 出土土器	10
第15図	遺物出土状態	10
第16図	調査風景	11
第17図	調査風景	12
第18図	鏡出土状態	13
第19図	調査風景	13
第20図	現地説明会風景	14
第21図	調査風景	14
第22図	調査風景	15
第23図	整理作業風景	16
第24図	整理作業風景	17
第25図	展示風景	18
第26図	揖保川の源 大身谷	27
第27図	揖保川と林田川合流点(有紋の瀬)	27
第28図	半田山周辺の地形	28
第29図	福田天神遺跡	29

第30図	半田山周辺の空中写真	29
第31図	半田山周辺の遺跡	30
第32図	片吹遺跡	32
第33図	中井1号墳三重環濠	32
第34図	中井2号墳	32
第35図	中井廃寺礎石	33
第36図	飯粒の丘（中臣山）	33
第37図	宝林寺北遺跡	33
第38図	宝林寺北遺跡、中世墓とその遺物	34
第39図	宝林寺境内石棺	34
第40図	半田山周辺の墳丘墓と前期古墳	35
第41図	斐久山1号墳	36
第42図	斐久山墳墓群（斐久山墳墓群転載）	36
第43図	斐久山2号墓	37
第44図	斐久山42号墓土器棺	37
第45図	野田窓跡	37
第46図	鳥坂2号墳	38
第47図	鳥坂3号墳 銀	38
第48図	龍子向イ山1号墳	39
第49図	中垣内1号墳	40
第50図	白鷺山墳墓群出土遺物	41
第51図	半田山 墳丘墓・古墳配置図	42
第52図	半田山 地形測量図	43, 44
第53図	弥生前期の墓 位置図	53
第54図	土器棺墓1 実測図	54
第55図	土器棺墓1 棺身実測図	55
第56図	土器棺墓2 檢出状況	56
第57図	土器棺墓2・土壤墓2・土壤実測図	57
第58図	土器棺墓2 棺身実測図	58
第59図	土壤墓1 実測図	59
第60図	土壤墓1 土器実測図	60
第61図	土壤墓1 土器出土状態	60
第62図	弥生前期 土器実測図	61

第63図	弥生前期 土器拓影	62
第64図	1号墓 地形測量図	98
第65図	1号墓 墳丘断面図	99
第66図	築造時の主体部 位置図	101
第67図	第1・2主体 実測図	102
第68図	第1・2主体 墓壙埋土	103
第69図	第1主体 墓壙断面	103
第70図	第1主体 遺物出土状態	103
第71図	第3主体 墓壙埋土	104
第72図	第3主体 実測図	105
第73図	第4・5主体	105
第74図	追葬時の主体部 位置図	106
第75図	第4・5主体 実測図	107
第76図	追葬時の墓壙と第6主体墓壙	108
第77図	第6主体 実測図	109
第78図	土壤1 実測図	110
第79図	土壤1 土器出土状態	110
第80図	土壤2 実測図	111
第81図	第6主体 出土土器実測図	112
第82図	土壤1 出土土器実測図	113
第83図	土壤2 出土土器実測図	114
第84図	土壤3 出土土器	115
第85図	墓壙出土土器 実測図(1)	116
第86図	墓壙出土土器 実測図(2)	117
第87図	弥生土器 文様拓影(1)	118
第88図	弥生土器 文様拓影(2)	119
第89図	第6主体 鉄鎌	125
第90図	鉄劍 実測図	126
第91図	銅鏡・小形彷彿鏡 実測図	127
第92図	2号墓 墳丘断面図	128
第93図	2号墓 地形測量図	129
第94図	2号墓 墳丘測量図	130
第95図	2号墓 墳裾土層断面図	131

第96図	第1主体 実測図	132
第97図	第2主体 実測図	134
第98図	第3主体 実測図	135
第99図	土壤1 実測図	136
第100図	土壤2 実測図	137
第101図	遺物出土状態(埴縫)	137
第102図	2号墓 出土土器実測図	138
第103図	埴 実測図	138
第104図	半田山4・5・6号墓 地形測量図	141
第105図	土壤墓1 土層堆積状況	147
第106図	土壤墓1 実測図	148
第107図	土壤墓2 実測図	148
第108図	土壤墓2 枕石	149
第109図	土壤墓2~4 位置図	149
第110図	土壤墓3 実測図	150
第111図	土壤墓4 実測図	150
第112図	弥生時代末の土器実測図	152
第113図	弥生時代末の土器拓影	154
第114図	3号墳 地形測量図	187
第115図	3号墳 墳丘測量図	188
第116図	3号墳 墳丘土層断面図	189
第117図	3号墳 石室遺物出土状態	190
第118図	3号墳 横穴式石室実測図	191, 192
第119図	3号墳 頸椎器 実測図(1)	194
第120図	3号墳 頸椎器 実測図(2)	195
第121図	3号墳 頸椎器拓影	196
第122図	3号墳 墳恵器 実測図(3)	197
第123図	3号墳 墳恵器 実測図(4)	198
第124図	3号墳 土師器 実測図	206
第125図	3号墳 鉄器実測図	208
第126図	3号墳 耳環 実測図	209
第127図	3号墳 玉 実測図	209
第128図	7号墳 地形測量図	212

第129図	7号墳 墳丘測量図	213
第130図	7号墳 墳丘土層断面図	214
第131図	7号墳 主体部実測図	215
第132図	7号墳主体部 遺物出土状態	216
第133図	7号墳 東側墳裾遺物出土状態	218
第134図	7号墳 須恵器実測図(1)	219
第135図	7号墳 須恵器拓影	219
第136図	高杯の文様	219
第137図	7号墳 須恵器実測図(2)	220
第138図	後世の土器 実測図	220
第139図	7号墳 鉄器実測図(1)	223
第140図	7号墳 鉄器実測図(2)	223
第141図	7号墳 玉類実測図	225
第142図	台付壺 復原図	227
第143図	牛田山遠景	228
第144図	牛田山墳墓群および福保川流域遺跡出土土器の Al_2O_3 -般不溶性成分%グラフ	240
第145図	職物付着状況模式図	242
第146図	職物断面模式図	242
第147図	職物形式模式図	243
第148図	燃方向	243
第149図	片島遺跡 出土須恵器のRb-Sr分布図	244
第150図	K因子の対比	245
第151図	Ca因子の対比	245
第152図	牛田山7号墳 出土須恵器のRb-Sr分布図	246
第153図	牛田山3号墳 出土須恵器のRb-Sr分布図	246
第154図	1号墓 主体部の位置関係	256
第155図	牛田山1号墓 出土鏡複葉図	258
第156図	牛田山8号墳 石棺実測図	258
第157図	牛田山8号墳 石棺	259

図版目次

- 図版1 1号墓出土遺物
図版2 (上) 半田山遠景(北東から)
(下) 半田山遠景(北西から)
図版3 (上) 半田山遠景(南東から)
(下) 半田山遠景(南西から)
図版4 (上) 弥生前期土器棺1・土壙墓1全景
(下) 弥生前期土器棺・土壙墓出土土器
図版5 (上) 半田山遠景(南から)
(下) 半田山遠景(北西から)
図版6 (上) 半田山遠景(北から)
(下) 半田山全景(南東から)
図版7 (上) 半田山調査地全景
(下) 半田山調査地全景
図版8 (上) 半田山遠景(南西から)
(下) 半田山遠景(南東・揖保川対岸から)
図版9 (上) 1号墓からの眺望(北方向)
(下) 1号墓からの眺望(東方向)
図版10 (上) 1号墓からの眺望(南方向)
(下) 1号墓からの眺望(西方向)
図版11 (上) 土器棺墓1・土壙墓1(東から)
(中) 土器棺墓1・土壙墓1(西から)
(下) 土壙墓1(西から)
図版12 (上) 土器棺墓1(西から)
(下) 土器棺墓1(南から)
図版13 (上) 土器棺墓2・土壙墓2・土壙
(下) 土器棺墓2
図版14 弥生前期の墓出土土器
図版15 弥生前期の土器
図版16 (上) 弥生前期の土器(壹)
(下) 弥生前期の土器(貳)
図版17 (上) 1・2・3号墓・3号墳全景(南西から)

- (下) 1・2・3号墓・3号墳全景(西から)
図版18 (上) 1号墓新段階主体部上面(土壤1~3)
(下) 1号墓第6主体
図版19 (上) 2号墓・3号墳全景
(下) 2号墓全景
図版20 (上) 2号墓第1主体
(下) 2号墓墳丘断面
図版21 (上) 1号墓全景(調査前・北西から)
(下) 1号墓調査前の状況
図版22 (上) 1・2号墓全景(北西から)
(下) 1・2号墓全景(南東から)
図版23 (上) 1・2号墓全景(北北西から)
(下) 1・2号墓全景(北西から)
図版24 (上) 第6主体全景
(下) 第6主体全景
図版25 (上) 第6主体(側面から)
(下) 第6主体(蓋除去後・側面から)
図版26 (上) 土壇1~3全景(南東から)
(下) 土壇1・3全景(南東から)
図版27 (左) 土壇1遺物出土状態
(右) 土壇墓4遺物出土状態
図版28 (上) 第4・5主体・土壇墓2全景(北西から)
(下) 第4・5主体全景(南東から)
図版29 (上) 第4主体全景(南東から)
(下左) 銚出土状態
(下右) 墓壇埋土器出土状態
図版30 (上) 第1・2主体全景(東から)
(下) 第1・2主体全景(西から)
図版31 (上) 第1主体(東から)
(下) 第1主体(南から)
図版32 (上) 第1~3主体(北西から)
(下) 第3主体(東から)
図版33 (上) 2号墓全景(南東から)

- (下) 2号墓第2主体
- 図版34 (上) 2号墓第1主体検出状況
- (下) 2号墓第1主体
- 図版35 (上) 2号墓全景(西から)
- (下) 2号墓第1主体
- 図版36 (上) 2号墓墳裾堆積状況
- (下) 2号墓墳裾堆積状況
- 図版37 (上) 2号墓墳丘断面
- (下) 2号墓墳丘断面と土壤1・2
- 図版38 1号墓出土土器
- 図版39 1号墓出土土器
- 図版40 1号墓出土土器
- 図版41 1号墓第6主体出土土器(土器館)
- 図版42 1号墓出土土器
- 図版43 1号墓第1主体出土鉄劍
- 図版44 (上) 2号墓出土埴・1号墓出土鉄器・銅鏡・鏡
- (下) 2号墓出土土器
- 図版45 半田山3~5号墓全景
- 図版46 (上) 4号墓全景
- (下) 5号墓全景
- 図版47 (上) 土壙墓群検出状況
- (下左) 土壙墓2
- (下右) 土壙墓1
- 図版48 弥生末の墓出土土器
- 図版49 (上) 半田山空中写真(北東から)
- (下) 半田山1・2号墓・3号墳全景
- 図版50 (上) 3号墳石室全景(南から)
- (下) 3号墳石室全景(北から)
- 図版51 (上) 3号墳石室内遺物出土状態
- (下) 3・7号墳出土玉類(黄色ガラス小玉1点のみ3号墳)
- 図版52 (上) 7号墳主体部全景
- (下) 7号墳墳丘断面
- 図版53 (上) 3号墳全景(北西から)

- (下) 3号墳全景(南東から)
- 図版54 3号墳横穴式石室全景(南から)
- 図版55 (上) 3号墳横穴式石室全景(南から)
(下) 3号墳横穴式石室全景(北から)
- 図版56 (上) 3号墳横穴式石室全景(西から)
(下) 3号墳横穴式石室奥壁
- 図版57 (上) 3号墳堆積状況
(中) 3号墳堆積状況
(下) 3号墳横穴式石室遺物出土状態
- 図版58 (上) 玄門周辺遺物出土状態
(下) 腹道部遺物出土状態
- 図版59 3号墳出土土器
- 図版60 3号墳出土土器
- 図版61 3号墳出土土器
- 図版62 3号墳出土土器
- 図版63 3号墳出土土器
- 図版64 3号墳出土土器
- 図版65 3号墳出土土器
- 図版66 3号墳出土土器
- 図版67 (上) 3号墳出土土器
(下) 3号墳出土鐵器・ガラス小玉
- 図版68 (上・中) 3号墳出土鐵器
(下) 3号墳出土耳環
- 図版69 (左上) 7号墳調査前全景(北から)
(左下) 7号墳調査前全景(北東から)
(右上) 7号墳全景(北から)
(右下) 7号墳全景(北東から)
- 図版70 (上) 7号墳全景(東から)
(下) 7号墳全景(南東から)
- 図版71 (上) 7号墳主体部全景
(下) 7号墳堆積状況
- 図版72 (上) 7号墳主体部全景
(下) 主体部遺物出土状態

- 図版73 (上) 7号墳埴器遺物出土状態
 (下) 7号墳埴器遺物出土状態
- 図版74 (上) 7号墳墳丘断面
 (下) 7号墳墳丘断面
- 図版75 7号墳出土土器
- 図版76 7号墳出土土器
- 図版77 7号墳出土鉄器
- 図版78 (上) 7号墳出土鉄臘に残る布痕
 (下) 7号墳出土玉類



越後川町の位置



1号墓出土遺物



宇田山遠景（北東から）



宇田山遠景（北西から）



李田山遠景（南東から）



半田山遠景（南西から）

图版4



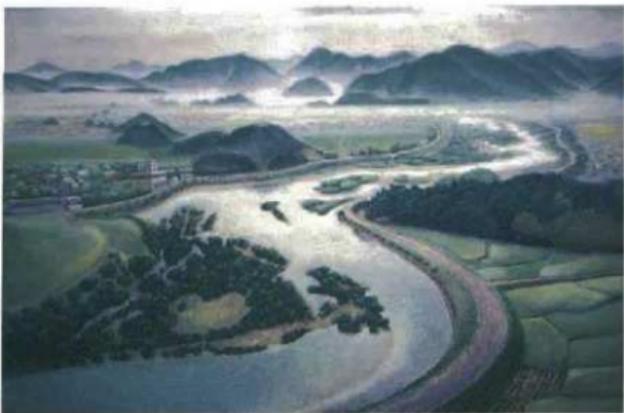
弥生前期 土器棺1・土塙墓1全景



弥生前期 土器棺・土塙墓出土土器

第1章

はじめに



第1節 調査に至る経緯

山陽自動車道は、吹田市を起点とし神戸市北区まで中国嶺貫自動車道と路面を共有し、三木市・加古川市・姫路市と徐々に南に下がりながら播磨を西進し、中国地方の南部を縦断し山口市に至る総延長430kmの高速自動車道路である。現在、東側では竜野西～備前インターチェンジ間25.3kmが、昭和57年3月に供用を開始している。

昭和46年に基本計画が発表されてから、幅広い範囲で分布調査が実施された。竜野市域は上田哲也氏を中心に行われた。ルート決定後の詳細分布調査は昭和50年度に行われ、日本道路公团大阪建設局と兵庫県教育委員会の間で協議が重ねられてきた。兵庫県教育委員会も随時分布調査を行い、調査結果ごとに協議も行われている。それら分布調査によって半田山も確認された遺跡である。当初は古墳1基（1号墓）、古墳状隆起1基（5号墓）として挙げられている。しかし、その後の周辺の調査結果などから南斜面に弥生時代集落跡の可能性も考えられ、2地点以外に尾根上や斜面も確認調査対象とすることになった。

山陽自動車道関連の確認調査は、昭和53年度に相生市ツブレ池古墳・竜野市と揖保川町にまたがる片島1号墳・南山散布地の確認調査を皮切りに、翌年に赤穂市堂山遺跡・相生市緑ヶ丘窓塗群の全面調査が行われ、昭和61年度まで竜野市を中心として調査が実施されている。当初20箇所地点が挙げられていたが、確認調査で終了したものや遺跡が路線外に存在するものを除いて、姫路東インターチェンジ以西では15箇所で全面調査が実施されている。

昭和57年度も、前年度までの調査に引き続いて竜野西インターチェンジ以東の調査を実施することになり、兵庫県教育委員会は2パーティ（4人）を投入し、半田山も57年度の調査計画に入っていた。用地買収の都合で、57年度は調査が不可能となつたため、調査着手は次年度以降となつた。昭和58年度になって、半田山全体の買収は終了していないものの斜面の確認調査を実施することとした。主に南斜面の弥生時代集落跡を対象とするものである。

昭和59年度は、兵庫県教育委員会にとつては近畿自動車道舞鶴線・本四連絡自動車道・太子竜野バイパスなど大規模工事が重なり、調査量が飽和状態になつてゐた。昭和59年度以降、作業委託を実施し調査方法にも変化が生じ始めた年である。そのため、調査計画が潤滑に立てられず、それに伴つて山陽自動車道の調査も太子竜野バイパスに係る宝林寺北遺跡終了後に、そのパーティ（2人）が担当することとなつた。



第1回 調査地遠景



第2図 山陽自動車道路線内の遺跡

そのため調査着手が遅れ、7月9日から実施した。

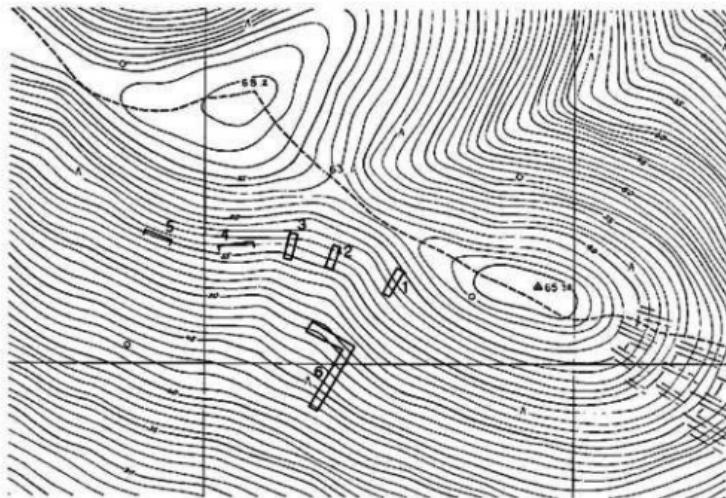
調査は、再伐作業隊から手掛け、地形測量を行ったのち、1号墓から調査を始めた。分布調査では1基の古墳と1ヶ所の古墳状隆起が確認されていた。新たに古墳状隆起が尾根鞍部に認められたので、調査の対象とした。また、尾根上や緩斜面に弥生時代の集落跡や墳墓が存在する可能性もあるので、併せて確認調査を実施した。その結果、古墳状隆起として点を落としていた尾根上に2基の墳丘（計3基）が確認され、尾根上から鞍部にかけての南斜面で1基の古墳と墳丘を持たない墓が複数存在することが確認された。また、1号墓の周辺でも同様の墓が確認された。その結果、用地内の尾根上はほぼ全域調査対象ということになった。調査面積は、約720m²である。その間、調査対象（面積）を変更したため、調査経費・日数などに大きな変化が生じることとなり、契約変更を行った。その際に、尾根上の3基の墳丘についての保存協議を行ったところ、計画では中央の墳丘が掛かる程度だが、地形測量を実施して正確な位置を出して、再度協議し保存されることとなった。

調査を行った結果、当初計画と比較して複数時期の造構が存在し、調査内容に変化が起きたので、昭和59年度の山陽自動車道に伴う調査計画を考え直す必要が生じてきた。他のパーティが入る予定になっていた西脇散布地も同様の理由で遅れたことから、さらに計画の見直しが必

要となってきた。日本道路公団も兵庫県教育委員会も今後の調査量を把握する必要があることから、確認調査成果の早い段階での入手が望まれた。その結果、半田山の調査を中断し、西脇散布地・相野散布地・西脇古墳の確認調査を実施することとなった。昭和57・58年度に実施し、本体工事の都合で調査が残っていた龍子向イ山・中井鴨池窯跡の調査も急を要することから、西脇散布地などの確認調査前に行うこととした。9月15日付の現地説明会終了後、残務処理をしたのち中断し、西脇散布地の確認調査が終わった11月5日に再開した。そして、3・7号墳と弥生前期の墓の調査を主に行い、昭和59年12月27日に調査を終了した。調査に費やした日数は74日、人数は延べ1041人である。

第2節 確認調査の経過

山陽自動車道路線内の買収経過によって、昭和58年度も半田山の調査は延期された。しかし、これは尾根上の墳丘墓（古墳）を対象にしてのことと、最近の調査では丘陵上の弥生時代の遺跡の存在事例が増加してきた。特に、昭和57年度に実施した龍子向イ山・養久乙城山周遭跡の調査成果により弥生時代中期後半の集落跡が営まれていることが知られるようになった。隣接する丘陵での遺跡の確認例であることから、半田山丘陵についても同様の遺跡が存在する可能性が求められた。南斜面については、集落が営まれる立地条件を有していることから、確認調



第3図 確認調査トレンチ設定図

査の対象に加えることとなった。

弥生期の集落跡の調査の場合、墳丘墓（古墳）の調査とは異なり、調査に要する日数・予算の幅が大きいことが挙げられる。特に、当初予定の数倍の調査日数が費やされる可能性があるので、次年度の工事計画・調査計画を企図するうえで、実態を把握する必要が生じてきた。そのため、調査可能地域の中で、主に集落跡を対象とした確認調査を実施することとなった。

調査は、中井古墳群の調査期間中の着手可能な時期に実施することとし、買収済み地域の伐採が終了する7月末に行うこととした。その間にも、数回現地にて協議を重ねてきた。

調査は第3図のように6本のトレントを設定した。その結果、弥生時代集落跡の存在する可能性は無くなかった。ただ、標高の高い部分に設けた第1トレントで弥生土器片が出土しており、分布調査で確認した墳丘墓以外にも尾根上付近に遺構が存在する確率が高まつた。調査は立ち会い調査を除いて3日間行った。

調査の組織

発掘・整理調査とともに、日本道路公團大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。以下、すべて同様である。

調査事務 社会教育・文化財課

課長 藤本繁

文化財担当参事 吉村芳郎

副課長 道畠實

課長補佐 池田義雄

管理係長 福永慶造

埋蔵文化財 横木誠一

調査係長

主任 八家均

技術職員 大平茂

事務職員 杉本恵子

調査担当 社会教育・文化財課

技術職員 渡辺昇

調査参加者

吉田一夫・吉田勝・

西田數美・吉本三四二・

吉田政信・赤松千恵子・

出田敬子・横田久美



第4図 調査地全景



第5図 調査地全景と第3トレント

調査日誌抄

1983年7月25日(日) 晴れ

半田山山裾部分は開墾などによって手が加えられていることが明らかなので、重機を使用して確認を行った。また、その上部の竹林も人力では困難なので重機を使用した。山裾部分では近世以降の土器・瓦は見られたが、遺構は認められず、堆積土も搅乱を受けているところが多くあった。



第6図 第2トレンチ



第7図 調査風景

7月26日(月) 晴れ

等高線に直交してトレンチを設定する。調査順に番号を与える。(第3図)1トレンチで鉢生土器小片出土する。3本のトレンチすべて土壤化した層や包含層認められず、遺構存在の可能性薄い。基本的に表土・黄褐色土・地山となっている。堆積土も少なく、地山まで浅いところで10cm弱、深いところでも40cm前後である。

7月29日(木) 晴れ時々曇り

現況で崖面を呈している個所2地点の断面を清掃する。その他、数箇所崖面を観察するが、遺構・包含層認められない。写真撮影・実測作業を行い、確認調査終了する。

第3節 町屋散布地の確認調査

山陽自動車道に伴う分布調査では確認されなかったが、その後工事の進捗に伴って実施した再分布調査によって確認された地点である。分布調査の面積が狭いことや現地調査をするまでの条件に恵まれたこともあろうが、須恵器・土師器・陶磁器の小片とともに鉄鋸を探集している。また、地元でも耕作の段階で鉄鋸が出土していることを知った。そのため、工事に先立ち確認調査を実施することとなった。前年度の昭和57年度に町屋散布地の南西方向の養久乙城山D地区の調査で製鐵遺構が検出されたことにより、さらに遺跡の可能性が高まったので調査を

実施することとなった。

調査は、半田山南斜面同様集落の可能性があり、調査が必要な場合、調査工程・計画を根本的に立て直さなければならないことから、早急にその資料が必要なので、急振確認調査を先行して行うこととした。調査は、養久山43号墳の調査終了後、中井古墳群の調査準備に入る前の昭和58年5月24・25日の2日間に行った。



第8図 町屋散布地遠景

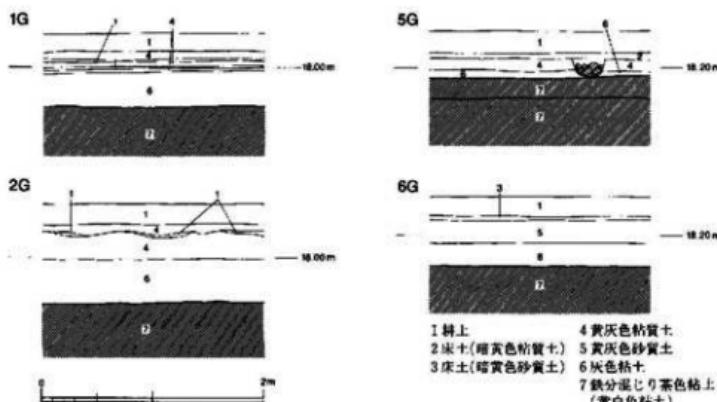
1. 所在地 揖保郡揖保川町半田字長田・楠
2. 調査期間 昭和58年5月24・25日
3. 調査主体 兵庫県教育委員会
(担当) 社会教育・文化財課
主任 井守徳男
技術職員 渡辺 異

4. 調査結果

調査対象地となっている部分の地図はすべて水田であった。調査は $2 \times 2\text{ m}$ の坪(グリッド)を基準として確認調査を行った。ただ、坪5だけ性格が不明瞭で遺構が遺存している可能性が考えられたので、その後に1m拡張し $2 \times 3\text{ m}$ の坪とした。調査地は6地点で、調査面積は 26 m^2 と小規模な調査である。



第9図 町屋散布地坪設定図



第10図 町屋散布地土層断面図

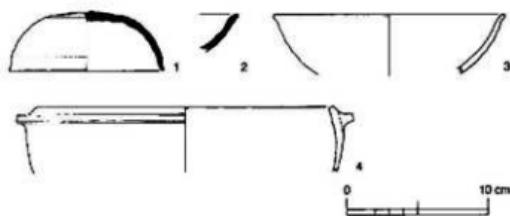
現在の圃場整備と同様の改良工事が行われ、その際に遺跡は消失したかもしれない。地山は北から南へ緩やかに傾斜している。坪3では耕土直下が地山となっている。旧地形を削平したものと思われる。坪4では約50cmの盛土がなされていた。坪5を設定した田は瓦屋があったと言われており、その言い伝え通り、瓦片とともに焼土・炭が出土している。ただ、遺構は存在しなかった。しかし、数点の近世～近代の陶磁器も出土していることから確実に瓦屋が存在したものと思われる。出土遺物の中に完形に近い土器もあるので、標高が僅かに高い西側の用地外の部分に遺跡の存在の可能性が考えられる。工場部分から現在の田中の集落にかけての地域が小集落が存在しているのである。



第11図 坪2北壁



第12図 坪4北壁



第13図 町屋散布地出土土器実測図



第14図 町屋散布地出土土器



第15図 遺物出土状態

5. 出土遺物

6ヶ所すべての坪から多少の差はあるが、遺物は出土している。出土遺物の内訳は第1表の通りである。

出土遺物の時期は、弥生時代後期の壺の破片が最も古い時期の遺物である。時期的にはその後中世末までの遺物が見られる。同一層から出土していることから、古い段階の遺構面は、周辺の水田も含めて存在しないだろうと思われる。

第1表 町屋散布地 出土遺物一覧表

坪No	出土総数	弥生土器	須恵器	土師器	瓦質土器	陶磁器	実測No
1	19			19			
2	21		4	15	2		4
3	2		2				
4	1			1			3
5	13	1	8	3		1	1・2
6	2		1	1			

第4節 全面調査の経過

前節で記したように昭和59年度は、兵庫県教育委員会にとって大規模開発が重なり、多忙を極めた年度であった。そのため、調査計画も円滑には進まなかった。また、大規模な調査が続いたため、昭和58年度から継続して調査を行っている遺跡が多数あった。山陽自動車道に伴う調査も前年度に中断していたこともあって、継続調査終了後に着手することとなった。山陽自動車道の調査も太子竜野バイパスに係る宝林寺北遺跡終了後に、そのパーティ（2人）が引き継ぎ担当することとなった。調査着手が遅れ、7月9日から実施した。

調査は再伐作業から始め、地形測量を行ったのち、1号墓から掘り下げを開始した。基本的には1→2→3→7号墓（墳）の順序で調査を進行していくが、調査内容の変化もあり、重複している部分も多くあった。また、調査を進めて行く中で、1号墓周辺・3号墳周辺では下層の遺構が確認されたので調査工程に変化が生じた。前述したように、他の要因で調査を中断したことと調査期間が延長した理由である。

調査は梅雨の調査準備から始まり、梅雨明けの7月16日から本格的に調査を開始し、中断した9月28日まで実働47日間を費やして、1・2号墓の調査と確認調査を終了した。他の遺跡・散布地の確認調査を終えて、調査を再開したのは11月5日で、その後中後瀬遺跡の一部全面調査に入るまでの12月27日まで、27日間を3・7号墳の調査に費やした。

前半と後半では時期的な差があるが、大きな変化があった。前半は夏季休暇に当たったこと也有って、行政の調査としては珍しく学生主体の調査となつた。後半は次の調査予定などの制約もあり、気分的にゆとりのない調査となつたが、合計74日間の調査を無事終えることが出来た。

調査体制

調査事務 社会教育・文化財課

課長	西沢 良之
文化財担当参事	大西 章夫
副課長	森崎 理一
課長補佐	和田 富夫
管理係長	小西 清
埋蔵文化財	
調査係長	樋本 誠一
主査	坂本 豊明
技術職員	大平 茂



第16図 調査風景

事務職員 杉本 恵子
調査担当 社会教育・文化財課

技術職員 岡田 章一
〃 渡辺 昇

発掘調査参加者

高瀬一嘉・小林正人・前田真吾・井上一三・
西脇 淳・門口秀己・山本正一・出羽一雄・
高田欣弘・山下晋作・竹廣晋作・真殿博吉・
森田照弘・清水栄藏・赤松都子・出羽操・
西田あやの・西田ゆき子・吉田町づ子・滝
北ゆき子・北本秀子・丸山みつぎ・吉本三
四二・藤田鈴枝・土井栄子・栗川律子・房
安まみ・森沢時子・中川喜美枝・塙谷圭・
猪沢寿賀子・赤松千恵子・出田敬子・横田
久美・西上知子子・金治美香・清水美穂・
内匠真澄

調査日誌抄

1984年7月9日(月)～13日(金)

1号墓の伐採作業から開始する。尾根筋を基準として杭打ちを行う。伐採木や下草のかたずけ後、地形測量(1/100、25cmコンタ)を始める。

7月16日(月)～20日(金)

基準杭打ち、地形測量継続する。1号墓尾根主軸と墳頂の主軸が異なるため、基準杭以外に1号墓の杭を設定する。(約7°北へ振る)1号墓墳頂をF40とし、南北をアルファベット、東西を数字で表し、南西の杭番号をグリッド名とする。下ライン北側に幅1.5mのトレンチを尾根上に設定し、確認調査を行う。調査前の写真撮影後、十字にアゼを残して1号墓表土除去開始する。表土下から弥生土器片出土。西側の南斜面(のちに3号墳となった地域)では須恵器甕の破片が出土しており、後期古墳の存在が推定された。そのため、用地西端まで伐採広げる。

7月23日(月)～27日(金)

地形測量継続。1号墓表土除去終了する。堆積土僅かで、土器片・甕が検出された。アゼ写真撮影後除去し、平坦面清掃する。主体部と思われる遺構検出する。写真撮影後、遺構掘り下げる(のちの土壙墓2～4、第6主体、調査段階では別の名称で呼んでいたが、以後報告書の遺構名を使用する)。他にも土壙など調査するが明瞭ではない。平坦面全体写真撮影・実測。遺構ごとの撮影も行う。1号墓東側の確認調査トレンチでも弥生土器が出土しているが、遺構は



第17図 調査風景

検出されなかった。土壌墓群南側に墓壙と思われるライン確認。

7月30日(日)～8月3日(水)

土壌墓4の遺物取り上げ。平坦面全体に下げる。南側の墓壙ラインを追求する。土壌墓の埋土が黒褐色であるのに対して、墓壙埋土は地山土を含むやや淡い色調をしている。墓壙上面と土壌墓の間に暗黄色土が存在していることから、時期差が認められる。第6主体(土器棺墓)北半断ち割り立面からの写真・実測を行う。棺蓋(鉢)を除去し、写真撮影・実測作業を行ってから、棺身も取り上げる。平坦面で新たに土壌3基確認し、そのうち2基には土器を含んでいる。写真撮影。2号墓表土除去始める。

8月6日(日)～11日(土)

1号墓土壙の遺物出土状態図作成し、土器取り上げる。墓壙全体に掘り下げてから、主体部の検出を行う。小口部を切り合うように2基の木棺(第4・5主体)を確認する。墓壙埋土から鏡出土する。棺内のアゼ検討後除去する。土壙断面図とともに平面図も作成する。2号墓平坦面清掃し、遺構検出に努める。墳裾部分も掘り下げ墳裾確定する。墳裾から壺1個体出土。第3主体検出する。写真撮影・実測を行う。

8月20日(日)～24日(木)

1号墓墓壙内さらに掘り下げる。二段墓壙になるようで、中央部に土の変化が見られる。2号墓第2主体確認する。E F25・26周辺で土壙・土器棺墓検出する。土壙・土器棺墓撮影後、削り付けし、実測。

8月27日(日)～31日(木)

1号墓墓壙西および北側に広がり、第4・5主体の墓壙より大きいものであることを確認する。北側墓壙埋土から精製鏡出土する。2基の木棺(第1・2主体)検出する。第1主体は、底に朱を置いている。北側長辺に沿って鐵劍出土。二段墓壙の中央に位置しており、中心主体と思われる。2号墓第1主体確認し、掘り下げる。トラック形の墓壙で周囲に溝を持っている。今週から龍子向山の調査も平行する。

9月4日(日)～7日(水)

2号墓第1主体掘り下げる。墳裾にある土壙の実測。3号墳墳裾部分を掘り下げる。墳裾部分からも須恵器出土。主体部の追求を行う。

9月11日(日)～15日(木)



第18図 鏡出土状態



第19図 調査風景



第20図 現地説明会風景

にシートを掛けて、調査中断する。

11月5日(月)～9日(金)

西脇散布地（中後瀬遺跡）の調査を終え、半田山の調査再開する。1号墓墳丘の断ち割り作業を行う。第1主体を中心に十字に断ち割り作業を行う。平坦面西側で第3主体確認する。平坦面の大型墓壙に近接しているが、切り合はない。そのため、拡張して第3主体の調査を行う。棺内から鉄鏃出土。南側には小口穴が見られる。2号墓も断ち割り作業を行う。第1主体は礫を墓壙内に多く入れている。撮影・実測。3号墳墳裾部分で、あらたに土器棺・土壌確認する。7号墳地形測量開始する。

11月12日(月)～16日(金)

1号墓墳丘の断ち割りトレンチ清掃し撮影・実測を行う。第1主体と第3主体の位置関係の写真撮影。3号墳アゼ除去。墳裾の土器棺・土壌の写真撮影。7号墳地形測量後、表土除去開始。

11月20日(火)～22日(木)

一部中井鶴池窓跡と同時平行して調査を実施。7号墳表土と2層目掘り下げる。墳丘が高いこともあるって、墳裾は堅然と判る。主体部確認作業を行う。墳頂に擾乱構がある。

3号墳墳裾の掘り割りを追う。北西部分で2つに分かれている。北西の溝は5号墓の墳裾の掘り割りと思われる。尾根上の全体写真撮影のため清掃する。また、個々にも遠景写真撮影する。15日午後2時から現地説明会を開催する。祝日でもあったので、参加者多く、200名近くの方に参集頂いた。

9月17日(月)～21日(金)

3号墳墳裾部分予想以上に良く残っており、掘り割りが回っている。土層図作成。7号墳伐採および伐採木のかたづけ作業。

9月26日(水)～28日(金)

7号墳伐採および伐採木のかたづけ作業繼續。3号墳から基準杭を7号墳まで移動。28日にはリコプターによる空中写真撮影。撮影後、全体



第21図 調査風景

12月26日(月)～30日(金)

1号墓墳丘除去。2号墓第1主体棺押さえの石を取り除きながら実測図追加。底から地出土。3号墳埴掘土器館・上覆墓とともに弥生前期の遺構と思われる。実測後遺物取り上げ。3号墳平坦面上の遺物取り上げ後、掘り下げたところ横穴式石室の基底石が確認された。漢道部と西側側石の大半は残っていないが、床面は旧態を保っていた。須恵器・鉄器・耳環出土。7号墳主体部掘り下げ。壇内から平安時代の須恵器出土。棺確認するが、中央部分は擾乱を受けている。西側小口部で須恵器・鉄鏡・玉類出土。撮影・実測後、中央の主体部横断のアゼ除去する。

12月3日(月)～7日(金)

2号墓墳丘南半除去。断面写真撮影・土層図作成。第1主体下で土壤確認1個体の盃を包含している。3号墳床面清掃し写真撮影。遺物出土状態実測後、遺物取り上げる。玄室だけ敷石を施していたようである。敷石清掃。石の抜き取り穴も認められる。7号墳埴掘部分に礫が幾つか認められる。墳丘全景写真撮影。

12月10日(月)～14日(金)

2号墓墳丘北半除去始める。3号墳敷石清掃し全景写真撮影。敷石実測。敷石の間から遺物少量出土。7号墳遺物出土状態実測後、取り上げ。墳丘測量。墳丘西半除去。

12月17日(月)～21日(金)

3号墳横穴式石室割り付け後実測を始める。4・5・6号墓地形測量を行う。7号墳墳丘西半除去し、墳丘断面撮影・実測。終了後、墳丘東半も除去する。器材など龍野市龍野町大道の山陽道調査事務所に搬出する。

12月25日(水)～27日(金)

3号墳石室実測し、一部断ち割りを行う。4号墓周辺地形測量補足。7号墳墳丘除去終了し半田山の調査終了する。



第22図 調査風景

第5節 整理作業の経過

整理作業は、昭和61年度から63年度までの3ヶ年にわたって実施した。昭和61年度は水洗い作業・注記(ネーミング)作業・接合復原作業を行った。昭和62年度は実測・拓本作業とトレス作業・写真撮影を行い、昭和63年度は原則的にレイアウト作業と執筆を行い、全体の編集をし報告書刊行を実施、すべての整理作業を終了した。整理作業は3ヶ年とも兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて行った。

出土遺物は、整理箱(セキスイコンテナTS-28タイプ)に52箱である。その内訳は須恵器18箱、弥生土器30箱、金觸器3箱、玉1箱の52箱である。遺跡の性格が、時期は異なるものの居住域ではなく、すべて墓域であったことから土器の破片は少なく復原出来るものが大半である。しかし、弥生土器については丘陵上の遺跡特有の脆弱な器面を持つことから、接合出来なかった土器も多くある。それでも接合率は高いものと思われる。

また、金属器の保存処理は1号墓第1主体出土遺物については元興寺文化財研究所に委託して処理を行った。それ以外の鉄器については、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課主任加古千恵子を担当者として兵庫県埋蔵文化財調査事務所において保存処理を行った。処理にあたって、増田啓・野村純子両氏の協力を得た。今まで、調査担当者が普通の整理室で銷落とし・実測を行っているのとは、雲泥の差がある。それゆえに、7号墳出土鐵鏡の布の痕跡が判明出来たものと思われる。

兵庫県埋蔵文化財調査事務所開所記念の『ひょうごの遺跡展』、同じく第3回兵庫県埋蔵文化財調査事務所展示会『弥生人のムラとくらし』や西播磨文化会館での『西播磨の原始・古代・中世をたぐる展』や播磨郷土資料館での『邪馬台国時代の鏡・土器・墓』、神戸市立博物館での『卑弥呼の鏡展』に小形仿製鏡をはじめとして出土遺物を展示し、多数の方々に見て戴き、有形無形の教示を得たが、十分に活用出来なかつた。

慢性的な整理作業の遅れから、報告書を作成するについても十分な人員が確保されずに実施したが、何とか刊行出来たのは補助員の協力によるものである。

整理作業を進めて行くうちに、当初考えていたことと変化している点が幾つかある。埋蔵文化財研究会や兵庫県埋蔵文化財調査年報で記述したことと、本報告で変わっている点は、本報告によって訂正したものとして戴きたい。



第23図 整理作業風景

調査の組織

発掘調査と同じく兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。調査事務は社会教育・文化財課が行った。

(1)昭和61年度

課長 北村 幸久
文化財担当参事 森崎 理一
副課長 黒田 賢一郎
課長補佐 福田 至宏
管理係長 小西 清
課長補佐 兼
埋蔵文化財調査係長 大村 敬通
主任査定官 小川 良太
主任研究官 加古 千恵子
事務職員 松本 豊彦
事務職員 足立 彩久
技術職員 渡辺 畿
調査担当
主任研究官 岡田 章一
技術職員 渡辺 畿
整理補助員
小川真理子・岡村真理子・西田知子子
作 品 慎子・八木 和子・池田 早恵

(2)昭和62年度

課長 北村 幸久
文化財担当参事 森崎 理一
副課長 黒田 賢一郎
課長補佐 兼
埋蔵文化財調査係長 大村 敬通
管理係長 山口 幸作
主任査定官 小川 良太
主任研究官 八家 均
主任研究官 加古 千恵子



第24回 整理作業風景

主任 岡田章一
 主任 松本豊彦
 事務職員 小林亮介
 調査担当
 主任 岡田章一
 主任 渡辺昇
 整理補助員

小川真理子・岡村真理子・伴悦子

八木和子・新浜良子・野村純子・増田啓



第25回 展示風景

(3)昭和63年度

課長	中根孝司	主任	岡田章一
文化財担当参事	日野和広	主任	深井明比古
副課長	高坂隆	事務職員	小林亮介
課長補佐兼		調査担当	
埋蔵文化財調査係長	大村敬通	主任	岡田章一
課長補佐	松下勝	主任	渡辺昇
管理係長	山口幸作	技術職員	高瀬一嘉
主査	小川良太	整理補助員	
主査	西村武生		小川真理子・石澤真理子・伴悦子
主任	加古千恵子		八木和子

発掘調査・整理作業に際し、多くの方々に御教示戴いた。また、多数の方々・機関に御協力戴いた。謝意を表します。特に、下記の方々・機関には有益な助言・御教示を得た。

(敬称略)

電野市教育委員会・揖保川町教育委員会・揖保川町文化センター・元興寺文化財研究所
 市村高規・加藤史郎・岸本道昭・後藤博綱・是川長・角山幸洋・志水豊章・長石正道
 堀本依子・松本正信・三辻利一・森昭・安田博幸

第2章

位置と環境





平田山遠景（南から）



平田山遠景（北西から）

図版6



平田山遠景（北から）



平田山全景（南東から）



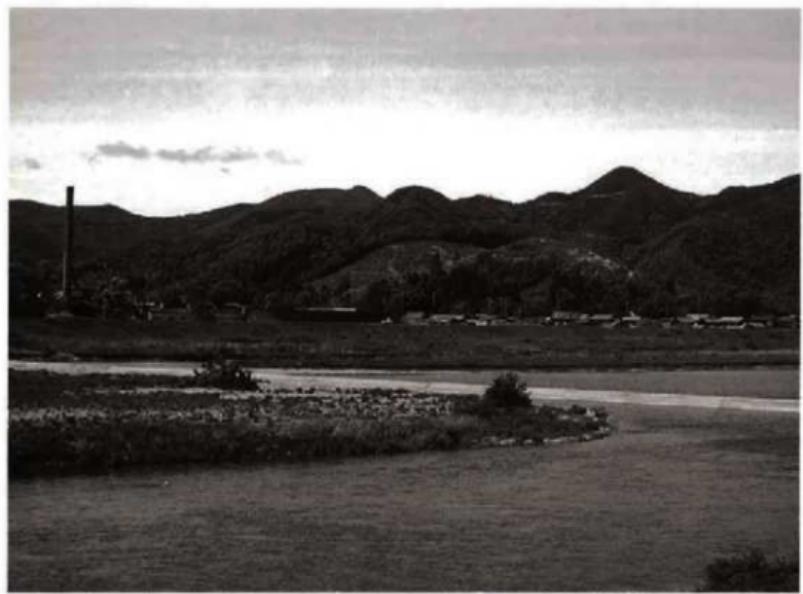
宇田山調査地全景



宇田山調査地全景



平田山遠景（南西から）



平田山遠景（南東・揖保川対岸から）



1号山からの眺望（北方向）



1号山からの眺望（東方向）



1号墓からの眺望（南方向）



1号墓からの眺望（西方向）

半田山墳墓群は、揖保郡揖保川町半田字半田山・同字東山に所在する墳墓群である。墳墓群の存在する半田山は、古生代に隆起した丘陵の残丘部分に相当し、新生代に周囲が沈降したことにより形成された独立丘陵であると言われている。揖龍低地内の独立丘陵となっており、周辺は揖保川による堆積物によって平地化して現状では山裾まで水田となっている。独立丘陵の主軸方向は、北西から南東方向にかけてのN45Wに近い値を示しており、揖保川対岸の中臣山やさらに東の片吹山と同方位を採っている。これら丘陵は同時期に形成されたことを示しており、同じ地形活動の要因によって形成されたことが考えられる。独立丘陵は揖保川によって形成されたもので、半田山北側の水田には旧河道が認められる。現在でも丘陵東側部を揖保川は南流している。

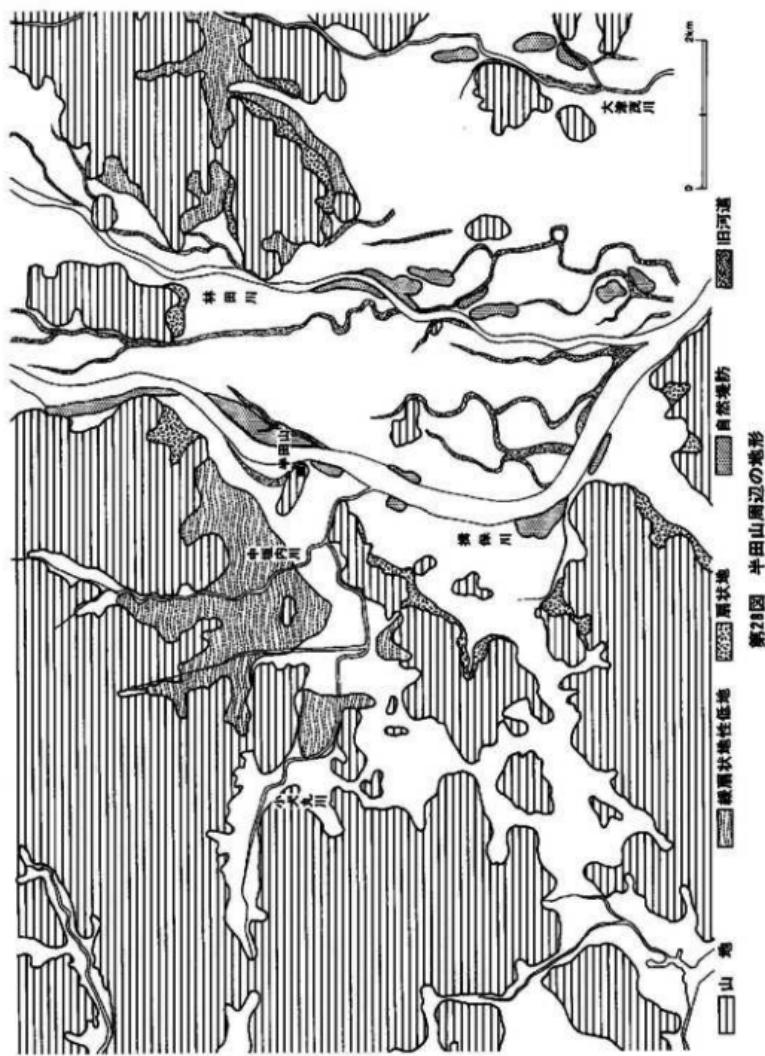
揖保川は、兵庫県最高標である水ノ山山塊に源を発する水を集めて播磨灘へ注ぐ全長69.73kmの一級河川である。但馬と播磨を分ける分水嶺の一つである富士野峠から流れた水は大身谷と呼ばれ揖保川の源流となっている。大身谷を流れた水は三方川となり、途中公文川・福知川の水を集め播磨國風土記にいう御方里の平野を潤し、戸倉峠に源を発する引原川と宍粟郡一宮町安積で合流し河川の体をなしてくる。関賀里や播磨國一之宮である伊和神社の鎮座する伊和里の小盆地を南流する。中小河川の水を集めながら、山崎町・新宮町・龍野市・揖保川町と流れ、徐々に大河川の趣を増しつつ、龍野市揖保町真砂で揖保川最大の支流である林田川と合流する。



第26図 揖保川の源大身谷



第27図 揖保川と林田川合流点（有致之瀬）



大河川となり、河口近くでは元川などと分かれはするが、姫路市網干区興浜で播磨灘へ注いでいる。半田山は、揖保川の源から59km、河口から11kmの中流域に存在する。

揖保川流域は、播磨国風土記が残されていることから古代の情景を彷彿とさせ、比較が可能である。代表的なものとして、林田川との合流点は「所以称字頭川者、字須岐津西方、有紋之瀬、故号字頭川……」と記され、有紋之瀬と呼ばれていたことがわかる。揖保川も字頭川と呼称されていたようであるが、下流域に限られた名称と思われる。このように、風土記による遺跡地が多く、また遺跡も数多く存在している。半田山周辺は、風土記による出水里に比定される。

半田山墳墓群の立地の最大の特徴は、眺望に勝れていることであろう。次には、付近に義久山墳墓群と言う古墳発生を考える上に重要な遺跡が多数存在することであろう。半田山1号墳の立地する標高65.38mの東側頂上からの眺望を主にして周辺の遺跡を概観して見る。

東方向は、山裾に揖保川が流れしており、揖保川を越えて揖保平野が広がっている。揖保平野は圃場整備が施行されておらず、旧地形を復原するのに最適な資料を与えてくれる。微高地上に存在する遺跡として揖保上遺跡・桜ヶ坪遺跡・小宅神社遺跡・末政遺跡・片山遺跡などの小規模な遺跡が知られるにすぎなかつたが、最近の大規模開発によって多くの各時期の大規模な遺跡が確認されるようになった。福田天神遺跡・福田片岡遺跡・片吹遺跡・宝林寺北遺跡・門前遺跡・宮脇遺跡群（尾野廻遺跡・五反田遺跡・他）である。揖保平野は東側の法隆寺領斑



第29図 福田天神遺跡



第30図 半田山周辺の空中写真



第31図 半田山周辺の遺跡

第2表 半田山周辺の遺跡一覧表

					開文後期～古墳前期	1978年調査
1	半田山墳墓群	弥生前期～古墳後期	1984年調査	32	清水道跡	
2	佐江遺跡	弥生中期～		33	古山古墳群	古墳後期
3	笠久乙城山遺跡	弥生中期～室町	1982年調査	34	小神古墳群	古墳後期
4	笠久山墳墓群	弥生末～古墳後期	1969-1982年調査	35	中垣内古墳群	古墳後期
5	赤山墳墓群	弥生末	1971年調査	36	山根墳墓群	弥生末
6	笠久谷遺跡	縄文～	1982年調査	37	景雲寺古墳群	古墳後期
7	神戸北山墳墓群	弥生～		38	景雲寺墳墓群	弥生末
8	神戸北山遺跡	弥生・古墳		39	中垣内鷹寺	奈良
9	神戸北山東道路	弥生～		40	天神山古墳	古墳後期
10	サンマイ山墳墓群	弥生～		41	中垣内三昧遺跡	古墳
11	兼田古墳群	古墳		42	新宮東山墳墓群	弥生末
12	山津屋遺跡	弥生～		43	新宮遺跡	弥生中期～
13	宝配山墳墓群	弥生末～古墳		44	小大久遺跡	縄文後期～
14	袋原波谷遺跡	弥生～古墳後期	1976年調査	45	池の谷墳墓群	弥生末～古墳後期
15	金剛山古墳群	古墳前期～後期		46	竹万遺跡	弥生
16	金剛山廢寺	奈良		47	尾崎遺跡	弥生中期
17	真砂遺跡	平安		48	小畠道跡	奈良～鎌倉
18	門前遺跡	縄文晚期～鎌倉	1970年調査	49	長尾タイ山古墳群	古墳中期～後期
19	宝林寺北遺跡	古墳初期～室町	1983-1984年調査	50	友ヶ谷古墳群	古墳中期
20	片吹遺跡	縄文前期～平安	1982年調査	51	竹原道跡	平安
21	中垣山遺跡・古墳群	弥生中期～古墳後期		52	大陣原窟跡群	平安後期
22	桜ヶ坪遺跡	弥生中期		53	郡波野古墳	古墳後期
23	宮脇遺跡	平安～鎌倉		54	治郷坂古墳	古墳中期
24	小宅神社境内遺跡	平安～鎌倉		55	ニワトリ塚古墳	古墳後期
25	片山東山遺跡	弥生中期～古墳後期		56	兼田古墳	古墳後期
26	北龍野遺跡	弥生中期		57	片島道跡・古墳群	弥生中期～古墳後期
27	龍野城	室町		58	二塚古墳群	古墳前期～後期
28	白鷺山墳墓群	弥生末		59	龍子三ツ塚	古墳期
29	猿啄古墳	古墳後期		60	鳥坂古墳群	古墳前期～後期
30	西宮山古墳	古墳後期	1954年調査	61	龍子長山古墳群	古墳後期
31	小神庵寺	白鳳～奈良		62	龍子向山遺跡・古墳群	弥生中期～古墳後期
						1982-1984年調査

堀莊を中心に小宅莊・弘山莊が広がっている。そのため、各遺跡ともそれら莊園遺跡として考えられ、該図からの条里復原が行われている。斑鳩莊は福田天神遺跡・福田片岡遺跡・馬場遺跡・斑鳩寺・常全遺跡が、小宅莊は官邸遺跡群・小宅神社遺跡・末政遺跡が、弘山莊は広山遺跡・片吹遺跡が、浦上莊は宝林寺北遺跡・門前遺跡が調査されている。各遺跡

とも中世の貴重な資料が多数出土している。陶磁器だけを取っても、掛保平野の遺跡と他の熊野市内の遺跡とは出土量・内容とも異なっている。掛保平野の遺跡は莊園遺跡がやはり中心ではあるが、それ以前の各時代の遺構も確認されている。縄文時代の遺構は片吹遺跡で検出されている。縄文時代早期の焼土壙をはじめ中期後半から後期にかけての竪穴住居跡が5棟調査されている。今まで縄文時代の遺構検出例は播磨では数少なく掛保川流域では最大の調査例となつた。出土遺物も最近調査された同じ掛保郡内の鹿路市の丁・柳ヶ瀬遺跡などとともに興味あ

るものが多い。福田天神遺跡・福田片岡遺跡では弥生中期の集落跡が下層で確認されている。福田片岡遺跡はその後も継続して生活を営んでいる。門前遺跡では、弥生中期に生活を放棄しているが、縄文晩期から古墳時代にかけての母集落とも思われる断続的な遺跡である。特に、熊野市指定文化財になっている弥生前期の一括遺物は掛保郡の弥生文化を考える上に重要である。その北側に立地する宝林寺北遺跡でも遺構は確認されていないものの弥生時代末から古墳時代初頭の遺物が出土している。ただ、半田山からの眺望は中臣山によって南東方向の一部は遮られている。掛保平野の東縁の丘陵上には明神山墳墓群・舍利田山墳墓群

の墳丘墓や横穴式石室を内部主体とする内山古墳群などが築かれている。笠山の頂上には経塚が築かれている。内山の北側の龍野上郡断層によって形成された谷部の南側には中井古墳群があり、北側には中井庵寺・中井瓦窯跡が存在する。中井1・2号墳は龍野面に築かれた大型の横穴式石室を内部主体とする大型の円墳である。径は16mであるが立地条件からそれ以上の規模の古



第32図 片吹遺跡



第33図 中井1号墳三累環鏡



第34図 中井2号墳



第35図 中井庵寺礎石

墳の印象を受ける。1号墳からは三重環頭太刀が出土している。中井庵寺・中井瓦窯跡は瓦の需給関係の明らかな例である。中井庵寺では軒丸瓦6種、軒平瓦8種、そして県下では出土例の少ない鶴尾が確認している。興味深い資料は鬼面文軒丸瓦で数少ない資料例の一つである。

創建瓦は複弁九葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒

平瓦で、ともに中井瓦窯跡から出土していない。

中井瓦窯跡では軒丸瓦1種、軒平瓦2種が確認されており、平安前期とやや時期が新しいことから、中井庵寺の補修用の瓦を供給した瓦窯跡と考えられる。中井瓦窯跡は1969年に調査が行われており平面が杓子形のロストル式平窯であることが判明している。中井庵寺はまだ調査が実施されていないが、礎石などから法隆寺式伽藍配置が想定されている。

南方向は、半田山の東側を流れる揖保川が半田山に当たることによって流れをやや東に変えているが元に戻り、半田山を越えてから南南西に向かって流路を取ることから、半田山からの眺望の中央を占めることになる。ただ、宝記山に当たって流れを再び南東方向に変え、梅現山麓を流れ「有絃之瀬」付近を視界の限度とし、

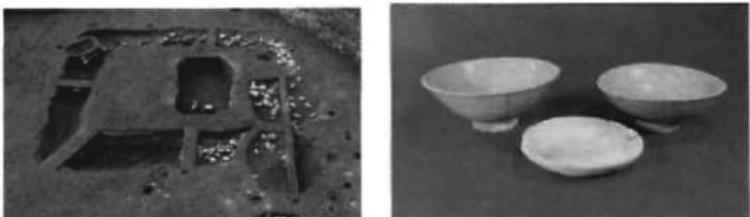
播磨灘を眺められる。播磨灘には、家島諸島が遠望される。晴れた視界の良好な日には、南東方向に淡路島と四国を見ることが可能である。南側の揖保川以東は川を通して小宅荘の推定地が広がっており、揖保郡の地名伝承の元となつた「飯粒の丘」(中臣山)が見られる。その南側は浦上莊推定域である。他にも遠望される水田地帯はすべて莊園に比定される地域である。それゆえに、中世の遺跡が多数存在するはずであるが、発掘件数が少なく、遺構が確認されているのは、揖保町の宝林寺北遺跡だけである。宝林寺北遺跡は、弥生時代末から近世にわたっての複合遺跡である。特に、中世墓は興味深いもので、弥生時代の方形周溝墓と同じ形態を示す墓である。主体部から、2個の白磁碗と土師器皿が埋葬され、周溝からは規軸陶器をはじめ魚住・十脚・備前系と思われる各地の須恵器と土師器が出土している。各種の土器の共伴関係を考える上での好資料と思われる。遺跡内で検出さ



第36図 飯粒の丘 (中臣山)



第37図 宝林寺北遺跡



第38図 宝林寺北遺跡、中世墓とその遺物

れた溝は宝林寺の北限の溝と思われ、赤松氏の菩提寺の1つである寺との関係も見逃せない遺跡である。また、出土地は不明ながら宝林寺境内に家型石棺の身が置かれている。宝林寺北遺跡の南には、弥生時代前期と弥生時代末～古墳時代初頭を代表する遺物が出土している門前遺跡が立地している。門前遺跡が存在する掛保川周辺の水田部分では、他に掛保上遺跡・桜ヶ坪遺跡・神戸北山遺跡・神戸北山東遺跡などが存在するが、遺跡の性格は明らかでない。

掛保平野を隔てた南側の丘陵・山塊には多くの墓が築かれている。真南に見える宝記山には弥生時代末の墳丘墓および集団墓と前方後円墳である宝記山8号墳など古墳時代前期の墓が認められる。宝記山山塊東側の斜面に立地する袋尻浅谷遺跡では3時期の墓が検出されている。弥生時代前期に遡る土器棺墓が1基と弥生時代中期の土壙墓・土器棺墓が15基と古墳時代後期の5基の古墳が調査されている。弥生時代前期の土器棺は半田山例より遡る資料で比較する上で数少ないものである。半田山と同じく大型の壺を棺身とし、蓋もやはり壺と思われるが確認されない。器高55cm、最大腹径54cmで、2条のヘラ描き沈線が施されている。弥生時代の墓は中期後半の土壙墓が主であるが、後期の土器片も出土していることから、後期まで集団墓が営まれていた可能性が高い。後期の古墳は、6号墳のみ箱式石棺を主体部とするが、他は横穴式石室を埋葬主体としている。個々に興味深い資料が提起されている。1号墳は、巨石を使った大型の石室で、排水溝が良く残っている。出土遺物の中に山杞子玉を保有していることは特記される。また、石室は古代・中世に再利用されている。2号墳からは素環頭太刀が出土している。



第39図 宝林寺境内石棺

3号墳は保存状態の良好な古墳で、閉塞施設が残っていることなど旧状をよく残している。副葬状況や、追葬に伴う片付けの状況が看取される貴重な例で、出土遺物にもミニチュアの壺の3点セットや小型高杯を配した器台の装飾土師器の特殊な遺物が見られる。これら土師器は儀式用の仮器と考えられる。宝記山山塊の尾根続きの南北側には、古式の前方後円墳で



第40図 半田山周辺の墳丘墓と前期古墳

ある金剛山6号墳や横穴式石室を主体部とする20基以上の円墳が見られる。金剛山古墳群の南側の谷部には奈良時代の寺院跡である金剛山廐寺が建立されており、礎石が残っている。さらに南の椎現山・梶山古墳群が100基以上の古墳で構成されている。特殊埴輪を有する51号墳と50号墳の2基の前方後方墳が盟主墳として存在し、さらに前方後円墳1基（14号墳）が築かれている。終末期の小石室まで構築されている。さらに南方の播磨灘を望む位置に綾部山古墳群と興塚古墳が築かれているが半田山からは可視出来ない。興塚古墳は揖保川最大の古墳で、全長110mを測る中期の古墳である。興塚古墳の周辺には5世紀後半の神獸鏡を出土した荒神古墳や横穴式石室を主体部とする後期の古墳も築かれている。綾部山古墳群は中期に遡る大型円墳や大型石室を持つ正玄塚などで構成される古墳群である。

西方向は、揖西平野を望むことになる。揖西平野を限る南縁の蓑久山山塊から北側の平野南半を眺望範囲としている。その北側は半田山主尾根によって妨げられている。主尾根頂上に立てば、当然西方の視界は開けているが、調査を実施した1号墓からでは遮られている。1号墓

からでは揖西平野北西隅の長尾周辺が北の限界となっている。池の谷墳墓群から南の遺跡を可視範囲としている。

視界に入る丘陵上には多数の弥生時代末の墳墓が構築されている。町屋の水田を隔てて500mと指揮の間にある墳丘墓として著名な斐久山墳墓群がある。45基以上の墳墓・古墳が尾根上に構築されている。分布密度は湊厚とは言えないが、尾根上の立地条件の良いところに集められて



第41図 斐久山1号墳



第42図 斐久山墳墓群（斐久山墳墓群転載）



第43図 豊久山2号墓

いる。大半は墳丘墓で、半田山1号墓を考える上に白鷺山墳墓群とともに重要な関係にあると思われる。双方中円墳という特異な形態をとる5号墓で代表されるように、首長墓としての胎動が感じられる遺跡である。5号墓とは逆に18



第44図 豊久山42号墓土器棺

基と多くの主体部を有する32号墓もあり、興味深い。2号墓など小型の墳丘墓も認められる。12・18号墓は前方後方墳である。18号墓は半田山2号墓第1主体と似た墓域周囲に溝を有する主体部が検出され、その関連を考える必要がある。豊久山1号墳はバチ形を呈する前方後円墳で全長30mを測り、相保川流域の古墳発生を考える上に重要な古墳である。中央主体である竪穴式石室をはじめ6基の主体部が確認されている。北側へ張り出す支尾根上には古段階の須恵器を保有する41・43号墳もあり、また、須恵質埴輪を持つ34号墳などの後期の時期の古墳も少数含まれており、南側山腹には横穴式石室を主体部とする古墳も存在する。半田山同様、埋葬地域として選定された丘陵である。その南側には半田山からは養久山によって見れないが、小さな鞍部によって養久山と隔てられた赤山墳墓群が存在していた。半田山1号墓と同時期の墳墓である。小さな鞍部によって分けられた養久山丘陵側の支尾根上に前記した横穴式石室を主体部とする養久山19号墳が立地している。1墳2主体の特殊な古墳である。2主体とも横穴式石室である。また、時期の下る遺跡であるが、養久山丘陵東端近くの南側山腹に近世窯跡である野田焼の窯跡が残されている。西播を代表する近世の焼物の1つで、相生の郡野田焼とともに「トビガンナ」を特徴とする灰釉を主体とするものである。現在、連房式登り窯の遺構が竹板の中にはば完全な形で残されており、当時の遺構として貴重である。周辺地域や兵庫県に留まらず、近世窯跡の好例と言える。半田山南



第45図 野田窯跡



第46図 鳥坂 2号墳



第47図 鳥坂 3号墳 鏡

斜面でも同時期の遺物が出土しているが、明確な遺構は検出されなかった。

養久山丘陵は北東から南西方向に主軸を有しているが、鳥坂峠を隔てて三ツ塚丘陵が主軸を同じくして延びている。頂上には前期古墳である三ツ塚1・2号墳が存在する。1号墳は、全長38mの南向きの前方後円墳で、横穴式石室を主体部とし、波文帶神獸鏡・刀・鉄劍・鉄矛・鐵鏟・土師器が出土している。鏡は同範鏡が確認されており、大分県・愛知県・和歌山県の古墳と分有關係にある。2号墳は、1号墳の北側に裾を接して築かれた径20mの円墳である。主体部は特殊な幕法のもので明らかではない。朱の付着した愛鳳鏡と三角縁四獸鏡の2面だけが出土しているが、詳細は不明である。他に數基の墳丘が三ツ塚山塊に認められるが、小規模なものである。三ツ塚頂上から鳥坂峠へ延びる尾根上には6基から成る鳥坂古墳群が立地している。尾根先端から古墳は順次築かれており、1・2号墳は前期の3号墳は5世紀前半の築造で、1代ごとの系譜が想定される。1号墳から3号墳は続いて造営されたが、4号墳との間には隔絶がある。また、4号墳から6号墳は時期を隔てずに、造営されている。築造時期と追葬時期が重なっているかもしれない。4~6号墳とも墳丘や石室の規模の割には副葬品が豊富である。3号墳と4号墳は、裾を接して築かれているが、築造時期に150年前後の差がある。それにも係わらず同一系譜のように並んでいることは興味深い点である。

三ツ塚山塊の北側山裾は山陽自動車道が通ることによって、調査が実施されている。そのため、表面観察ではつかめない事実が数多くある。龍子向イ山遺跡では弥生中期の集落跡が確認され、さらにその遺物の中に旧石器時代のナイフ形石器が含まれていた。龍野市域では神岡町の大住寺皿池遺跡に次いで旧石器時代の遺物を確認した遺跡である。他に古墳時代中期の大型鉄矛なども龍子向イ山遺跡で特筆される遺物である。また、遺跡の上に後期の古墳群が営まれている。5基以上で構成されるもので、今のところ主体部は横穴式石室に限られる。1・2号墳に見られる石室内での火葬は重要であろう。龍子向イ山古墳群の南西方向の尾根上には龍子長山古墳群が築かれている。やはり、横穴式石室を主体部とする2基の円墳から成っており、1号墳は調査が行われた。全長6.5mとさほど大きいとは思われず通常規格の石室であるが、後世に再利用されている。火を伴った土壙を築いており、綠釉陶器などが出土している。さらには

南西方向の尾根上で片島遺跡・古墳群が調査されている。遺跡は龍子向イ山遺跡同様弥生時代中期後半の1時期の集落である。古墳群は5世紀後半のもので、1号墳は帆立貝式の数少ないタイプの古墳である。主体部は木棺直葬で、調査前に鉄槍が1点出土している。外部施設は埴輪列と葺石を伴う径15m前後の円墳であるが、主体部は明確でない。

片島古墳群の南西部分は現在の行政区画では相生市に編入されているが、元々は揖保郡の地域である。古式の須恵器を出土した宿禰塚古墳や大型円墳である大塚ハガ古墳や兵庫県を代表する後期の大型横穴式石室を持つ那波野古墳や宿禰塚古墳とともに野見宿禰の墓に伝承のあるニワトリ塚など特徴的な古墳が多く見られる。

また、西播磨で最初に須恵器が焼成された那波野丸山2号窯をはじめとする那波野丸山窯跡群が存在する。平安時代以降は揖西平野西縁から後明・縁ヶ丘（入野）にかけて築造された相生窯跡群の遺跡となる窯跡群である。

揖西平野の遺跡を見てみると、平野内の微高地に遺跡が存在している。ただ、遺物は採集されているものの、遺跡の状態・様相をつかめる遺跡は少ない。半田山に近い遺跡から挙げると、町屋散布地・佐江遺跡・北山遺跡・竹万遺跡・尾崎遺跡・新宮遺跡があり、可視範囲にはないが小犬丸遺跡・中垣内遺跡などが微高地上・層状地上に立地している。揖西平野南縁の丘陵上には前述した龍子向イ山・片島・養久乙城山の各遺跡が弥生時代中期後半に営まれているが、平野内に同時期の遺跡が存在することは興味深い。また、佐江遺跡の製塙土器や、尾崎遺跡の分鏡形土製品の出土も特筆されるべきものである。

北方向は、揖西平野東端部から揖保川上流部を見ることになる。眼下の水田部分には、弥生時代後期の拠点的集落の1つと思われる清水遺跡が存在する。清水遺跡は、縄文時代後期から遺跡は営まれている。後期の磨削織文の土器片が出土しているが、小片でしかも数点の出土である。上方から流された可能性が高い。さらに弥生時代中期の遺物も出土しているが、中心は弥生時代後期である。遺構は、溝しか検出されていないが、遺物量・密度などから、墳丘墓を築いた時期の拠点的集落と想定される。清水遺跡の北側には、県道姫路・郡線が東西に通っており、旧山陽道と推定されている。旧山陽道に沿って瓦出土地が認められる。西から小犬丸遺跡・中垣内遺跡・小神遺跡があり、小犬丸遺跡については出土遺物や検出された遺構から布勢



第48図 龍子向イ山1号墳

驅家と推定されている。遺構に伴った遺物の中に「布勢驅」の文字のある木簡・土器が出土したことは布勢驅家に比定する上に大きな資料となっている。また、時代は異なるかもしれないが島形木製品は興味深い遺物である。琴坂の西側に位置しており、眺望が開けた場所とは言えない。遺跡から水田部分が僅かに広がり、再び二ツ木峠へと坂道となっていく。その谷合いとなる狭長な谷部から縄文後期の土器片が出土している。揖西地域では、龍子向イ山のナイフ形石器に次ぐ古い時期のもので、その間の資料は採集されておらず、当地域での縄文文化を考える上の数少ない土器である。また、弥生時代の土器片も出土しており、長期間にわたって生活していたことが理解される。中垣内遺跡は、現在の恩慈寺の境内周辺で、詳細は判らないが寺跡と考えられている。小神遺跡は、中垣内遺跡のさらに東側約1.4kmの位置にあり、現在の揖保川の流路とは約0.7km離れている。塔跡とも推定されている基壇状の高まりが残っており、他の寺跡よりも規模の大きなものと思われるが、伽藍配置・寺城などの詳しいことは不明である。古く採集された遺物の中に素弁八葉蓮華文軒丸瓦があり、飛鳥時代のものと考えられ、播磨最古の寺跡とも思われる。この時期、揖西平野の南側では瓦を出土する遺跡はなく北側が主となっていたことが明確である。

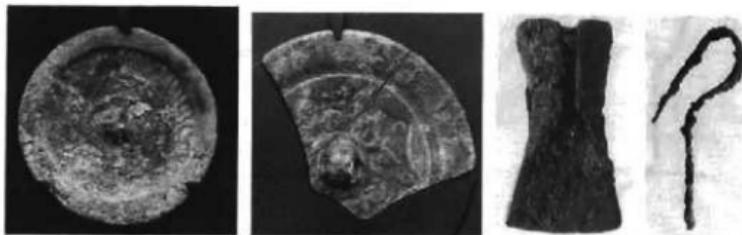
古山陽道の北側丘陵には、また多くの古墳が構築されている。特に中垣内遺跡と小神遺跡の間の山塊は古墳の稠密地帯である。西北から、中垣内・景雲寺・小神の各古墳群が存在する。総数100基近くの古墳が築かれていたものと思われる。低い墳丘のものもあるが、今のところ主体部は横穴式石室であろうと思われる。3古墳群とも横穴式石室を埋葬主体とする円墳で構成されていることになる。中垣内1号墳はこれらの中では豫出した規模の石室を持っている。径17m余りの円墳で石室開口部付近は削られているが、ほぼ完存している。現存長9.8mの両袖式の石室である。1m前後のやや大型の石を使用している。玄室は、長さ4.2m・奥壁での幅2.5m、現在の高さ3.1mを測る。玄室の方が垂頭部の石材よりも大型のものが使われている。奥壁も特別大きな石は使用されていない。中垣内古墳群で特筆される点として、装飾付須恵器と装飾太刀の柄頭が出土していることである。装飾付須恵器は器台上に蓋が乗せられたもので、器台上台口縁部には水鳥が配されている。蓋肩部にもやや大きめの小壺が装飾されている。装飾太刀は方頭太刀の柄頭でとともに東京国立博物館に保管されており、出土位置などの細かい資料は残されていないが、中垣内古墳群の遺物と考えられる。また、景雲寺古墳群と接して、墳丘墓も築かれている。景雲寺（東山）墳墓群と山根墳墓群である。ともに土器の散布ではなく、集団墓ではなく墳丘を持った墳丘墓であろうと思われる。3古墳群の北東方向の台山にも後期の



第49図 中垣内1号墳

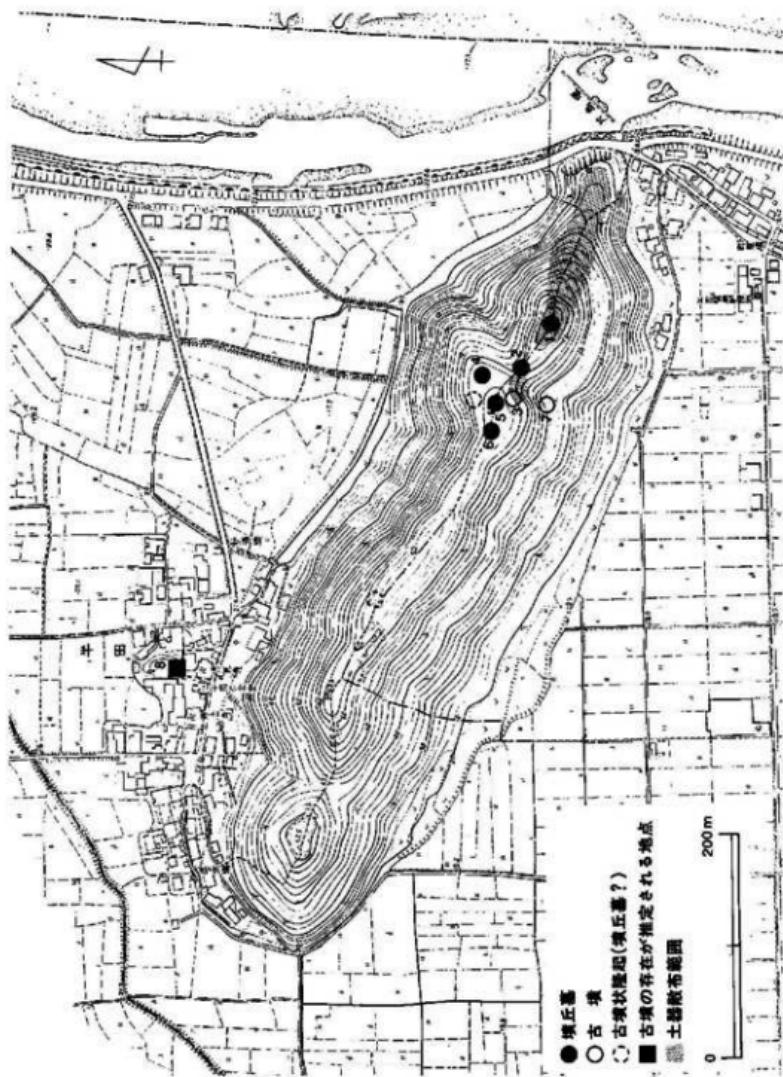
古墳が築かれている。台山（的場山）の頂上から尾根続きに『風土記』に記された水争いの場となった龜ノ池があり、さらに北側には赤松氏の居館の1つである城ノ山城が立地している。台山東側には鶴籠山があり、龍野城が築かれており、石垣・郭などが残存している。鶴籠山北側に弥生時代中期後半の単純遺跡である北龍野遺跡がある。南側には龍野の町並みが広がっている。龍野の町並みが揖保川に沿って伸びているが、その西側の丘陵上にも遺跡が営まれている。白鷺山墳墓群は、半田山墳墓群と有機的に繋がる遺跡である。時期が同じ墳墓であり、性格が似通っている。2基の弥生時代後期末の墓が確認されており、ともに箱式石棺を埋葬主体としている。1号墓からはほぼ完全に遺存した人骨が出土し、副葬品として鏡片・網織された内行花文鏡と鉄劍・不明鉄製品が棺内から出土している。内行花文鏡には「位」「公」「金」「石」などの銘が鋳出されている。2号墓からは北九州出土例に近い内行花文鏡と鉄斧と勾玉が出土している。半田山1号墓とともに小形彷彿鏡の西限の遺跡としての位置づけがなされる墓である。また、同一地域内に横穴式石室も築かれている。白鷺山の南西部分は、現在高校の校庭となっているが、ここに西宮山古墳がかつて存在していた。全長35m前後の前方後円墳で、主部は初期の横穴式石室である。装飾付須恵器や馬具・鏡・玉類など豊富な遺物を保有していた古墳である。最後の前方後円墳としての歴史的価値の高い古墳である。その尾根続きの北側には大型石室を持つ狐塚古墳があり、市指定文化財となっている。

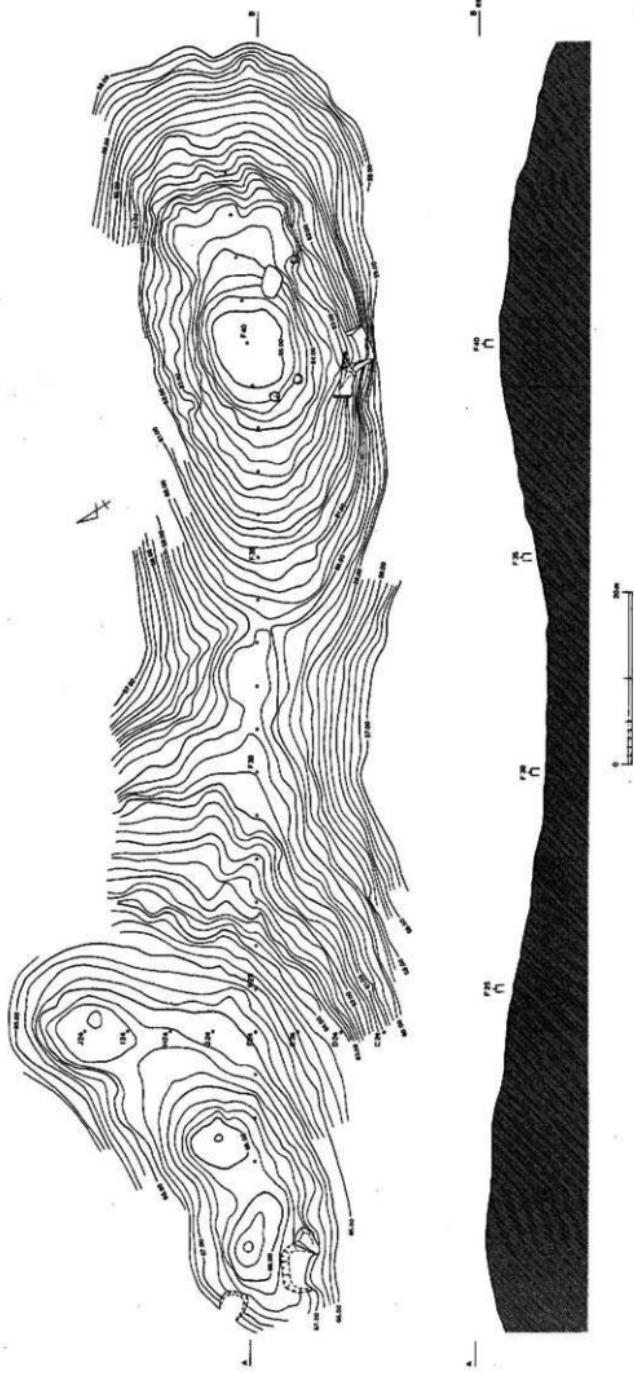
このように半田山を巡る環境を概略したが、眺望にすぐれていることが大きな特徴である。遺跡の変遷も多岐にわたり、一言では言い表せない。相西平野でも南北で変化はあるが、筒潔に記すと弥生時代中期後半は南側の方に遺跡は多く営まれていたが、後期になり平野内に拡散し、周囲の丘陵に多数の墳丘墓が築かれる。古墳時代後期になると西宮山古墳で代表されるように大きな画期となり古山陽道沿いが主となる。半田山は山陽道に面した南側に立地している遺跡であり、その位置は大きな意味があるものと考えられる。



第50図 白鷺山墳墓群出土遺物

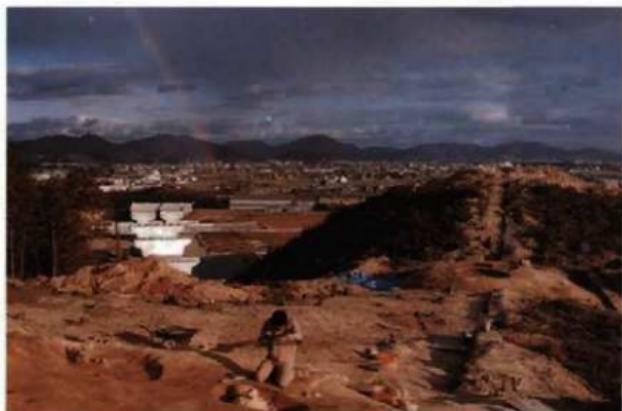
第51図 幸田山城丘墓・古墳配置図





第3章

弥生時代前期の墓の調査





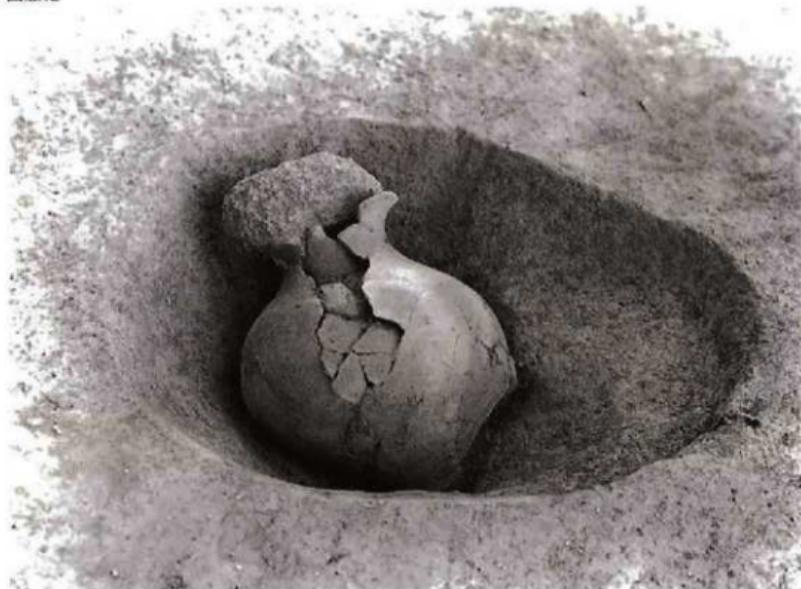
土器棺墓1・土壙墓1〔東から〕



土器棺墓1・土壙墓1〔西から〕



土壙墓1〔西から〕



土器棺龕1（西から）



土器棺龕1（南から）



土器棺墓 2·土墙盖2·土墙



土器棺墓 2



赤生陶器の塊 出土土器



3



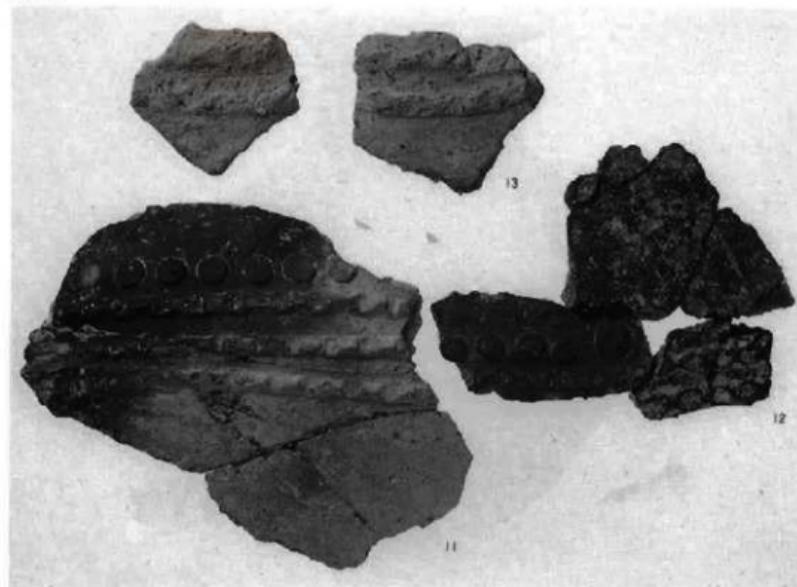
10



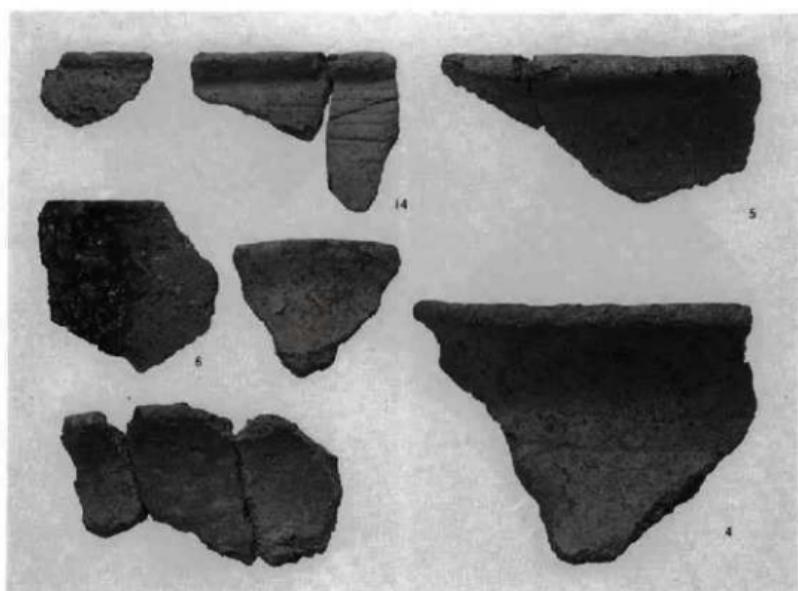
2

弥生前期の土器

図版16

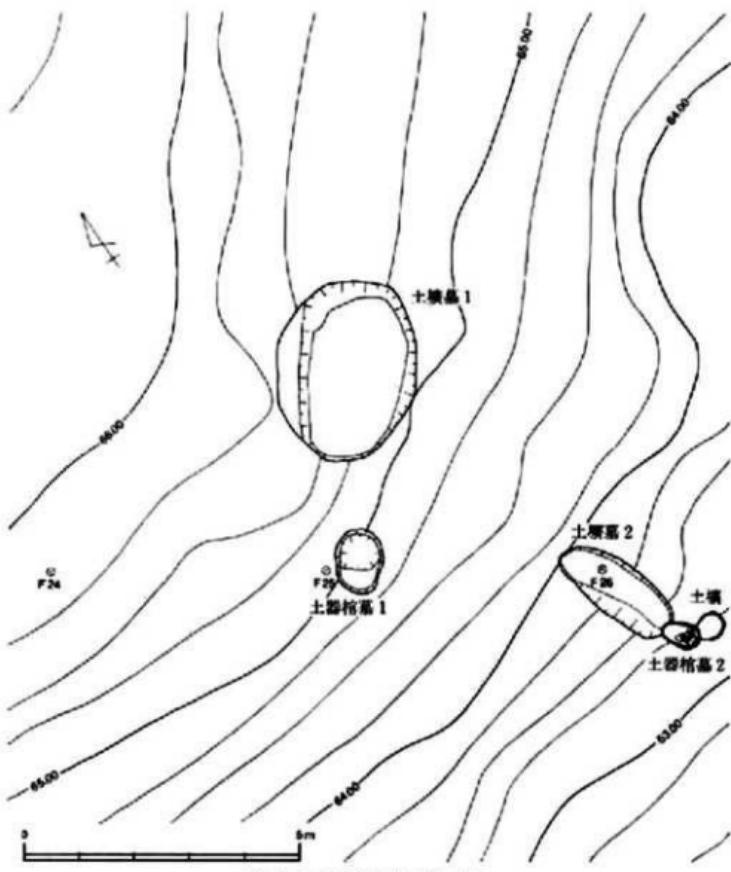


氷生前期の土器 (壹)



氷生前期の土器 (壹・貳)

弥生時代前期の遺構は、3号墳墳裾近くの尾根上で4基の墓を確認しただけである。ただ、1号墓でも弥生前期の土器が出土していることから、丘陵上に遺構が残かれていた可能性が求められる。しかしながら、平坦面がほとんどなく、生活に伴う面や焼土・炭などが検出されていないことから、住居跡の存在の可能性は少ないものと考えられる。



第53図 弥生前期の墓位図

第1節 土器棺墓

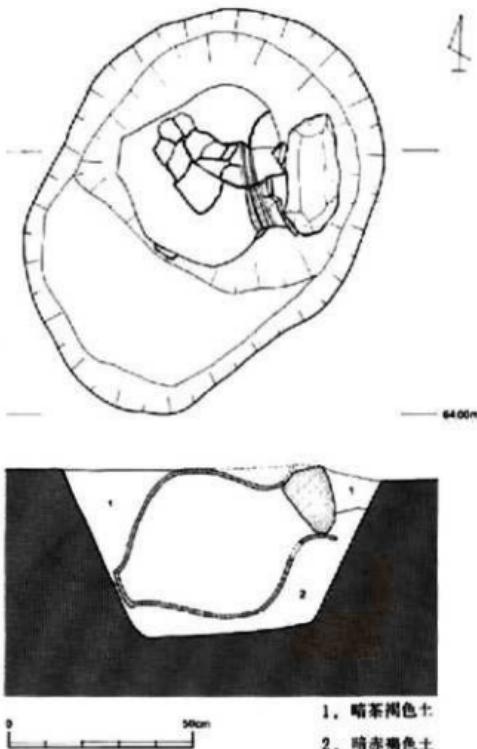
土器棺墓1

1. 立地

半田山主尾根上に位置している。5・6号墓の立地する尾根頂部から、1号墓へ向かう主尾根と4号墓から北東方向へ伸びる支尾根とに分岐する。主尾根は5・6号墓から緩やかに3号墳墳頂付近まで続き、3号墳墳頂から墳裾にかけてやや急な傾斜となるが、再び墳裾付近から緩やかになり、2号墓の立地する尾根鞍部へと続いている。その傾斜面上に立地している。位置的には、ほぼ3号墳の東側墳裾に相当し、尾根筋に築かれている。

2. 遺構

弥生前期の壺を使った土器棺で、石を蓋とした单棺である。墓構は、尾根主軸に短径を持つ楕円形プランである。長径112cm、短径85cmを測る楕円形で、北側に接してさらに径70cmの不定円形の墓構を2段に掘り下げている。上段は15~20cm、下段は25~30cmの深さを測る。墓構下段に土器を斜位に置いている。船直方向から約65°傾けて置いている。棺身である壺底部は墓構底面には接しておらず、肩部に付いている。調査段階の墓構の深さは、ほぼ土器を埋置した深さと同じで、最小限の深さを掘り下げたものと思われる。壺を置き、安定を図るために敷石の角礫をかませている。壺底部から口縁部までの下部の埋土と上部の埋土は異なる。下部は有機質の混ざった暗茶褐色土で、上部の埋土は地山土の混ざ



第54図 土器棺墓1実測図

った暗赤褐色土である。意図的に埋土をえたものと思われる。棺身の主軸方向は S 87° E とはば東西方向になっている。口縁部を東側にして置かれている。蓋は半田山山塊でも採取される石英斑岩を使用している。壺口縁端部より内側に蓋が接するようにしている。蓋に使われた石材には加工の痕跡は認められない。土器棺の大半は旧態を保っていたが、立地が尾根筋の斜面上であることから、遺構上部が自然流失したものと思われ、口縁端部の一部が欠失している。

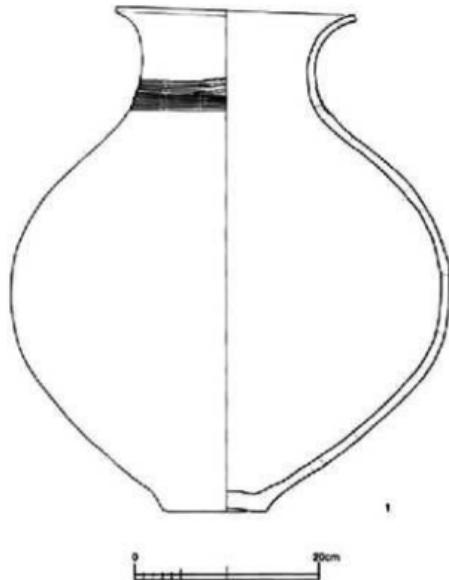
3. 遺物

副葬品はなく、棺蓋も石が使用されていたため、出土遺物は棺身の大形土器（壺）1点だけである。

壺高 53.5cm、最大腹径 47.8cm の大形の壺である。粘土紐の継ぎ目は内面において顕著に看取出来る。内面はユビ成形しており、粘土の継ぎ目とともに指頭圧痕が隨所に見られる。成形のち同じくユビによって調整を加えている。外面もユビ成形したのち、さらに整形を加え、布を使ったナデによって全体を仕上げている。部分的にハケメかと思うほど強く痕跡が残っている。ただ、単位をなさないことから布の纖維の痕跡と思われ、ナデと考えられる。口縁部のみヨコナデを施していると思われるが、範囲は表面磨滅のため明らかでない。ただ、外面は頸部にまで及んでいる。器面調整後、

頸部に 8 条の沈線を施している。沈線は対になっており、円周内で 2ヶ所の継ぎ目が見られる。上の沈線が下の沈線に接続している部分もある。時計回りに沈線を施している。対となっていることから施文原体は半截竹管と思われる。

壺高のはば中位に最大腹径 47.8 cm を持つ球形の胴部に突出した平底が付いている。底径 11.56cm を測り、中央がやや上がっている。頸部から緩やかに外脣しながら口縁へ続いている。口縁部は水平でなく、やや重んでおり、口縁端部は角張りぎみである。口径 26.0cm、頸部径 19.5cm を測る。外面には対称する位置に 2ヶ所黒斑が見られる。1ヶ所は大きく 20cm 余りの大



第55図 土器壺蓋 1 棺身実測図

きさであるが、他の1ヶ所の黒斑は径5cmと小さなものである。色調は、外面は黄褐色～赤褐色、内面および器内は黄褐色～淡黄色を呈しており、胎土はチャート・長石・酸化鉄の小石粒を比較的多く含む。焼成は良好であるが、丘陵上の遺跡のため保存度は良好とは言えず表面磨滅している。

頸部下の半截竹管を施し原体とする8条の沈縫と土器全体のプロポーションから前期でも最も新しい時期が与えられるものと考えられる。前期末の土器館と考えられよう。

土器棺墓2

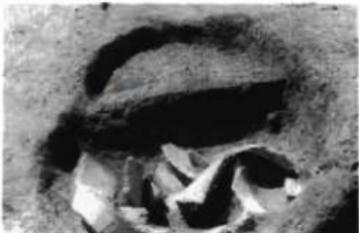
1. 立地

土器棺墓1と同様の牛田山主尾根上に立地している。土器棺墓1の東側に位置しており、水平距離で6.1m、垂直距離で0.8mを測る。土器棺墓1が尾根上より僅かに北側に位置しているのに対して、土器棺墓2は南に向かった斜面に存在する。また、土器棺墓1が平坦面に築かれているのに対して、土器棺墓2は斜面に築かれている。

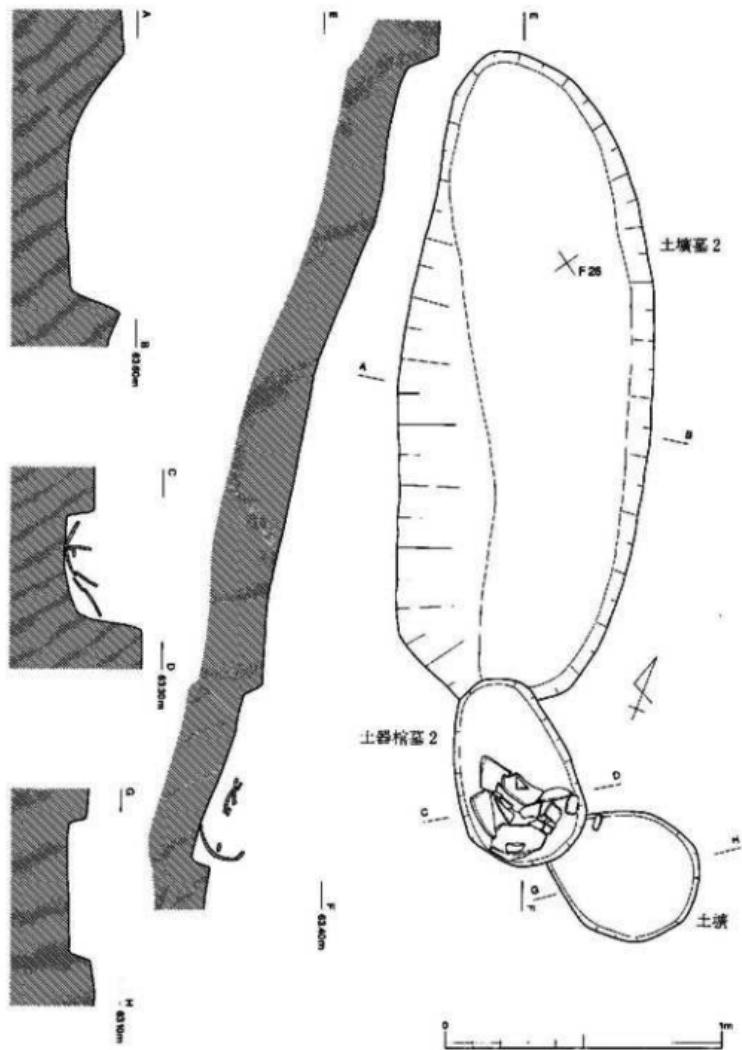
2. 遺構

壺を使用した土器棺で、蓋は調査段階では確認出来なかった。周辺でも他の土器片は出土しておらず、大きめの石材も出土していない。流失した可能性も十分に考えられるが、蓋が確實に存在した資料は与えられていない。墓壙は等高線に直交する方向に主軸を持ってきている。長径68cm、短径45cmを測る。標高の高い方が幅の狭い倒卵形をしている。底面は短径方向は平坦であるが、長径方向は斜めになっている。長径方向の比高差は20cmを測り、斜度は18°である。底面と肩部との最大の數値は28cmである。

棺身は壺で、土器棺墓1と比べると小形の土器である。現状では蓋は確認されていないので、単棺として報告する。斜面の低い方の底面から肩部にかけての部分に壺底部を置いている。口縁部が残っておらず、胴部上半も旧態を保っていなかったことから、埋置状況の復原は出来ない。だが、墓壙底面の斜度よりも純角であったらうと推定される。土器底部が肩部に着いてい



第58図 土器棺墓2検出状況



第57図 土器棺墓2・土壤墓2・土壤 実測図

ることから、 30° ~ 40° ぐらいの角度にならうかと思われる。

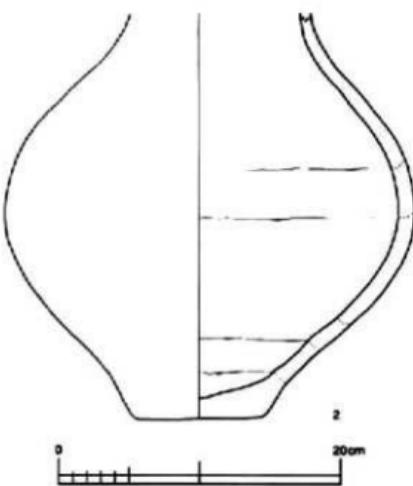
墓壙埋土は暗茶褐色土で、埋土は1層である。遺物は、棺身以外の遺物は出土していない。

3. 遺物

出土遺物は棺身の蓋1点だけである。土器棺墓1の棺身に比べると小形の蓋である。

口縁部・頭部を欠いた蓋である。残存高28.4cmを測り、頭部近くまで残っている。最大腹径は、胴部の高さのはば中位にあり、29.1cmを測る。胴部は明らかな算盤形ではなく、最大腹径部分は緩やかな曲線を描いている。底部は、底径8.9cmを測る平底で、比較的大

きな底部である。口縁部は残存していないが、土器棺墓1の棺身の土器と同じ形態をしているものと想定される。粘土紐の継ぎ目が明瞭である。色調は、外面が黄褐色~淡褐色、内面が黄灰色を呈しており、外面に黒斑が認められる。胎土は、長石・黒雲母・石英の小石粒を含む。内外面とも、ユビ成形のちナナデ仕上げている。外面はユビとともにヘラ状工具で調整しているようであるが、磨滅のため明確でない。



第58図 土器棺墓2 棺身実測図

第2節 土壙墓

土壙墓1

1. 立地

土器棺墓と同じく3号墳墳頂に相当する尾根上に立地している。土器棺墓と比べるとより緩やかな斜面となっている。5号墓から4号墓と3号墳の尾根に分かれる谷部に向かった緩斜面となっている。尾根筋南斜面より土壙墓の立地する北側の方が造構を築くには良い条件となっている。

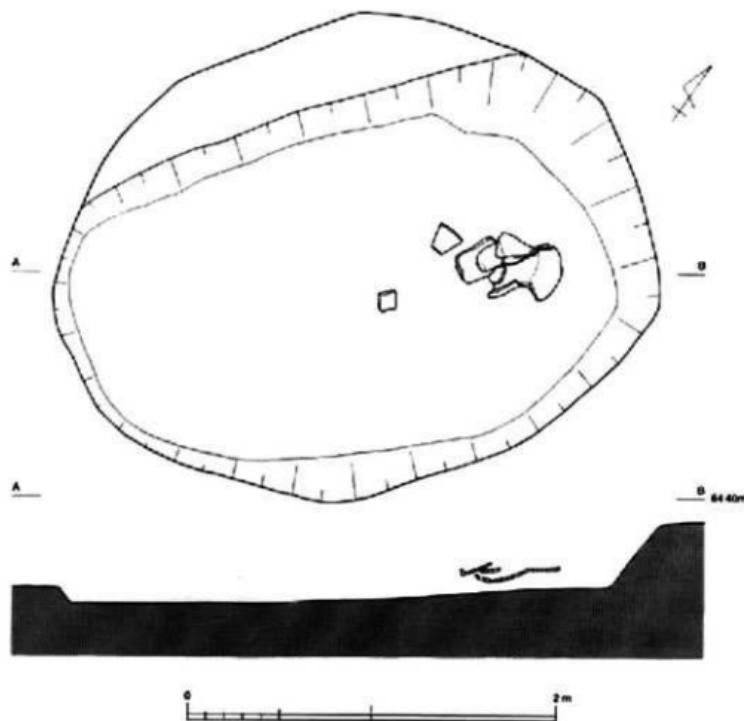
2. 造構

トランク形に近い形状をした土壙である。斜面上で自然流失などによる残存状態が悪いこともあるが、最も深いところでも30cmと浅い数値しか得られない。N40°Eとはほぼ等高線に沿っ

て主軸を持つ土壙で、長径322cm、短径205cmを測る。土壙北端に近い部分で壺が1個体出土している。口縁部を北東方向へ向け、主軸方向に近い方向を示している。壺は土壙底面に接しておらず、5cm前後浮いた状態で出土している。1個体分の土器以外埋土中から遺物は1点も出土していない。近くに土器棺墓が存在することや、壺が供獻形態としての類例が見られるところから土壙墓として報告する。

3. 遺物

小形の壺が1個体だけ出土している。出土状態も上下に大きく分かれており、特に下半の残存度は悪く、底部も全体の6分の1程度しか残っていない。が、全体像は復原出来る。器高は28.0cm、口径15.2cm、底径8.0cmを測り、器高の中位より下に最大腹径17.2cmを有している。底部はすべては残っていないが、中央がやや上がった平底で、僅かに外方に突出している。底部



第59図 土壙墓1実測図

を成形する際の粘土の難ぎ目が見られ、その粘土の一部が突出している底部から緩やかに広がり、やや長めの副部を形成し、径8.6cmの頸部へと明瞭な接線を持たずに続いている。頸部から口縁部へは直線的に外開きとなり、端部手前で外反して角張りぎみの端部へと続いている。内面はユビ成形ののち調整を加えている。外面はユビ成形ののち5~6本/cmの縱方向のハケ整形を施し、端部のみ僅かにヨコナデで仕上げている。

頸部には8条のヘラ描き沈線が施されている。逆時計回りで1本ずつ施文されている。

土壤墓2

1. 立地

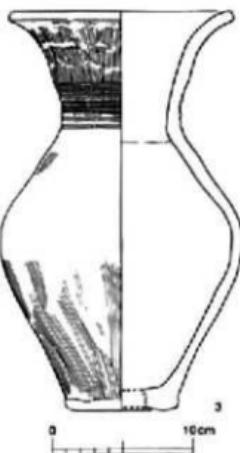
半田山尾根上に立地していることでは、他の弥生前期の墓と共通している。土壤墓1は平坦面に築かれているが、土壤墓2は斜面に構築されている。4基の墓の中では最も急な斜面に存在している。土器棺墓2に切られており、この2基の墓から南側はさらに斜面が急になっている。

2. 遺構

出土遺物はないが、遺構の切り合いで弥生前期の遺構と判断出来る。埋土は土器棺墓2と同じ暗茶褐色土で、一部黒褐色土となっている。色調の違いで同一層と考えられる。埋土は1層である。

形状は溝状で、両端は弧を描く長辺の長いトラック形を呈している。長辺2.3m、短辺0.9mを測り、最大の深さは0.2mと浅い土壌である。斜面に築かれていることから、標高の高い部分と最も低い部分では数値に0.6mの開きがある。長軸方向は斜面となっているが、短軸方向は平坦である。

土器棺墓2に東側端部を切られている。
そのことから、時期的に古いことになるが、
遺物は出土していない。遺構の在り方など
から、土壤墓と考えた。



第60図 土壌墓1土器実測図



第61図 土壌墓1土器出土状態

第3節 その他の遺構

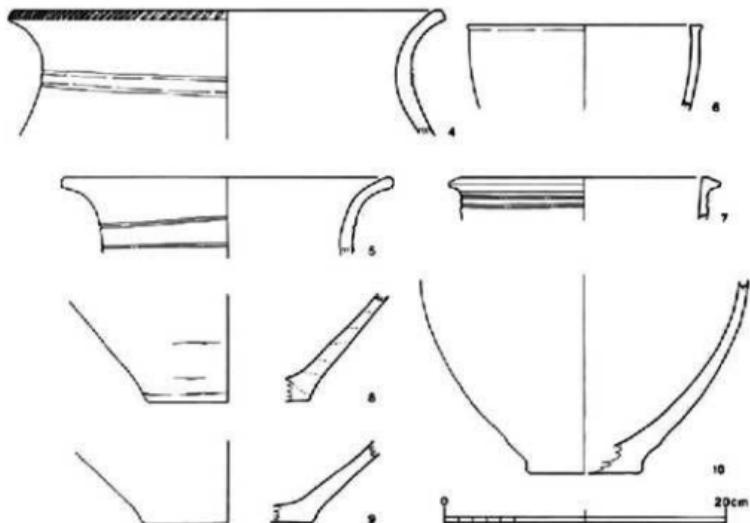
遺構の性格が不明なものとして、土壙が1基検出されている。土器棺墓2によって切られてることから、時期的に前期の遺構であることには問題ない。

短径45cm、長径52cmの梢円形を呈した土壙である。深さは、最大値で26cmを測る。等高線に平行な方が短い形状である。埋土は、土器棺墓2・土壙墓2と同じ暗茶褐色土である。上面から土器の破片が出土しているが、土器棺墓2の破片であった。他の遺物は出土していない。

第4節 その他の弥生時代前期の遺物

他の遺構で切り合い関係がなく、遺物が全く出土していない遺構は所属時期が当然不明である。明らかな弥生時代前期の遺構は確認出来なかった。遺構は土器棺墓・土壙墓の4基の墓と1基の土壙だけである。

丘陵上の道路特有の、器面の保存状態が悪い脆弱な土器であったため、調査段階で個々の時期を正確に判断出来なかつたが、整理作業の結果、弥生前期の遺物は上層である暗褐色砂質土



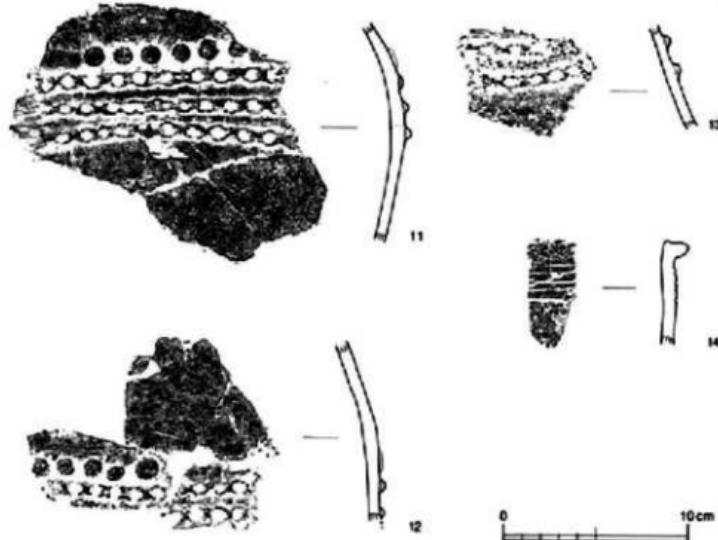
第62図 弥生前期土器実測図

から多く出土していることが判った。主に、確認調査トレンチや3号墳石室周辺の暗褐色砂質土から出土している。1号墓から2号墓にかけての斜面や7号墳の立地する山腹からは1点も出土していない。このことから、調査対象地においての弥生時代前期の墓は、3号墳周辺のみ構築されたものと思われる。

出土遺物はコンテナ3箱と少量である。固化した土器は7点で、拓本を採取したものが4点と合計11点資料化出来た。器種は鉢が1点と壺が2点で、残りの8点は盃であるが、2点は同じ個体と思われる。墓出土の土器もすべて盃であることから、3点だけ他の器種であることになる。固化していない破片を観察しても大半は盃と思われ、盃の占める割合が高いことが指摘できる。

(4)は復原口径30.4cmを測る大型の壺の口頭部である。残存高8.8cmと胴部の一部までしか残っていない。胴部から緩やかな弧を描いて頭部から口縁部へと続き、角張りぎみに丸く納めた端部となっている。頭部には2条の沈線が施されている。端部にはヘラによる刻目が施されている。刻目は均一な大きさではなく、浅いものや深いものとばらつきがある。表面磨滅しているが、内外面ともヨコナデで仕上げられたと思われる。内面に黒色の付着物が認められる。

(5)も盃の口頭部である。口径は23.7cm、残存高5.5cmを測る。頭部に明瞭な棱を持たない点は



第83図 弥生前期土器拓影

同じであるが、(4)と比べると頸部は直立ぎみで、端部近くで屈曲し外方へと広がっていく。頸部には2条の沈線があるが、(4)がほぼ近接した位置に並行して施されているのに対して、離れた位置に各々方向を変えている。全体にヨコナデで仕上げられている。

(6)は鉢の口縁部である。表面磨滅で成形技法など不明であるが、内面はユビ仕上げかと思われる。端部は直立ぎみで、内外面に肥厚している。復原口径16.4cm、残存高5.9cmを測る。

(7)は外方へ大きく肥厚するL字形の甕である。口縁端部を折り曲げて形成している。その粘土の纏ぎ目が明瞭である。肥厚した端部のすぐ下に2条の沈線を施している。

(8)は壺の底部である。内外面ともユビ成形のちナデで仕上げている。粘土組の纏ぎ目が明瞭に残っている。底径11.6cm、残存高7.5cmを測る。

(9)も壺の底部である。成形技法もユビ成形のちナデで仕上げる。底径12.0cm。

001~006は小片で復原径を出すことは不可能である。0002は同一個体と考えられる壺胴部の破片である。内面はユビ成形されており、指圧痕が残っている。外面はヨコナデで仕上げられている。そのうちに、文様帶を付けている。最大腹径部分に3条の貼り付け突帯が付加され、さらにヘラによる刻目を押圧している。3条の突帯の上に円形浮文が巡らされている。円形浮文の大きさは均一でなく、まばらである。円形浮文も1周していたと思われ、円形浮文帯となっていたであろう。

007も壺の胴部の破片である。2条のヘラ押圧による刻目を施した貼り付け突帯が付けられている。0002と異なり、頸部に近い部分と思われる。表面磨滅している。

008は甕の口縁部である。口縁部に接するように付けられた突帯は付加したものか、折り曲げたものか磨滅しているため、明らかでない。突帯の下に5条の沈線が施されている。口縁端面内側は僅かに上方へつまみ上げられている。

他に資料化していない破片のなかに、器種が判るものがある。すべて壺の破片で、確実に個体数を指摘出来るのは、口縁部1個体と底部1個体である。

第5節 小結

牛田山丘陵において、弥生時代前期の遺構の確認はもちろんのこと遺物の出土も当初予想もしていなかったことである。しかし調査の結果、4基の墓と1基の土塙および少量の遺物を出土し、新たな事実を得た。

弥生時代前期の遺跡は揖保川流域では多数確認されている。牛田山周辺でも、眺望関係のある遺跡だけを挙げても、常全遺跡・立岡遺跡（以上太子町）、門前遺跡（龍野市）、袋尾浅谷遺跡（揖保川町）、丁柳ヶ瀬遺跡・山戸遺跡（以上姫路市）が存在する。眺望関係はないが、近くの遺跡は神戸北山東遺跡・美久谷遺跡の揖保川町の遺跡が挙げられる。また、縄文晩期の突帯

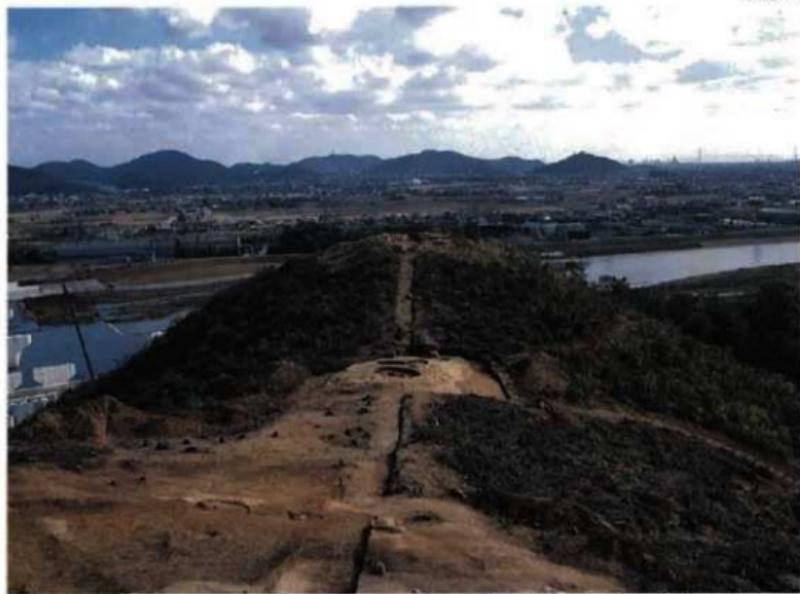
文土器と共に伴する例も丁・柳ヶ瀬遺跡など出土例が増加している。しかし、その時期の生活遺構は確認されていない。揖保川流域では前期（古）段階の土器も出土していない。遺構を確認している遺跡は、門前遺跡・袋尻浅谷遺跡である。門前遺跡では土壙が、袋尻浅谷遺跡では土器棺墓が検出されている。しかし、遺構の数は少なく遺構が検出されたことだけでも稀少例と言えよう。その上、墓地という遺跡の性格が明らかなことは興味深い事実である。遺構の規則性はないが、集落跡が近くに今のところ知られていないことから、丘陵上に離れて埋葬地を設けていることだけを指摘できる。現時点では前期の遺跡は南西方向の美久山南側に存在する美久谷遺跡が最も近い位置に立地する遺跡である。ただ、眺望関係がないことは同一集団の集落と墓地の関係にあることが否定的になる。半田山南側の微高地か、旧地形では揖保川が現河道より東に流れていたので、中臣山周辺も集落が存在した可能性のある地域である。今後、周辺で半田山遺跡に埋葬した集団の集落跡が確認されることを期待したい。

遺物は少量で、丘陵上特有の表面磨滅した脆弱な土器であることから、多くの事実を得ることは出来ない。ほぼ完全な形をしているのは2点だけである。そのプロポーションや技法を見ると、前期のなかでも新しい要素を多く観察出来る。他の土器についても古い段階に位置づけられる土器は含まれない。総体的にみても、單一時期の前期でも末の遺物として捉えられる。

第4章

墳丘墓の調査





1・2号墓・3号墳全景（南東から）



1・2号墓・3号墳全景（西から）



1号墓 新段階主体部上面（土壤1～3）



1号墓第6主体



2号墓·3号墳全景

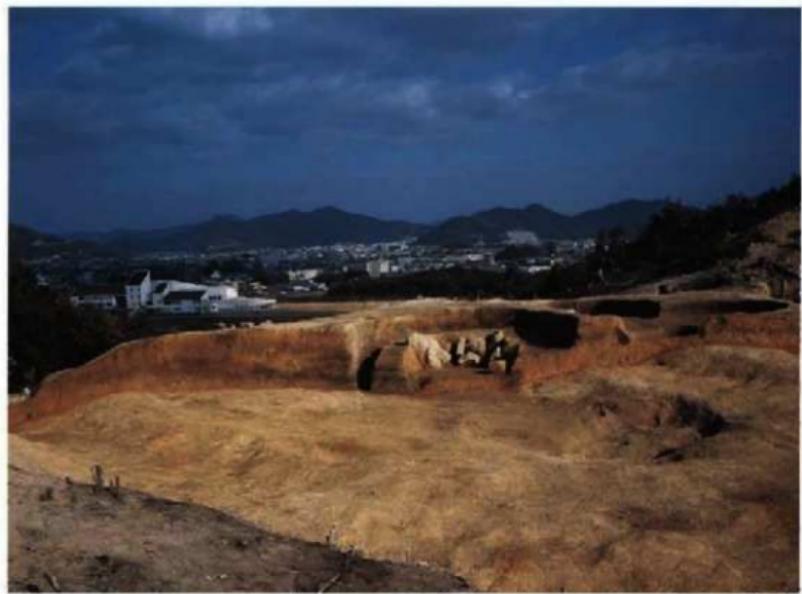


2号墓全貌

图版20



2号墓第1主体



2号墓丘断面



1号墳全景（調査前・北西から）



1号墳調査前の状況



1・2号墓全貌（北西から）



1・2号墓全貌（南東から）



1・2号墓全景（北北西から）



1・2号墓全景（北西から）

图版24



第6主体全景



第6主体全景



第6 主体（側面から）



第6 主体（蓋除去後・側面から）



土壇1-3 全景（南東から）



土壇1-3 全景（南東から）



土壤4 滤物出土状態



土壤1 滤物出土状態





第4・5主体、土壙墓2全景（北西から）



第4・5主体全景（南東から）



第4 主体金器（南東から）



鏡 出土状態



墓壙埋土 土器出土状態



第1・2 主体全景（東から）



第1・2 主体全景（西から）



第1主体（東から）



第1主体（南から）



第1～3主体（北西から）



第3主体（東から）



2号墓全景（南東から）



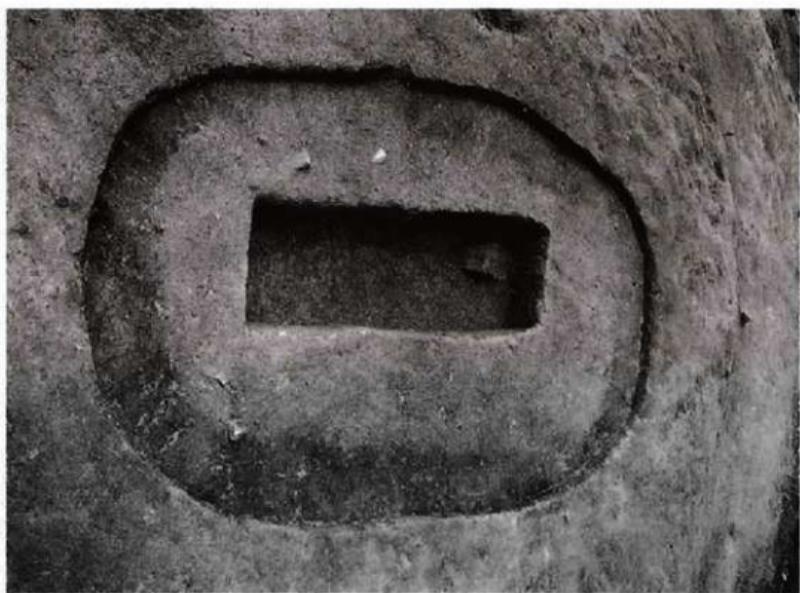
2号墓第2主体

图版34



2号墓第1主体挖出状况

2号墓第1主体





2号墓全景（西から）



2号墓第1主体



2号墓填埋堆积状况



2号墓填埋堆积状况



2号墓埴丘断面



2号墓埴丘断面と土腰1・2





1号墓出土土器



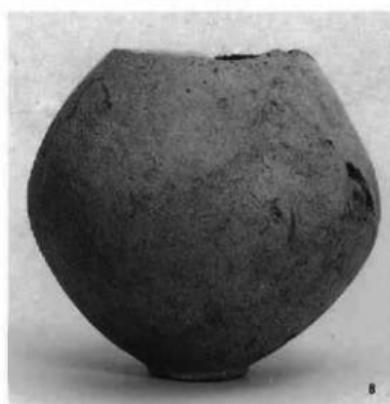
5



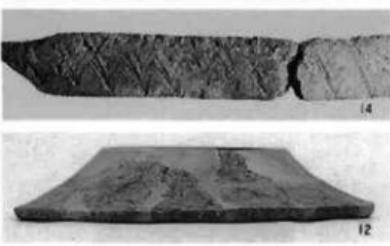
9



14



8



12



13

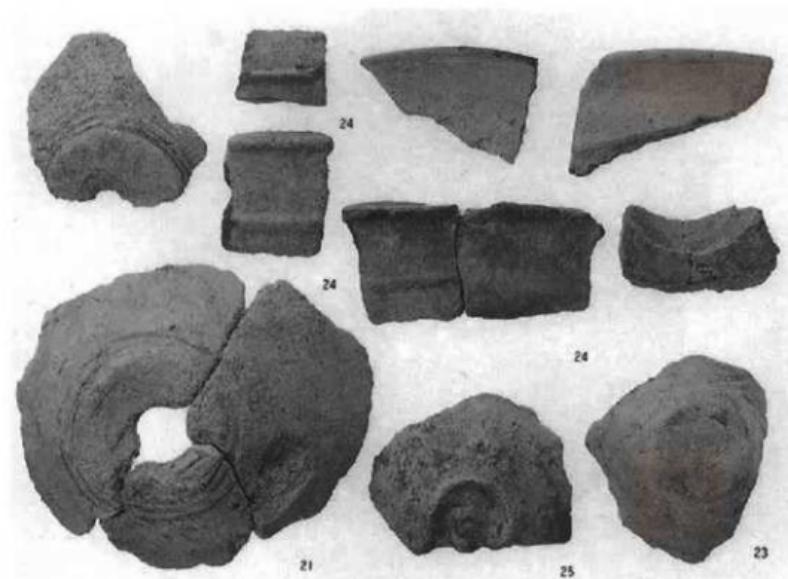
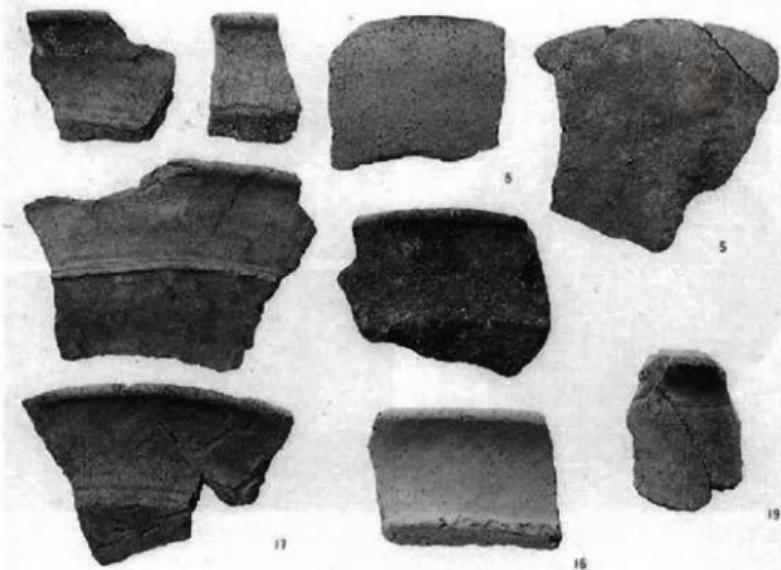


26

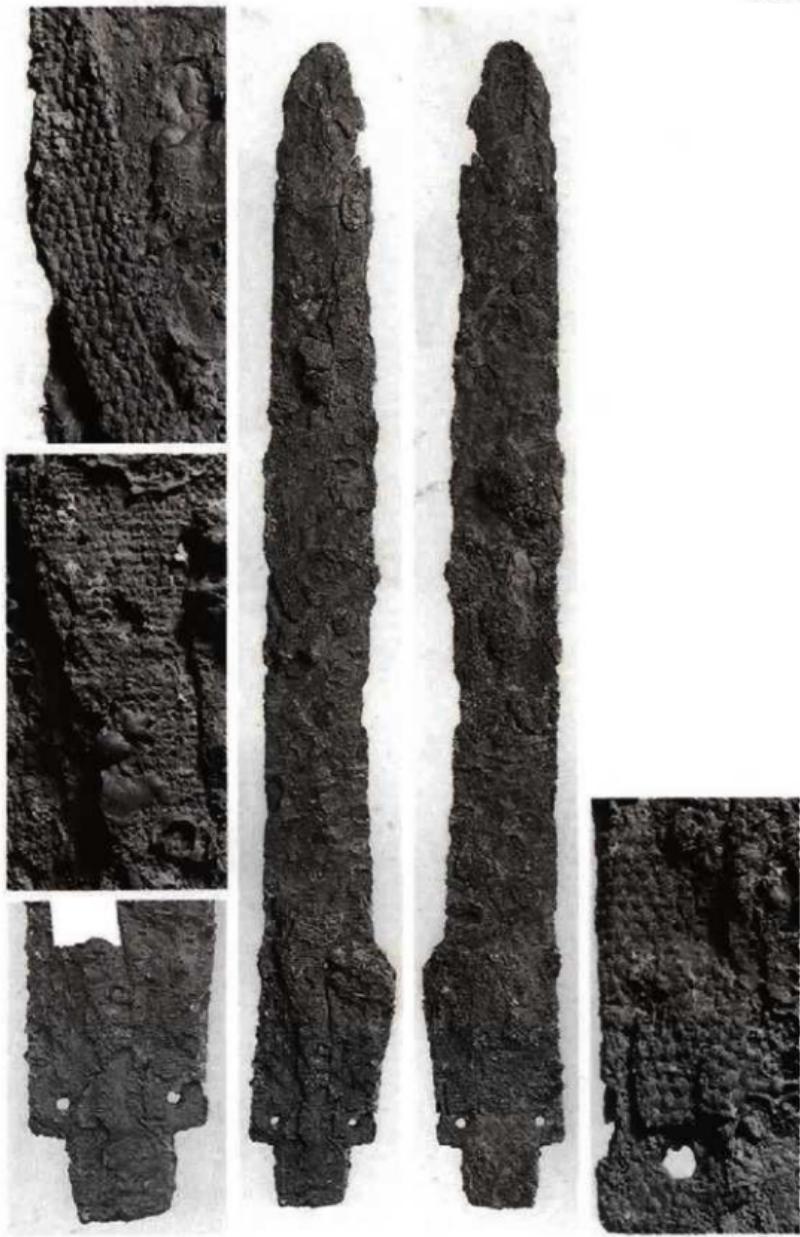
1号墓出土土器



1号墓第6主体出土土器〔土器棺〕



1号墓出土土器



1号墓第1主体出土嵌件



2号墓出土土器·1号墓出土铁器·铜镜·鏡



1



2

2号墓出土土器





4号墓全景



5号墓全景

第1節 半田山1号墓の調査

1. 立地

半田山1号墓は、支尾根頂上に古地している。半田山は独立丘陵で、尾根頂部は中央部の69mを最高としたほぼ平坦な尾根が東西に延びている。65.5mの5号墓が位置する地点まで続きそこから尾根は2つに分かれる。4号墓の位置する北東方向と1号墓の存在する南東方向となる。この間の谷は西側の谷とともに半田山丘陵で数少ない谷となっている。5号墓から緩斜面となり、徐々に低くなっている。2号墓の立地する鞍部へと延びている。2号墓から1号墓へ向かって逆に標高が高くなっている。標高65.3mの支尾根頂上から、揖保川へ向けて緩斜面となって標高は低くなっている。北東方向への支尾根は標高を上げることなく、下がっているので、1号墓の立地する支尾根頂上は眺望に優れている。北西方向を除いてすべての方向に視界は開けている。1号墓の大きな特徴の1つとして、可視範囲の広いことが挙げられる。

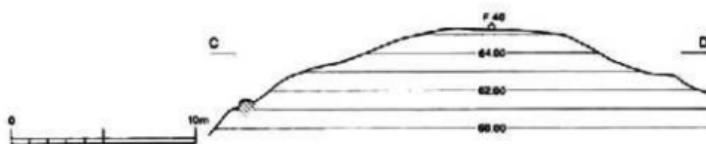
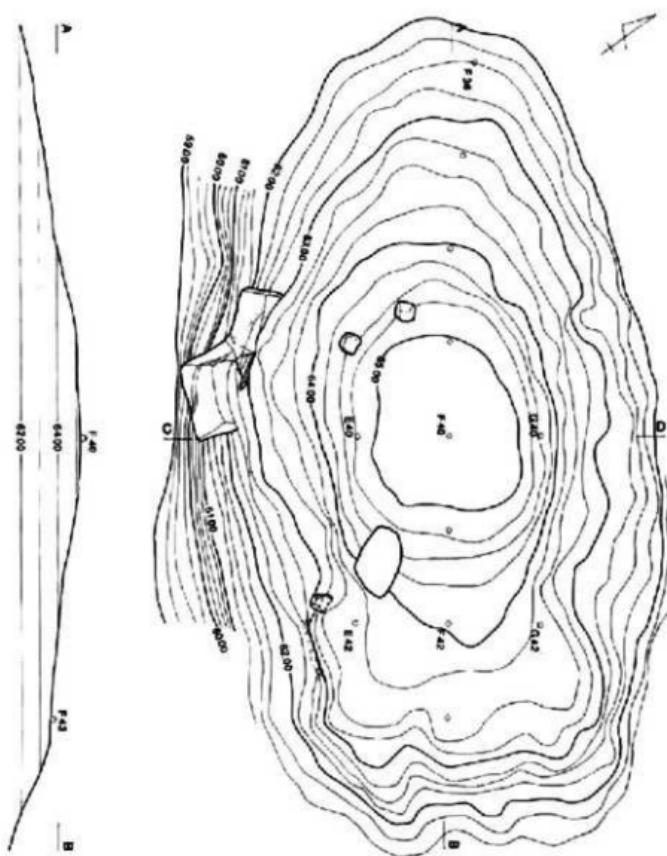
2号墓とは、水平距離で40m、垂直距離で45m離れている。主尾根上の5号墓とは、水平距離で93m、垂直距離で3.3mの隔たりがある。南側の水田面とは比高差46m、東側の揖保川とは比高差48mを測る。

墳丘上からの眺望は良好である。北西方向を除く方向を視界とする。その詳細は第2章に記述した通りである。北西方向の新宮東山墳墓群・山根墳墓群を除く同時期の墳墓はすべて視界に取めることができると言っても過言でない。著名な遺跡では、指呼の距離にある薬久山墳墓群をはじめ、白鷺山・宝記山・明神山の各墳墓群を見ることが可能である。揖保川を通して、遠く淡路島・四国・家島諸島をも遠望出来る。1号墓からの可視範囲が広いのが、大きな特徴と言えよう。揖保川流域（上流・下流とも）、播磨灘が望めるのも一つの意味があるものと思われる。

2. 外形

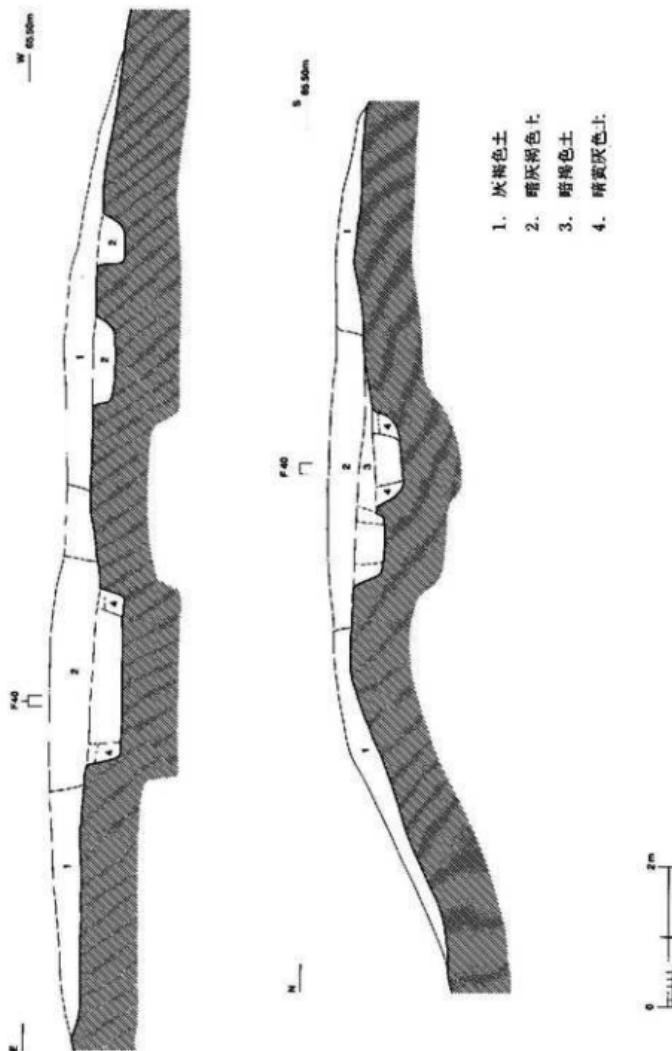
支尾根頂上に立地していることから、自然流失が著しい。そのため、田畠を残していないと思われる。調査前の状況では、墳頂部は平坦面を形成しており、墳頂部南西隅の露頭している岩の上に地蔵尊の祠が置かれている。その信仰による地形の変化も僅かながらあったかもしれない。東側山裾から地蔵信仰による祠が1号墓へかけて続いている。その小径が墳丘長軸方向に認められる。半田山への登り道にもなっている。それらの僅かな変化はあろうが、大半は尾根頂上という立地条件による自然流失が大きな要因と思われる。

調査前の観察では、墳塚を確定することは困難であるが、コンターラインからある程度推定することは可能である。墳頂部の平坦面は当初からの平坦面と思われ、65.00mで囲まれた地域が平坦部に当たる。平坦面の規模は南北7.5m、東西9mである。平坦面中央部よりやや南側の方



第84图 1号基地形测量图

第65圖 1號墓填土剖面圖



が僅かに高くなっている。尾根筋直交方向（南北）は比較的急斜面である。北側では狭い幅であるが、63.00mと62.75mの間に平坦に近い緩斜面が認められ、墳壠と考えられる。南側は明瞭でないが、63.25mと63.50mの間に僅かな差が看取される。南北のこの部分を削ると約17mとなる。尾根主軸方向（東西）は南北方向に比べると明らかでない。しかし、僅かな平坦部分が認められることからこの部分を墳壠と推定することが可能である。東側の方が顕著である。64.00mと64.25mの間に変化がある。64.00mより下は平坦になっている。調査前の状態では、この平坦部は墳丘に付属するものとも考えられたが、調査の結果関係のないことが判明している。西側は、さらに不鮮明である。63.75mと64.00mの間が墳壠と考えられる。この間の距離は18.5mを測る。墳壠推定部分の最も低い63.00mと墳頂の高い地点の65.32mの比高差は2.32mである。墳壠の最も高い64.25mとの比高差は1.07mである。墳形は主軸方向に僅かに長い楕円形を呈している。だが基本的には円形と考えても問題はないと思われる。

墳丘は、立地条件からか、ほとんど残っていない。また、調査の結果から、調査前の観察が大過ない数字であることが判明している。土層の堆積状況が劣悪であったことから、検討を加えることが出来なかつたため、墳壠の確定は地山を削ったものかどうか断定出来ない。現状の地形を見るかぎり、墳丘は地山を削平して、墳丘を画したものと思われる。尾根長軸に墳丘の位置を決定するのに、東側に平坦部を残したことについて意図するものがあるのであろうか。墳丘内に岩盤の岩が露頭している。自然地形を利用したことにも起因するが、露出している岩によって墳丘の位置を確定した可能性も十分に考えられる。

調査の結果から、堆積土は0.05~0.3mしかなく、墳丘構築についての検討は困難である。残存する墳丘よりも流土の方が多いと思われる。墳丘を画する明確な削平は描画出来ない。

3. 主体部

調査段階では、最初に土器棺と土塙墓を確認したが、土層堆積の検討から土塙墓は1号墓の次代の墓と考えられたので、本節では除外する。位置的には土塙墓（土塙墓2~4）は1号墓平坦面上に相当し、主体部上面に位置している。

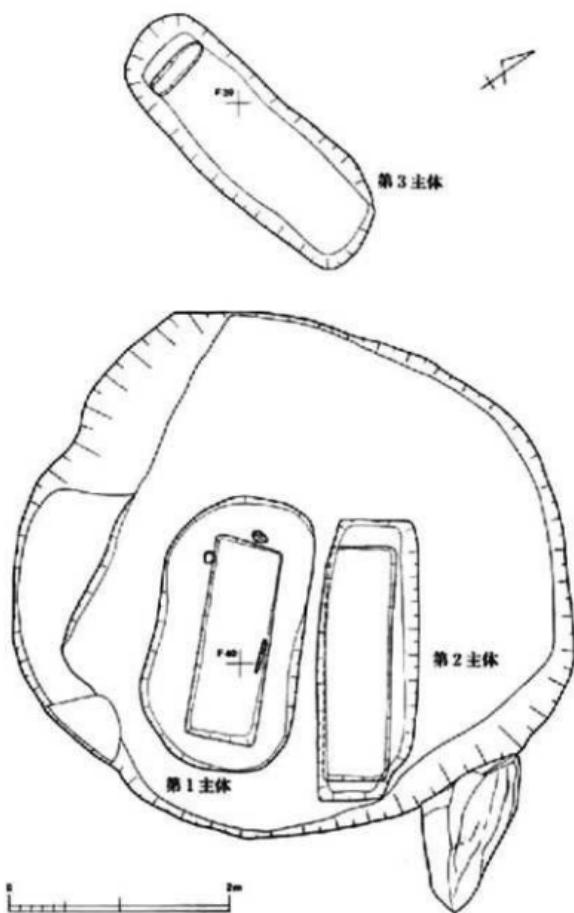
内部主体は大きくは2時期に分けられる。主体部の種類は1基の土器棺を除くと他の5基は木棺である。また、新段階の木棺に伴って供獻土器を埋納した土壙が3基検出されている。主体部に伴う遺構であることは間違いないので、本項でも触れることとする。

(1) 塗造時（古段階）の主体部

大型の墓壙を有し、木棺を2基平行して埋葬している。墓壙との関係からも、当初から企画的に2体埋葬を予定していたものと思われる。

① 第1主体（木棺）

1号墓で最初に埋葬された主体部である。墓壙内の堆積状況の観察からは、第2主体の埋置段階での墓壙の掘り起こしを再び行ったのか、同一埋葬なのか断定する資料は得られなかった。

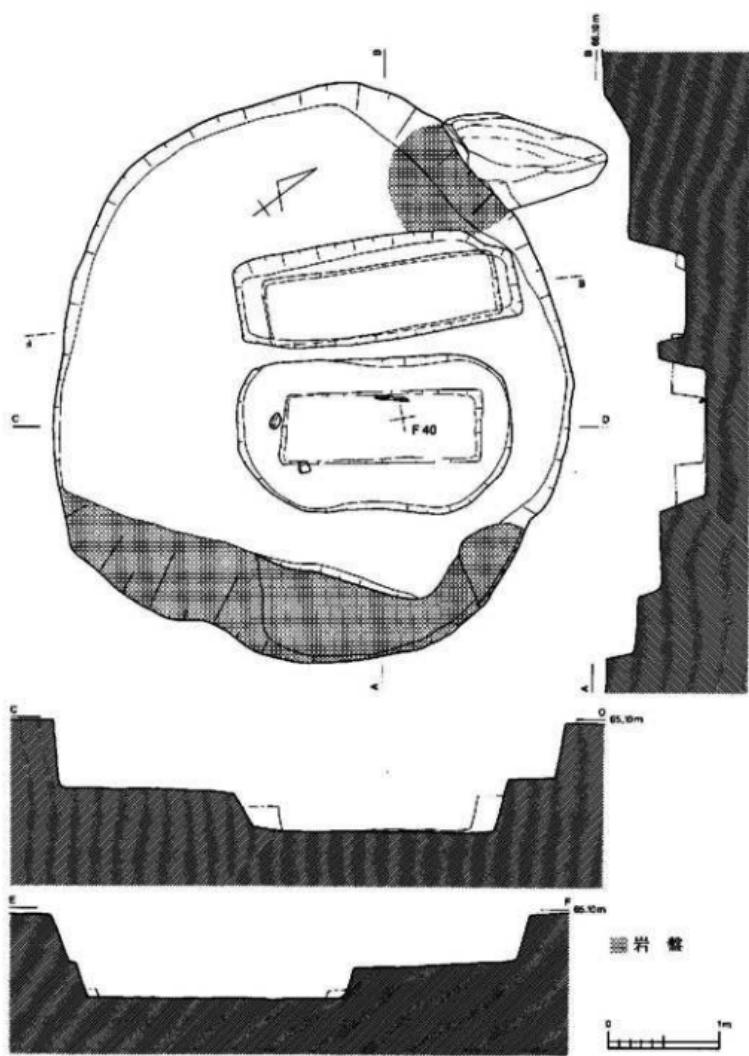


第88図 墓造時の主體部位置図

との関連で、東西方向の正確な数値は得られない。土層の堆積から推定すると、東西方向（尾根主軸方向）は3.7m前後と思われる。平面プランは東西方向（尾根主軸方向）の短い不定形円形である。南北方向は最長で5.1mを測る。岩盤がすでに露出していることから、墓壙掘り下げに制約を受けたことが十分に想像される。南半部と北東部は岩盤が露出していることから墓

調査結果からは墓壙は同一とすると考えた方が妥当と思われる。ただ、棺底のレベルは明らかに異なることから、時期差は明らかである。第2主体構築にあたっては、第1主体の位置を考慮して築かれしており、墓壙内での第1主体の位置が南へずれていることから、当初から第2主体の埋葬を予定して埋葬したものと思われる。同一墓壙を使用した主體部で、一時埋め戻したのち、第2主体埋葬時に掘り下げたものと思われる。

墓壙は大型のもので、二段墓壙となっている。平底面全体がほぼ墓壙といえるほどの規模を有している。平面プランは第4主体以降の墓壙



第67図 第1・2主体実測図

壇の肩は岩盤となり、他の肩よりも角度が緩やかである。岩盤は掘り残して、上段墓壇の下面で約4.1mの円形の平坦部を作り、下段の墓壇を掘り下げている。上段墓壇の深さは、0.4~0.5mである。第1主体の下段の墓壇は、この平坦面の南寄りに築かれている。上段下端から0.3m離れているが、平坦面はすでに岩盤となっており、ほとんど平坦面南端に築かれているのと同じである。下段墓壇の規模は、東西2.45m、南北1.35m、深さ0.5mを測る。

下段墓壇のほぼ中央に木棺が置かれている。主軸はN55°Wである。その中央に長さ1.8m、幅0.6mの木棺が埋納されている。棺と墓壇間の埋土は暗黄灰色土で分層はできなかった。棺検出面のレベルでは、埋土中に拳大からそれより小さな礫が混入している。数石で多数並べるように入れているわけではない。棺底で朱を検出している。ごく少量の水銀朱を一面に施したもので、棺底に限られている。棺底の朱の厚みなど広がりが均一であることから棺側には施していないかったと推測される。棺底でも東側小口近くには朱は分布していないかった。内側に小口板が存在していた可能性もある。その場合の内法の長さは1.5mとなる。棺底での小口穴などの遺構は認められない。

出土遺物は棺内遺物として、鉄劍がある。切先を東に向けて、棺中央の北長鋼板治いから出土している。片側の刃を棺底に着けて、棺底と約45°の角度を持って出土している。棺底におかず棺側に立て掛けたか、刃を棺底に着けて副葬したかのいずれかと思われる。

棺内遺物は鉄劍だけで、明らかに1号墓出土遺物と断定出来るものはない。墓壇内に混入し



第68図 第1・2主体墓壇埋土



第69図 第1主体墓壇断面



第70図 第1主体遺物出土状態

た土器片と第3・4主体墓壙埋土出土の鏡・銅鏡が第1主体棺上遺物と考えられる。主体部の規模や位置づけから鏡・銅鏡という特殊遺物は1号墓に伴うとした方が一般的だらうと思われる。

②第2主体（木棺）

第1主体に並んで築かれた主体部で、第1主体同様木棺である。墓壙も第1主体と同じ墓壙であり、二段墓壙となっている。上段は第1主体と同じで、中央より北側に位置している。第1主体が上段下端近くに接して下段墓壙を掘り下げているのに対し、第2主体の下段墓壙は、北側に平坦面を広く取っている。もっとも広い箇所で1.2mの幅を待っている。北東コーナー部分は岩盤が露出しているので、内側へ凹んでいる。下段の墓壙は長さ2.5m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。棺は墓壙南側に接して納めている。長さ2.1m、幅0.6mとなっている。北東コーナーでは岩盤が露出しているため、棺は岩盤にほとんど接するよう納められていたようである。第1主体墓壙肩とは0.1mと近接しているが、切り合はない、2棺並行して埋納することを計画していたものと思われる。

副葬品は出土しておらず、下段墓壙埋土からも団化可能な土器は出土していない。第2主体北側の上段墓壙下端付近から1個体の精製甕(26)が出土している。第2主体の遺物とは決められないが、第1主体か第2主体の築造時（古段階）の主体部に伴う遺物であることは間違いない。

③第3主体（木棺）

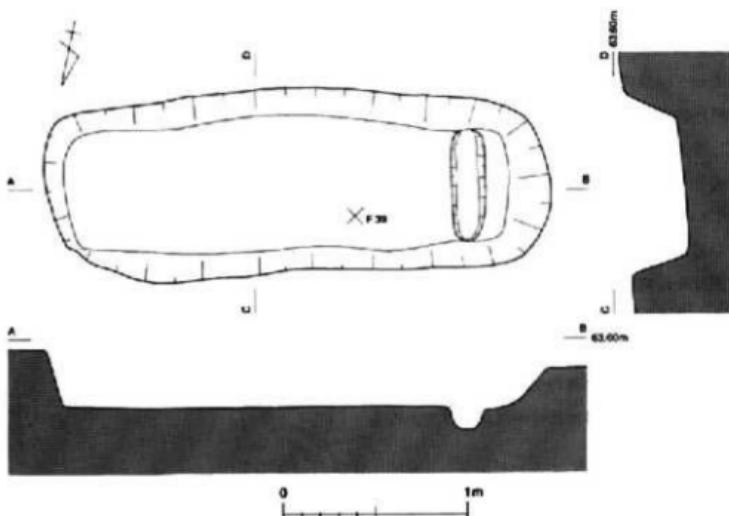
墳丘断ち割りに際して確認した主体部で、墳丘下で確認したことから築造時の主体部と考えた。墳丘断面を検討したが、掘り下げた痕跡が認められず、当初の主体部と考えられる主体部の位置は、平坦面の西端に当たる。第4・5主体の墓壙と最短部で0.45mと近接している。主軸方向は第1・2主体などと異なり、N70°Eをとっている。第1・2主体の推定される墓壙肩からの最短距離は1.6mと思われる。

墓壙の規模は、長さ2.75m、幅0.95m、調査した深さ0.45mを測る。上面では棺の痕跡を明らかに出来なかった。しかし、墓壙底で小口穴を検出したことにより、木棺と断定することが可能となった。小口穴は幅0.6m、幅0.18mのもので、棺幅はこの数値より小さいということだけが推定出来る。

出土遺物は棺底から鐵鏡の破片が1点出土している。第1主体では副葬品があるが、他の主体部では遺物が認められないことから、鐵鏡の破片とはいって、副葬品を持つ意義が第3主体にあるように思われる。



第71図 第3主体墓壙埋土



第72図 第3主体実測図

(2)追葬時〔新段階〕の主体部

新しい段階の主体部も木棺で、平坦面に大型の墓壙を掘り下げている。葬造時の主体部同様2基並んで埋葬されている。また、主体部上面に土壙が3基築かれており、2基の木棺に伴う遺構と考えられる。土壙と同じ面に土器棺墓も築かれており、大局的には同時期と考えられる。3基の主体部と3基の土壙がこの時期の遺構である。

①第4主体（木棺）

墓壙は大型の墓壙である。第1・2主体の上段墓壙とある程度平面を共有している。大型の墓壙で、第3段階の墓壙のように二段にはならない。深さも上段墓壙よりも浅い。規模は南北3.5m、東西3.6mとはほぼ同じ値の隅円方形プランである。深さは最大値で0.75mを測る。墓壙埋土は暗灰褐色土1層である。棺側部分（底から上面まで）には礫が見られるが、墓壙埋土には礫はほとんど含んでいない。

第4主体は、墓壙内の北側に位置している。長さ2.2m、幅0.7m、調査した高さ0.55mを測る。墓壙埋土は黒褐色土～暗褐色土である。棺



第73図 第4・5主体

上面で土器片が出土しているが、棺内からは遺物が出土していない。棺底のレベルは東側の方が5cm前後低くなっている。

棺外の墓壙埋土から鏡が出土している。前述したように第1主体の棺上遺物が移動したものと考えている。南側長辺側壁外側で出土している。第4主体と第5主体の間の墓壙埋土から、数点に分かれて出土しており、その位置は最も離れているもので、0.35m離れている。念のため、周辺の埋土を箇にかけたが、小片は確認出来なかった。現状で小片に分かれているのは、その後の保存状態によるもので、当初は数点の破片に分かれただけであろう。

土壙2と土壙3は第4主体に伴う遺構である。土壙3が西側小口部上面に、土壙2が棺上面に位置している。土壙2からは長頸壺2個体が、土壙3からは頭部より上を欠いた壺が出土している。

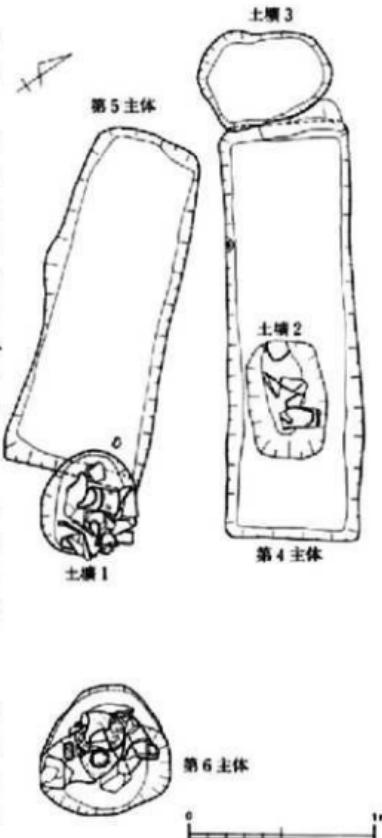
②第5主体（木棺）

墓壙南側に位置している。長さ1.9m、幅0.7m、調査した高さ0.35mを測る。やはり、棺内遺物は包蔵していなかった。棺幅は一定でなく、東小口部は0.8m、西小口部は0.55mを測る。棺底のレベルも西側の方が5cm前後低くなっている。第4主体とは、棺内のレベルの低い方の方位が異なるが、棺幅の数値も異なることから東側を頭位とする方が一般的である。

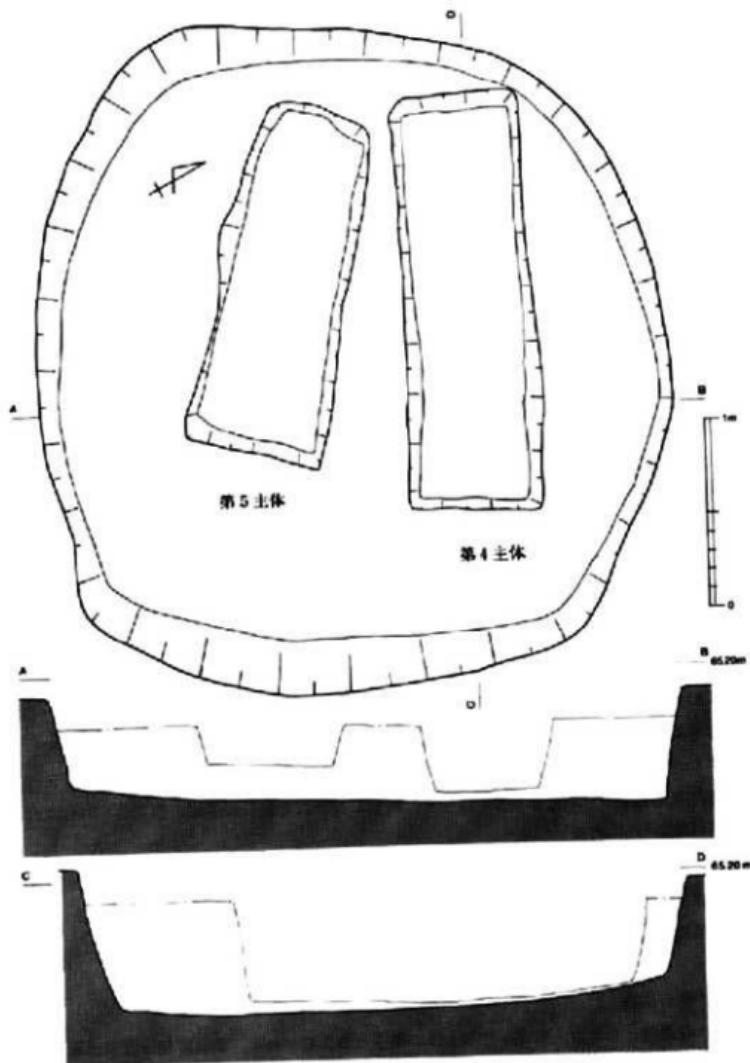
埋土は、第4主体と同じ黒褐色土～暗褐色土であるが、第4主体より色調は僅かに淡くなっている。

第4主体との明確な切り合い関係はないが、棺の位置や棺底のレベルなどから、第4主体の方が後に構築されたものと思われる。

第4主体と同じように、東側小口部上面に土壙1が存在する。壙内からは大型の器台だけなく、高杯・長頸壺も出土している。



第74図 遺構時の主体部位置図



第75圖 第4・5主体實測圖

③第6主体(土器棺)

第4・第5主体の墓壙を僅かに切って主体部の墓壙としている。上面で15cm余り切り合っているにすぎず、下部までは重複関係がない。換言すれば、墓壙肩部に接して構築されているとも考えられる。主体部の位置は、平坦面の東端で、北側には岩盤が露出している。第6主体周辺は岩盤が現れずに地山である赤褐色土が堆積していた。



第78図 遺葬時の墓壙と第6主体墓壙

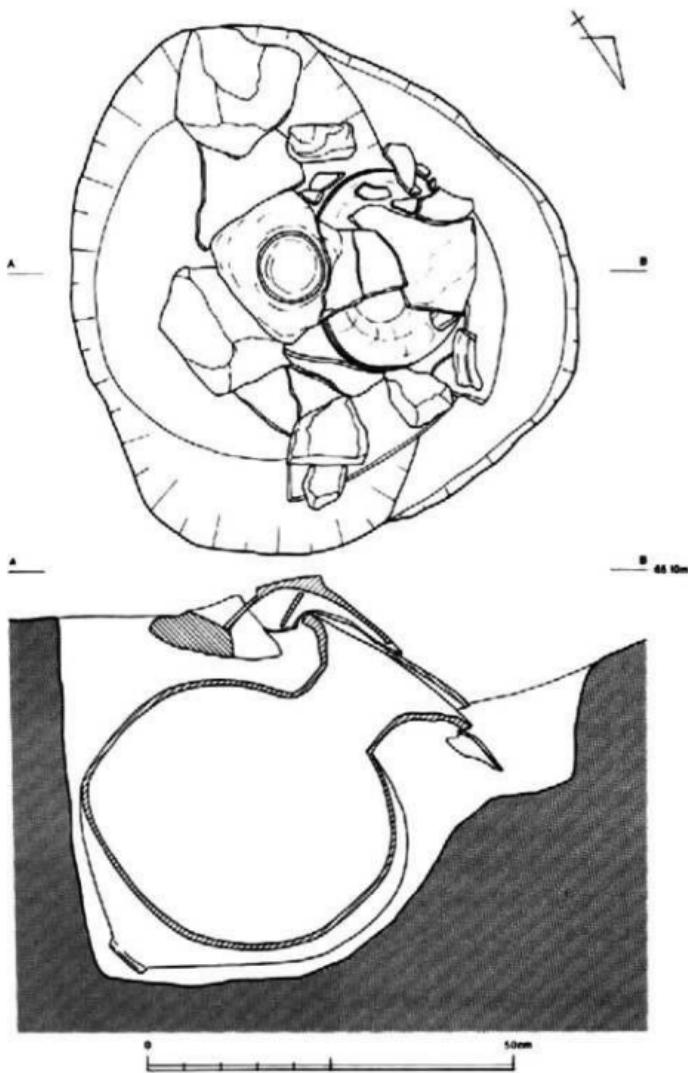
墓壙は上面で約径0.7mの不定円形を測る。掘り下げ方が、東半は垂直に近い急斜面となり、西半は緩やかに下げられている。平面プランでも東側の方が膨らんだ弧を描いている。深さは0.55mを測り、墓壙の形状は土器棺を埋納するのと深く係わっているようである。東側肩部と底は棺身と接するぐらいう最小限の掘り方となっている。東西方向の断面形状は片葉研状になっている。底は平らな部分が径30cm前後あるが、ほぼ丸底で棺身に則した形状である。

土器棺は2個体の土器から成っている。身と蓋で、ともに大形土器である。周辺の墳丘墓で確認される土器棺の棺身は口頭部を欠いているものが通常である。本例は、この時期の同種の遺構としては数少ない完形品である。器高50cm、口径27.2cmを測るもので、口縁部を西側に向けて約45°の角度を持って据え置かれている。棺身は割ることなく、完形で置かれたものと思われる。棺蓋は鉢を転用したもので、器高29cm、口径54cmを測る。側部に把手を受けたタイプで、埋葬用として作られたものではないと考えている。完形品を使用せず、埋葬時に破碎して利用したものと思われる。そのため、全体の5分の3程度しか残っておらず、把手も1ヶ所しか残存していない。ただ、把手と片口部が直交する位置にあることから、把手は対になっている実用品と考えられる。鉢を逆さにして蓋としている。身(壺)口縁部と平行状態(約45°傾斜)で蓋をするのではなく、水平状態で蓋をしている。鉢底部は、調査時の墓壙面とはほぼ同じレベルである。蓋は完全に合わせるものではなく、斜位に置かれた壺口縁端部に蓋である鉢の内面が接している。

墓壙の形状は蓋をする部分が外側へ出るので、棺身の中位で墓壙を拡大している。蓋口縁部が入る程度に拡大している。約10cm広げている。墓壙は、棺身口縁部側が緩やかに広がっている。墓壙埋土は暗褐色土1層であり、部分的に礫も使用されている。他の遺物は出土していない。

4. その他の遺構

明らかな遺構としては、第4・第5主体に伴う土壙3基がある。他に時期は限定出来ないが、土壙2基が築かれている。



第77图 第8主体实测图

①土壙1

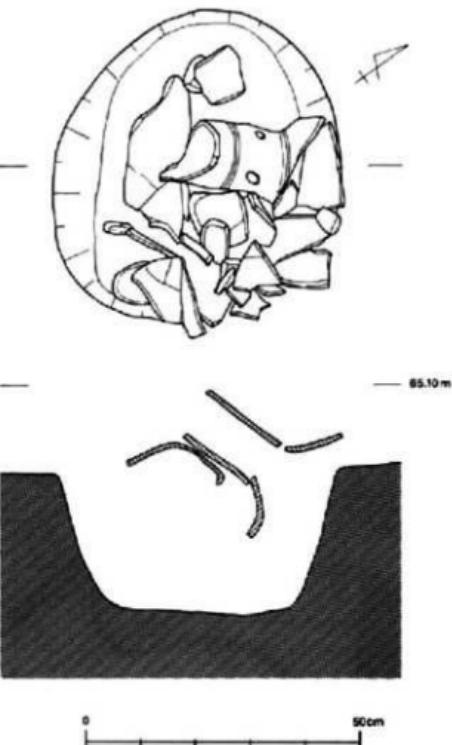
第5主体東側小口上面に位置する土壙である。長径60cm、短径50cmの梢円形を呈し、深さは25cmである。土壙は垂直に近い形状で下げられており、底は平らである。底面は35cmあり、断面は逆台形である。埋土は暗茶褐色土で、土器は上面に多く出土している。上部に器台(3)が、下部に高杯(5)の脚部、長頸壺口縁部(4)が出土している。すべて、倒壊した状態で出土しているものと思われる。

②土壙2

第4主体中央東寄り上部に築かれた土壙である。土壙1に比べて黒褐色の土壤化の進んだ土を埋土している。東西方向に長軸を持つ長方形の土壙で長辺62cm、短辺42cmを測る。土壙1のように底は平坦でなく、緩やかになっている。深さは、25cmを測る。土壙1と同様に上部で土器が横位置で出土している。長頸壺口縁部が大きな破片として検出されたが、整理作業によって完形に近い状態まで復原出来た。同じ形状の1個体の可能性のある壺(6・7)である。大型の破片以外は土壙内から出土している。

③土壙3

第4主体西側小口上面に築かれた土壙である。第5主体の主軸延長上でもあり、両方の主体部を意識して構築された可能性もある。埋土は土壙1と同じ暗茶褐色土で、土壙2とは異なって



第78図 土壙1実測図



第79図 土壙1土器出土状態

いる。平面形は不定形で、開円長方形に近い形である。長径76cm、短径50cmを測り、深さは21cmある。長径を第4主体主軸と直交する位置に設けており、第4主体の幅とはほぼ同じ規模である。断面形態も土壙1に近い逆台形になっており、底は平たい。

土壙上面では、土壙1・2のように出土遺物は確認出来なかつたが、埋土を掘り下げたところ、小形の壺が1個(8)出土している。口縁部を欠いているが、ほぼ完形に近い壺と思われる。他の土器は出土していない。

5. 出土遺物

(1) 陶生土器

1号墓から出土した陶生土器のうち圓化出来たものは26点である。このうち(1)、(2)は第6主体、(3)、(4)、(5)は土壙1、(6)、(7)は土壙2、(8)は土壙3、(9)～(10)は第1・2・3・4・5主体の墓壙から出土した土器である。

第1主体出土の土器

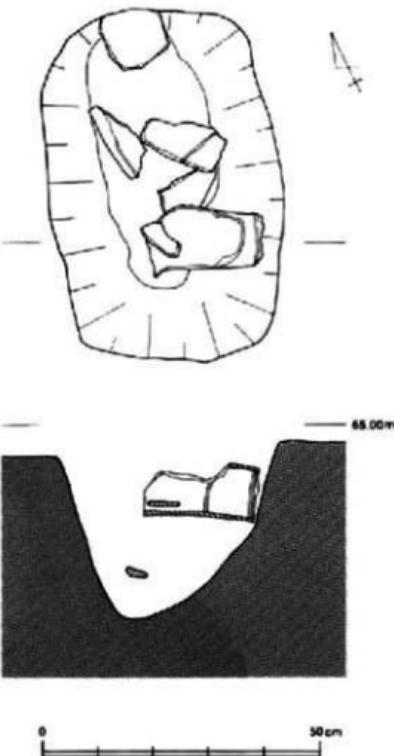
第6主体からは土器棺の棺身として使用された広口壺(2)と、その蓋として使用された鉢(1)が出土している。

(2)の広口壺は下方に拡張した口縁部に3条の凹線を施し、外反気味に直立した後、大きく開いた頭部とやや肩の張った圓球形を呈する大型のものである。外面は全面にヘラミガキ、内面はハケの後ナデ仕上げと非常に丁寧に作られている。

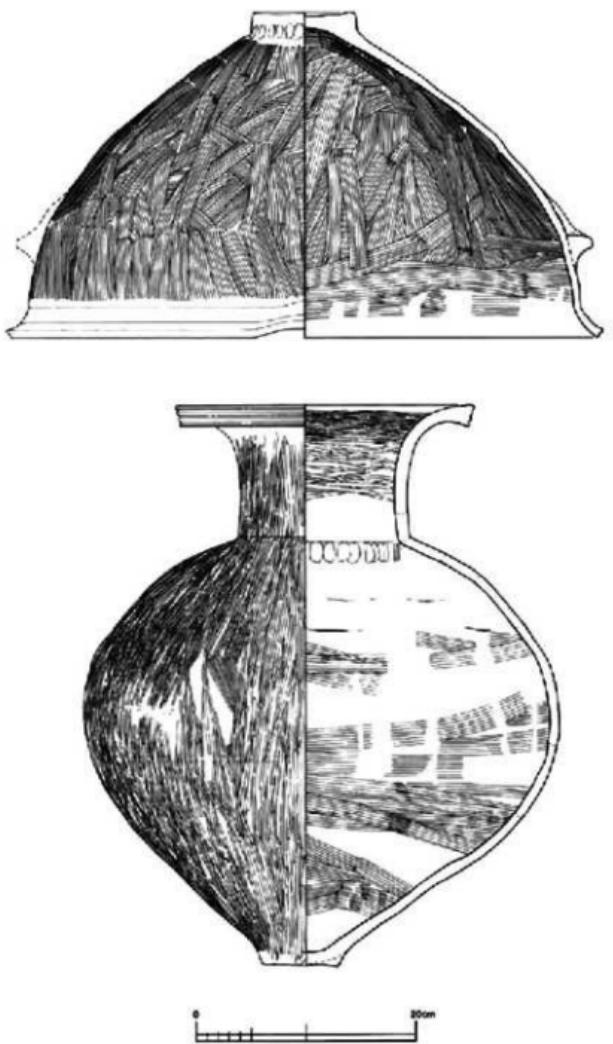
(1)の鉢は、外反して端面を持つ口縁部を有する片口の鉢で、これも大型のものである。左右両面には、把手を貼り付けており、底部は再成形法を用いていると思われる。内・外ともハケ調整を施し、口縁部はその上からヨコナデで仕上げている。

土壙1出土の土器

土壙1からは器台(3)、細頭壺(4)、高杯(5)が出土している。



第80図 土壙2実測図

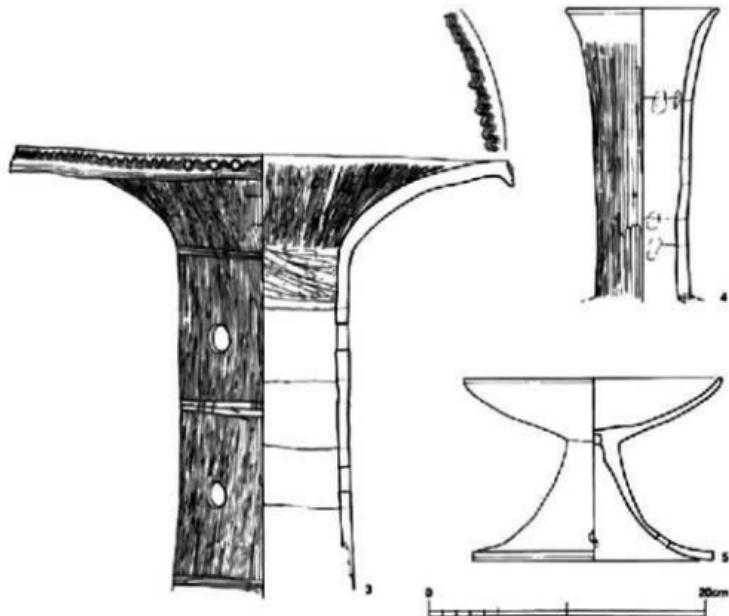


第81図 第6主体出土土器実測図

(3)の器台は、座部を欠失している。筒状の体部から大きく聞く口縁部を持つものである。口縁端部は下方に拡張され、やや外方に開いている。口縁端面と内部端には波状文を施し、口縁端面には3個1組の円形浮文が貼り付けられている。この円形浮文は復元すると8箇所貼り付けられていたようである。体部には3条の備描沈線文が上・中・下位の3箇所に施されており、円孔が上下2段に3箇所ずつ穿孔されている。調整は、外面にはタテ方向のヘラミガキ、内面は口縁部にヘラミガキ、口縁端部にはその後ヨコナデの仕上げを行っている。体部上位にはヘラケズリ、中位以下はユビナデによる荒い調整を行っている。

(4)は細頸壺の頸部と考えられる。約半分が残存している。体部との接合部からやや外反気味に立ち上がった後緩やかに外方に開き、口縁端部を尖らせている。調整は、外面がタテ方向のヘラミガキの後、口縁端部をヨコナデで仕上げている。内面上位と下位にヨコ方向のハケ調整、中位は荒いユビナデで仕上げている。内面には接合痕を残している。

(5)は高杯である。杯部は浅くゆるやかに聞く椀状を呈し口縁端部に1条の浅い沈線を巡らせている。脚部は円錐状の脚柱部からゆるやかに外反する裾部を持つ。脚部には円孔が4方向に



第82図 土塙1出土土器実測図

穿孔され、脚端部は垂直な端面を持ち1条の沈線を巡らせる。脚部外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリで調整し、端部は内・外面ともにヨコ方向のナデで仕上げている。杯部外面はタテ方向のヘラミガキを施している。内面は磨滅が激しく区別が困難であるがヘラミガキを施しているようである。杯部と脚部は分割成形の後接合されている。

土壙2出土の土器

土壙2からは、長頸壺(6)、底部(7)が出土している。(6)と(7)はおそらく同一個体であったと思われる。

(6)は長頸壺の体・頸部である。算盤形の体部を持ち、ラッパ状に外反する頸部へと続く。頸部に2箇所、体部上位に1箇所、頸部に4条、体部には3条の櫛描沈線文を施す。外面は頸部から体部にかけてタテ方向のヘラミガキ、体部最大径部のみヨコ方向のヘラミガキを施す。内面は頸部がユビナデで荒く、口縁部は内・外面ともにヨコナデで仕上げている。体部は上半がユビナデ、下半がハケで調整を行っている。内面上半には接合痕をのこしている。

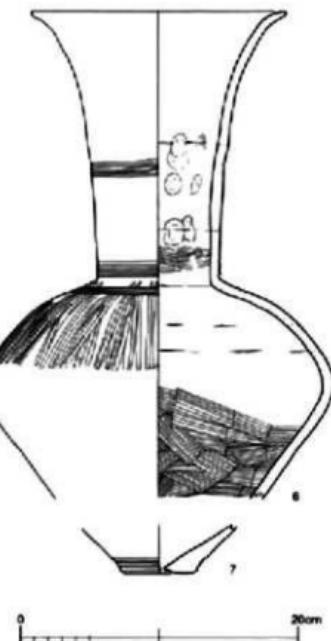
(7)は底部である。小型化した平底のもので、外面に3条の櫛描沈線文を施す。底面には穿孔があり、外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はハケで調整する。(6)、(7)いずれの土器も外面全面にヘラミガキを施した丁寧な造りの土器で、供獻用の土器であろう。

土壙3出土の土器

土壙3からは小型の壺(8)が出土している。肩部から上を欠失している。体部はほぼ中位に最大径をもつ鐘形を呈する。器厚は薄く、やや突出したドーナツ状の底部を持つ。調整は内面をユビナデで仕上げ、接合痕を残す。外面は全面をヘラミガキで仕上げていたようであるが表面の剥離が激しいため一部分看取できるのみである。本来は小型の精製壺であったと思われる。

墓壙出土の土器

第1・2・4・5主体の墓壙より出土した土器である。第1・2主体に伴う墓壙の位置から出土した頭をのぞいては、すべて上層から出土しているため、残りの土器はいずれの



第83図 土壙2出土土器実測図

埋葬主体に伴うものは確定できない。ここからは、器台(9)～(12)、高杯(9)～(12)、長頸壺(9)、(10)、甕(9)、(10)、体部(9)、異形土器(9)が出土している。

器台(9)は、土壤1出土の器台(3)とよく似たものである。口縁端面と口縁内面端に施された波状文、その上に貼り付けられた3個単位の円形浮文、体部の横描沈線文、3方向に穿孔された円孔、器形のプロボーション、色調など同時期の同一人物によるものとさえ思われる。た 第84図 土壙3出土土器だ外面と内面の口縁部が(3)はヘラミガキ(9)がハケ調整であることや、口縁端部の下方への拡張が(3)が外方に開いているのに対し(9)では垂直な面を持つなどの違いは残っている。

(9)、(10)、(11)の器台は色調、胎土などから同一個体である可能性が高い。(9)は器台口縁部で大きく水平に近いまでの開きを持つ大型のものである。下方に拡張された口縁端部はやや外方に開き、端面には3条の横描沈線文を施し、4個単位の円形浮文を貼り付けている。調整は外面はハケ調整の後口縁部のみヨコナデ、内面はヘラミガキの後口縁部をヨコナデで仕上げている。口縁端面には一部赤色顔料が付着している。

(10)は器台体部であるが、径の約1/3程度しか残存していない。残存高も10cmに満たず、体部の高さは不明である。円孔が穿孔されているが個数は不明である。外面の調整は、表面がほとんど剥離しているため明確ではないが一部ヘラミガキが看取できる。内面は荒いユビナデで仕上げている。

(11)は器台据部である。ゆるやかに外反しながら開き、端面を持つ。外面は丹念にタテ方向にヘラミガキされ内面はヘラケズリの後ヨコ方向のハケで仕上げている。一部赤色顔料が付着している。(9)、(10)、(11)とも表面の剥離がみられる。本来、化粧土で覆っていたものが剥離したものと思われる。製作時は化粧土を施したのち外面全面に丹念にヘラミガキを行い、一部には赤色顔料を塗布していたと考えられる。

(12)はミニチュアの器台の体部と考えている。直立する体部から据部に向かってゆるやかに外反するものである。器厚は比較的厚い。外面には稚拙な横描の波状文と直線文が施されている。調整は外面にタテ方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げている。波状文と直線文は器台(3)、(9)に共通する文様で、このことから(12)は器台とした。(12)はこれらを真似て製作されたと考える。

(9)は、器台体部から口縁部にかけてのものである。直立する体部から接合部で小さく屈曲し、広く聞く口縁部を持つ。口縁端部は下方に拡張され端面に波状文を施す。波状文は4本単位の横描かれ(3)、(9)のものより幅が狭く、そのため山形文に近く観る。端面には単位個数は不明であるが円形浮文を貼り付けている。外面の調整はハケで行っているが、体部と口縁部との接合部で明瞭に分かれ、体部は下方に口縁部は上方に向かって調整している。口縁端部はその後ヨコナデで仕上げている。内面は体部がヘラケズリの後荒いユビナデ、口縁部がナデで仕上げ

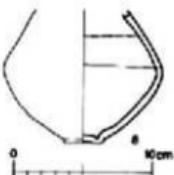
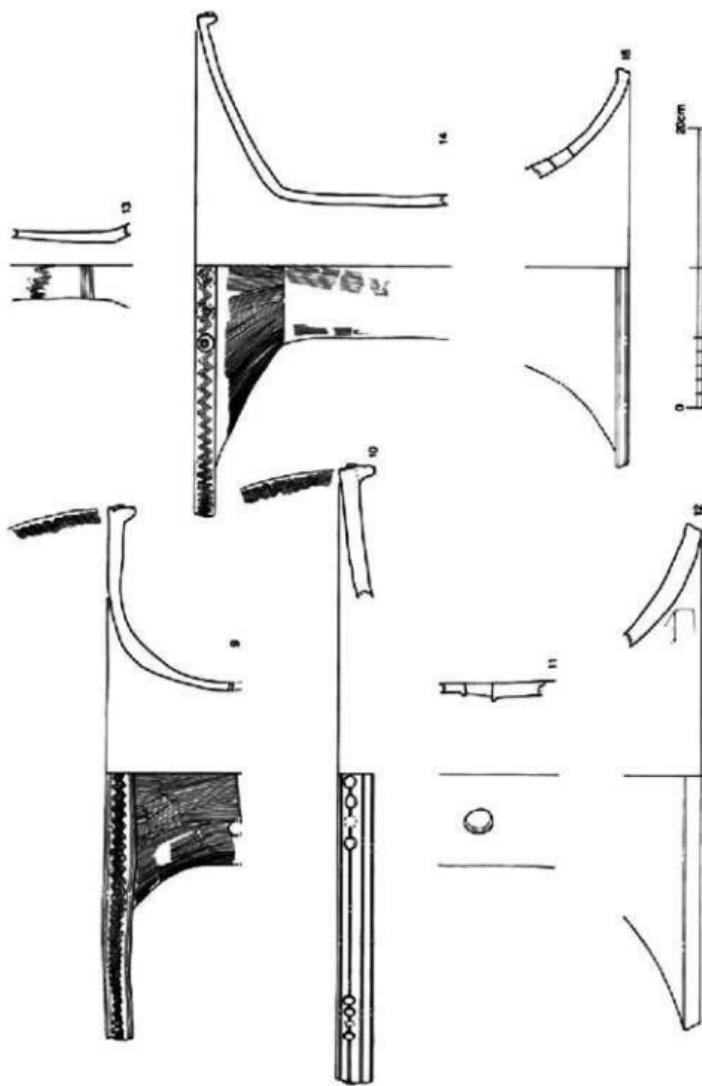
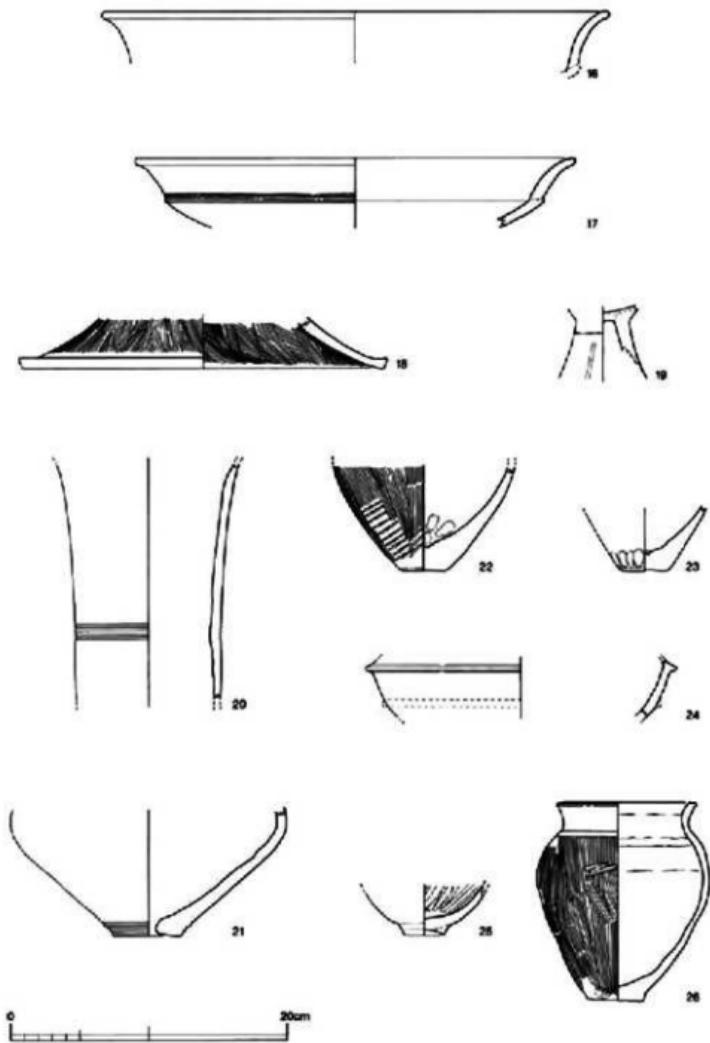
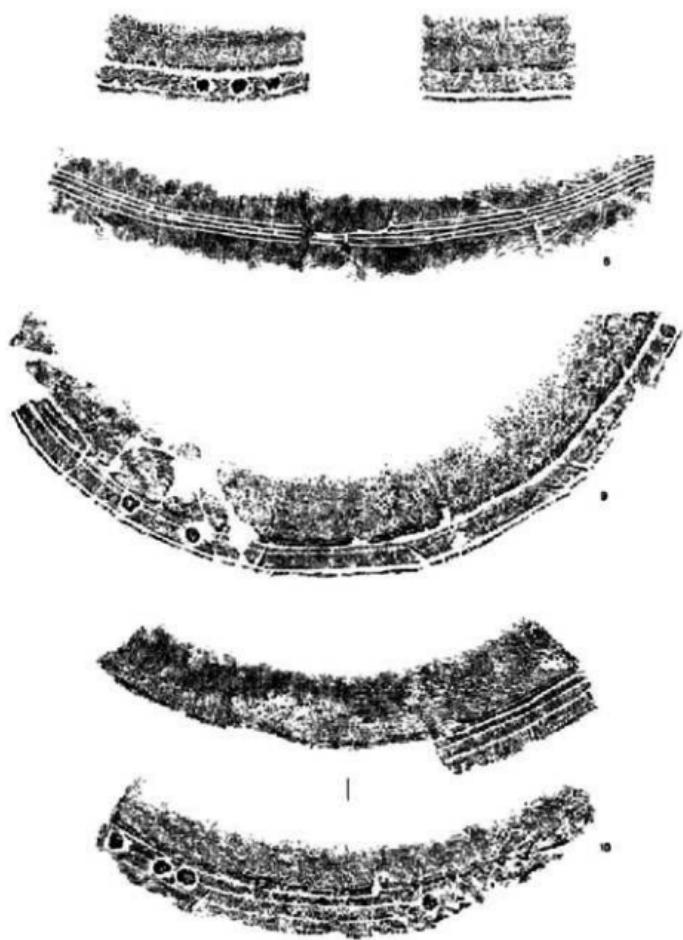


圖85 圖 墓葬出土土器測量圖(1)





第88图 墓出土土器实测图(2)



0 20cm

第87圖 弥生土器文様拓影(1)



第88図 弥生土器文様拓影(2)

る。(3)、(9)でみられた沈線、円孔は(8)にはみられない。色調は似ているものの器厚が薄く、(3)、(9)とは違ったやや繊の細い印象を受ける土器である。

(8)は器台裾部である。やや急な角度で開く裾部で端部は面を持っている。調整は外面はタテ方向のヘラミガキの後端部ヨコナデ、内面はヘラケズリの後ヨコナデで仕上げている。

(9)は高杯の杯部口縁部のみの残存である。口縁部径は復元で36.9cmと大型で大きく外反する口縁部である。端部は丸くおさめ、調整は内・外面ともナデで仕上げている。内・外面ともごく一部に赤色顔料が付着している。

(10)も高杯の杯部である。(9)と較べて口縁部は開きが大きく、体部は内骨氣味で浅い。口縁部との接合部には2条の沈線を施している。調整は口縁部内・外面ともにヨコナデ、体部外面はヘラミガキで仕上げている。

高杯脚部(11)はゆるやかに外反しながら開き、脚端部は端面を持っている。調整は内・外面とともにハケ調整の後、端部をヨコナデで仕上げている。円孔は穿孔されているが、個数は不明である。外面には赤色顔料の付着がみられる。

(12)は高杯脚柱部である。円錐状の脚部を持ち、脚部と杯部を分割して成形した後接合している。調整は外面縦方向のヘラミガキ、杯部-脚部接合部は粘土を貼り付けた後、ヨコナデで仕上げている。

(13)と(14)は長頸壺の頸部と体部下半であるが、同一個体になる可能性がある。(13)は頸部で、ラッパ状に開くと思われる。3条の横沈線を施し、外面はタテ方向のヘラミガキ、内面は荒いユビナデで仕上げている。(14)は体部下半から底部にかけての部分で、横に張った体部と穿孔し小型化した底部を持つ。調整は最大径部でヨコ方向のヘラミガキ、下半はタテ方向のヘラミガキを施している。内面はハケで調整している。(13)と(14)は、その色調、胎土、器形、内・外面の調整、沈線、底部の穿孔、など(6)、(7)の長頸壺と同じ形態的特徴を持った土器である。これら

の長頸壺は、底部の形態（穿孔）から実用に供されたものではなく、祭祀用に製作されたものであろう。

⑩と⑪は甕の底部である。両者とも小型化した平底の底部である。⑩は外面タタキの後上からタテ方向のハケでタタキ目を消している。⑪はナデで仕上げ、底部と体部の接合部は指で押さえている。内面はヘラケズリを施し、⑪についてはユビナデで仕上げている。

⑫は小型甕の底部である。外面にヘラミガキを施し、丁寧に仕上げているように見えるが底部は粘土紐を貼り付けて高台風にしている杜撰な仕上げである。

⑬は完形の小型の甕である。墓壙内下層から出土し、第1・2主体に伴う遺物である。丸みをもって外反する口縁部に、上位に最大径をもつ体部、やや突出した底部を持つ。口縁端部上面は平坦面をもち、1条の沈線を施している。調整は体部外面全面をハケで調整し、口縁部はヨコナデで仕上げている。内面は、下半をヘラケズリ、上半にユビナデを施す。底面はヘラを用いて整形している。底部再成形法を用いたと思われ、ドーナツ状を呈する。この土器も実用に供されたとは思えない精製の甕である。

⑭は異形土器とした。2条の凸帯を貼り付けた土器で、上方は内側へ屈曲する。調整は外面はヘラミガキ、内面はナデで仕上げている。見たところ丁寧な造りである。手培形土器の可能性も考えられる。

1号墓からは、第6主体、土壙1、2、3、第1・2・4・5主体の墓壙より土器が出土している。第6主体は第1・2主体の墓壙を切っているため、これより新しいものと考えられる。しかし第1・2主体の上層につくられている第4・5主体の墓壙との切り合いは明らかではない。土壙1、2、3は第4・5主体の棺上祭祀に伴う遺物と考えている。このため、層序的に⑨→(1)(2)(3)～⑩→(3)～(8)という順序になると考えられる。

⑮は第1・2主体の墓壙より出土し、1号墓出土の土器のなかではやや古いと考えている土器である。内面下半にヘラケズリがみられることに新相を示しているようであるが、庄内型の甕などに施されているヘラケズリとは異なり、むしろ播磨地方の中頃の土器にみられる内面下半のヘラケズリの流れをくむものと考える。また、中部瀬戸内地方にみられるような内面上半にまで及ぶヘラケズリとも趣を異にする。V様式の後半に小型甕が量的に増大していることなどを考慮すれば、V様式の中頃以降に収まると考えるが、上層出土の一群の土器よりはV様式の中頃以降という範囲の中では古い様相が看取できる。この甕は口縁内外面をヨコナデで仕上げていること、体部上半に輪積痕が残っていることなど、川島・立岡遺跡⁽¹⁾20満土器の甕Cまで統く形態の土器と考えられる。

⑯以外の墓壙出土の土器は、第4・5主体が第1・2主体の上につくられているため、どちらに伴うものかは不明である。ここから出土した土器もV様式の様相を示す。高杯切は浅く内

脇する杯部に大きく外反する口縁部を持っている。これはV様式の中頃以降にみられるもので、庄内式までは下らない。**06**が、手焙形土器であるとすると、その出現が中頃以降であり時期的には一致する。**02**の壺、**09**の鉢もV様式に取まるものと考えられる。

第3主体出土の土器棺はこの地方では類例が多い。ただ棺身に使用された壺(2)は口縁部が打ち欠いてある場合が多い。一般に外面に縱方向のヘラミカキ、内面はハケで調整している例が多い。(養久山5号墓5号墓、18号墓、32号墓第4主体、40号墳第3主体、42号墳第2主体)半田山1号墓の棺身に使用された壺の調整も同様の様相を示している。頭部が直立し、口縁部がひらく形態は、大まかに言えれば養久・谷遺跡¹²出土の壺①、やや時期が下るが川島・立岡遺跡20溝出土の壺Fに類似している。しかし、川島・立岡遺跡20溝出土の壺Fの内面ヘラケズリと外面ハケ調整が当遺跡の壺(2)には行われていない。この違いは、両者の時期的な違いであろう。壺として使用された鉢(1)は内外面とも丹念にハケで仕上げており、タタキ痕は残していない。この壺と鉢との間には時期差は感じられない。これらの時期は、壺の体部が球形に近くなっているものの未だ圓球状であること、内面にヘラケズリがないことなどからV様式の後半、そして庄内式には至らないところにおきたい。

土器1、2、3は第4・5主体の棺上祭祀に伴う遺構と考えている。土壤1からは器台(3)、細頸壺(4)、高杯(5)が出土しているが、これは播磨・吉福遺跡¹³の土壤5と較べ、要を欠いているもののその器種構成が良く似ている。播磨・吉福遺跡の土壤5の時期として庄内式直前あたりが与えられている。これを基準に半田山1号墓の土壤1、2、3の時期を考えてみると、土壤2から出土した長頸壺(6)(7)が保証てくる。この長頸壺は播磨・吉福遺跡のものと較べると内面上位に輪積痕を残し、下半をハケで調整していること、外面はヘラケズリで仕上げていることなど類似点が多い。しかし、口縁部の外反度が大きいことや体部が未だ球形には到っていないことなどを考えると弥生式土器の範疇に入れるべきであろう。(4)の細頸壺も頭部の形態が一般に外反→直立→内弯の順に新しくなってゆくことからすれば、V様式の中頃以降に比定されるが最終段階までは下らないと考える。他地域に類を求めるならば、田能遺跡¹⁴の第6Y調査区第2溝、第1A調査区大溝、第1B調査区出土の長頸壺、黒谷川郡頭遺跡¹⁵の溝1、17が挙げられる。

器台は(3)と(9)ほぼ同じ形態を示しているため、同時期のものと思われる。(10)は(3)と類似した胎土、色調を示して調整なども似ている。(10)は内面端部に波状文が施されていないことから当初脚部と考えていたが、当遺跡では脚部の形態が**06**(4)のように端面を拡張していないものが多く、また端面に円形浮文が付くことなどから器台体部→口縁部とした。同一個体と考えていい。000002は色調が浅黄橙色を呈し、口縁端面に凹線を施すなど他のものとは様相を異にしている。器台は川島・立岡遺跡、門前遺跡¹⁶、養久・谷遺跡、播磨大中遺跡¹⁷、八代深田遺跡¹⁸、本位田遺跡¹⁹、播磨・吉福遺跡等から出土しているが、類似しているものとしては、播磨・吉

福道跡のものが最も近い。口縁部端面が上方に拡張することなく、下方にのみ拡張されていることや、端面の凹線文、波状文、貼り付けられた円形浮文、脚部の形態に類似点を見出すことができる。口縁部端面に波状文を施し、その上に円形浮文を貼り付ける技法はやや離れているが、神戸市の玉津田中遺跡¹⁰出土の器台にもみられる。当遺跡出土の器台は周辺の集落遺跡から出土している器台とは、形態的には類似しているもののその装飾性、仕上げの丁寧さにおいて違いを見せる。しかし、埋葬遺跡である半田山1号墓より出土した器台が周辺の集落遺跡より出土した器台の流れをくむものであることは確かである。墓上において供獻として器台を用いているところなどは、中部灘戸内地方の葬送儀礼の影響を受けていると思われる。

当遺跡とはほぼ同時期の遺跡として平成元年3月に赤穂市の原田中遺跡¹¹で調査された墳丘墓からは弥生時代後期の器台が周溝より出土している。出土の器台は、その他の土器とともに吉備地方の影響を受けている。当遺跡出土の器台とは形態的に類似点は少いが墓上において供獻として器台を用いていると考えられるところなどは、吉備地方の葬送儀礼の影響を受けていると思われる。これまで西播磨において無いとされてきた平地に墳丘墓が発見されたことによって当地方の弥生時代後期の墓制に畿内の影響もつよく受けた可能性がうかがえる。

〔註〕

- (1) 石野博信ほか『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会 1971
- (2) 近藤義郎 松本正信 加藤史郎 是川 長『菱久山墳墓群』揖保川町教育委員会 1985
- (3) 深井明比古 市橋重喜『菱久・乙城山』兵庫県教育委員会 1988
- (4) 渡辺昇『菱久山42・43号墳』兵庫県教育委員会 1985
- (5) 松本正信『菱久・谷遺跡』揖保川町教育委員会 1985
- (6) 石野博信 村上益昌 松下勝『兵庫県埋蔵文化財調査報告第2集』兵庫県教育委員会 1974
- (7) 福井英治ほか『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会 1982
- (8) 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡』徳島県教育委員会 1986
- (9) 菅原康夫ほか『黒谷川郡頭遺跡II』徳島県教育委員会 1987
- (10) 上田哲也ほか『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』兵庫県・竜野市教育委員会 1971
- (11) 上田哲也『播磨大中』播磨町教育委員会 1965
- (12) 山本博利 秋枝芳 森下大輔『八代深田』姫路市教育委員会 1977
- (13) 井守徳男ほか『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(佐用編)』兵庫県教育委員会 1971
- (14) 山本三郎ほか『玉津田中遺跡 調査概報1』兵庫県教育委員会 1984
- (15) 『原田中遺跡現地説明会資料』赤穂市教育委員会 1989

第3表 1号墓出土土器觀察表

No.	器種	色調	法 異	形 態	技 法	備 考
1	鉢	赤褐色 -淡黄褐色 10R 6/6 ~7.5YR 8/3	口径 54.0cm 底径 9.2 cm 器高 29.0cm	体部から外反する口縁、端面を持つ。口縁に片口、左右に把手。	外面 ハケ後口縁ナデ。 内面 ハケ後口縁ナデ。 底部体部間にユビオサエ。	第6主体 十勝館の 蓋
2	広口 壺	によい黄褐色 10YR 7/2	口径 27.2cm 底径 43.2cm 底径 7.1 cm 器高 50.0cm	横に開く口縁部、下方に拡張した口縁端部、ほぼ中位に最大径を持つ体部。	外面 タテヘラミガキ。 内面 ユビ成形・ハケ・ナデー 体部、 ヘラミガキ・口縁部。 口縁端間に3条の凹線。	第6主体 上器館の 身
3	壺合	によい褐色 5YR 7/3	口径 (36.4cm) 底径 12.0cm 残存高 31.0cm	筒状の体部から大きく開く口縁、端部は下方に拡張。体部に3方向の円孔が2段。	外面 タテヘラミガキ。 内面 体部上位はヘラケズリ以下はユビナデ。口縁ヘラカキ端部ナデ。 口縁端面、内面端に波状文。 体部に3条の沈線が3段。	壺合体部 -口縁部 土塚1出土
4	細頸 壺	明赤褐色 2.5YR 5/8	口径 (11.2cm) 残存高 20.5cm	頸内骨氣味に直立する頸部にラッパ状に開く口縁部。	外面 タテヘラケズリ後ヨコナ チ。 内面 上部はヨコハケ、下部ユ ビナデ。	細頸壺 部土塚1 出土
5	高杯	褐色 5YR 6/6	口径 18.6cm 脚径 17.4cm 器高 13.1cm	橢状の杯部、外方に広がる脚部、端部は垂直の端面を持つ。4個の円孔を穿孔。	外面 ヘラミガキ端部ナデ。 内面 ヘラケズリ後ナデ。分割 成形。	土塚1出 土。
6	瓦頭 壺	によい黄褐色 10YR 7/4	口径 (18.4cm) 底径 (25.3cm) 残存高 34.3cm	ラッパ状に開く頸部に上位に最大径を持つ体部。	外面 タテヘラミガキ、最大洋 部のみヨコヘラミガキ。 内面 頸部と体部上半はユビナ デ、下半はハケ。 頸部、体部に沈線文。	7と同一 個体か。 土塚2出 土
7	長頸 壺	によい黄褐色 10YR 7/4	底径 (5.6cm) 残存高 34.3cm	底部から外方に開く体部。	内面 ハケ、底部穿孔。 3条の沈線を下部に施す。	長頸壺底 部土塚2 出土
8	壺	淡黄色 2.5Y 7/4	底径 11.5cm 底径 2.8cm 残存高 9.5cm	やや突出した底部に、ほぼ中位 に最大径を持つ体部。	外面 ヘラミガキ。 内面 ユビナデ、接着痕残す。	上部欠、 表面剥離 人。土塚 3出土。
9	蓋合	褐色 2.5YR 8/6	口径 (38.9cm) 残存高 10.0cm	筒状の体部から大きく開く口縁部、端部下方に拡張。体部上位に3孔の円孔。	外面 タテハケ。 内面 体部右方向ナデ。 口縁端部、内外面ナデ。 口縁端面、内面端に波状文。 端面に3個単位の円形浮文。	蓋合上部 これ以降 は蓋壺出 土
10	器台	淡黄褐色 10YR 8/4	口径 (44.0cm)	大きく広がる口縁部、端部を下方に拡張。	口縁内面端に波状文、端面に3 条の沈線、4個単位の円形浮文。 赤色顔料の付着。	表面剥離 大11、12 と同一個 体か
11	蓋合	淡黄褐色 10YR 8/4	口径 (13.0cm)	3孔の円孔。	内面 タテ方向のユビナデ。	表面剥離 大、体部

〔 〕は復原品

No	器種	色調	法量	形態	技法	備考
12	器台	浅黄褐色 10YR 8/4	幅径 (32.0cm) 残存高 5.5cm	ゆるやかに大きく広がる瓶。	外面 タテヘラミガキ。 内面 ヨコナデ。 赤色顔料の付着。	瓶部
13	器台	浅黄褐色 10YR 8/4	体径 (5.0cm) 残存高 9.0cm	瓶部に向かってゆるく圓く体部。	外面 タテヘラミガキ。 内面 ナデ。 椎描法波状文、直線文。	ミニチュア器台 体部
14	器台	橙色 5YR 7/8	体径 (10.5cm) 幅径 (38.0cm) 残存高 18.3cm	筒状の体部からやや屈曲して広がる口縁部。端部を下方に拡張。	外面 口縁・体部タテハケ 内面 体部ユビナデ、口縁部ハケ。端部はヨコナデ。 波状文、円形浮文。	口縁部 ～体部
15	器台	橙色 7.5YR 7/6	幅径 (28.0cm) 残存高 7.5cm	端部をわずかに上方に拡張し縁面を持つ。やや深めに聞く瓶。円孔を穿孔。	外面 タテハケ、端部はヨコナデ。 内面 細かいヨコハケ。	瓶部
16	高杯	明黄褐色 10YR 7/6	口径 (36.9cm) 残存高 4.0cm	やや深めに立ち上がる口縁。	内・外ともにナデ。 一部赤色顔料の付着。	口縁部
17	高杯	橙色 5YR 6/6	口径 (32.0cm) 残存高 4.0cm	浅く聞く杯部から屈曲して大きく聞く口縁部。杯部との接合部に棱を持つ。	外面 杯部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。接合部に2条の沈線。 内面 口縁部ヨコナデ。	杯部
18	高杯	赤～明黄色 10R 4/8 ～10YR 7/6	脚径 (26.8cm)	外反しながら聞く脚部。	内・外ともにハケ、端部のみヨコナデ。 一部赤色顔料の付着。	脚部
19	高杯	橙～明橙色 2.5YR 6/6 ～7.5YR 7/8	残存高 5.2cm	円錐状の脚部。	外面 杯部と脚部との接合部はヨコナデ。脚部はタテヘラミガキ。円板を埴す。	脚部
20	長頸瓶	にっぽい黄褐色 10YR 7/4		ラッパ状に聞く頸部。4条の沈線を持つ。	外面 タテヘラミガキ。 内面 ユビナデ。	頸部
21	長頸瓶	にっぽい黄褐色 10YR 7/4	体径 (20.0cm) 底径 (5.0cm) 残存高 9.0cm	上半に最大径を持つと思われる体部。底部に3条の沈線と円孔を穿孔。	外面 タテヘラミガキ。最大径部はタテヘラミガキ。 内面 タテハケ。	底部 20と同一個体か
22	甕	灰黄褐色 10YR 4/2	底径 (3.5cm)	平底の底部から内脣骨溝に立ち上がる。	外面 右上リのタタキ後ハケで消す。 内面 ヘラケズリ後ユビナデ。	底部
23	甕	灰褐色 7.5YR 6/2	底径 (3.5cm) 残存高 4.7cm	やや突出した平底の底部。	外面 ナデ、体部と底部の接合部。ユビオサエ。 内面 ハラケズリ。	底部
24	異形土器	橙色 5YR 6/6		上部、屈曲して内側に伸びる。	外面 2条の凸唇を貼り付け、ヨコヘラミガキ。	手培形土器か？
25	鉢	橙色 5YR 6/6	底径 (3.0cm) 残存高 3.6cm	内脣しながら上方に聞く底部。	外面 タテヘラミガキ。 内面 ケズリ。 粘土紐を貼り付けて高台風の底部を形成。	底部
26	甕	橙色 5YR 6/6	口径 10.2cm 体径 12.5cm 底径 4.2cm 基高 14.0cm	外反する口縁部、上位に最大径を持つ体部、突出した底部。	外面 ハケ後口縁部ヨコナデ。 内面 体部下半へラケズリ上半ユビナデ。接合痕残る。 口縁部上面には沈線。	第4・5主体基準

(2) 鉄器

① 鉄鏡

第3主体の棺底より1点出土した。基部のみの残存で、樹皮が巻かれているのがよくわかる。鏡身部が欠損しているので、鏡の形態は不明である。

② 鉄劍

第1主体部の棺内より1点出土した。基部を若干欠損するがほぼ原形をとどめている。劍身長27.3cm、身幅1.5~3.2cm、同厚さ0.5cmを測る。基幅は1.8cmとやや幅広い。闊は直角をなす。鍛化が激しいため銘は不明瞭である。

この鉄劍の大きな特徴は、闊部に穿たれた2孔である。これは細形銅劍にも若干闊部に孔をもつものがあることから、銅劍の形態を受け継いだ可能性がある。

また劍身部に織物片が付着しているが、下半部闊周辺では、2種類の織物が観察できる。荒い織目の布の上に細い織目の布が重なるようにして劍身に付着している。これは異なる種類の織物を二枚重ねて、それを劍に直接巻いて棺に納められたことがうかがえる。

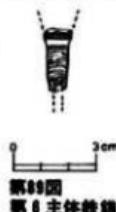
(3) 青銅器

青銅器は2点出土している。ともに追葬時の墓壇埋土（第4主体墓壇埋土）から出土している。遺物の内容から考えて、第1主体の棺上遺物が移動したものと考えるのが妥当かと思われる。

鏡と銅鏡が1点ずつで、鏡は第4主体の西側小口寄りの南側長闊壁の外側で出土している。周辺に10数点に分かれて出土している。銅鏡はさらに南側の第4主体と第5主体の間の埋土中から出土している。銅鏡はほぼ完形に近いが、茎と鋒を欠いている。

銅鏡の茎は、早くに欠損したものと思われ、断面は古い面となり、本来の面かと思われるほどである。鋒は調査終了後も破損が激しく脆弱になっている。現存長2.5cmを測り、茎は1.0cmで、鋒は1.5cmであるが、鋒長は1.7cm前後と推定される。茎長は不明である。茎は断面方形で鋒の延長上に後線を持っている。柳葉式の銅鏡で鋒は明瞭である。現重量1.63g。

鏡は、小形彷彿鏡で10数点に分かれて出土している。最も大きな破片は鋒を欠くが、ほぼ半分の破片である。文様構成は、銀一圓線一文様帶一圓線一柳葉文帶となっている。文様帶は明瞭ではないが、蕨手文と思われる。面径は5.3cmで、鋒は上部で0.5cm、背面との接続部である下部（鋒座の径）で1.1cmである。鋒の高さは推定であるが0.4cmである。蕨手文様帶の径3.6cm、柳葉文帶の径4.8cmを測る。銀孔は、やや歪であるが、穿孔方向は推定出来そうである。縁部での厚さも0.25cmと薄いものである。鏡の反りはないようと思われる。比較的軽いもので、鋒上がり状態も良好とは言えない。



第6主体
銅鏡

6. 小結

半田山1号墓は、半田山丘陵支尾根頂上部に築造された墳墓で、揖保川を東側眼下に望む眺望に優れた立地条件を有している。墳丘上からの視界が広いという点が1号墓の大きな特徴であると言えよう。水田面との比高差は46mと僅かの比高であるにもかかわらず可視範囲は極めて広い。

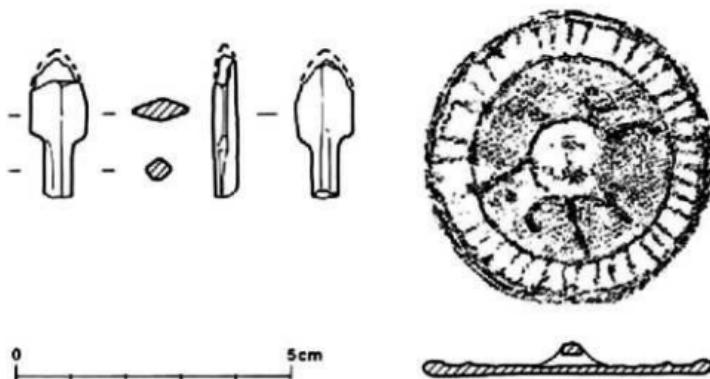
墳裾は明確には画していないが、不定円形で18.5m前後の規模を測る。流失した墳丘の方が残存している盛土より多いと思われる。そのため、墳丘築成は検討出来なかった。ただ、自然地形を最大限利用した墳丘を築いたものと思われる。墳丘を盛るとともに墳裾部分は削り出して墳丘を構築している。墳裾部分の僅かな平坦面は削り出しの痕跡と考えられる。東側に平坦面を残しているのは、意識が働いていたのかどうか疑問である。墳丘内に地山の露岩を組み入れている。平坦面を設定する際に、この露岩を意図的に周囲に置いて構築したかも知れない。墳裾に列石などの施設は有していないが、露岩が墳丘規模を意図していたものと思われる。墳丘規模の割に平坦面は大きく、南北7.5m、東西9mを測る。墳丘高は1.3mと低いが、立地から墳丘が高い印象を受ける。

主体部は5基確認している。木棺墓が5基で土器棺墓が1基である。大きく2時期に分けることが可能である。築造時の古い段階の主体部は木棺墓3基で、第1主体と第2主体は切り合い関係にあるが、墳丘中央部に位置していることから中心主体と考えられる。特に第1主体は規模・形態・副葬品の有無・朱の使用などの点で、他の主体部とは性格を異にする。第3主体は墳裾近くに築かれているが、規模は大きい。小片ながら鉄鎌の一部であるが副葬品を保有していることは追葬時の主体部と違うところである。また、小口穴を持つことも第3主体だけである。層序関係などから第1・2主体と第3主体の前後関係は指摘出来ないが、ほぼ近い時期の埋葬施設と思われる。ただ、一般的に想像すると中心主体の方が最初に築かれたと考えるのが妥当であろうか。第1主体がはじめに構築され、次が第2主体か第3主体と考えるべきであろう。

新しい段階の追葬時の主体部は、木棺墓2基と土器棺墓1基である。木棺墓（第4・5主体）は副葬品はなかったが、棺上に3基の土壙を設けている。2基の主体部の接する小口部に1基、第4主体部中央近くの上部に1基、第5主体小口部に1基の土壙が設けられており、主体部と



第80図 鉄剣実測図



第91図 銅鐘・小形彷製鏡実測図

強い関連があるものと思われる。個々の上層には壺・器台などの土器が置かれている。土器棺墓（第6主体）は、平坦面の東端に位置している。壺を棺身とし、鉢を棺蓋とした2個体から成っている。周辺でこの時期の土器棺の棺身は口縁部を欠くものが多いが、本例は完形である。丁寧に磨かれており、埋葬用として焼成されたかもしれないが、蓋である鉢は実用品を転用したものと思われる。

出土遺物は多数とは言えないが、この時期の墳墓からの遺物としては多い方でまとまった資料となろう。棺内遺物は第1主体の鐵劍、第3主体の鐵錐の2点だけである。墓壙内出土遺物は銅鏡・銅錐の2点の青銅器と19点（因化した点数でそれ以上の可能性もある）の弥生土器が出土している。鏡のみは蒸造時の墓壙にあったが、他の土器は上層から出土していることから時期を明らかにしたい。2点の青銅器は第1主体の棺上遺物と考えている。出土遺物の大半が原位置を保っていないことは惜しまれるが、總体的に一括遺物としての価値は高いものと思われる。

第2節 半田山2号墓の調査

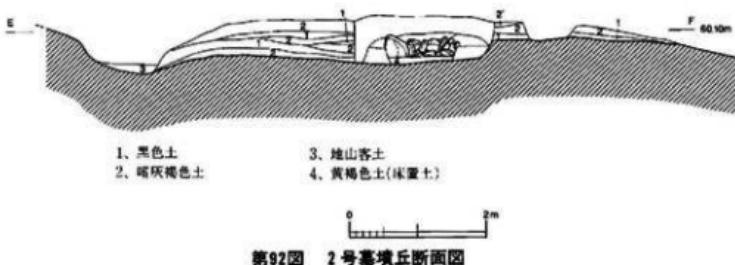
1. 立地

半田山尾根筋の鞍部に築造されている。5号墓の位置する尾根東側頂上部から1・2号墓や集団墓の築かれた東南東へ延びる尾根と北東へ延びる尾根に分岐している。その主尾根は緩やかな斜面で、徐々に低くなり、2号墓が立地する部分が鞍部となっている。2号墓から東へ向かって斜面はやや急となり、1号墓の立地する標高65.38mの支尾根頂上となる。5号墓から1号墓の尾根筋の鞍部という特殊な立地条件を有している。そのため、尾根筋である南東方向と北西方向の視界は遮られている。また、北側も北東方向へ延びる支尾根によって眺望は開けていない。その結果、視野が開けているのは、北～東と南東～西にかけての方向となる。鞍部という立地条件が、実際の可能な視界以上に1号墓からの眺望と比べた場合、極めて視野を狭められた印象を受ける。可視出来る同時期の墳墓は白鷺山墳墓群・内山墳墓群・養久山墳墓群・サンマイ山墳墓群である。

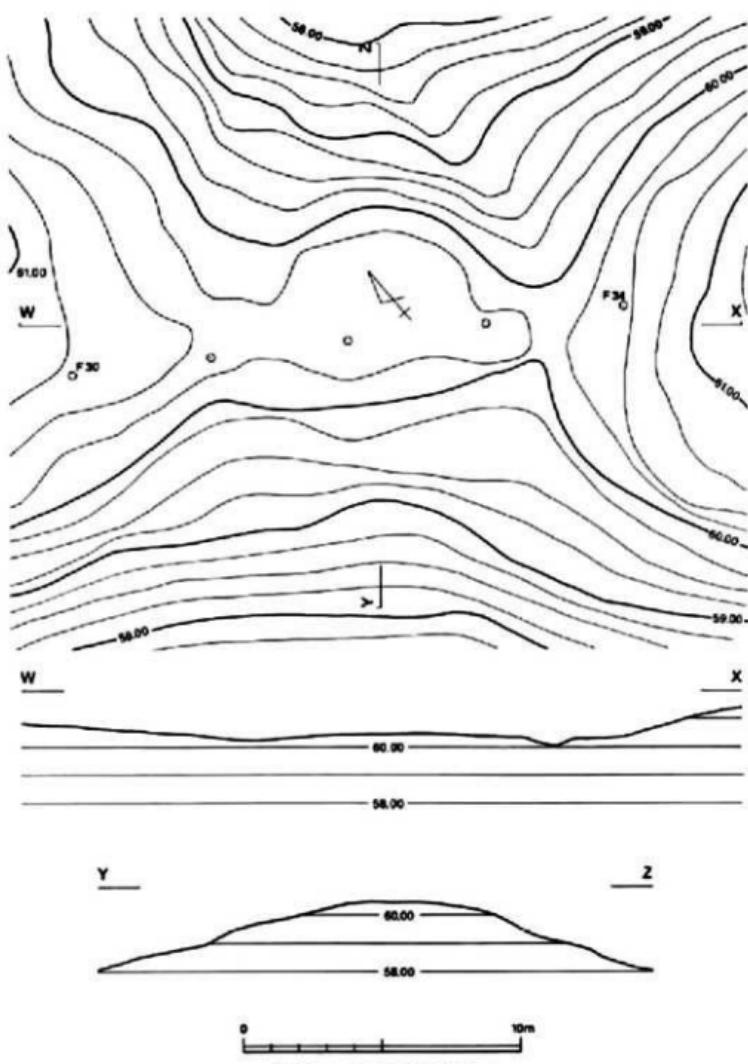
2. 外形

調査前の状況でも墳丘はかろうじて確認出来た。尾根の南北どちらも谷地形となっている。南側斜面の方が緩斜面である。北側の谷地形の南向き斜面は緩やかである。南側の谷は1号墓下方の斜面はやや急斜面となっている。

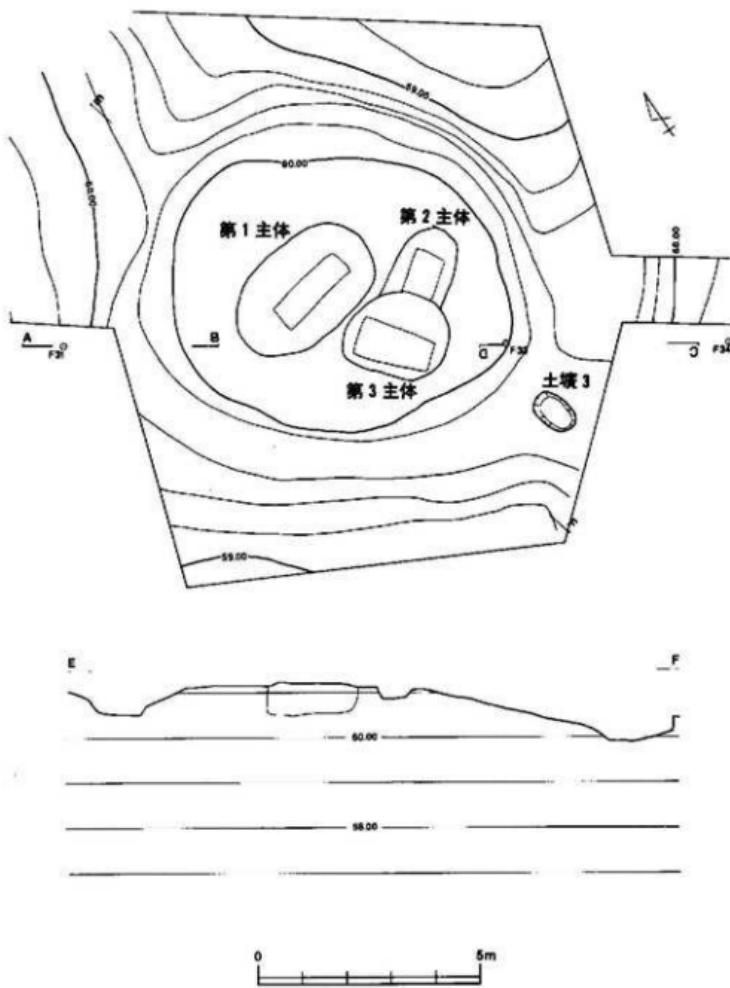
墳裾部分にはコンターラインが入り込んでおり、墳裾を確定する資料となった。墳頂は、比較的の平坦で明瞭な墳丘は描き出されなかった。墳裾のコンターラインは、南側より北側が、西側より東側が明らかである。最も不明瞭な南西部分で60.00と60.25mの2本のコンターラインが入り込んでいる。最も明瞭な北東部分では60.25mから58.50mの8本のコンターラインが影響を受けている。しかし、低い部分のコンターラインは築造当初の痕跡ではなく、後世の自然による影響を受けたものとも考えられる。確実な比高差の値は0.75前後である。



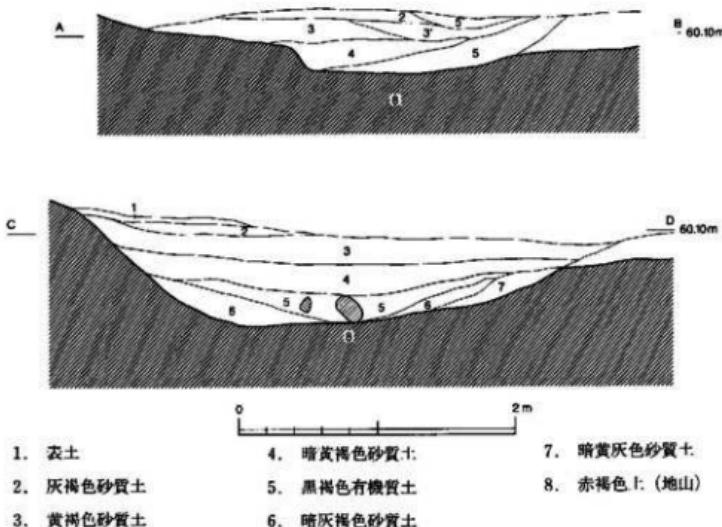
第92図 2号墓墳丘断面図



第93图 2号墓地形测量图



第94図 2号墓墳丘測量図



第85図 2号墳埴土層断面図

調査を行った結果、尾根部分には溝状の掘り割りが確認され、埴堀は明確である。地山が整形されている幅は狭いところで1.6m、広いところで3.2m手が加えられている。斜面部分は明瞭でないため、埴形は明らかでない。埴丘内のコンタライインは不定形ながら橢円形を呈している。長径は10.3mで、短径は埴堀を明らかに測り得ないが8~9mと思われる。埴丘は尾根上の最も少ない部分で0.55mを測る。埴堀と想定される部分からの最大数値は1.45mである。

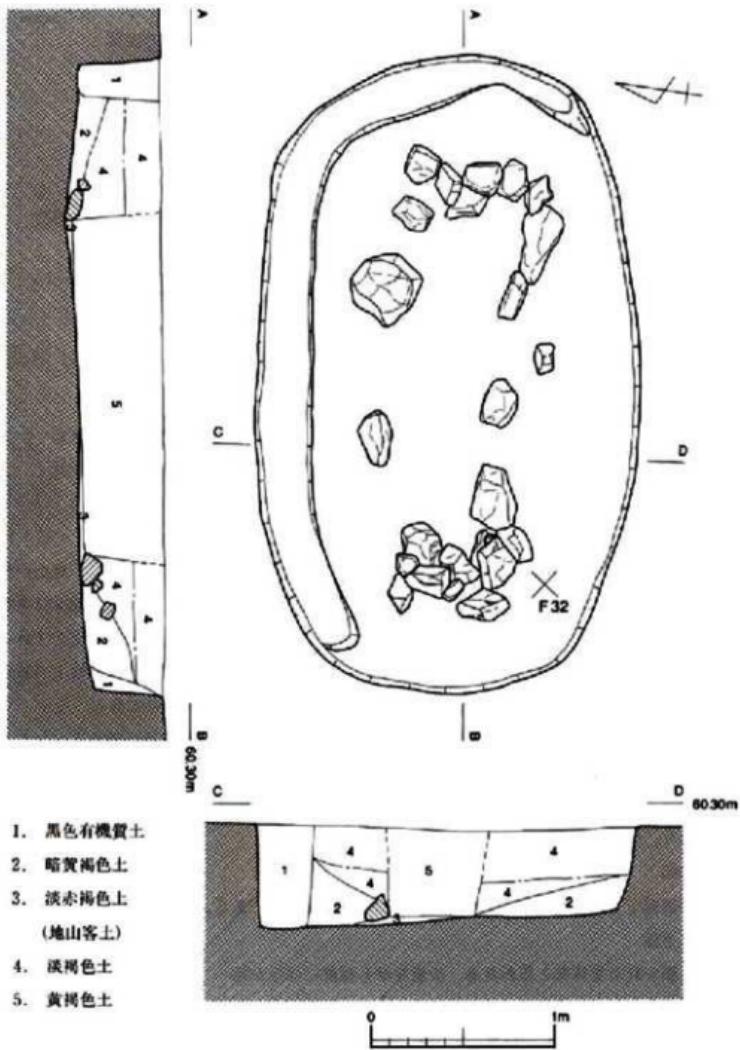
埴丘は、断ち割りトレンチの結果で約0.6m確認された。埴堀は埴丘築成後に振り下げたよう見える。埴丘築成は、基本的に黒色土と暗灰褐色土を瓦層としている。第1主体周辺の埴丘中央部は層が細かく分かれているが、周辺は層が厚く幅広くなっている。埴丘は上部が平坦になっており、側面観は台形となる。

3. 主体部

埴丘平坦面で3基の主体部を検出した。すべて、木棺直葬である。

(1) 第1主体

最初に築かれた主体部と思われる。少量ながら棺底には朱が用いられていた。採取出来ない程度の量であるが、肉眼観察では1号墓第1主体と同様の朱（水銀朱）と思われる。埴丘中央部より、僅かに西側にずれて位置している。長橢円形の平面プランを示す埴堀である。長径3.4m、短径2.1mを測る。埴堀は垂直に近い急斜面で振り下げている。特に、溝のある部分はほぼ



第98圖 第1主体実測図

垂直となっている。調査した深さで最大値0.5mを測る。中央に復原値の長さ1.8m、幅0.45m、残存高0.3mの木棺を置いている。木棺安置後、墓壙掘り方をまず暗黄褐色土で埋めている。次の段階として角礫を棺押さえとして使用している。両小口部分は、部分的に3石積まれた状態になったところもある。長辺側板の押さえの石もある。礫の数は少ないが、小口に使われた礫よりも大型の石材を使用している。石室状に閉むものではなく、部分的に置いて棺を押さえたものと思われる。その後、掘り方は淡褐色土で埋めている。主軸はN82°Eでほぼ東西に近い。出土遺物は少なく、棺底に埴1点と埋土中に小片となった弥生土器片10数点のみが出土している。弥生土器片は、小片で固化出来るものはないが、埴掘出土器などと同時期の壺・甌の破片と思われる。埴は北東部の小口近くの棺底から出土している。残存長7.5cmを測る大型のもので、最大幅は2.4cmを測る。

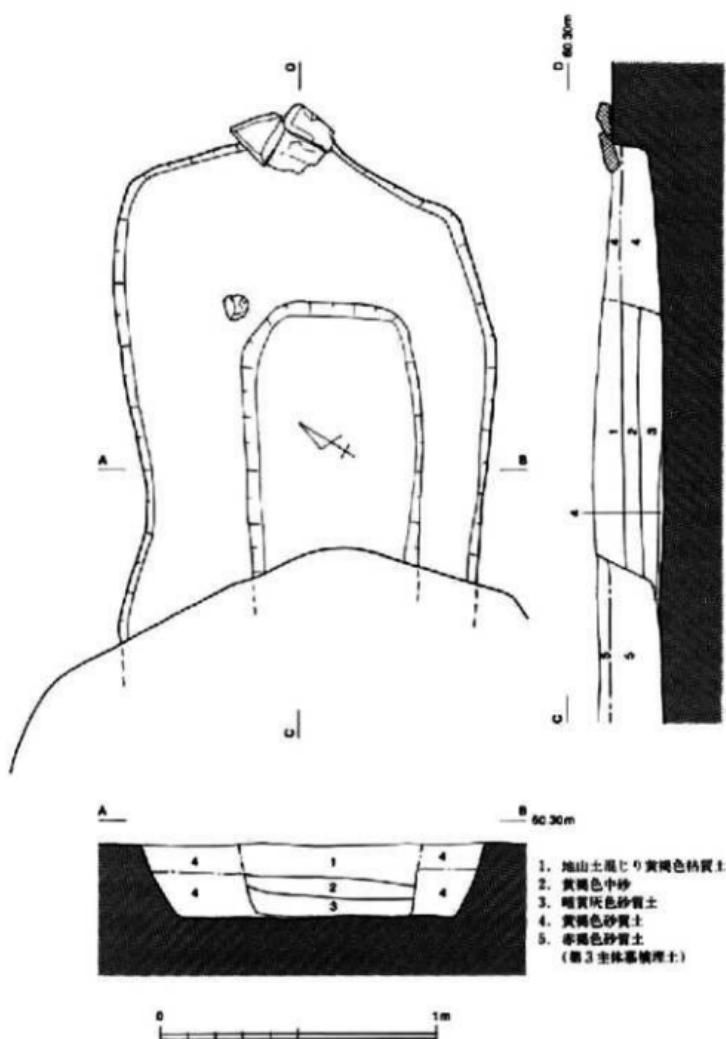
(2)第2主体

第1主体の東側に位置している主体部である。平坦面の東端に近く、地形変換線から0.75m離れている。主軸方位は、第1主体よりやや西に振ったN35°Eである。第3主体によって西側を切られている。第1主体と切り合い関係がないことから先後関係は断定出来ない。しかし、築造された位置が第1主体の方が中心に近く、しっかりとしていることから、第2主体の方が遅れて築かれたものと思われる。墓壙は、最大幅1.3m、残存長1.65m、深さ0.3mを測る。墓壙は垂直には掘り下げられず、比較的緩やかに掘られている。墓壙埋土は、黄褐色砂質土で1層で埋められている。墓壙小口部掘り方上部に角礫が置かれている。周辺に數石角礫が認められるところから、意図的に配置されたものと考えられる。棺は墓壙中央部に認められ、幅0.65m、残存長0.92m、深さ0.25mを測る。棺内埋土は3層に分けられるが、堆積状況としか認められない。

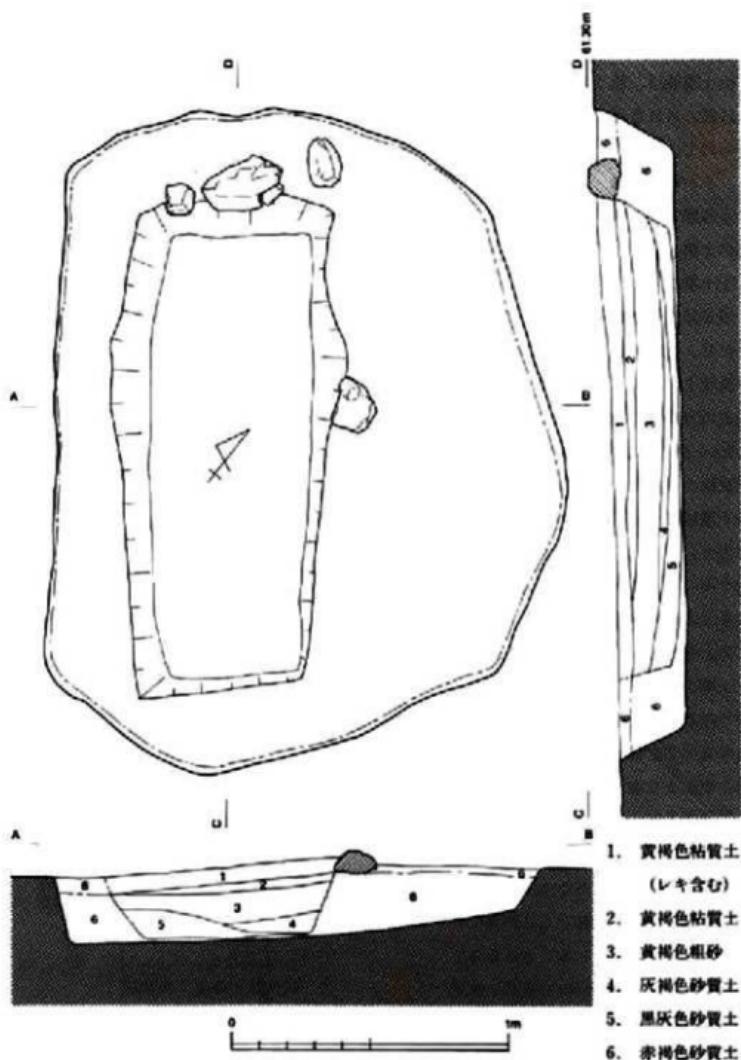
出土遺物は、弥生土器片が数点出土しているが、固化出来るものはない。

(3)第3主体

平坦面の南側に位置している。第2主体の南西側を切っている。第1主体墓壙肩部とは0.2mと近接しているが、切り合い関係はない。南側の平坦面の端まで0.5m離れている。主体部の主軸方向はN38°Wと第1・2主体とは大きく異なっている。第2主体とは、直交関係に近い。墓壙の平面プランは、他の主体部のものと異なり、不定円形に近い形状である。墓壙の規模は、主軸方向が長く2.4mを測り、東西方向が短く1.85mを測る。東側の第2主体を切っている方は円形に近く、逆の西側は直線的である。墓壙の深さは0.25mと浅い。ただ、墓壙底は第2主体より深く下げられている。だが、第1主体よりは約0.3m高い位置に墓壙底がある。墓壙埋土は、地山土である赤褐色土1層で埋められている。棺は、墓壙の西側に偏って置かれている。長さ1.8mを測り、北側小口肩部には角礫が3石置かれている。幅は直線でなく、北側小口が0.7m、南側小口が0.6mと異なっている。北側の方が広いことから、頸部と考えるのが妥当であろうか。深さは、最深部で0.25mと上部が流されているものと思われる。角礫は小口部だけでなく、



第97図 第2主体実測図



第38圖 第3主体実測図

東側長辺にも1石見られる。棺内の堆積状況は、まず西側長辺部から黒灰色土が入り、後は地形に則した北側から4層が流入している。

出土遺物は、第2主体と同様で墓壙埋土中に弥生土器小片は認められるが、供獻土器や副葬品は認められなかった。ただ、第2主体を切っているものの、埋土の土器に時期差を看取出来ないので、ほとんど差はないものと思われる。

4. その他の遺構

主体部・墳丘確定に伴う墳壙削平以外の遺構として、墳壙掘り割り内に1基、主体部下に2基の土壙を確認している。

(1) 土壙1

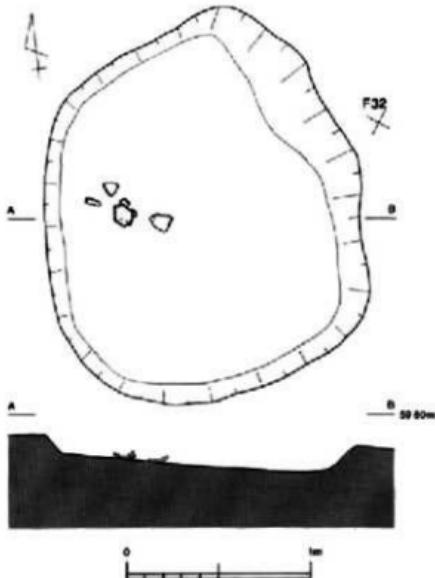
墳丘除去後に確認した遺構で、第1主体の下部で検出している。第1主体西側小口部の下に当たり、墳頂平坦面の西端に相当する。平面プランは隅円方形に近い不定形をしている。西側が弧状を呈し、東側は直線的である。

南北の方がやや長く1.95mで、東西は1.8mを測り、深さは0.25mである。肩は東側の直線部分だけが緩やかである。出土遺物は、土壙西側から1個体の壺が出土している。長頸壺で、本来は完形であったと思われる。埋土中からも弥生土器小片が出土している。

(2) 土壙2

土壙1と同じく墳丘除去に伴って下層で確認した土壙である。第3主体の棺中央の下で検出している。墳頂平坦面の中央より南側に位置している。第3主体の下部で検出しているが、第1主体と土壙1の関係と同様に、第2主体の小口下部に築かれた土壙かもしれない。第1・第2主体とともに西側小口下部に土壙を有することになる。

東西0.85m、南北0.6mの東側に底辺



第88図 土壙1実測図

を持つ不定の三角形をした浅い土壙である。深さは最深部で0.13mしかない。壙内には3個の角礫が入っている。底辺に接して最大長0.4mの人頭大の礫2個が重なって置かれている。中央付近では底に付いていない。西端には拳大の礫が1個置かれている。遺物は出土していない。

(3) 土壙 3

墳裾掘り割り内南側底に築かれた土壙で、1号墓へ登る尾根筋に当たる。南北に長軸を持つ楕円形プランを呈している。長径1.05m、短径0.7mで、深さは最大値で0.3mを測る。土壙埋土は暗灰褐色シルトである。土壙と直接結び付くかどうか不明であるが、土壙上面から墳裾西側に流されたと思われる斜面下方にかけて壺1個体が出土している。墳裾部分に散乱していたが、本来完形品を置いたものか、墳裾で破砕されたものか、器面磨滅しているため不明である。

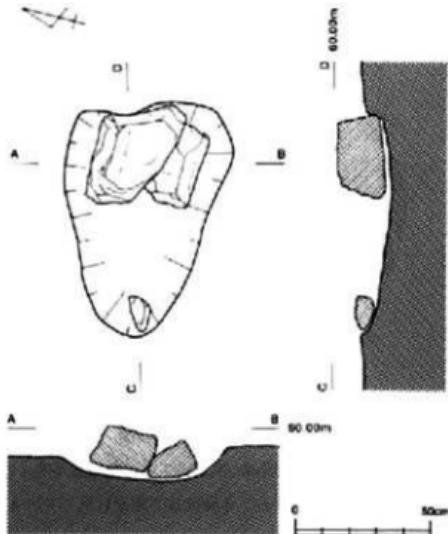
5. 出土遺物

出土遺物は、鉄器と土器である。鉄器は第1主体出土の地である。

出土土器は、墓壙埋土や墳丘などから全体にわたって出土しているが、磨滅した土器で小片が多い。そのため、実測可能な土器はなかった。図化出来たのは、土壙1壙内出土壺と土壙3上面出土壺の2個体だけである。

(1)は、土壙3上面出土壺である。底部を欠くが、図上では復原可能である。球形の胴部から直立ぎみの口頭部へと続く。口頭部は水平に近く大きく開くのが特徴である。口径と最大腹径は近い数値である。内外面とも5~6本/cmのハケで整

第100図 土壙2実測図



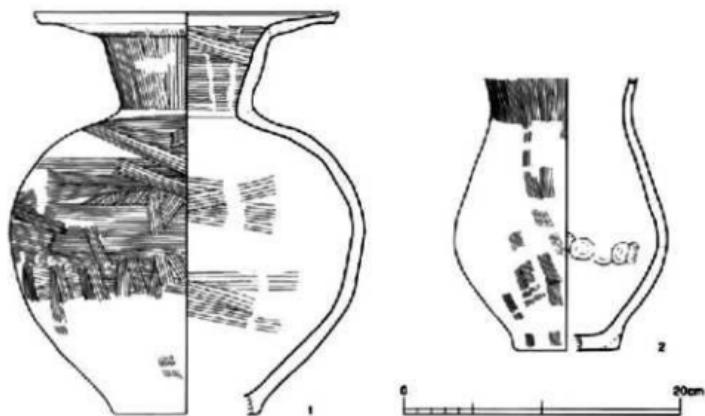
形している。胴部外面下半はヘラミガキ状の粗いナメで仕上げている。底部は径10.4cmと大型である。

(2)は、土壙1出土の壺である。突出平底からやや長い胴部となり、明らかな縫線を持たずに頭部へと緩やかに延びている。底部は(1)と同様に径7.6cmと大型である。最大腹径の内面に指圧痕が明瞭に見られる。内外面ともハケ整形である。底部再成形。

(3)は、第1主体出土の壺である。棺底面から出土しており、副葬品と考えられる。幅2.4cmと



第101図 遺物出土状態（墳裾）



第102図 2号墓出土土器実測図

やや幅広のタイプである。残存長7.5cmで基部は残っていないが、開口部は認められないタイプと思われる。3mm前後と僅かに反っている。縁も明瞭には看取出来ない。

6. 小結

2号墓は、鞍部に立地するという特殊な立地条件（ある意味で悪い立地条件）を持つ墳墓である。外形からも、かろうじて墳丘を認めることが出来るが、低墳丘である。また、古墳と異なり、上部が平坦である。尾根主軸に長径を持つ橢円形に近い形状である。長径10.3m、短径8~9mを測る。可視範囲は地形によって制約されていることから、1号墓と比較すると極めて狭く、主に南北方向に限られている。



第103図
実測図

第4表 2号墓出土土器調査表

No.	器種	色 調	法 量	形 态	技 法	備 考
1	壺	赤褐色 -洗黄褐色 10R 6/6 -7.5YR 8/3	口径 21.6cm 底径 10.4cm 器高 28.5cm 最大腹径 25.5cm	肩の張った球形の側面に直口さ みの腹部が付く。口縁部はほぼ 水平に近く延びている。腹部は 上につまみあげている。底部は 大型。	外面 ユビ成形-ハケ塑形 腹部下半はヘラミガキ状の無い ナナ。黒斑あり。 内面ハケ塑形-ナナ調整 口縁部のムヨコナゲ仕上げ。	
2	壺	にじい黄褐色 10YR 7/2	口径 27.2cm 底径 7.6cm 残高 19.4cm 最大腹径 15.4cm	やや大型の底盤から下部にかけて の側面中位より下に最大腹径を 持つ。大きさは底がらずに縁や 肩に腹部へと最も。	外面 ハケ塑形 (6本/cm) の のちユビ調整。黒斑あり。 内面 ユビ成形ののちユビ調整 部分的にハケ工具の痕跡があ るが明瞭でない。 表面磨拭。	

主体部は3基構築されている。第1主体はほぼ中央に位置し、副葬品（鉈）も保有しており他の2基の主体部とは性格を異にするものと思われる。また、極微量ではあるが、朱も使用されている。さらに特徴的なことは、墓壇周囲に掘られている溝である。斐久山12号墓でも同様の溝が設けられている。墓壇底まで達しており、幅0.3mと比較的大きな規模の溝で、特殊な意図がある遺構と考えられる。墓壇内に地山中の角礫が入れられており、棺押さえとして利用されたものと思われる。丁寧に埋葬された施設と考えられる。

他の2基の主体部も木棺直葬である。第1主体とは切り合い関係がないが、第2主体と第3主体は切り合い関係がある。第3主体が第2主体を切っており、もっとも新しい埋葬施設である。第1主体と第2主体は主軸を東西方向に持つが、第3主体は南北方向に長軸を持つ。2主体ともに第1主体ほどではないが、数石の礫を配している。

主体部以外の遺構として、土壙を3基検出している。埴輪部分に塗かれた土壙3は、7号墳のある南側からの登り道に位置し、土壙3を中心に周辺に壺(1)が散乱していた。完形品を置いたものか土壙で破砕したものかは不明であるが、一種の墓前祭祀と考えられよう。第1主体の下層にある土壙1や第3主体の下層にある土壙2も同様に祭祀色の濃い遺構である。土壙1からは壺(2)が出土している。

出土遺物は土器2点と鉄器1点だけである。土器は2点だけであるが、2点とも鐵入品の可能性の高い壺と思われ興味深い。北四国地方の土器か、その影響を強く受けた土器と考えられる。2号墓の埋葬者の特殊な性格を想定する資料となろう。

第3節 半田山4・5・6号墓の測量調査

調査着手前の段階で古墳状隆起を確認していた地点で、尾根上に数基の墳丘が認められた。当初は確認調査を実施する予定であったが、現地で位置の確認を行ったところ路線予定範囲内に入る部分は僅かであった。そのため、原位置を確認して取り扱いを協議することとなった。当初、古墳状隆起として挙げられていたのは5号墓で、4・6号墓は用地外であることが歎然となつたので、対象外となつた。5号墓は、墳裾部分が僅かに用地にかかることが判明したが、工法変更によって保存が図られることになったため、確認調査は実施しなかつた。しかし、同一の墳墓群であることは明白なので、4～6号墓周辺の地形測量を行つた。

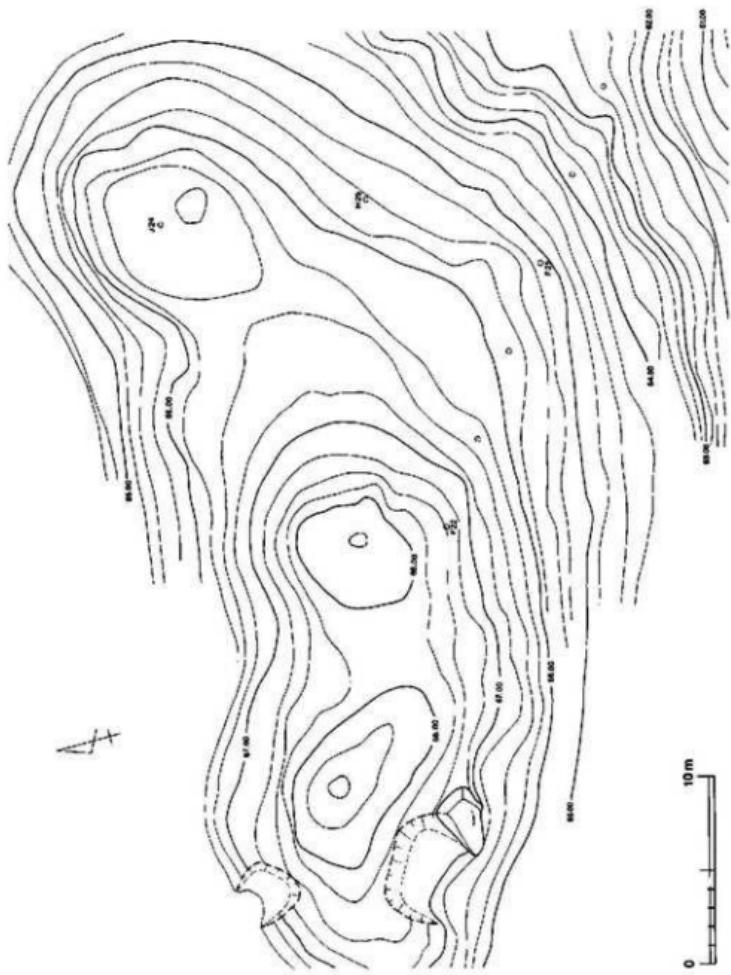
位置 半田山主尾根上に築かれた墳丘墓で、3基とも尾根筋に位置している。主尾根頂上部からほぼ平坦に東へのびた東端に5・6号墓は位置している。5号墓は1号墓のある南東尾根と4号墓のある北東尾根の分岐点に相当する。4号墓は北東に向かう尾根上とはいえ、大きさは5・6号墓と同じ分岐点の平坦面に立地していることになる。比高差は1mに満たない緩やかな斜面を呈している。墳丘墓の立地している尾根上からの眺望は良く、原則的に1号墓の視界と同様であるが、ただ、眼下に揖保川を望む迫力には欠ける。4号墓はやや北東に偏在していることから、わずかに南北方向の視界は悪くなつておらず、一部遮蔽されている。

4号墓 平坦面の北東隅に位置しており、他の2基と比べると規模は小さい。僅かな高まりが確認されており、最大値で0.65mと低いものである。上面は比較的平坦で、2号墓などの墳丘と共通している。現状では尾根主軸が長い楕円形を示している。長径12～13m、短径9～10mを測る。遺物は確認されていない。

5号墓 平坦面中央に位置しており、3基の中では最も墳丘が明瞭である。心々間の距離で、4号墓とは20m、6号墓とは13m離れている。また、直線距離で2号墓とは55m、1号墓とは195m離れている。径は11m前後を測る円形で、墳丘は最大値で1.35mを測る。西側の尾根側は0.5mと低い値となっている。4号墓同様墳丘上面は平坦になつておらず、側面観は台形である。

6号墓 平坦面の西端に位置している。その西側は緩斜面となりつつ、やせ尾根となって頂上へと続いている。墳丘南側に岩の採擗部があり、旧状を損なっている。墳丘は最大値で1.35mの高さを測るが、平坦な印象を受ける。特に東側は墳丘が流失したことであろうが、裾部が判然としない。平面プランは、ほぼ円形で9m前後を測る。

第104图 华田山4·5·6号墓地形测量图



第5章

弥生時代末の墓の調査





土壤剖面检测状况



土壤剖面 2



土壤剖面 1



勝生糸の島出土土器

弥生時代末の土器は、調査対象地の尾根上ほぼ全域から出土している。7号墳周辺や南斜面では出土していない。尾根上から流れた土器があるだけである。尾根上は東側の調査地外まで土器の散布が見られる。明瞭な遺構は、1号墓周辺しか検出されていない。

第1節 立地

半田山主尾根上に遺構は築かれている。土器小片の分布は尾根全体にわたっているが、集中して出土している地点は、1号墓周辺と3号墳周辺である。

1号墓周辺は4号墓から南東方向に分岐した主尾根上に位置している。4号墓から主尾根は2号墓の位置する鞍部へ下降し、逆に標高を高めて1号墓の立地する東側の頂上部となる。そこからは徐々に低くなってしまい保川へ向かっている。標高で約25m下がった38m付近で鞍部となり、再び僅かに高くなってから山裾へと延びている。遺構が存在するのは、1号墓上部とその東側の平坦面である。しかし、土器の分布は下方の尾根上まで広がっている。現状では鞍部の上方までもしか採集していない。遺構を検出している部分は平坦で、遺物を採集している部分は斜面である。その地形条件によって、遺構の保存状態の変化があるかもしれない。

3号墳周辺は、4号墓から2号墓へ下る尾根上とその南斜面にかけて土器が散布している。1号墓周辺のような平坦面は認められない。土器は団上で完形になるものもあるが、遺構は検出されなかった。3号墳周辺の遺構は、弥生時代前期の遺構であることから、弥生時代末の遺構は高い面に存在したものと思われ、すでに流失したものと思われる。

第2節 遺構

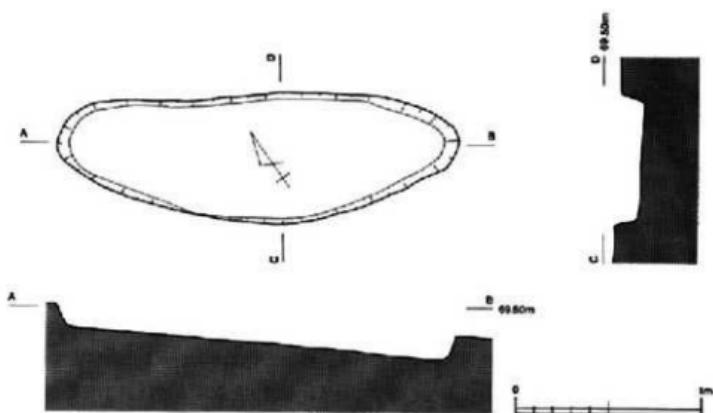
検出された遺構は、1号墓周辺に限られる。性格が判るのは、土塙墓4基である。

土塙墓1

1号墓東側の平坦面で確認した土塙墓である。尾根主軸方向に長軸を持つ土塙墓で、長径2.2m、短径0.7mを測る。平面プランは不定形で、北側は直線であるが、南側は弧を描いている。中央部が最も幅が広く、両端は狭くなっている。深さは、もっとも深いところで0.15mである。両端部はやや尖りぎみになっている。理土は黒褐色土である。理土中に弥生土器の小片が出土しているが、固化出来ない破片である。



第105図 土塙墓1 土層堆積状況

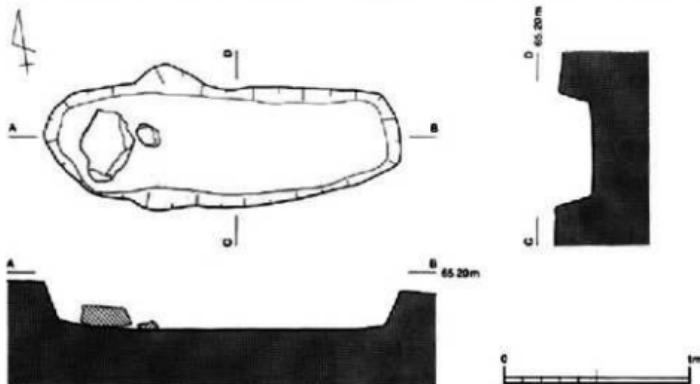


第106図 土塚墓1実測図

土塚墓2

1号墓と平面を共有している遺構で、土塚墓3・4と並んで築かれている。土塚墓2～4と半田山1号墓の上部の遺構との間に黄灰色土層が間層として存在する。墳丘墓とは空間をともにしているが、時期の異なる遺構と考えられる。土塚墓3・4も同様である。

平面プランは、長椭円形である。東側は隅円の方形に近い形状になっている。主軸方位はN 74°Wである。長辺の最大値は1.9m、幅は0.65m、深さは0.2mを測る。西側の小口部に角礫が置

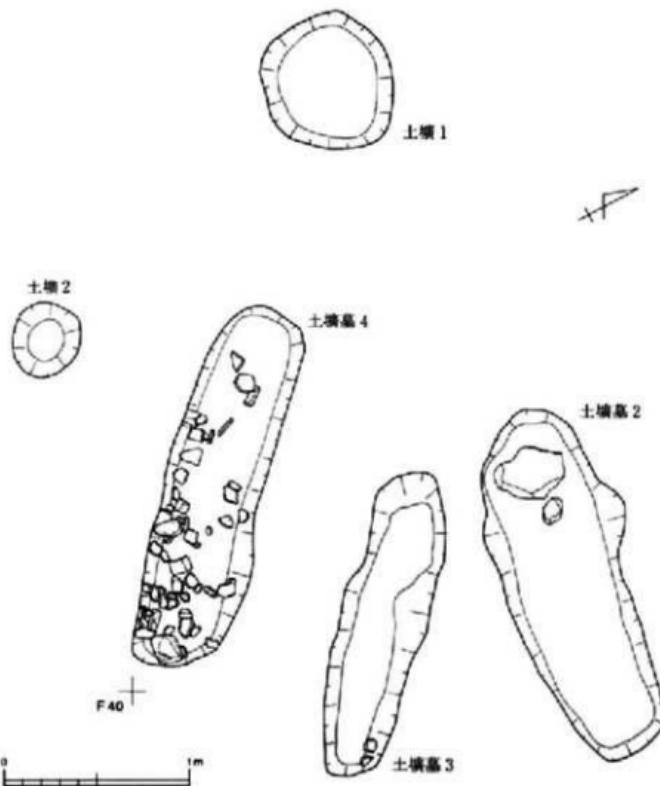


第107図 土塚墓2実測図

かれている。最大長0.4m、厚さ0.12mの石英斑岩であり、上面は比較的平坦である。石材の性質が節理面で割れることから、上下は平滑である。節理面以外は多少手を加えているが、平滑になるまでには加工していない。出土位置や石材の形状から枕の可能性の高いものである。枕石の手前に最大長0.15mの礫が存在している。出土遺物は確認出来なかった。



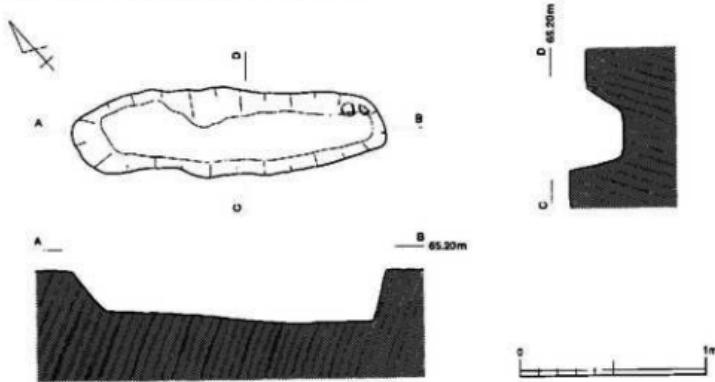
第108図 土壙墓2枕石



第109図 土壙墓2～4位置図

土壙墓3

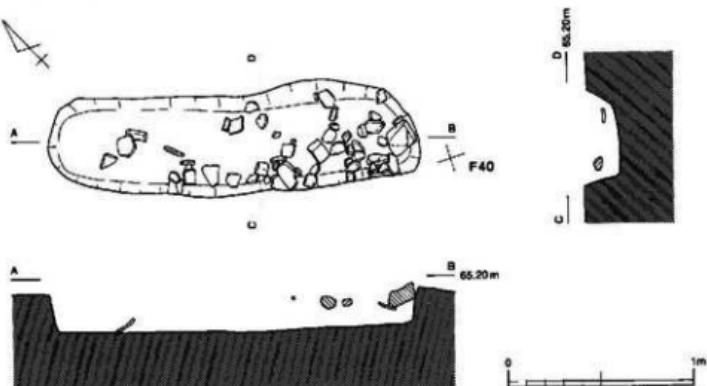
1号墓上面の3基の土壙墓の中央に位置している。主軸方位はN40°Wと土壙墓2とは方位を変えている。規模は、長さ1.68m、幅0.48m、深さは0.28mを測る。土壙墓2と比べて小口部のない形状である。やはり、遺物は出土していない。



第110図 土壙墓3 実測図

土壙墓4

上壙墓2～4ではもっとも南に位置している。主軸方位はN38°Wと土壙墓3と近い数値を示している。最大長2.0m、幅0.55m、深さは0.22mを測る。短辺の形状は、土壙墓2と土壙墓3



第111図 土壙墓4 実測図

の中間の形態を呈している。西側の方は僅かに角張っている。断面の形状は、南側は垂直に近く掘り下げられ、北側はやや緩やかである。土壙墓1~3と異なって、横内に礫が入っている。礫は岩盤である石英斑岩ではなく円礫が入れられており、葬送儀式の上からの意図を感じる。

底底や肩部に器台などの弥生土器が見られるが、下層の1号墓に伴う遺物と考えられ、出土遺物は保有していないものと思われる。

明確な遺構は、上述した土壙墓4基であるが、遺物は第51図のように1号墓から東側の尾根上と3号墳南斜面に散布している。また、3号墳南斜面では時期不明の土壙・ビットが検出されている。それゆえに、他にも墓を中心とした遺構が存在したものと思われるが、残存しておらず、流失したものと考えられる。

第3節 出土遺物

出土遺物は、弥生土器に限られる。出土位置も1号墓東側尾根上と3号墳南斜面に分かれているが、明らかな遺構から出土した遺物はない。ただ、(2)や(5)のようにはほぼ完形品に復原出来る土器があることから、遺構から離れて堆積したものとは思われない。遺構そのものは流失したものと考えられる。その近辺に遺構が存在した傍証にもなろう。

土器の器種は、壺・甕・鉢・高杯・器台と各種の土器が出土しているが、個体からは壺・甕が多数を占める。図化した土器の内訳は、壺6点、甕4点、鉢1点、高杯2点の13点である。

壺(1)~(4)(700)

(1)(2)は、ともに二重口縁の壺の口唇部に近い口縁部である。長石・チャート・黒雲母の小石粒・砂粒を胎土に含んでいる。短い頸部から外側に大きく開き、直立ぎみに立ち上がるタイプの壺と思われる。(1)は内傾しており、端部は大きく肥厚している。特に内側は顯著である。(2)は内傾してから端部近くで屈曲して外方へ広がっている。強いヨコナデによって屈曲しているようで内面に凹線状の凹みが見られる。ともにユビ成形のうちヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈しており、胎土の特徴などから北四国からの搬入土器と思われる。

(3)は、直立ぎみの頸部から大きく水平に開いて端部へと続いている。表面磨滅(特に内面)が著しいため明確ではないが、ユビ成形のうち外面は細かいハケ(6本/cm)で整形している。口縁端部はヨコナデで仕上げている。端部は下方へ肥厚している。色調はやや明るいが、2号墓墳掘出土壺と同タイプの土器の口縁部と思われる。口径16.0cm、残存高3.1cmを測る。

(4)は副部下半と底部を欠いているが、比較的全体像が推定出来る口縁部から副部上半の壺の破片である。口径9.2cmで頸部径9.4cmとはほぼ同じ値の、高さ2.5cmの直立する短い口縁部を持つ壺で、残存高13.4cmを測る。副部はやや扁平な球形で、最大腹径20.0cmを測る。外面は、ユビ成形のうち細かい平行のタキメが施され、ナデで仕上げられている。内面はユビ成形のうち

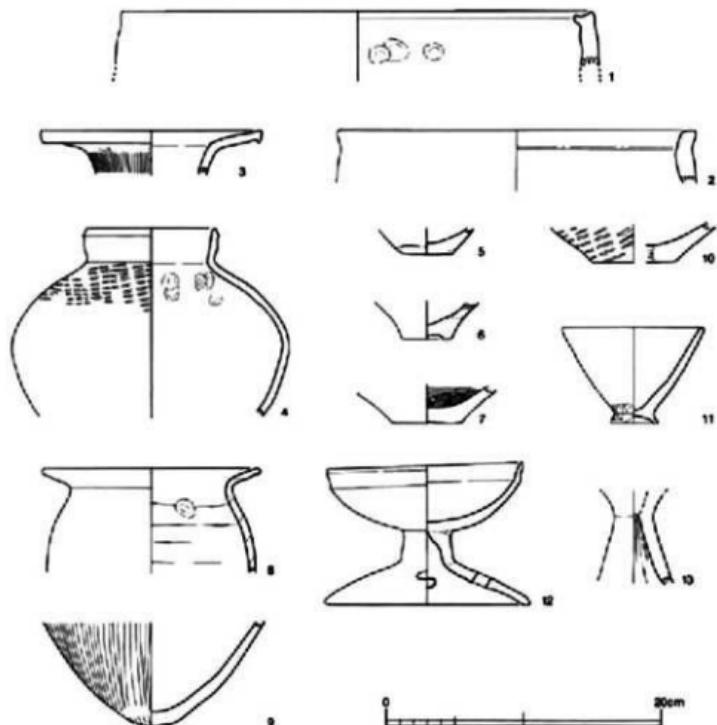


図112 因 烏生時代末の土器実測図

ナデで仕上げている。内面には成形時の指圧痕が残っている。口縁部はヨコナデが施されている。口縁端部はヨコナデによって内側だけつまみ上げられている。外面には黒斑が見られる。

(7)は底部である。ともに平底で緩やかに外方へ広がる形状から、盤と考えた。(7)は底面中央が僅かに上がっている。(7)は底径5.2cm、残存高2.7cm。(9)は底径6.0cm、残存高2.8cmを測る。(7)は外面を強いナデで整形しており、内面はくもの巣状の細かいハケで整形している。

(9)は外面を右上がりのタタキ成形しており、そのうちナデで整形している。ともに長石・チャートの小石粒を含むが、胎土は緻密である。

■(5)(6)(8)(9)

(5)(6)(9)は底部で、その形状から盤と考えた。3個の底部は、すべてタイプが異なる。(5)は突出平底で、(6)は上げ底、(9)は尖底である。(5)は、タタキ底の可能性がある。外面に粘土

第5表 弥生時代末の土器観察表

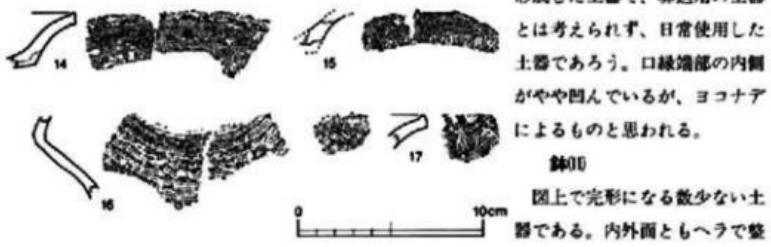
No.	器種	色調	径量(cm)	形態	技法	備考
1	壺	(内外面) 明褐色 7.5YR 5/6	口径 11径 器高 3.9	直立するタイプの二重口縁部の 11縁部。端部は内外面に肥厚して いる。特に内側は頗る。	ユビ成形のちヨコナデ仕上げ。 内面に指圧痕残る。	
2	壺	(内面) にぼい褐色 7.5YR 6/3 (外面) にぼい褐色 7.5YR 5/3	口径 26.0 器高 (3.7)	直立するタイプの二重口縁部の 口縁部。	ヨコナデ仕上げ。内面に凹線状 の強いヨコナデが見られる。	
3	壺	(内外面) 棕 5YR 6/8	口径 16.0 器高 (3.1)	直立気味の頸部から水平に近く 開く口縁部へと続く。口縁部は 内外面に肥厚している。	外面は細かいハケ整形 (6~7 本/cm)。 口縁部はヨコナデ。	表面感減
4	壺	(内外面) 赤褐色 2.5YR 4/6	口径 9.2 器高 (13.4)	やや扁平な球形の体部に直立する 短い口縁部が付く。端部は内 側のみ上部へつまみ上げている。	外面はユビ成形のちタタキ (平行) 成形をし、ナデで整形 調整している。黒斑あり。 内面はユビ成形・ナデ仕上げ。	
5	底部 (窓)	(内面) 黄褐色 10YR 7/8 (外面) 明黄褐色 10YR 7/6	器高 底径 (1.9) 3.6	突出平底。	外面に粘土紐の擦ぎ目残る。 タタキ底の可能性もある。	表面感減
6	底部 (窓)	(内面) にぼい黃褐色 10YR 6/3 (外面) 黄褐色 7.5YR 4/2	器高 底径 (2.6) 長 3.6 幅 3.3	底面中央は上げ底になっている。	外面はナデ成形のちヘラで整 形している。 内面はユビ仕上げ。	
7	底部 (窓)	(内面) 棕 7.5YR 6/6 (外面) 明赤褐色 5YR 5/6	器高 底径 (2.7) 5.2	平底。	外面は強いナデで整形している。 内面はクモの巣状の細かいハケ 整形。	
8	壺	(内面) 明黄褐色 10YR 7/6 (外面) 棕 7.5YR 6/8	口径 器高 (15.4) (7.4)	縦を持たず斜り曲げて口縁部 を作っている。端部は丸くおさ める。 最大径よりも口径が上回 っている。	外面はナデ調整。口縁部はヨコ ナデ。 内面ユビ整形のままで粘土紐の 痕跡明瞭。	
9	甕	(内面) 明黄褐色 10YR 6/6 (外面) 灰褐色 8-灰褐色5YR 6/2	器高 (7.4)	尖底状の丸底。	外面は6本単位と思われる粗い ハケ (3本/cm) で整形してい る。内面はユビ成形のままである。	
10	底部 (窓)	(内面) にぼい褐色 7.5YR 5/3 (外面) 灰褐色 7.5YR 4/2	器高 底径 (2.8) 6.0	平底で緩やかに外へ開いている。	外面は右上りのタタキのちナ デで整形。	
11	鉢	(内面) 明黄褐色 10YR 7/6~黒 褐色 2.5YR 3/1 (外面) 明黄褐色 10YR 7/6~棕 5YR 6/8	口径 器高 底径 (10.2) 6.8 3.4	僅かに内側するが直線的に伸び る。端部は角張り気味である。低い 脚台で底へ開きぎみである。器 壁の厚さは大きく変化なく、ほ ぼ同じ厚さである。	外表面ともヘラ整形したのちユ ビ調整。 脚台部はユビで成形。	表面感減
12	高杯	(内外面) 噴赤褐色 5YR 3/6	口径 14.2 器高 10.2 縦部径 15.0	杯部は弧を描き、縦部は縦筋が 薄くなり丸く尖り気味になって いる。縦部は短く直立で縦を持つ て縦部は直線的に広がる。四 方透孔。	縦部は絞り目の痕跡があり、ヘ ラで調整している。外表面とも 縦かくヘラミガキで仕上げてい る。杯内部はヘラミガキのの ちナデでさらりと仕上げている。	
13	高杯	(内面) 淡黄褐色 2.5YR 6/8 (外面) 棕 7.5YR 6/8	器高 (6.2)	弱い後縫を持つ脚部・杯部・縦 部とともに緩やかに広がる。	外面はハケ整形かと思われる。 内面に絞り目が見られる。	表面感減

()は復原径・残存高

縦の擦ぎ目が明瞭で、底径3.6cmを測る。(6)は、外表面は強いナデで整形しており、内面はナデで仕上げている。底はドーナツ状の輪を付加したような上げ底になっており、底面は不正円形と

なっており、最大径3.6cm、最小径3.3cmを測る。色調は茶褐色で多数の土器とは異なっている。
⑨は、ユビ成形の外側だけは6本単位と思われる粗い(3本/cm)ハケで整形している。

⑩は口縁部で、外側に模様が付着している。内面はユビ成形のままで、粘土紐の跡目が明瞭である。外側はユビ成形のちナデ調整を加えている。成形段階で脚部を折り曲げて口縁部を



第113図 弥生時代末の土器拓影

形成した土器で、非選用の土器とは考えられず、日常使用した土器であろう。口縁端部の内側がやや凹んでいるが、ヨコナデによるものと思われる。

鉢00

図上で完形になる数少ない土器である。内外面ともヘラで整形をえたのち外側はユビ調整

している。外形は外に膨らんだような形態に見えるが、直線的に開いており、縁部は角張りぎみに納めている。ユビ成形による脚台部を付けており、外側は指圧痕が残っている。脚古は0.6cmと低いもので、やや踏ん張りぎみに外へ開いている。口径10.2cm、底径3.4cm、器高6.8cm。

高杯0203

⑩は、完形に近い楕円形の高杯である。杯部と脚部が水平でない歪な形状を示している。口径は14.2cm、瓶部径15.0cm、器高10.2cmを測る。器高は高い部分の数値で低い部分では9.8cmである。杯部は楕円形で端部付近はヨコナデによって器壁が薄くなっている。尖りぎみに丸く納めている。脚部は大きく裾の開く、高さの低いものである。内面の絞り目が残っており、筒部内面を除いて全体的にヘラミカキで調整を加えている。杯部内面だけはナデ仕上げも行っている。長石・チャートの砂粒含むが、緻密である。脚部中央に円形の四方透孔が施されている。

⑪は高杯の脚部であるが、表面磨滅が著しく整形技法が明らかでない。内面には絞り目が残っている。外側ハケ整形と思われる。

他に文様の施されている土器も数点ある(第113図)。高杯と壺の口頭部で、波状文が主体である。高杯口縁部に描かれている波状文は円弧を繰り返したような文様である。特に高杯は精製土器である。⑩と⑪の壺は同一個体の可能性も考えられる。

第6章

古墳の調査





半田山空中写真（北東から）



半田山1・2号墓・3号墳全景



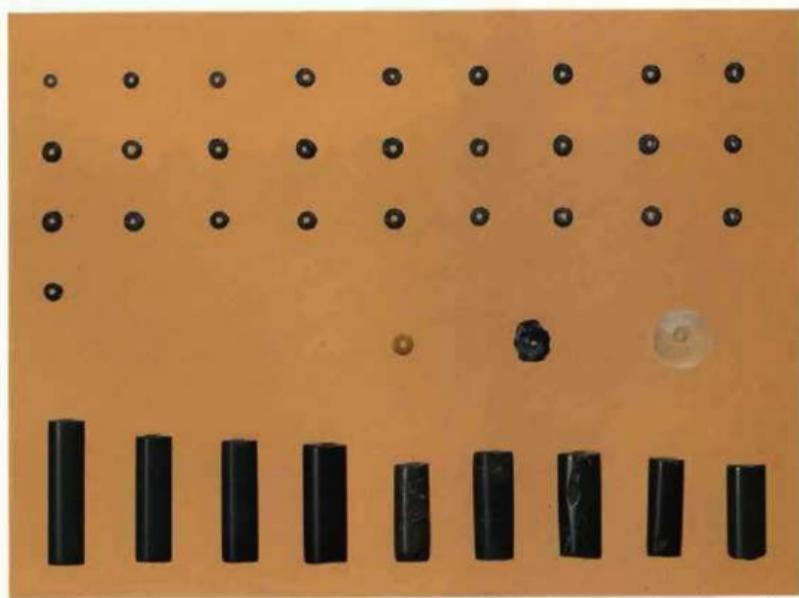
3号墳石室全景（南から）



3号墳石室全景（北から）



3号墳石室内遺物出土状態



3・7号墳出土玉類（黄色ガラス小玉1点のみ3号墳）

图版52



7号坟
主体部全景



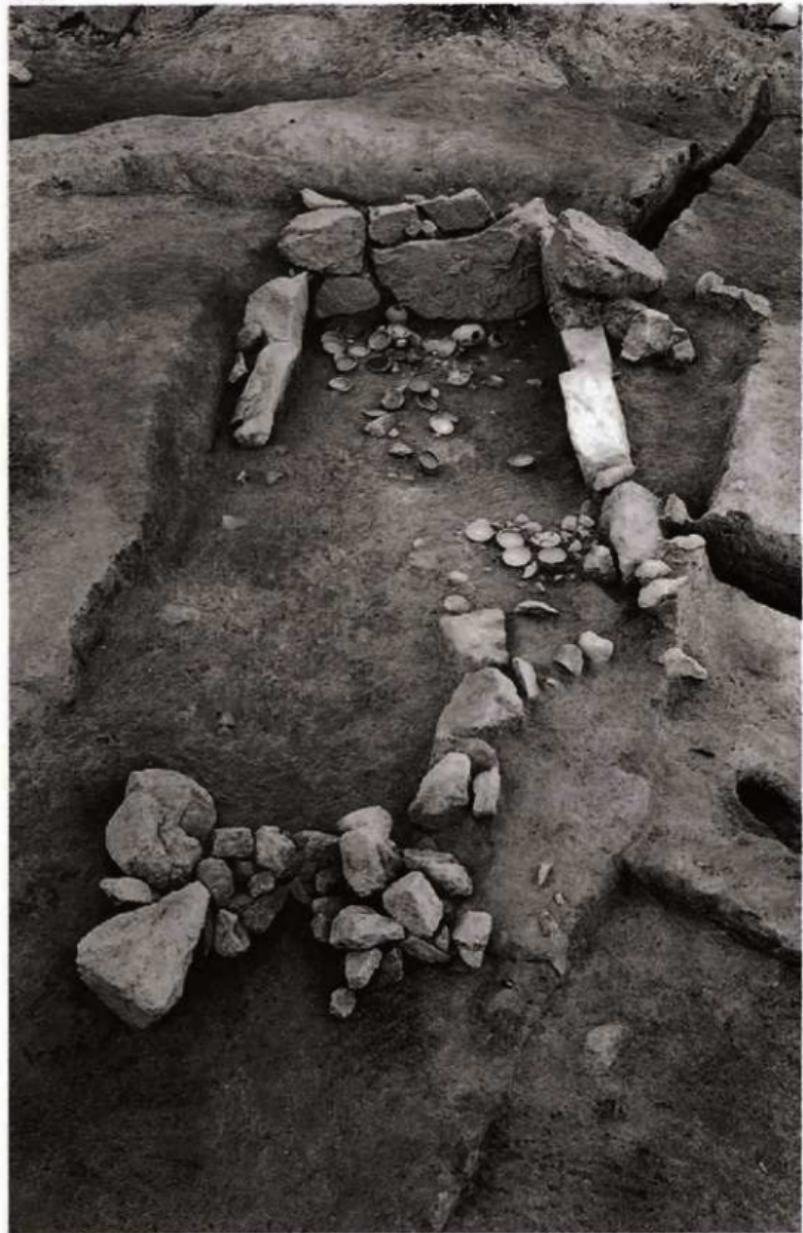
7号坟 墓丘侧面



3号墳全貌（北西から）



3号墳全貌（南東から）



3号墳横穴式石室全景（南から）



3号埴横穴式石室全景（南から）



3号埴横穴式石室全景（北から）



3号埴横穴式石室全景（西から）



3号埴横穴式石室奥壁



3号培塿堆积状况



3号培塿堆积状况



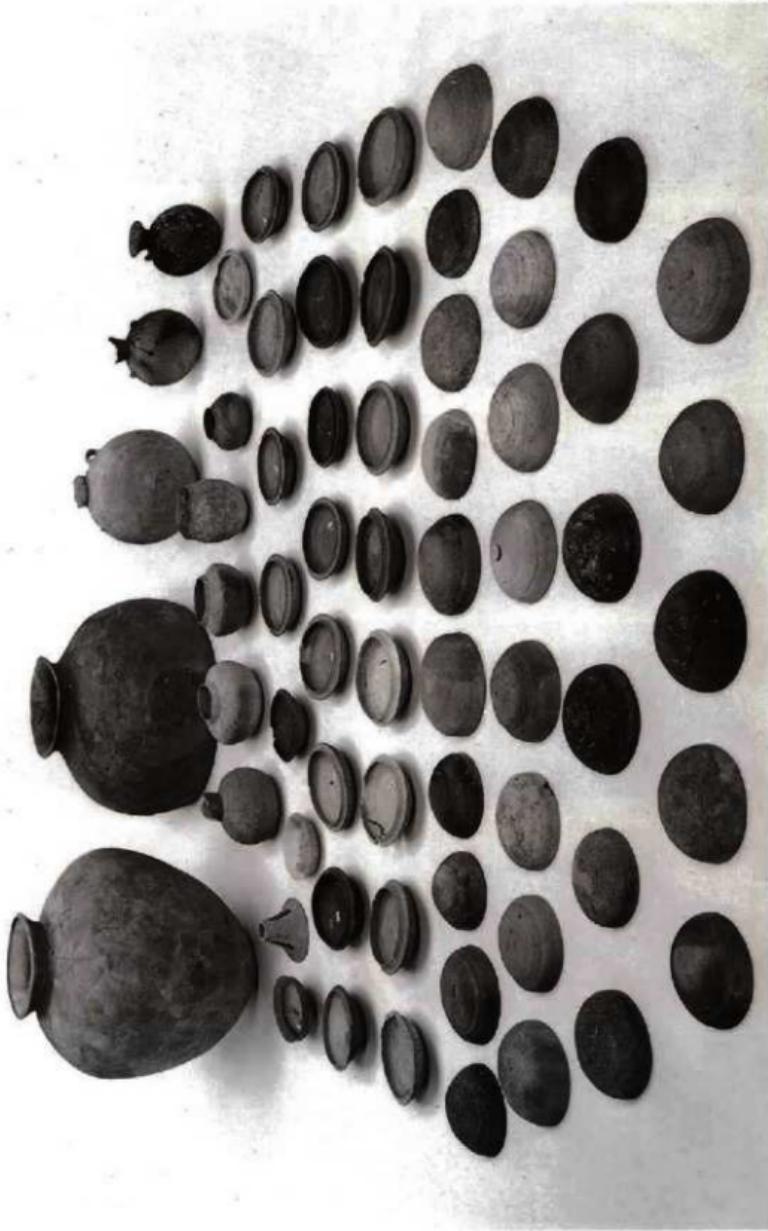
3号培塿穴式石室遗物出土状况

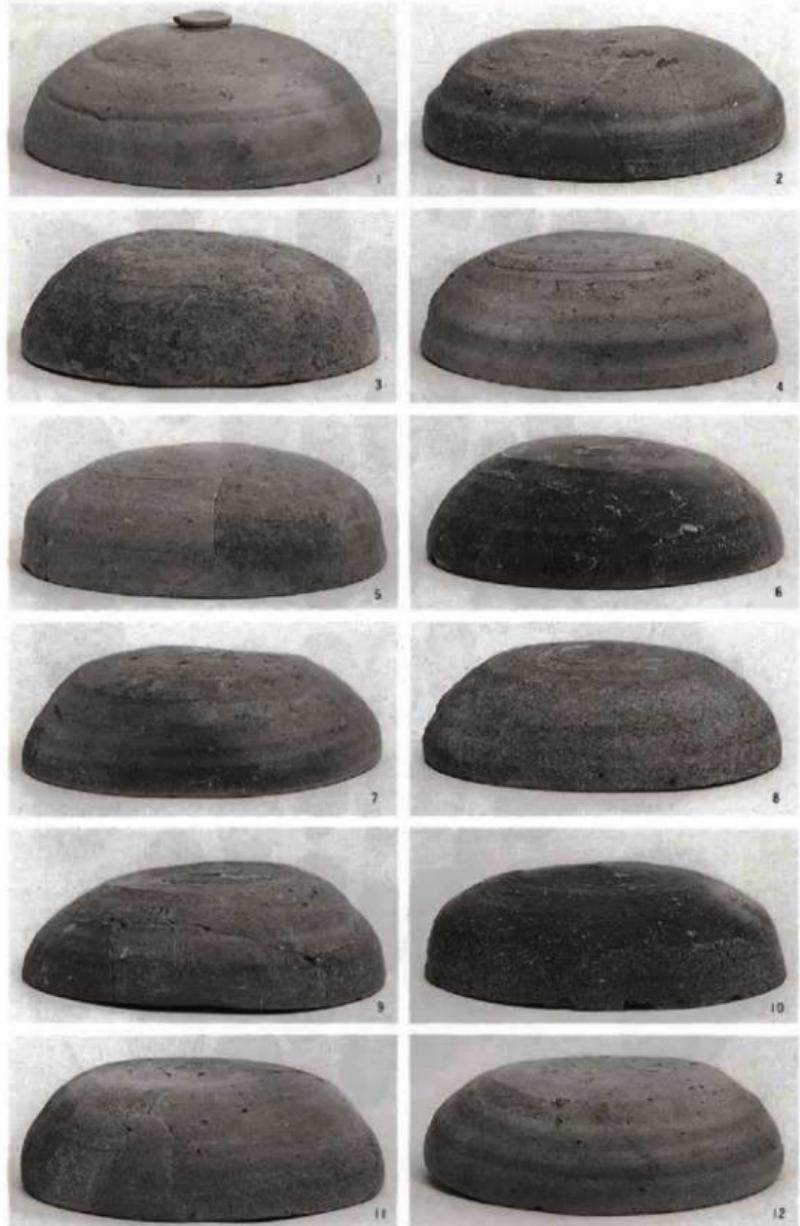


玄門周辺遺物出土状態

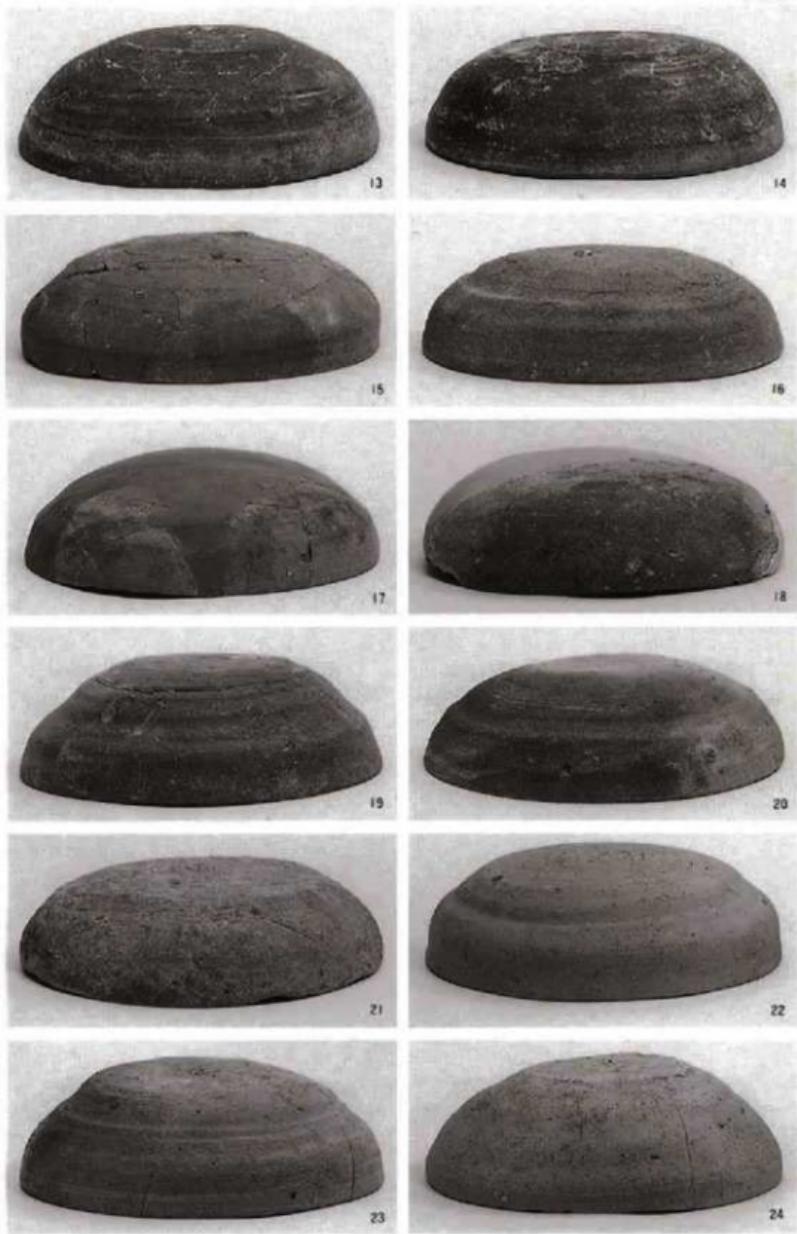


捲造部遺物出土状態

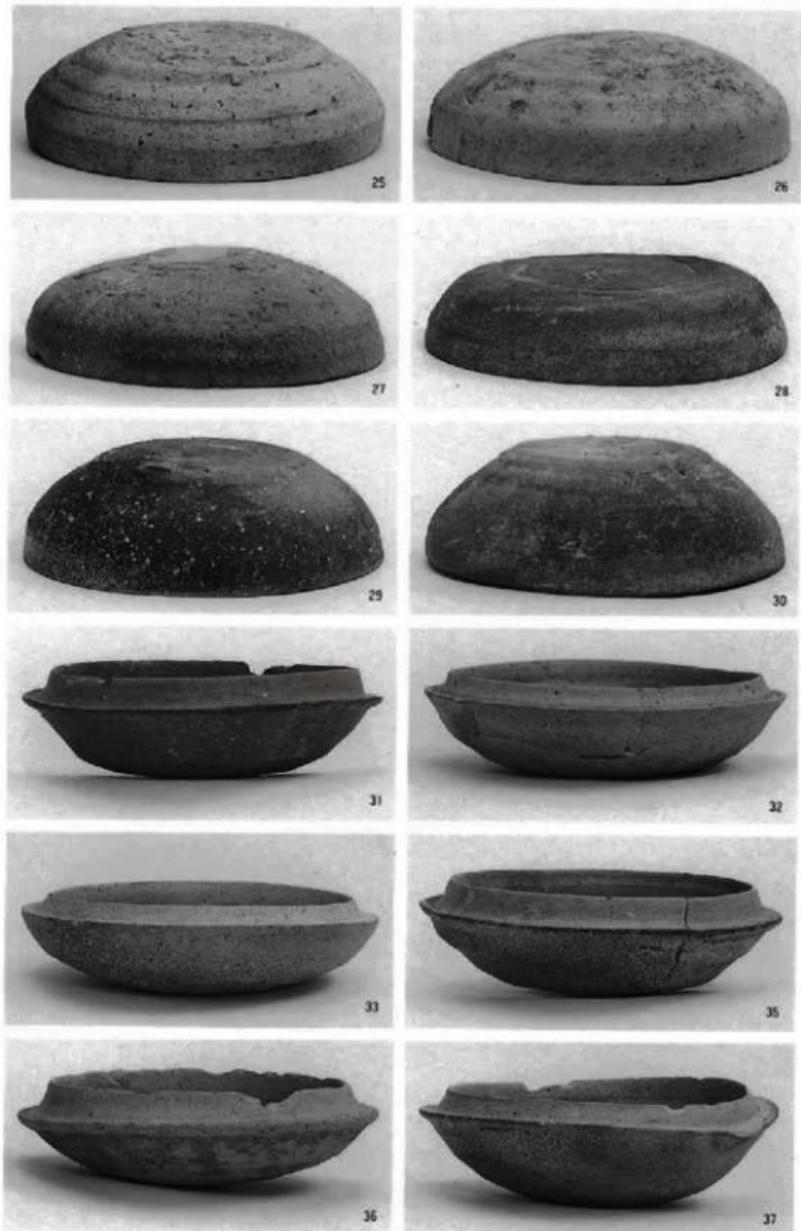




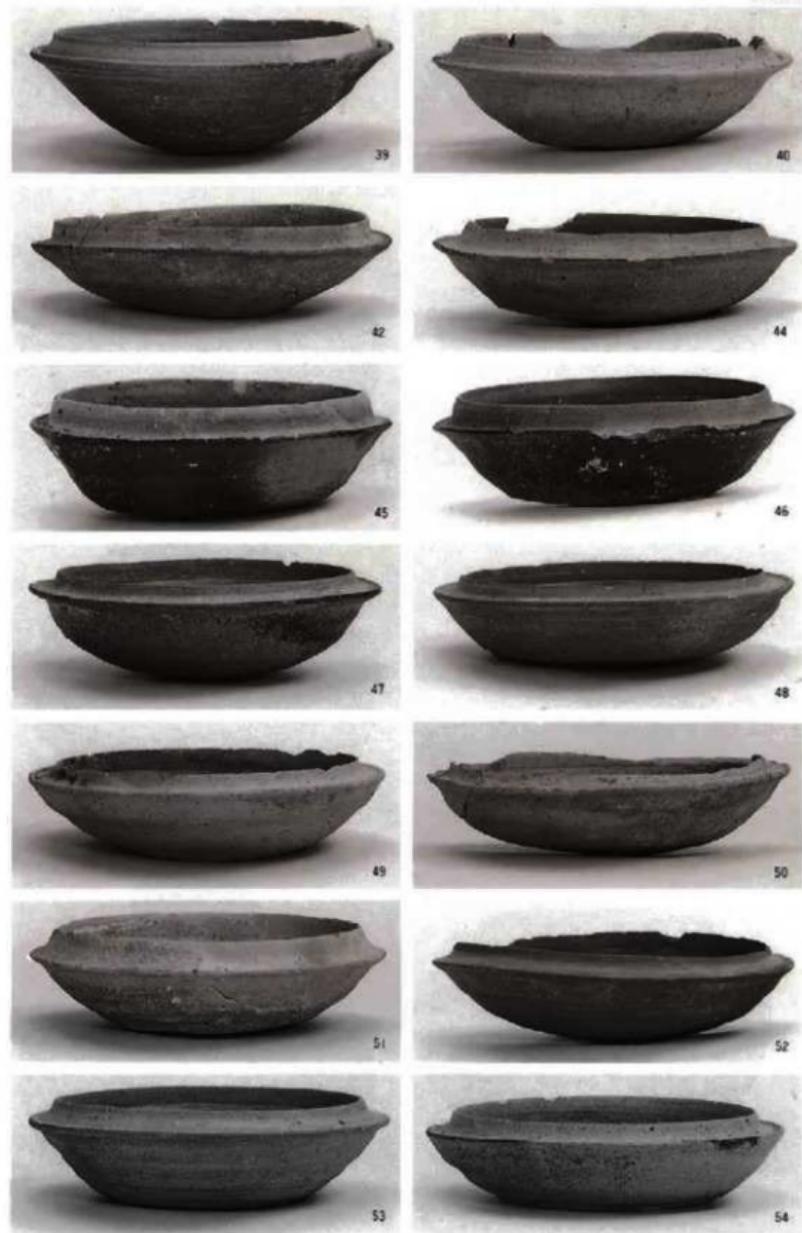
3号填出土土器



3号墓出土土器



3号填出土土器



3号填出土器



55



56



57



58



59



60



61



62



3号墳出土土器



17



18



19の内面の叩き痕



20の内面の叩き痕

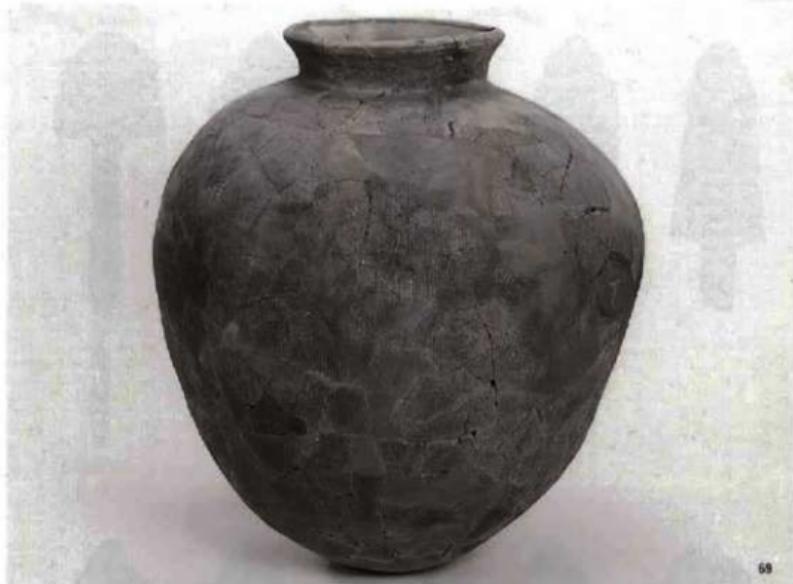


21

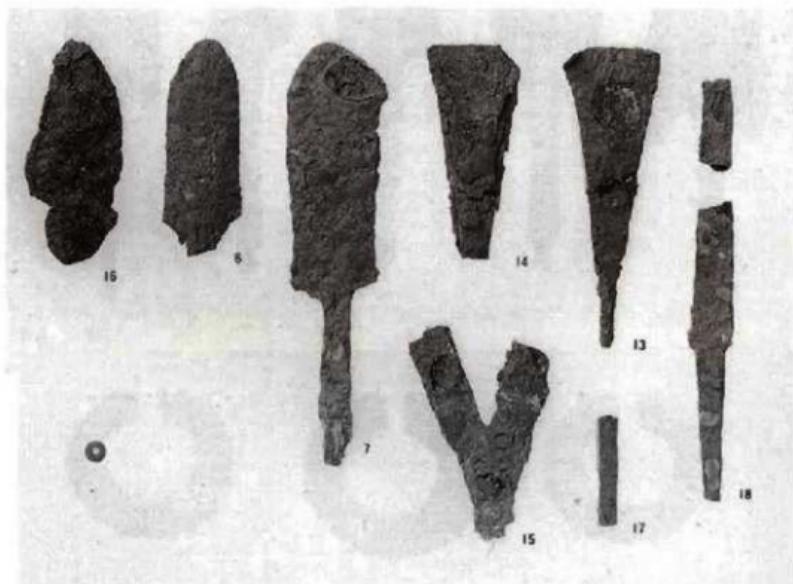


22

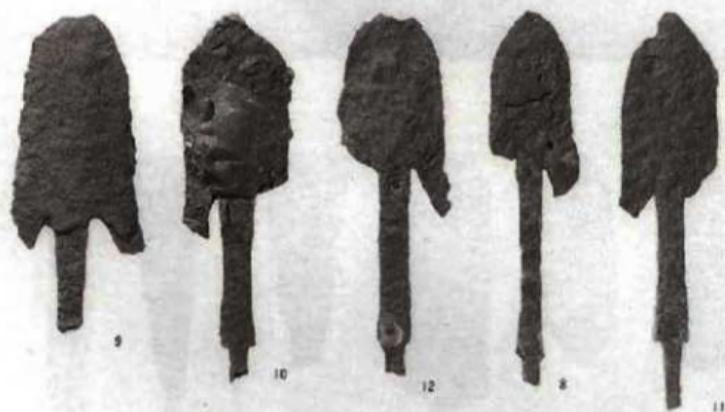
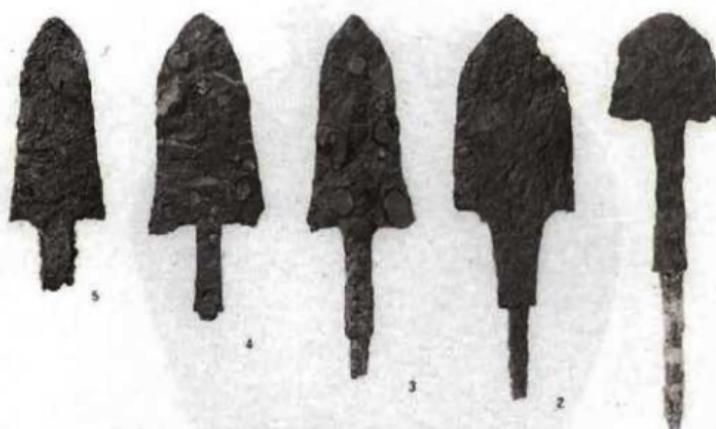
3号墳出土土器



3号墳出土土器



3号墳出土鉄器・ガラス小玉



3号墳出土鐵器



3号墳出土耳環



7号機全貌（東から）



7号機全貌（北東から）



7号機西斜面全貌（東から）



7号機西斜面全貌（北東から）



7号墳全景（東から）



7号墳全景（南東から）



7号坑主体部全景



7号坑坡面堆积状况

图版72



7号坑主体出土物



主体墓随物出土物



7号填埋物出土状态



7号填埋物出土状态

图版74



7号填堆丘断面



7号填堆丘断面



(3)の内面の印き痕

7号墳出土土器



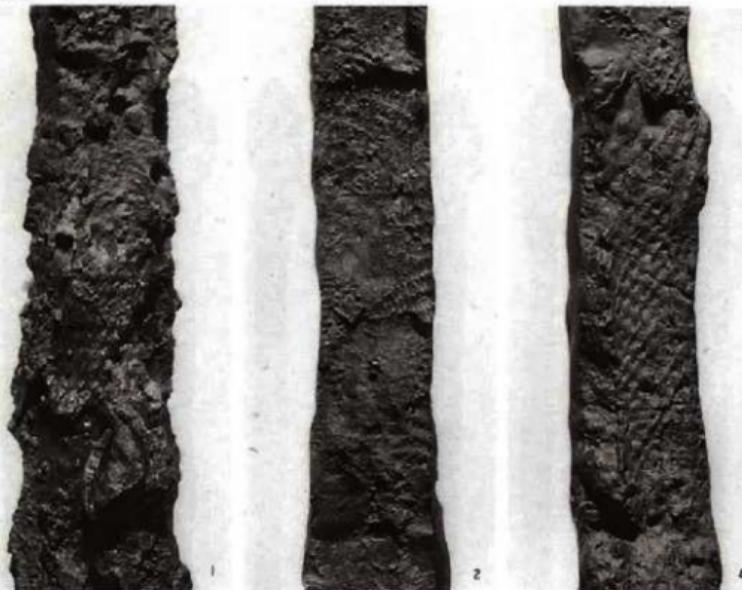
13



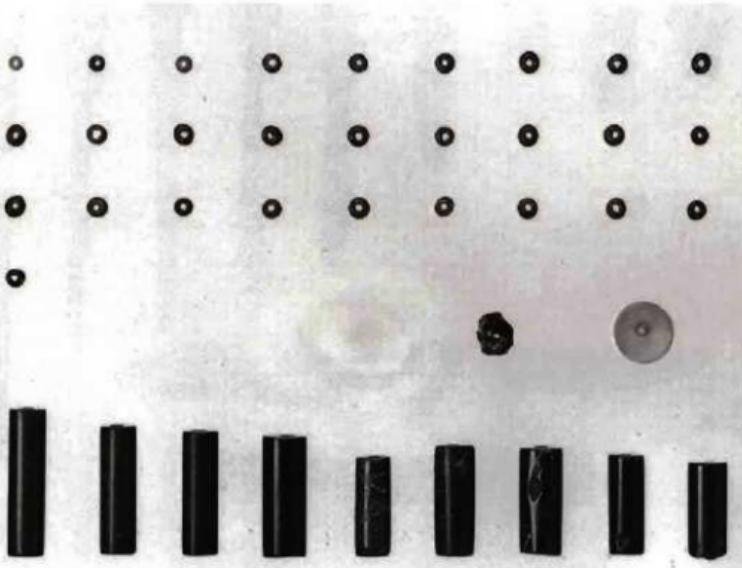
7号填出土土器



7号坑出土武器



7号墳出土鉄鏡に残る痕痕



7号墳出土玉類

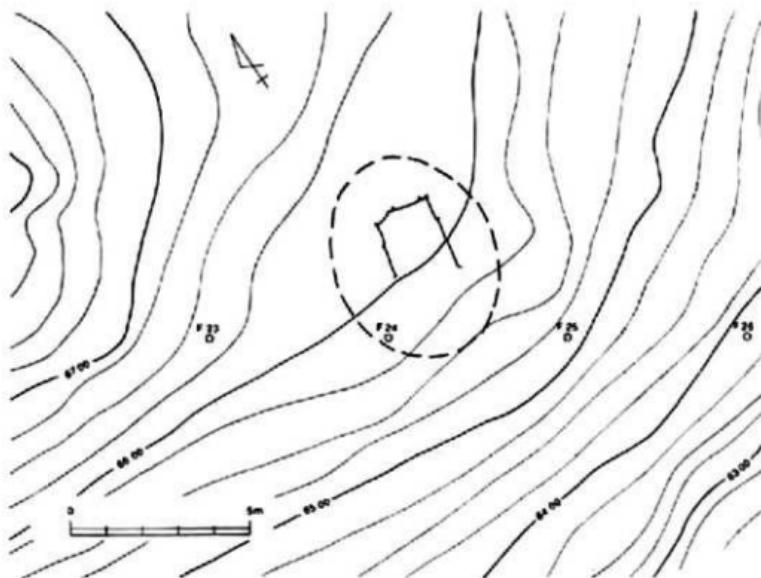
第1節 半田山3号墳の調査

1. 立地

3号墳は2号墳から西に向かって徐々に高くなっていく斜面上に位置している。今回、発掘調査の対象となった半田山墳墓群の中では最も西側に位置する。調査時点では封土は殆ど流失しており、外形からは殆ど古墳とは判断できなかった。尾根上に、東西方向に向かって幅2m、長さ35mのトレンチを設定して、造構の有無を確認した所、横穴式石室を主体部とする古墳である事が判明した。

墳丘は、現状では標高65~67m付近に築かれており、南側には揖西平野が一望出来る。また、3号墳の南側の斜面上には、弥生時代前期の土塙墓及び土器棺が4基と弥生時代末の土器が散布しており、弥生時代前期から末にかけての集団墓が存在している。

また、北側及び西側の尾根上には、今回は発掘調査の対象とはならなかつたが、3基の墳丘墓が存在している。



第114図 3号墳地形測量図

2. 外形

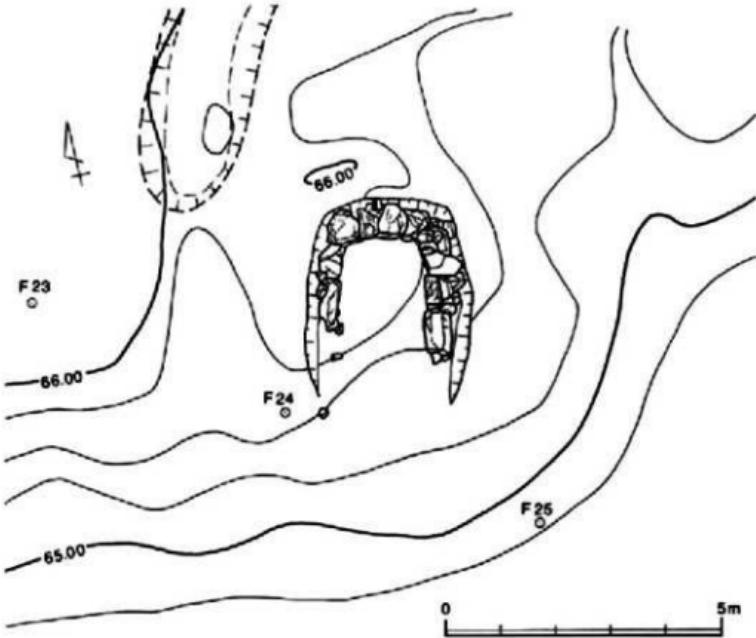
先程も述べたように、調査時点では封土が殆ど流失していたため、外形からは、殆ど古墳とは認識出来なかった。斜面にそって確認トレンチを設定して、遺構の有無を確認した所、横穴式石室を主体部とする古墳である事が確認された。

墳丘は殆ど失われているが、わずかに墳頂部付近に黒褐色土と黄褐色土を混えた堆積土が認められ、墳丘盛土である可能性がつよい。また、墳丘斜面及び墳裾部には、墳丘の流土と思われる暗黄褐色土、黄褐色砂質土、黒褐色砂質土の堆積が見られ、堆積土中には、土師器片及び須恵器片が含まれていた。

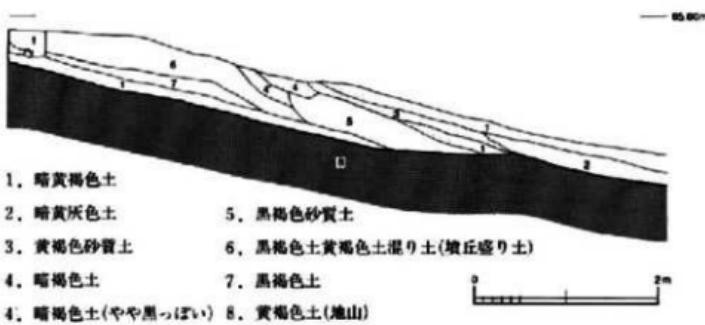
また墳頂部より、3m50cm離れた位置で、幅1.8m、深さ0.5mを測る周濠が検出された。このことから、3号墳は、径10m前後の規模をもつ円墳である事が確認された。

3. 主体部

3号墳は横穴式石室を主体部とする古墳である。調査時点では石室は殆ど破壊され、僅かに



第115図 3号墳墳丘測量図



第116図 3号墳墳丘土層断面図

玄室の奥壁と、両側壁の基底石が1段もしくは2段残存しているに過ぎなかった。

狭道部は完全に破壊され、玄室の前面に、狭道部を構成していたと思われる自然石が、原位置を遺棄した形で散在していた。

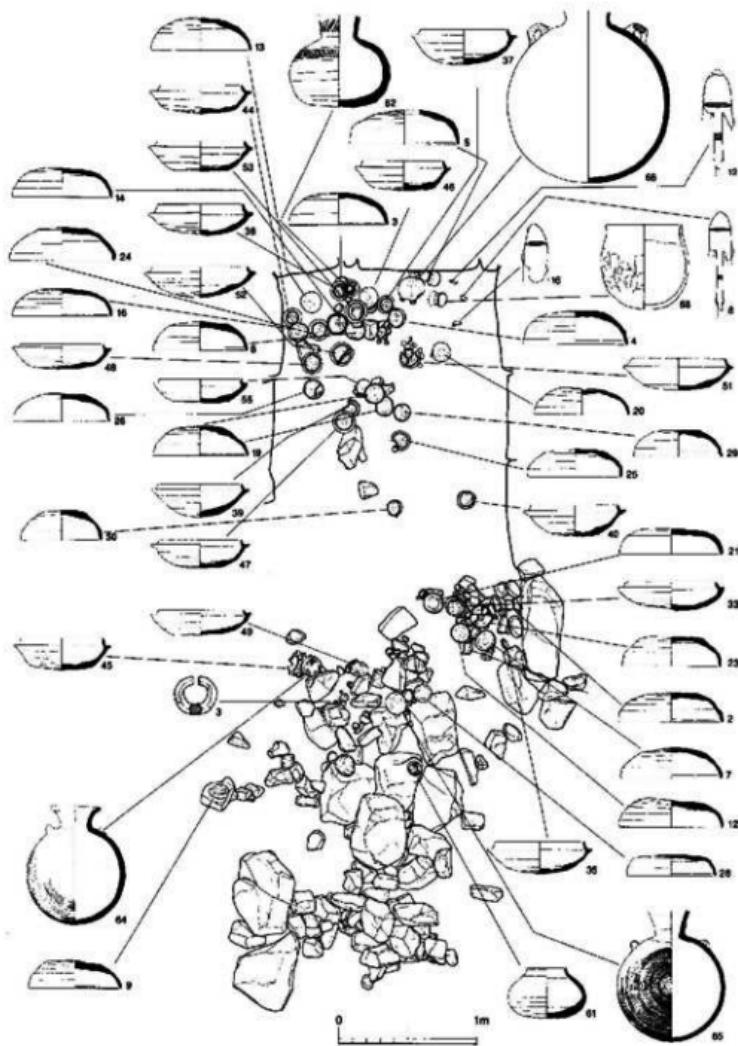
石室の規模は、現状では、奥壁幅1.5m、玄室長3.0mを測る。主軸はN-14'Eで、南側つまり揖西平野を眺望する方向に開口する。

石室の構築方法は、黄褐色地山に、幅3m、長さ3.5m、深さ0.3mの方形の石室の掘り方を掘り込み、その内側に最大長80cmの長方形の基底石を据え、掘り方と基底石の間には、5~10cm程度の小礫を裏込めとして充填する。また、石室床面には、厚さ10cm程度に黄褐色を床置土として充填している。残存する墳丘盛土は、断面観察から、暗灰褐色土と黒色土を交互につき固めて盛っている。

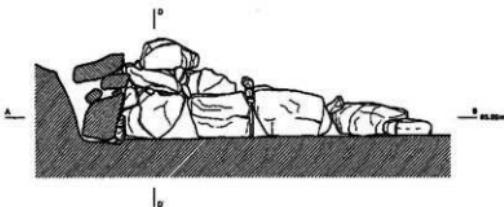
4. 遺物出土状態

遺物は、玄室部と玄門付近に分けられ、玄門付近はさらに玄門東側と狭道付近に分けられる。玄室部の遺物は奥壁北西寄りに集中しており、須恵器・土師器・鉄鏡などがある。北西寄りの部分では内面を上に向かた状態で須恵器の杯・蓋・長頸壺など13点余りが出土している。その中で杯蓋(3)と杯身(4)は、勘の長頸壺の下に重なって出土しており、胎土焼成の度合いからもセット関係が推測されるものである。奥壁近くの東側には鉄鏡(8、12、16)、土師器蓋と環状の把手をもつ大型の提瓶が口縁を上にした状態で出土しており、石室中央あたりには杯蓋(19、25、26、29、30)、杯身(39、40、55)が出土している。これはすべて須恵器である。

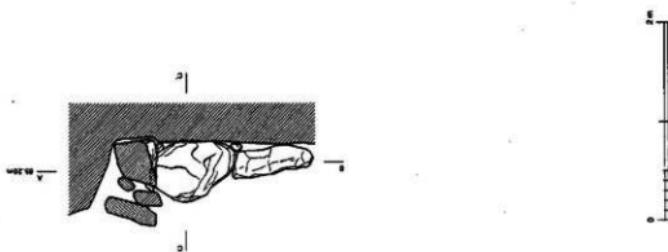
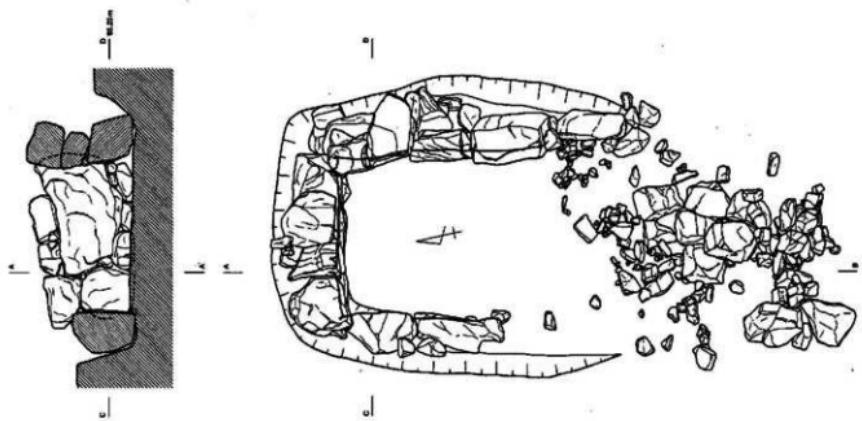
玄門付近の東壁の間に須恵器蓋、杯の一群が内面を上に向かた状態で出土している。その内、杯蓋(7)のそばに杯身(4)の一部が出土しており、(7)の重ね焼きの痕に一致するためセット関係が推測される。狭道部付近の側壁の崩れた礫群の間で検出されたものに杯蓋、杯身をはじめ提瓶(64、65)、小型短頸壺(60)があり、また耳環(3)が出土している。



第117図 3号墳石室遺物出土状態



第11图 3号坑 破坏石室平面图



5. 出土遺物

3号墳からは、总数71点を数える多くの土器が出土している。土師器の杯と広口壺の2点を除いて、全てが須恵器である。器種は蓋・杯類が大半で、ほかに高杯・短頸壺・長頸壺・提瓶・甕等が出土している。

(1) 須恵器

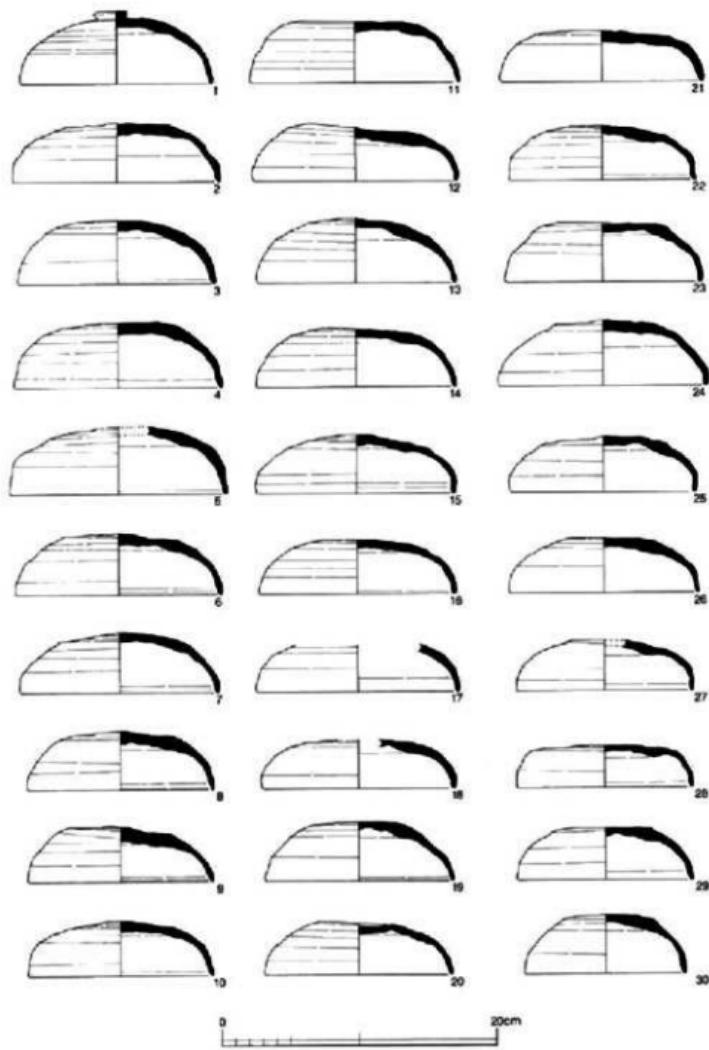
杯蓋(1~30)

杯蓋は总数30点を数える。天井部外面は回転ヘラ削り、外面の体部から内面にかけてはヨコナデを行なっているものが殆どである。調整による時期差が若干考えられる。

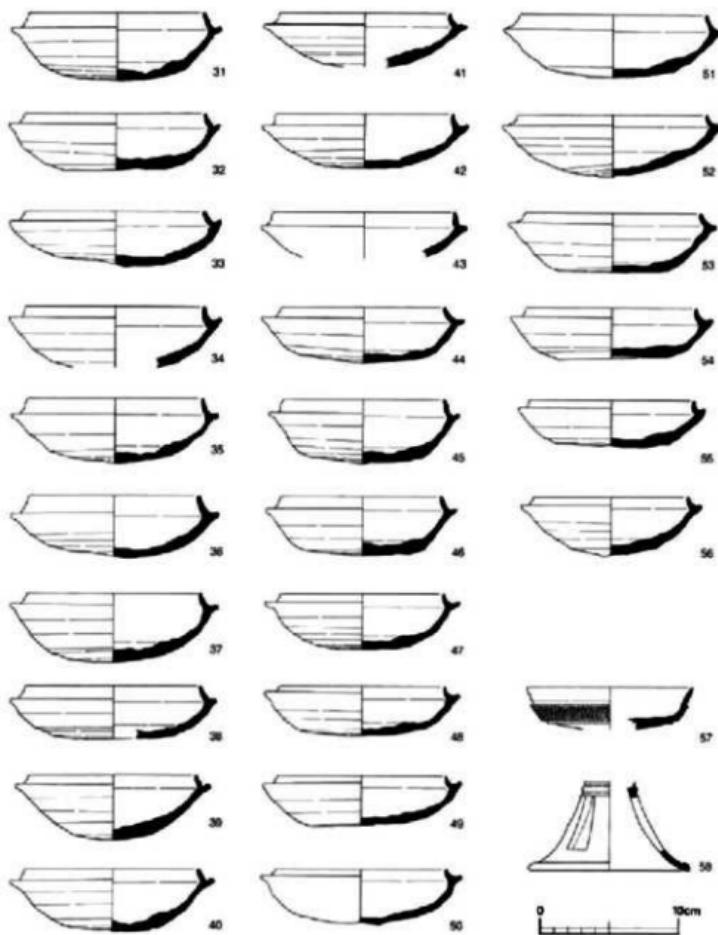
(1)は唯一つまみを持つ蓋である。つまみは中心部がややこんだ感じで、体部は全体に丸い。天井部と口縁部の間に棱をしめたであろう沈線をめぐらす。口径13.65cmに対し器高が5.2cmと高めである。(2~5)は全体に丸い感じで、口縁端部の内面をナデたようで端部三角形を早する。(1~5)は内面天井部に一方方向の仕上げナデを施す。(6~10)は口縁端部の内面に細い沈線により段をもって端部は細くおさめる。(11~12)は天井部が平らで口縁部へやや内側気味に下りるため(1)は特に全体的に四角い印象を与える。(13~18)は全体に丸い感じで天井部から1/2程度は回転ヘラ削り、口縁部及び内面はヨコナデを行なう。(19)は天井部の内面に一方方向の仕上げナデを施す。(20)は比較的船型も密で丁寧な調整であり、天井部内面には同心円状のあて具による痕跡が残る。(21)は全体に調整が粗雑である。(22)は残存部が少ないので明確ではないが、天井部は回転ヘラ削りを行ない、口縁部はヨコナデによる棱をもつ。(23)は非常に軟質であるが、回転ヘラ削りとヨコナデを行なったあとがみられる。(19~23)はやや小振りであろうか。(24)は天井部の外側にヘラ状工具による平行線が残る。(25)は軟質であるが完存しており、天井部に回転ヘラ削りの痕跡が認められる。(26)の天井部は回転ヘラ削りで、ヘラの回転が外側から内側へぬけている。天井部内面には同心円のあて具による痕跡が残る。(27~30)は天井部外側はヘラ切りを行なうものである。(27~30)は小型になる。(29~30)は天井部がヘラ切りで天井部が高く口縁部に丸みをもって端部に至る。天井部回転ヘラ削りのものよりやや時期が下る一般的な形態のものであろう。(31)には天井部の内面に十字の方向に仕上げナデを施す。

杯身(31~56)

杯身は26点を数えるが、杯蓋に比べてその数は少ない。(31)は口径12.6cm・器高4.85cmと容量は大きいほうである。立ち上がりは1cm強で内傾する。(32~33)はやや扁平で立ち上がり部は短めで内傾する。(34)は受け部に蓋との重ね焼きの痕跡及び他土器片が付着しており、その土器片が蓋(7)の破損部と一致するため杯身(34)と蓋(7)とは焼成時からセット関係にあったことがうかがえる。(35)は玄室北西隅から、(36)の蓋に重なって出土しており、その出土状態にあわせて焼成の度合いが一致することもあり、蓋(36)と杯身(35)は焼成時からのセット関係が推定されるものである。(37~38)は口縁受け部と立ち上がりとの接合面はナデによる調整がなされている。(39)は

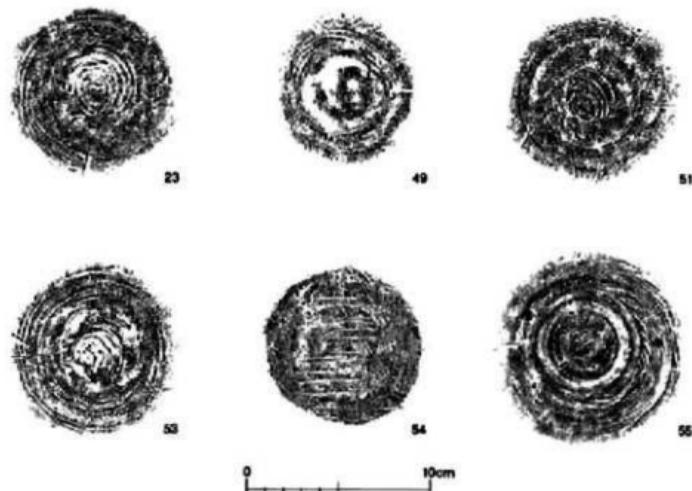


第119図 3号埴須器実測図(1)



第120図 3号墳須恵器実測図(2)

底部内面に一方方向の仕上げナデを施す。(39・40)は底部が小さく体部は斜め方向に口縁へ上がる。立ち上がりは受け部にのせたままのような状態で、接合面から太さは変わらずに端部に至る。(41~43)は扁平であるが全体に丸い印象を与える。図は残存部は少ないが非常に丁寧な



第121図 3号壇須恵器拓影

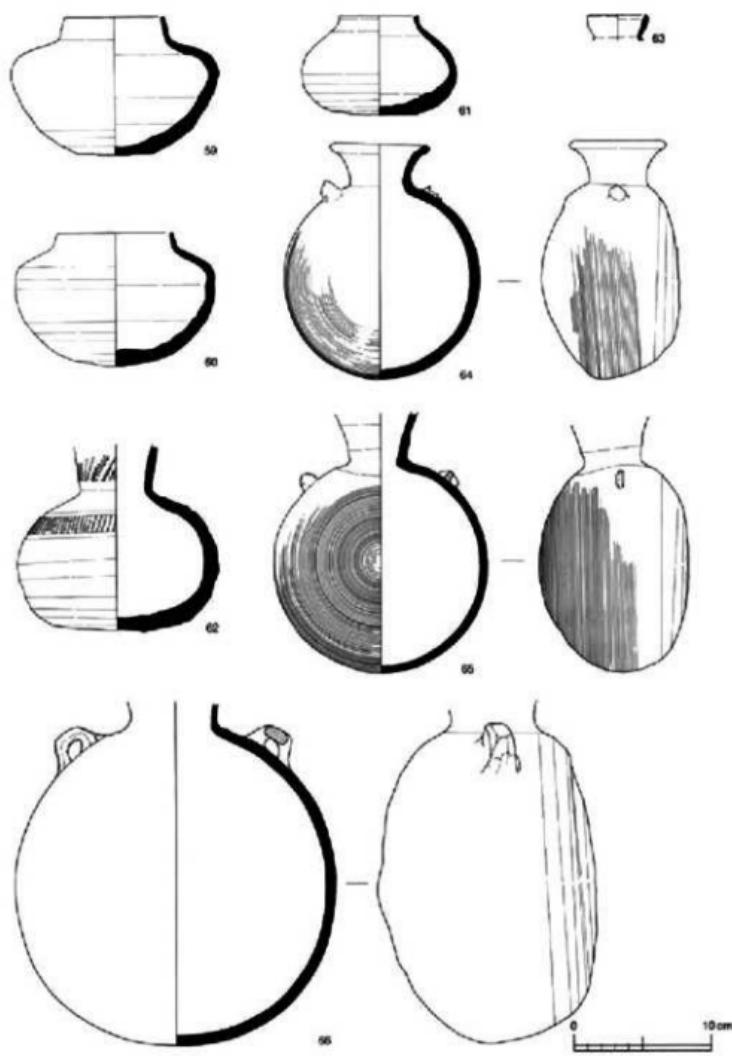
調整である。56は破損部から立ち上がりとの貼り付けの状態が確認できる。(44~46)は底部が広く平らなため四角い感じである。(47~52)は全体に丸い感じで、受け部と立ち上がりはナデによって一体化したように弓なりになり端部に至る。跡は受け部に重ね焼きの痕跡が見られるが一致する蓋は確認できない。(49~51)は底部内面に同心円のあて具による叩きを施す。(53・54)は底部外表面削りヘラ削りであるが、平らで座りが良い。53は底部内面に同心円叩きを施す。50は回転ヘラ削りの後ヘラ状工具による平行線を成し、さらにそのうえに粗い整形を施していくため、すり消し状態で中央部のみに平行線が残る。(55・56)は底部外表面はヘラ切りで、他の体部及び内面はヨコナナを行なう。56は底部内面全体的に同心円のあて具による痕跡が残る。56は底部内面に一方方向の仕上げナデを施す。

高杯(57・58)

57と58は接合点を見出すことは出来なかったが、胎土及び色調の状態から同一個体であることが推測される。57の杯部は口縁部下半に細かい波状文をめぐらす。58は脚部は二段三方の方形透かしと思われるが下段のみの残存である。

煙頭壺(59~61)

59は口径の復原径7.0cmで体部腹径15.0cmに対して小さめである。口縁部は1.5cmで高く肩部は張っており、底部にむかって斜めに下りる。跡は全体に丸い感じで、口縁部は脚に比べやや



第122図 3号墳須恵器実測図(3)

短い。肩部に重ね焼きの痕跡が残るが、これに一致する口径は約9.6cm程度と思われ、被せることのできる蓋は確認できない。柄は小型で体部から引き上げられたと思われる口縁部は口径5cmで小さく端部を上方からナデて平らにしている。底部内面に一方方向の仕上げナデを施す。

長頸壺

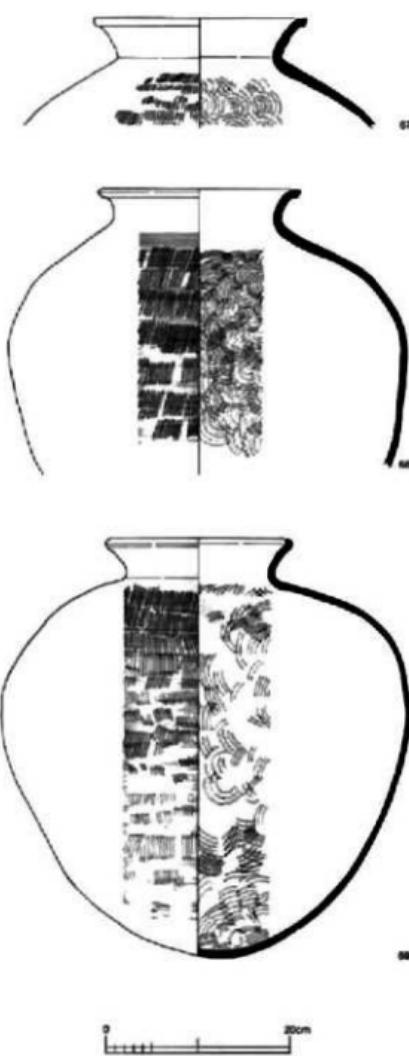
体部は丸く底部は平らである。口頸部近くに粘土の織ぎ目と思われる痕跡が残る。肩部と頸部に刺突文が施されている。

口縁壺

口縁部のみ残存で平瓶またはミニチュアの壺口縁と思われる。復原口径4.0cm、残存高1.8cmを測る。口縁部は外方向に若干の内側をもって上り、端部は丸くおさめる。

提瓶(64~66)

体部は円球形である。背面は扁平で回転ヘラ削り、前面はヨコナデを行なう。(64・65)は前面にカキ目を施す。60113は完存する。把手に関しては比較的残存部が少ないが、カギ状の突起を成すものと思われるものである。頸部は外反して口縁端部に至り側面をナデて方形を呈する。脚の把手は半円状の粘土板を立てて貼り付けただけの状態で形式化されたものである。このような形態の把手は特徴的であろう。脚は体部の最大径23.2cmを測り、大型の提瓶である。体部前面にはカキ目も施されておらず、全体的にやや粗雑なつくりである。口縁部は破損しており形態は不明である。把手は環状のも



第123図 3号墓須恵器実測図(4)

ので3号墳出土の提瓶のなかでは古い形式を成すものと思われる。

彫(67~69)

全体的に復原できたのは彫だけである。(67・68)の器高は彫の復原器高に大差はないものと思われる。彫の外面は平行叩きの後カキ目、内面は全体に同心円叩きを施す。(68・69)の口縁の高さは4.5cm程度で外反してのび、端部はつまみ出して側方をナデておさめ肥厚する。彫の口縁部は外反した後上方につまみ出して側面と内面をナデする。

第6表 3号墳須恵器観察表

No	器種	色調	焼成	胎土	法量(cm)	形態	技法	備考
1	蓋	(内)灰白色 7.5Y8/1 (外)灰白色 7.5Y8/1~ 7.5Y7/1	やや 軟質	2mm程度の 石英及び長 石含む。	11径 13.65 器高 5.2	外側天井部に扁平でやや中心部 がへこんだつまみを付す。口縁 部と大井部との間に凹線を巡ら す。	体部天井部から 程度まで回転 ヘラ削り口縁部から内面はヨコ ナデを行なう。内面天井部に不 定方向の仕上げナデを施す。	完形
2	蓋	(内)灰白色 N7 (外)灰白 ~灰白色 10Y7/1	良好	黒雲母の砂 粒、程度の チャートを 含む。	口径 14.7 器高 4.2	口縁部と天井部との間に凹線状 の溝を巡らす。外面に他土器片 付着。部分的に自然釉残る。	外側天井部は回転ヘラ削り、口 縁部及ぶ内面部はヨコナデを行な う。内面天井部に一方方向の仕 上げナデを施す。	ほぼ 完形
3	蓋	(内)灰色 10Y7/1 (外)灰色 10Y8/1	軟質	4mm程度の 長石及び石 英の小石粒 含む。	口径 (14.1) 器高 4.6	全体的に丸く、口縁部内面に細 い沈線を巡らす。	外側天井部 程度は回転ヘラ削 り、口縁部から内面はヨコナデ を行なう。	ほぼ 完形
4	蓋	(内)灰白色 10Y8/1 (外)灰白色 ~灰色 10Y8/1 ~10Y6/1	良好	石英の小石 粒を多く含 む。	11径 14.85 器高 4.7	全体に丸い感じで、口縁端部は 三角形を呈する。	外側天井部は回転ヘラ削り、口 縁部から内面にかけてヨコナデ を行なう。内面天井部に一方方 向の仕上げナデを施す。	完形
5	蓋	(内)灰白色 N8 (外)灰白色 N7	良好	石英、チャ ートの小石 粒を含む。	口径 15.55 器高 4.85	やや扁平で天井部からほぼ垂直 に口縁端部に下りる。	外側天井部から 程度は回転ヘ ラ削り、他内面にかけてヨコナ デを行なう。内面天井部に一方 方向の仕上げナデを施す。	ほぼ 完形
6	蓋	(内)灰色 N5 (外)灰色 N5~N4	良好	石英の小石 粒を含む。	口径 14.7 器高 4.4	天井部は平らで口縁部はやや丸 みをもって端部に至る。口縁端 部内面に沈線を巡らす。	外側天井部から を削りヘラ削 り、口縁部から内面にかけてヨ コナデを行なう。	口縫 部欠 損
7	蓋	(内)灰白色 7N (外)明オリ ーブ灰色 2.5GT	柔軟	黒雲母の砂 粒、若干の 石英を含む。	11径 14.3 器高 4.3	全体に扁平で天井部から若干斜 めに口縁端部に下りる。	外側天井部は回転ヘラ削り、口 縁部はヨコナデを行なう。	完形

No.	部種	色調	焼成	胎土	法量(cm)	形態	技法	備考
8	畫	(内)灰色 N5 (外)灰色 N6~N4	堅鐵	5mm程度の 石粒を含む。	口径 13.35 器高 4.15	天井部はほぼ平らで、口縁部は やや内壁気味に下りる、底部内 面に沈線を造らす。	外側天井部の回転へラ削りは荒 く、口縁部及び内面はヨコナデ を行なう。	完形
9	畫	(内)灰色 N6 (外)灰色 N6~N5	堅鐵	7mm大の石 粒を含む。	口径 13.2 器高 4.0	(8)と似た形態で口縁部内面に不 明瞭ながら沈線を造らす。	(8)と同じく回転へラ削りは荒く、 口縁部から内面にかけてはヨコ ナデである。	口縁 部欠損
10	畫	(内)灰色 N6 (外)灰色 N4	堅鐵	3~7mm程 度の石粒を 含む。	口径 13.2 器高 3.95	全体に扁平で、口縁部はほぼ垂 直に下りる。	外側天井部から 程度は回転へ ラ削り、口縁部及内面はヨコナデ を行なう。	完形
11	畫	(内)灰白色 10YR8/1 (外)灰白色 TN~7.5Y 7/1	堅鐵	2mm程度の チャート含 む。	口径 (15.0) 器高 4.45	やや大きめで器高も他に比べて 高い。口縁端部は丸く仕上げて いる。	外側部はロクロケズリ、あと、 口縁部2/3程度と内面はロクロ ナデを行なう。	口縁 部分 残存
12	畫	(内)灰白色 10YR8/1 (外)灰白色 10YR8/1 ~10Y7/1	堅鐵	2mm程度の チャート及 び石英、雲 母を含む。	口径 14.55 器高 4.2	天井部はやや扁平で、全体に丸 く、口縁端部も丸く仕上げてい る。	天井部1/3程度ロクロケズリ。口 縁部から内面にかけてロクロケ ズリ。	完形
13	畫	(内)灰色 N4 (外)灰色 N4	堅鐵	密	口径 14.2 器高 4.7	半円球を呈しており、口縁部は 丸く仕上げている。	天井部から1/2程度ロクロケズ リ。口縁部から内面にかけて、 ロクロナデを行う。内面天井部 に一方方向の仕上げナデを施す。	完形
14	畫	(内)赤灰色 10YR6/1 (外)赤灰色 10YR6/1 ~暗赤灰色 10R3/1	堅鐵	密	口径 14.3 器高 4.2	全体に扁平で、口縁端部は丸く 仕上げる。	外画、天井部から1/2程度ロクロケ ズリ。あと口縁部から内面にか けてロクロナデを行う。	完形
15	畫	(内)灰色 N6 (外)灰色 N6	堅鐵	密	口径 14.2 器高 4.2	やや扁平で口縁部は若干内傾す る。	天井部1/2程はロクロケズリ、口 縁部から内面にかけてロクロナ デを行うが、全体にやや粗雑で ある。	口縁 部1/2 程度 欠損
16	畫	(内)灰白色 N7 (外)暗灰色 ~よい黄 緑 10YR7/3	堅鐵	密	口径 14.05 器高 3.9	全体的に扁平。口縁部はやや外 方にのびる口縁端部は丸く仕上 げる。	天井部から1/2程度はロクロケ ズリ。口縁部と内面はロクロナ デを行う。内面天井部にはほぼ一 方方向の仕上げナデを施す。	完形
17	畫	(内)灰色 N6 (外)灰色 N6	良好	5mm大の石 粒を含む。	口径 (14.4) 器高 (3.4)	天井部の残存が少ないため的確 でないが、口縁部はナデによる 様をちらしながら内壁気味に端部 に至る。	天井部はロクロケズリ。口縁部 から内面にかけてロクロナデを行 う。	口縁 部1/2 残存

No	25種	色調	焼成	施土	法量(cm)	形態	技法	備考
18	畫	内)に赤い 黄緑 10YR7/3 外)に赤い 黄緑10YR 7/3	軟質	5mm大の石 粒を含む。	口径 (13.8) 器高 (3.45)	全体的に丸いかんじで、口縁部 はやや内傾する。端部は丸く仕 上げる。	非常に焼成が甘いため不明瞭で あるが、天井部の1/3程度はロク ロケズリ。あと口縁部から内面 にかけてロクロナデを行ってい ると思われる。	1/2 程度 残存
19	畫	内)褐灰色 10YR6/1 外)明オリ --ブ灰色 2.5GY11/ 1 灰白色 2.5GY8/1	良好	石英・チャ ートの小石 粒及び7mm 大の石粒を 含む。	口径 13.5 器高 4.25	やや高めの器高で天井部が狭く、 口縁部は斜めにおりる。口縁端 部は丸くおさめる。	天井部はロクロケズリ、口縁部 から内面にかけてロクロナデ。	完形
20	畫	内)灰白色 N7 外)灰白色 N7~灰 色 N6	堅緻	7mm程度の 石粒を含む。	口径 13.45 器高 3.8	全体的に丸みをおびており、口 縁部はやや内傾気味に端部に至 る。口縁端部は丸くおさめる。	天井部から1/2程度はロクロケ ズリ。口縁部から内面にかけて ロクロナデを行う。外側天井部 にヘラ工具によるナデのあとが 見られる。	完形
21	畫	内)淡黃色 5Y8/3 外)灰色 2.5Y9/6	軟質	2~6mm程 度の石英、 チャートを 多く含む。	口径 14.5 器高 3.6	全体に扁平で口縁部は内傾気味 に入る。口縁端部は磨滅が著し いため不明瞭である。	天井部2/3程度はロクロケズリ。 口縁部及び内面はロクロナデを 行っていると思われる。	完形
22	畫	内)灰白色 2.5GY8/1 外)灰白色 2.5GY8/1	堅緻	青	口径 13.2 器高 3.9	器高が低く、天井部が比較的広 い。口縁部はほぼまっすぐに端 部に至る。口縁端部は丸く仕 上げている。	天井部1/2程度はロクロケズリ。 口縁部から内面にかけてロクロ ナデを行う。	完形
23	畫	内)灰白色 10Y7/1 外)灰白色 7.5Y7/1	堅緻	2~5mm程 度のチャー ト、石英を 多く含む。	口径 13.9 器高 4.3	天井部は扁平でナデによる段を 有しながらやや内傾気味に口縁 端部に至る。端部は丸く仕上げ る。	天井部は、ロクロケズリのヘラ のあとが外から内へぬけている。 口縁部から内面にかけてロクロ ナデを行う。内面天井部に同心 円叩きが施されている。	完形
24	畫	内)灰白色 7.5Y8/2 外)灰白色 5Y8/2	良好	石英、チャ ートの砂粒 を含む。	口径 14.4 器高 4.2	やや高めの器高で半球形を成す。 口縁端部は丸く仕上げる。	天井部は回転を利用したヘラ切 りで口縁部及び内面はロクロナ デを行う。天井部内面に一方方 向の仕上げナデを施す。	完形
25	畫	内)灰白色 5Y8/2 外)灰白色 7.5Y8/2	良好	石英、チャ ートの小石 粒を含む。	口径 13.2 器高 4.0	やや扁平で天井部から口縁部へ 外方に下り、口縁部1cm上から 端部へまっすぐに至る。端部は 丸く仕上げる。	天井部はヘラ切り。口縁部から 内面にかけてロクロナデ。	完形
26	畫	内)淡黄色 5Y8/3 外)淡黄色 5Y8/3	良好	石英の小石 粒を多く含 む。	口径 13.6 器高 4.0	器高はやや低めで半球形を呈す る。口縁部は丸く仕上げる。	天井部外側はヘラ切り。口縁部 から内面にかけてロクロナデを 行う。全体に丁寧な整形である。	完形
27	畫	内)灰白色 N7 外)明オリ --ブ灰色 2.5YR7/1	堅緻	青	口径 12.65 器高 3.6	やや小型で全体的に扁平である。 口縁部は内傾気味に端部に至り、 端部は丸く仕上げる。外側は全 体的に器壁が荒れている。	天井部はヘラ切りで、口縁部及 び内面はロクロナデを行う。	完形

No	器種	色調	施成	胎土	法量(cm)	形態	技法	備考
28	蓋	内)灰色 N6 外)青灰色 5PB6/1	堅練	密	口径 12.55 器高 3.0	天井部は平らで広く、天井部からほぼまっすぐに口縁部に下りる。口縁部の一部に次かぶり。	天井部外面はヘラ切り。口縁部から内面にかけてロクロナデを行う。	完形
29	蓋	内)灰白色 N7 外)灰色 10Y5/1	堅練	石英の小石 粒を多く含む。	口径 11径 12.55 器高 3.75	天井部は平らで、口縁部は丸みをおびる。口縁部は三角形を呈する。	天井部はヘラ切り、口縁部及び内面はロクロナデを行う。	完形
30	蓋	内)灰色N6 外)オリーブ灰色 2.5GY5/1	良好	密	口径 11.4 器高 4.2	天井部は平らで、口縁部は外方にかけて端部近くで内反気味に端部に至る。	天井部外面はヘラ切り。口縁部から内側にかけてロクロナデを行う。天井部内面に不定方向の仕上げナデを施す。	完形
31	杯身	内)青灰 5BS/1 外)暗青灰 5BG4/1	良好	3mm程度の 小石粒を含む。	口径 12.6 器高 4.85	やや横円形に焼け歪んでいる。底部から外方にのびる。立ち上がりは内傾して端部に至る。	外曲、底部から1/2程度ロクロケズリ。体部及び内面はロクロナデを行う。	完形
32	杯身	内)灰白 5YN/2 外)灰白 5Y8/2~ 7.5Y7/2	良好	チャートの 砂粒、窑母 を含む。	口径 13.05 器高 4.1	焼け歪みがあるが、全体に丸い感じで受け部には立ち上がりとその後のナデによる溝が延る。立ち上がりはやや外反気味にのびる。	外側の底部分が2/3程度ロクロケズリ。体部から内面にかけてロクロナデを行う。	完形
33	杯身	内)灰白N8 外)明灰色 5B7	堅練	黒い砂粒を 多く含む。	口径 12.8 器高 3.9	全体に扁平であるが丸みを帯びる。立ちあがりは1cm程度で外反気味にのびる。	底部分から2/3程度ロクロケズリ。外表面部及び内面はロクロナデを行う。	完形
34	杯身	内)灰白 5Y7/2 外)灰白 7.5Y7/2	良好	チャート、 長石の小石 粒を含む。	口径 (12.9) 残存高 4.4	立ち上がりは1cm強でやや外反しがちに端部に至る。	底部分から2/3程度までロクロケズリで、ケズリの単位が明瞭である。他、内面にかけてロクロナデを行う。	1/5 程度 残存
35	杯身	内)明青灰 5B7/1 外)緑灰 7.5GY6/1	堅練	密	口径 12.6 器高 4.65	体部外側はほぼ全体的に自然釉が付着し、一部器表面が焼れている。 受け部は粗く、立ち上がりは1.5cmくらいで内傾して端部に至る。	底部分1/2程度はロクロケズリ。他、内面にかけてロクロナデを行う。	口縁部 1/4 欠損
36	杯身	内)灰色 10Y8/1 外)灰色 10Y8/1	軟質	7mm程度の 石粒を含む。	口径 12.2 器高 4.4	全体的に底盤が薄いが、立ち上がりが内傾しているため、受け部が広く感じられる。	受け部から2cmくらい下までロクロケズリ。他、内面にかけてロクロナデを行う。	完形
37	杯身	内)明灰色 5PB7/1 外)灰色 10Y6/1	堅練	密	口径 12.5 器高 4.95	器高がやや高く感じられるが、横円形に若干焼け歪んでいる。立ち上がりは認め端部に向かって細くなっている。	底部分はロクロケズリ。他、外側の1/2程度と内面にかけてロクロナデを行う。	完形
38	杯身	内)灰色 N5 外)暗青灰 5B4/1	良好	長石の小石 粒を含む。	口径 12.6 器高 3.75	全体的に扁平である。受け部は粗く、立ち上がりはやや外反気味に端部に至る。	口縁部近くまでロクロケズリ。他、内面にかけてロクロナデを行う。内面底部一方方向の仕上げナデを施す。	1/6 程度 残存

No.	器種	色調	焼成	胎土	法量(cm)	形 置	技 法	備考
39	杯身	内)灰色 外)10Y8/1 2.5GY7/1 5PR4/1	良好	8mm大の石 粒を含む。	口径 12.1 器高 4.65	口径に対して器高が高めで、体 部は山型を逆にした感じである。 立ち上がりは受け部に寄せた けのような状態である。	底部から1/2程度回転ヘラ削り で、他、外面と内面はヨコナデ を行う。	ほぼ 光形
40	杯身	内)灰色 7.5Y8/2 外)灰色 7.5Y8/2	やや 軟質	石英の小石 粒を含む。	口径 12.5 器高 4.5	器高は高めである。立ち上がり は1cm程度で内傾する。受け部 には貼り付けの痕生じたと思わ れる溝を残す。	外面底部は回転ヘラ削り。上部 外面1/2程度と内面にかけてヨ コナデを行う。	ほぼ 光形
41	杯身	内)灰色 2.5Y8/1 外)暗オリ -ブ灰 2.5Y7/1	軟質	密	口径 11径 12.3 残存高 3.25	残存高が少ないため刃削ではない が、やや扁平であろうか。立 ち上がりは1cm程度で外反する。	底部は回転ヘラ削り。他、外 から内面にかけてヨコナデを行 う。ケズリ、ナデともに単位が 明瞭である。	1/6 程度 残存
42	杯身	内)灰色 N7 外)暗青灰 10BG7/1	堅緻	密	口径 12.8 器高 3.9	全体的に扁平である。立ち上 りの外反度が比較的大きいため、 受け部が広く感じられる。	底部から口縁部近くまで回転ヘ ラ削り。口縁部から内面にかけ てヨコナデ。	ほぼ 光形
43	杯身	内)暗青灰 5B4/1 外)暗青灰 5B4/1 -暗紫灰 5P3/1	堅緻	密	口径 (13.0) 器高 3.2	全体的に丁寧なつくりである。 受け部は短く、立ち上がりは1 cm程度である。	口縁部近く2cm程度をのこし、 底部から回転ヘラ削り、あと内 面にかけてヨコナデ。	口縁 1/2 程度 残存
44	杯身	内)暗青灰 5B7/1 外)暗青灰 5GY8/1	堅緻	黑砂粒を多 く含む。	口径 11径 11.75 器高 5.0	底部が平らで全体的にも扁平で ある。立ち上がりから受け部に かけてナデが丁寧で、立ち上 りは外反が強い。	底部は回転ヘラ削り。他、口縁部 から内面にかけてヨコナデ。	ほぼ 光形
45	杯身	内)暗青灰 5B7/1 外)青黒 5B2/1 -緑灰 3G6/1	堅緻	黑砂粒を含 む。	口径 11.65 器高 4.6	口径に対して器高は若干高めに 感じる。底部は平らである。立 ち上がりは1cm程度ではば直立 する。	底部は回転ヘラ削り。口縁部及 び内面はヨコナデを行う。	ほぼ 光形
46	杯身	内)青色 10BG5/1 外)	堅緻	7mm大の石 粒を含む。	口径 11.6 器高 4.6	底部はほぼ平らである。立ち上 りはやや外反気味で受け部に 溝をめぐらす。	底部は回転ヘラ削り。口縁部及 び内面はヨコナデを行う。	ほぼ 光形
47	杯身	内)灰色 N7 外)黄褐色 8.5Y6/1 -褐灰色 7.5YR6/1	堅緻	黑砂粒及び 3mm程度の 小石粒を含 む。	口径 11.8 器高 4.0	全体的に丸い感じで、口縁部は ナデにより「く」の字形に屈曲す る。立ち上がりは5mmくらいで、 受け部は広めである。外反は自 然軽が付着し、器表面が若干荒 れている。	底部は回転ヘラ削りの後ナデで おり、口縁部から内面にかけて、 ヨコナデを行う。底部内面に一 方方向の仕上げナデを施す。	光形

No	器種	色調	焼成	粘土	法量(cm)	形 態	技 法	備考
48	杯身	内)青灰色 5B6/1 外)青灰色 5PB6/1	堅緻	5~7mm程度の石粒含む。	口径11.9 器高3.5	全体的に丸い感じで、やや扁平である。立ち上がりは5mm程度で、受け部がやや広くなっている。	底部は回転ヘラ削り。他外面及び内面はヨコナデ。	完形
49	杯身	内)灰白色 7.5Y8/2 -に近い黄 10YR7/4	軟質	石英・チャートの小石粒を含む。	口径11径 12.15 器高3.6	全体に丸い感じで扁平である。立ち上がりは低めで、受け部が広くなっている。	底部はヘラ切り。内面を含めヨコナデを行う。	ほぼ 完形
50	杯身	内)浅黄橙 10YR8/3 外)浅黄橙 10YR8/3	軟質	石英・チャートの小石粒を含む。	口径(12.25) 器高4.0	全体的に丸い。磨減が著しく端部を種類しがたいが、立ち上がりは低く受け部は広い。	磨減のため調整観察は不明瞭であるが、底部はヘラ切り、他、内面にかけてヨコナデと思われる。	ほぼ 完形
51	杯身	内)淡黄色 2.5Y8/3 外)淡黄色 2.5Y8/3 -灰白色 2.5Y7/2	やや 軟質	石英・チャートの砂粒を含む。	口径13.4 器高4.5	底部から受け部までは外方向にのびる。立ち上がりは1cm強で、内側気泡に入っている端部近くでやや外反する。	底部は回転ヘラ削り。体部から内面にかけてヨコナデを行う。	口縁 部約 1/2 欠損
52	杯身	内)青灰色 5B6/1 外)青灰色 5BG5/1	良好	密	口径13.65 器高4.4	体部は半球形をやや扁平にした感じで、立ち上がりが短く、受け部が広い。	底部はヘラ切りの後、かるく回転ヘラ削りを行っており、他、体部外面と内面にかけてヨコナデ。内面底部には一方方向の仕上げナデを施す。	完形
53	杯身	内)灰白色 N7 外)灰白色 N7	堅緻	5mm程度の石粒を含む。	口径12.6 器高4.2	底部は平らである。受け部が広く、立ち上がりが短い。	底部はヘラ切り後、ヘラでナデしている。他、体部及び内面はヨコナデを行う。底部内面に同心円印きを施す。	完形
54	杯身	内)灰白色 N8 外)灰白色 N8 -暗青灰色 10BG4/1	堅緻	密	口径12.75 器高3.75	底部が平らで、全体的に扁平である。立ち上がりは内方へのびて端部へさらに上へあがるために短く感じられる。	底部ヘラ切りの後、かるくナデしている。体部内外面ともヨコナデを行う。内面に同心円印きを施す。	完形
55	杯身	内)灰色N5 外)灰色 N5	堅緻	密	口径11.9 器高3.2	全体的に扁平である立ち上がりは5mm程度でほぼ直立する。受け部は狭い。	底部はヘラ切り。口縁部から内面にかけてヨコナデを行う。内面ほぼ全体的に同心円印きらしいあとが残る。	完形
56	杯身	内)灰色N5 外)明青灰 色5B7/1 -暗青灰色 5B4/1	堅緻	密	口径11.5 器高4.25	口径に対し器高が高く、底部は平らであるが範囲がせまく、底部から斜めに口縁にあがる。立ち上がりは1cm弱で受け部はせまい。	底部はヘラ切り。あと口縁部及び内面にかけてヨコナデを行う。内面底部に一方方向の仕上げナデを施す。	ほぼ 完形
57	高杯	内)灰色 7.5Y6/1 -灰色N5 外)灰白色 7.5Y7/1	堅緻	黒砂粒を含む。	口径(11.9)	杯部の底部は平らで口縁部との間に沈縫を造らし、口縁部は外方向にのび、中央部で沈縫をもつて若干屈曲をなす。	杯部の底部外面は回転ヘラ削り。口縁部及び内面にかけてヨコナデを行う。口縁部下に幅かい6条の波状文を施す。	杯部のみ 1/2 残存

No	器種	色調	焼成	胎土	法量(cm)	形態	技法	備考
58	高杯	内)灰白色 7.5Y7/1 外)灰白色 7.5Y7/1	堅織	黒砂粒を含む。	底径 (11.4)	肩部の下半分しか残っていない。下方にラッパ状に広がり、端部の側面をナデる。三方に方形透しをもつ。上下の間に2条の沈線を巡らす。	ヨコナデを行う。	肩部 下半 のみ 2/3 残存
59	瓶頸壺	内)淡黄色 5Y7/4 外)灰白色 5Y7/2 ~浅黄色 5Y7/3	良好	石英・チャートの小石粒を含む。	口径 (7.0) 器高 9.85	肩高・腹径に比べて口縁が小さい。肩部はほぼ水平になっており、肩部から底部に向かってやや極端に斜めに下りていく。	底部から体部1/2程度まで回転ヘラ削り。肩部を含め、内面にかけてヨコナデを行う。	体部 1/3 程口 縁部 3cm 残存
60	瓶頸壺	内)灰白色 7.5Y7/1 外)灰白色 5Y7/2 ~灰色N4	堅織	黒い砂粒、 雲母を含む。	口径 (6.2) 器高 9.5	体部は丸い感じで、肩部で縫をもち、口縁部で屈曲をして、端部に至る。肩部の口縁部近くに壺ととの重ね焼きのあと残す。	底部から1/2程度回転ヘラ削り。体部及び内面にかけてヨコナデを行う。	1/3 程度 残存
61	瓶頸壺	内)灰色N7 外)灰色N7 ~オリーブ 灰 5GY8/1	堅織	密	口径 5.6 器高 7.1	底部は扁平で体部中央あたりでかるく屈曲する。肩部は斜めに口縁部へ入り、口縁部から上方へのひ、肩部はナデて方形をなす。	底部から体部1/3程度回転ヘラ削り。他、外面と内面にかけてヨコナデを行う。	2/3 残存
62	長頸壺	内)灰白色 N7 ~灰色N6 外)灰白色 ~10Y7/1 灰色N6~ 明赤灰 5R7/1	堅織	密	器高 (13.9)	体部はほぼ球形で底部は平らである。肩部から口縁部は上方へやや外輪気味にのびる。肩部に刺突文をはさんで、2条の沈線を巡らす。	底部から2cm程度上まで回転ヘラ削り。あと体部のほとんど及び内面はヨコナデを行う。肩部と颈部に刺突文を施す。	口縁 部欠 損
63	口縁部	内)灰色 N5 外)灰色 N4	堅織	密	口径 4.05 残存高 1.8	平底またはミニチュアの壺口縁と思われる。外方向に若干内輪気味に端部に至り丸くおさめる。	ヨコナデを行う。	口縁 部のみ 1/4 程度 残存
64	掻瓶	内)明オリ ーブ灰 5GY7/1 外)オリーブ 灰 2.5GY6/1 ~オリーブ 黑 10Y3/2	堅織	密	口径 6.5 器高 16.3	体部両側の耳が鉤形に曲がっていたものと思われる。口頭部は端部に向かってラッパ状に広がっており、端部をナデているため、断面は方形を成す。体部全体に自然物及び窓壁が付着。	前面がヨコナデ。背面は回転ヘラ削りを行う。前面から中心にかけてカキ目を施す。	完形
65	搗瓶	内外)白色 10Y7/1	堅織	密	残存高 18.0 最大径 14.9	口縁部は外傾して上がる。肩部には半円形の粘土板を窓状に貼り付けた。	背面は回転ヘラ削り、前面はヨコナデを行いカキ目を施す。	口縁 部欠 損

No	器種	色調	焼成	胎土	法量(cm)	形態	技法	備考
66	壺	内)灰白色 2.5GY8/1 外)灰白色 N7~2.5 GY	堅焼	青	器高 (24.5) 最大径 23.2	大形で全体に粗雑なつくりである。肩部には環状の把手を貼り付ける。	背面は面輪ヘラ削り、前面はヨコナデを行う。	口縁 端部 欠損
67	壺	内外)灰白色 10Y7/1	堅焼	青	口径 (22.9) 器高 (11.6)	頂部は外反してのび、端部は側方をナデ、方形を呈する。	体部外面は平行叩きの後カキ目、内面は同心円叩きを施す。	体部 下半 欠損
68	壺	内外)灰白色 10Y7/1	堅焼	青	口径 (20.9) 器高 (26.4)	頂部は外反してのび、端部は側方をナデ、方形を呈する。	体部外面は平行叩きの後カキ目、内面は同心円叩きを施す。	体部 下半 欠損
69	壺	内)灰白色 10Y7/1 外)灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/2	堅焼	青	口径 (19.2) 器高 (44.7) 腹径 (44.5)	口縁部は外反して、端部を内方につまみ出し、側面と内面をナデておさめる。	体部外面は平行叩きの後カキ目を施す。内面は同心円のあて具による粗い叩きを行う。	部分的に 欠損

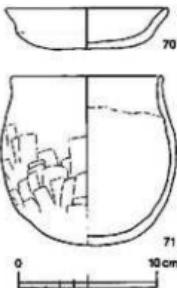
(2) 土師器

図70

復原口径11.5cm、器高2.9cmを測り、小皿としては大きいほうであろう。底部は指押えの痕跡が残り、口縁部はヨコナデを行なう。全体的に厚手で、ナデ整形である。体部にナデによる棱線が作られている。色調は淡く、胎土は緻密である。

図71

いわゆる広口壺といわれる形態で、器高12.05cm、腹径12.5cmを測る。体部は手捏ねをおこない、口縁部はヨコナデにより整える。また体部の外面には下方向へ、ヘラ状工具によるナデを施す。



第124図
土師器実測図

第7表 3号墳土師器観察表

No	器種	色調	焼成	胎土	法量(cm)	形態	技法	備考
70	杯	内外)淡青 5YR	良好	良好	口径 (11.5) 器高 2.9	小型である。底部は丸く口縁部はナデにより縁をもつ。	底部指押え。口縁部はヨコナデを行う。	口縁 部 1/3 残存
71	壺	内外)褐色 2.5YR6/6	良好	砂粒を含む。	口径 10.7 器高 12.05	いわゆる広口壺である。ほぼ球形を呈し、口縁部はナデにより整える。	全般的に指押えで、口縁部はヨコナデを行う。体部は下方へヘラ状工具によるナデを施す。	元形

(3) 鉄器

鉄鎌(1~17)

3号墳からは合計17点の鎌が出土した。(1)を除く16点は全て石室内からの出土である。完存するものは(1)のみで、全長11.2cm、鎌身長2.9cm、範被長3.9cmを測る。また茎部にはわずかながら木質が残っている。鎌身はほぼ正三角形を呈し、片丸造りである。(2)は鎌身の幅が底辺で3.3cmと最も広く、次いで徐々に狭くなり鍔状の範被が茎部との界につく。(3)~(5)の鎌身は長三角形を呈するが、特に(3)(4)の鎌身の底辺は若干、脇挟を意識したものと考えられる。また(3)はその先端を「重抜り」状につくった可能性もある。

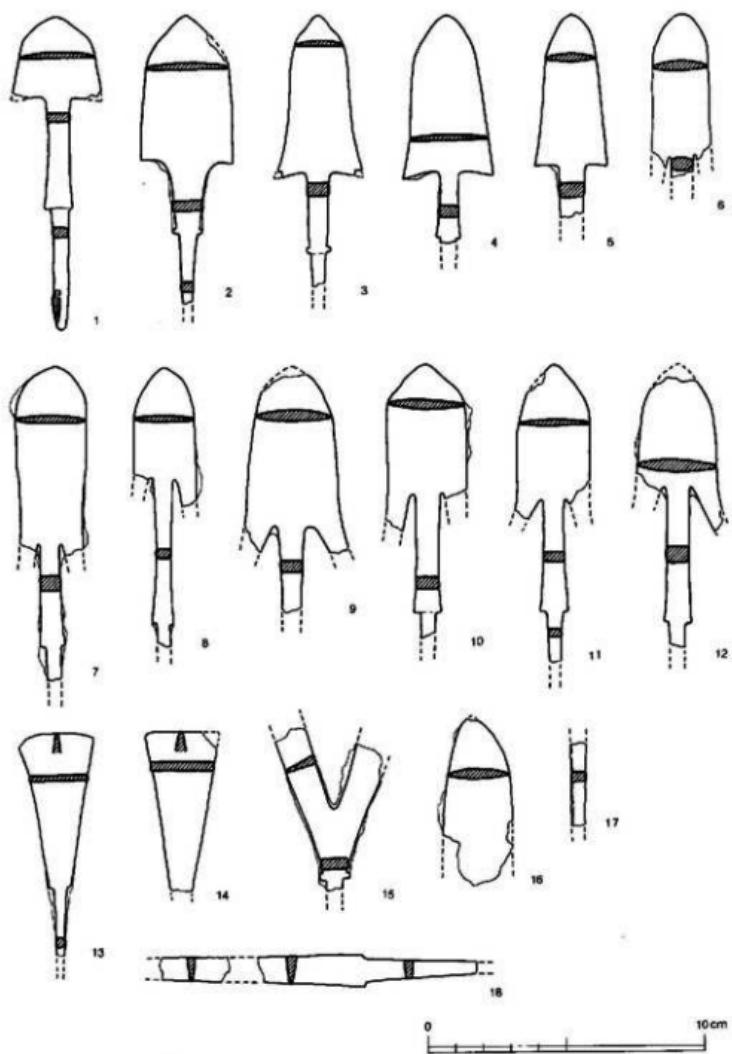
(6)~(12)は脇挟式の鎌である。いずれも逆刃部分を欠損している。(6)(7)は比較的長い鎌身をもつ。特に(7)は鎌身長(6.4cm)が範被長(3.7cm)よりも長く、その最大幅は鎌身部の先端近くにある。(8)は範被長が5.2cmと最も長く、やや小型の鎌身部をもつ。(13)~(16)の範被長はほぼ同じで、鎌身の形態も類似すると思われる。

(13)~(16)は上述の鎌と違い、鋒を欠くものである。(13)は鎌身の最大幅が上辺にあり、茎部へと徐々に狭くなる。平造りであるが、刃は上端のみに認められる。(15)は鎌身が二叉に分かれしており、刃は外側に造り出されている。鍔状の範被も残存する。以上の3点は共に、敵の体内に

第8表 3号墳鉄器計測表

No	種類	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	形 式	備考
1	鉄鎌	床面東壁沿い	11.2	3.2	0.4	8.08	範被広鋒片丸造三角形式	木質残存
2	鉄鎌	石室内上層	10.3	3.3	0.4	16.68	範被狭鋒片丸造三角形式	
3	鉄鎌	石室内敷石間	9.7	3.1	0.45	12.19	範被狭鋒片丸造三角形式	
4	鉄鎌	石室内敷石下	8.1	3.3	0.4	10.62	範被狭鋒片丸造三角形式	
5	鉄鎌	床面奥壁面塗隅	7.25	2.6	0.5	10.61	狭鋒両丸造三角形式	
6	鉄鎌	石室内	5.8	2.1	0.55	9.23	両丸造脇扶柳葉式	
7	鉄鎌	石室内上層堆土中	11.2	2.5	0.55	16.78	範被両丸造脇扶柳葉式	
8	鉄鎌	石室外流土	10.0	2.25	0.3	8.43	範被両丸造脇扶柳葉式	
9	鉄鎌	石室内敷石下	8.5	3.6	0.4	18.9	両丸造脇扶柳葉式	
10	鉄鎌	周溝内	9.8	2.8	0.5	19.46	範被両丸造脇扶柳葉式	
11	鉄鎌	石室内	10.6	2.65	0.35	10.53	範被両丸造脇扶柳葉式	
12	鉄鎌	石室外流土	9.6	2.9	0.6	16.64	範被両丸造脇扶柳葉式	
13	鉄鎌	石室内上層	8.0	2.7	0.3	8.67	方頭広根矛箭式	
14	鉄鎌	石室内敷石下	5.7	2.5	0.4	13.35	方頭広根矛箭式	
15	鉄鎌	石室内上層	5.8	3.3	0.45	10.22	雁股式	
16	鉄鎌	石室外流土	5.95	2.5	0.4	—		
17	鉄鎌	石室内上層	2.9	0.5	0.35	—		
18	刀子	石室内上層	2.5	0.9	0.25	1.06		
			7.95	1.2	0.4	4.64		

*鎌の形式分類は後藤守一「上古時代鐵鎌の年代研究」『日本古代文化研究』1942による。

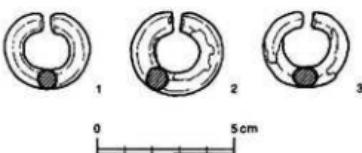


第125図 3号墳鉄器実測図

深く突き刺さることを目的とした鋒をもつ(1)～(2)の鉄と違い、むしろより広く大きな傷を負わせることを目的につくられたと考えられる。(10)は鎌身の一部、(17)は茎の一部分である。

刀子(8)

石室内より2点出土した。出土状態から、接合はできないが同一の個体であろう。残存する刀部長6.2cm、最大幅1.2cm、茎部残存長4.0cm、棟幅0.3～0.4cmを測る。両側造りの、やや小振りの刀子である。



第126図 3号墳耳環実測図

第9表 3号墳耳環計測表

No	種類	出土位置	最大径(cm)	最小径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	耳環	南側墳丘斜面 暗黄褐色土中	31.0	27.0	7.0	19.15	
2	耳環	石室内上層	33.5	30.0	8.0	19.22	銀箔のこる
3	耳環	床面	31.0	27.0	7.0	27.86	

(4) 耳環(1～3)

耳環は3点出土している。(1)は墳丘斜面より(2)(3)は石室内より出土している。3点とも鋳造が激しく、銅芯であるが笛の残存状態は非常に悪い。(2)にわずかながら銀箔を観察できる程度である。また対完形も不明である。

第10表 3号墳玉計測表

No	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考	◎
4	4.00	2.40	1.15	0.047	不透明な黄色	ガラス製	④

第127図
玉実測図

(5) ガラス小玉

石室内の敷石間より1点のみ出土した。径は4.0mm、重量は0.047gを測る。色は不透明な黄色を呈する。

6. 小結

半田山3号墳は、横穴式石室を主体とする径10m程度の円墳である。周囲には幅1.8m、深さ0.5mの周濠が廻る。立地は、尾根上斜面に位置し、眼下には揖西平野か眺望出来る見晴しの良い所に位置する。現況では、墳丘、石室とも大きく破壊され、僅かに実室と側室の一部の基底石を残すのみであった。

しかし、石室の保存状態が悪いわりには、床面の保存状態は比較的良好で、遺物の出土量は

総数71点を数える土器の他、鉄鎌17点、刀子1点、耳環3点、ガラス小玉1点の計93点の遺物が出土している。

遺物の出土状況は、玄室部、玄門東側、狭道部付近には集中して認められた。出土土器は土師器が2点含まれる他は全て須恵器であった。須恵器の内訳は、杯蓋が30点、杯身が26点、高杯が2点、短頸壺が3点、長頸壺が1点、提瓶が3点、甕が3点である。時期的には6世紀後半から7世紀前半のものと考えられる。

第2節 半田山7号墳の調査

1. 立地

1~6号墓（墳）が尾根上に位置しているのに対して、7号墳は山腹斜面に立地している。半田山は北西から南東方向に主軸を持つ独立丘陵である。幅の狭い細長い丘陵であるが、小さな谷が幾つか見られる。2号墓の位置する部分と北西部の谷が顕著な谷である。2号墓の位置する鞍部南側の谷の西側斜面に7号墳は立地している。東向きの緩斜面を選地している。尾根から僅かに緩やかな斜面があり、3~5mで急斜面となる。その後、比較的緩やかな斜面となり、山根近くで再びやや急斜面となる。急斜面から緩斜面になる上部の地形変換線下に7号墳は位置している。

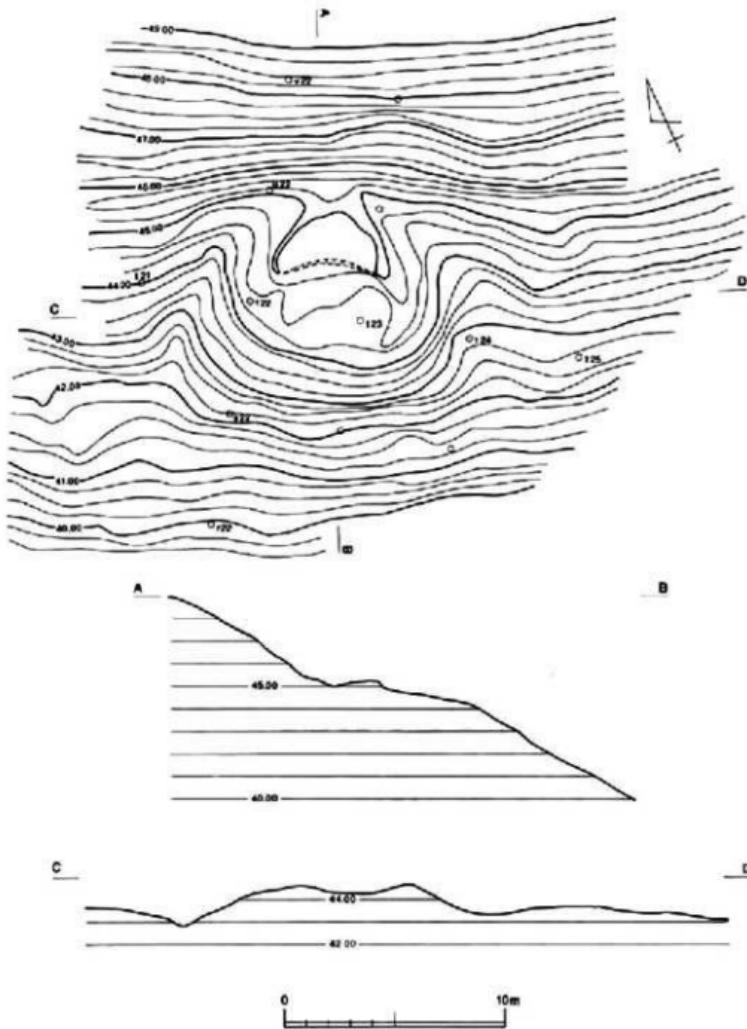
尾根南斜面に立地していることから、北側の眺望は遮られている。半田山裾で遮られる南東方向は揖保川を経て中臣山・揖保平野が眼下に認められる。遠望出来る範囲は、半田山裾から養久山東端までを可視範囲とする。同時期の遺跡としては、中臣山古墳群・袋尻渓谷・梅現山古墳群が遠望出来る。また、北西方向も視界が開けており、養久乙城山で遮られる揖西平野北半が見られ、池の谷墳墓群を見る事ができる。山腹に立地することから、尾根上の3号墳に比べて可視範囲は狭く、極めて限られている。

2. 外形

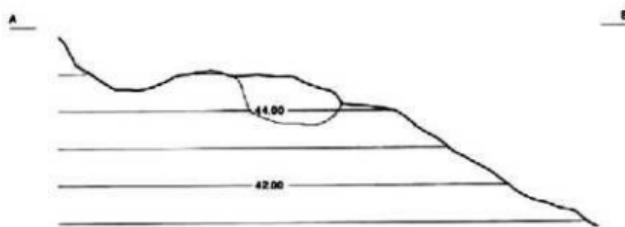
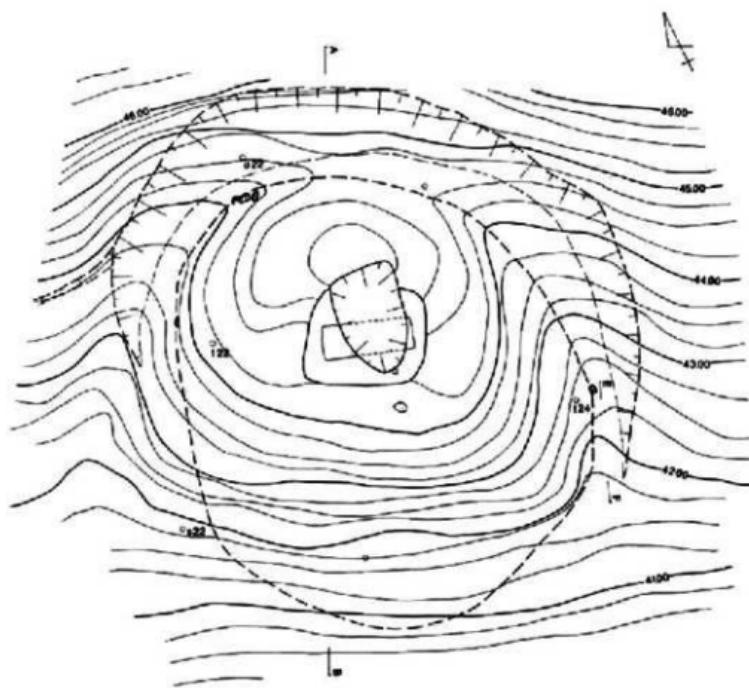
調査前の状況でも墳丘は明瞭であった。概略的には、墳裾も確認出来るほど残存状態は良好である。斜面上に立地することから、回るコンターラインは1本だけである。ただ、墳丘内と思われる部分のコンターラインはほとんど全て影響を受けている。42.25mから45.25mの13本のラインが変化している。斜面の標高の高い部分のみ後世の影響を受けて流失しているが、平面プランにおいては影響を受けていないものと思われる。

調査を行った結果、標高の高い北側には古墳を画する掘り割りが築かれているため、外形はより際立っている。北側に円周の2分の1以上の弧状に掘り割りが見られる。標高の高い部分が最も広く、幅2.5m、深さ0.6mを測る。そこから標高の低い方へ自然消滅的に消失している。墳丘測量図では2本のコンターラインが墳頂部分を囲っている。他のコンターラインも1周回ってはいないものの、大きく内側に入り込んでおり、墳丘は明瞭である。斜面は西側の方が若干高くなっている。地形とは関係なく、裾底面を揃えようとする意図からか、西側の方が掘り割りは深くなっている。

墳形は、やや重みはあるが、ほぼ円形である。約12mの円墳である。僅かに南北方向が長くなってしまっており、13m近くを測る。調査段階での墳頂部は45.15mを測り、墳裾の最も低い部分は39.80

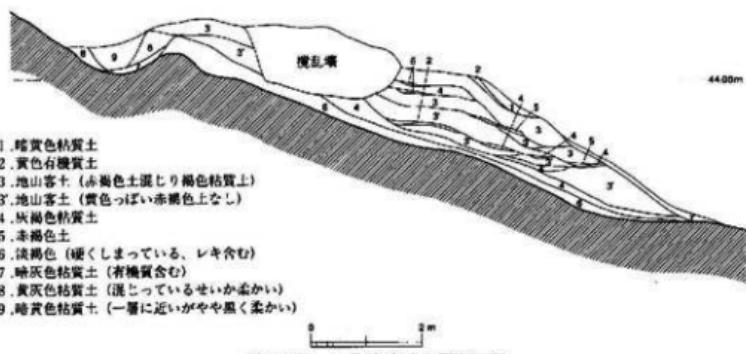


第126図 7号墳地形測量図



0 5m

第128図 7号墳丘測量図



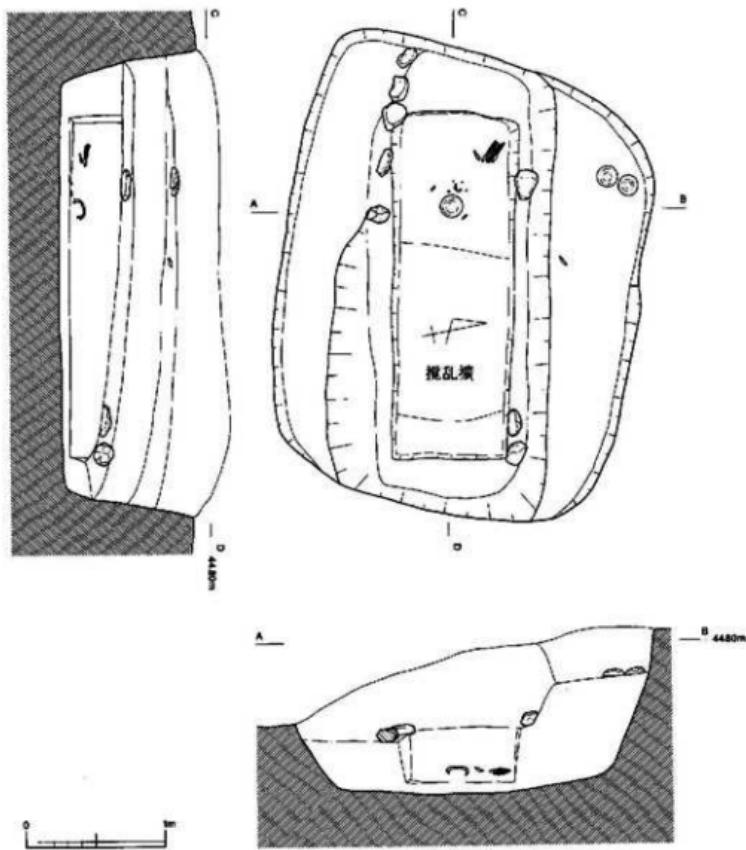
第130図 7号墳墳丘土層断面図

mあり、5.35mの最大比高差がある。標高の高い方の底面は44.55mあり、墳頂部からの比高差は0.6mを測る。実際の数値よりも見掛けの規模の方が大きく感じるのは斜面に立地しているからであろうか。約12mの円墳とは思えない大きさに感じる。

明らかな外部施設はない。だが、古墳を画する掘り割りと墳裾部分に並ぶ角礫は広義な外部施設と言えよう。掘り割りは、前記の通り標高の高い部分半周を三日月状に回るものである。南側には掘り割りが認められないが、自然流失したものかもしれない。掘り割りが消失する南東部分でのみ、掘り割り底面で礫が検出されている。明らかに敷いたものと断定は出来ないが、偶然に集中したものとは思われない。その北側で近接して須恵器壺が出上している。破碎された大型壺と関連のある遺構かと思われる。墳裾部分に見られる角礫は、全体には見られず、部分的に集中している箇所も見られない。そのため、外部列石とは言い難いかもしれない。ただ、墳裾部分に相当していることから墳丘築成には関係したものと思われる。1石や2石置かれて検出しているのは、全体にわたっている。3石並んでいるのは、標高の高い北側壘の南半に限られている。石材は角の取れているものもあるが、全て角礫で地元で採取される石英斑岩である。平面で並んでいるが、積まれている石ではなく、1ヶ所で2石が重なっているだけである。石材の大きさは、人頭大のものが中心である。

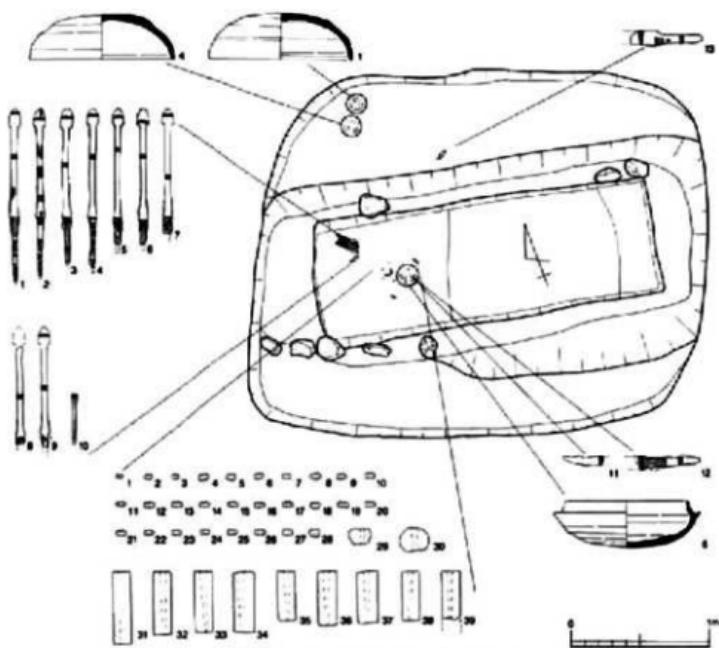
3. 墳丘築成

墳丘築成は、旧地形を利用して行っている。標高の高い部分の掘り割りを掘り下げ、墳丘の平面プランを確定している。円周部分の2分の1に相当する。掘削した土は墳丘土として使用したものと考えられる。高い部分では地山も掘り下げられている。墳丘内側で地山層・淡褐色土が上がっていることから明らかであり、最大0.7m下げていることになる。淡褐色土とその上



第131図 7号墳主体部実測図

層の灰褐色粘質土は自然堆積層であろう。ただ、その面での旧表土は認められなかった。その2層の上層は墳丘築成土となっていることから、この面から墳丘を構築したのは確実である。墳裾部分の掘削を行ったのち、墳丘築成土としてその掘削土を利用している。同一層は墳丘中心部にも認められるが、主に掘削土は墳裾部分に利用されたものであろう。その上は、地山客土と灰褐色粘質土を原則的に交互に積んでいる。標高の低い部分は層が細かく、高い部分は層が大きくなっている。墳丘築成土を切って墓壙が掘りこまれていることから、墳丘築成後に主



第132図 1号墳主体部遺物出土状態

体部を構築しているようである。

4. 主体部

主体部は木棺直葬である。墳丘が高いことから、他の内部主体を予想したが、木棺直葬の單独埋葬であった。主体部は墳丘構築後に造営している。墳頂部に擾乱層（盜掘層）があり、主体部の半数近くは損壊を受けている。そのため、棺の検出は上面では困難で、比較的下面で確実に検出した。

主体部は1基だけで、1墳1主体である。大型の木棺で、墓室の規模は長さ3.2m、幅2.6mの隅円長方形で僅かに歪んでいる。北辺は2.8m、南辺2.95m、西辺は2.4m、東辺は2.0mで、主軸と直交方向が最大値となっている。深さの最大値は1.1mを測る。墳頂部は余り大きな平坦面は持たず、平坦面を作らずに墓室を掘り下げる様に思われる。墳頂上面全体を墓室とする大型のものである。墓室断面は、短辺はU字形を、長辺は箱形を呈している。

棺はほぼ中央に置かれている。長さ2.5m、幅0.9mの箱形木棺である。中央から東辺近くの1.2m、は擾乱壙のため残っていない。西短辺は幅0.9mを測るが、東短辺は幅0.8mと僅かながら幅を狭めている。擾乱壙以外の部分では棺周辺に角礫が入れられているが、棺押さえの石と思われる。墓壙埋土中にも礫は混入している。棺は、南側では擾乱壙の影響を受けているため、非常に低い面でしか残存部が認められない。東半は擾乱されている。検出が困難を極めたため、2段墓壙のように下げているが、棺を埋める際の方法によるものである。棺周辺を棺押さえの石材を混ぜて埋土としており、他の部分と上が異なっている。北側で面をなすところがある。墓壙内であることと、須恵器・鉄器が出土していることからも、棺の上面と考えられる。この面を棺上とすれば、棺の高さは0.7mとなる。

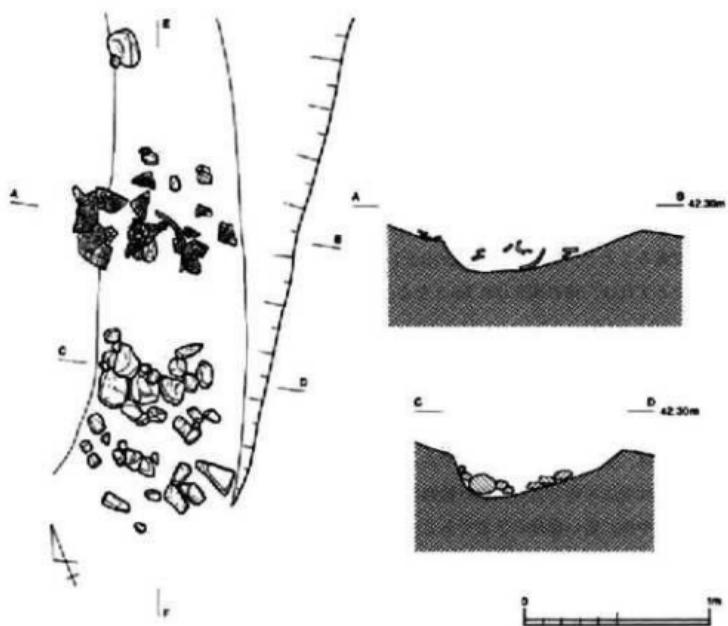
5. 遺物出土状態

遺物は、主体部内と填埋に分けられる。主体部はさらに棺内遺物と棺上遺物に分けられる。種別は、須恵器・鉄器・玉類である。

棺内遺物は、須恵器・鉄器・玉類である。棺の半分以上を擾乱壙によって欠いているので、全体の出土状況は不明である。狭い範囲の中ではあるが、出土位置から2つに分けられる。西側小口部と中央に近い部分の2者である。前者は、北西コーナー部に近いところで、鉄鎌が1塊の状態で出土している。切先を内側に向けて出土している。同じタイプの鉄鎌が10本で、完全な形を残すものはない。茎基部を欠いている。全て木質が残っていることから、装着状態で副葬されたかもしれない。装着状態で副葬されたものなら、出土位置との間に整合性がなくなる。その場合、棺に立てかけて副葬したことになろう。棺中央部近くでは、須恵器と玉類が出土している。須恵器は杯身1点で、口縁部を下に向けた倒置の状態で出土している。その周辺から玉類が出土している。杯身の西側（棺小口側）に散乱しており、碧玉製管玉9個と水晶小玉1個、ガラス玉1個、ガラス小玉28個の計39個の玉が出土している。

棺上遺物は、棺北側に限られている。南側は擾乱によって棺上推定部が残存していないためであるが、両小口部には副葬されていなかったものと思われる。北側の遺物は、須恵器と鉄器である。須恵器は杯蓋2個で並んで置かれている。墓壙の北西コーナーに近い位置に口縁部を下にして出土している。鉄器は刀子跡で擾乱壙によって出土位置が動かされている可能性がある。調査時では、茎を内側に向けている。跡は残っていない。また、擾乱壙内から2点の刀子跡が出土している。刀子跡は接合はしないが、跡と同一個体かもしれない。2点の刀子は擾乱によって移動したもので棺上遺物として副葬されたものと考えられる。

棺外で出土している遺物で原位置を保っているのは、填埋から出土している須恵器である。南東の填埋掘り割りが消失する部分で、中型の壺が出土している。置かれた状態ではなく、意図的に割られた状況である。出土位置が標高の低い部分に当たり、谷側から登って来る最初の



第133図 7号墳東側境柵遺物出土状態

地点に相当する。基道の復原を行えば、この位置が基道になるものと推定される。標高の低い部分にだけ認められる境柵底面に施される理とも関連があろうかと思われる。

他の出土遺物は、原位置を保っておらず、擾乱や自然の営力によって移動したものと考えられる。

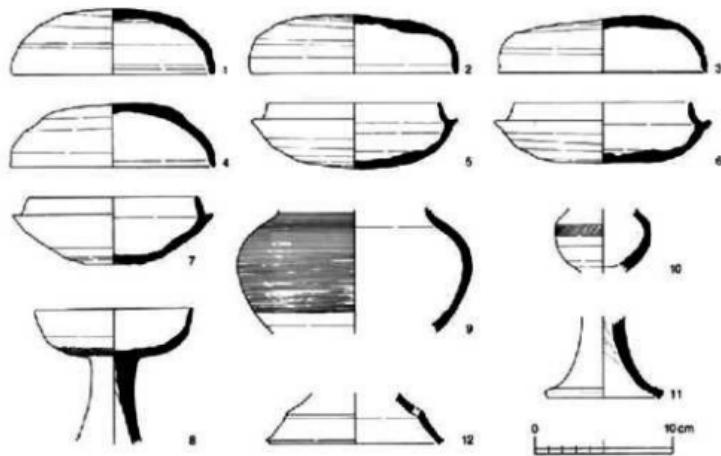
6. 出土遺物

3号墳に比べて出土点数は少なく、固化できたもので10点余りにすぎない。古墳時代にあたるものは、杯蓋・杯身・高杯・壺・短頸壺・甕があり、全て須恵器である。そのほかに後世の遺物にあたるであろう須恵器碗が1点ある。

(1) 須恵器

杯蓋(1~4)

(1~3)は天井部と口縁部との間に沈線を巡らしており、口縁端部の内面に細い凹線をもつ天井部は回転ヘラ削り、口縁部から内面にかけてヨコナデを行なう。(3)は天井部の内面に花



第134図 7号埴須恵器実測図(1)

びら状に同心円のあて具による痕跡を残す。

(4)は天井部外面は磨滅しているが、回転ヘラ削りの痕跡がみられる。天井部内面には一方方向の仕上げナデを施す。

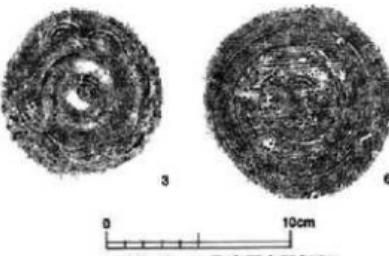
杯身(5～7)

底部は回転ヘラ削り、口縁部及び内面はヨコナデを行なう。(5・6)は立ち上がりが1.5cmとやや高めで上方へ外反気味に口縁端部に至り、(6)は口縁端部を内方向につまみ出す。また(6)の底部外面にはヘラ状工具による平行線を施す。

(7)の底面外面の回転ヘラ削りはやや粗雑である。口縁部の受け部はせまく、立ち上がりは直線的に内傾する。

高杯(8)

脚部下半が欠損している。杯部は丸みをもっており、明瞭な後線は持たない。底部外面は回転ヘラ削りで4条の凹線が逆時計回りに施されている。4条の凹線の上に斜線文を施し、口縁部から内面にかけてヨコナデを行なう。脚部はヨコナデで、破損部近くの脚部中ほどにめぐらしたと思われる沈線がみられる。脚部と杯部は接合しており、脚部内面下部はヨコナデで仕上げているが、上部は



第135図 7号埴須恵器拓影



第136図
高杯の文様

成形したままである。

短頸壺(9)

残存部が少なく、口縁部は欠損している。体部は全体に丸い印象を与える。底部は回転ヘラ削り、体部から内面にかけてヨコナデを行なう。体部外面にカキ目を施す。

壺(10)

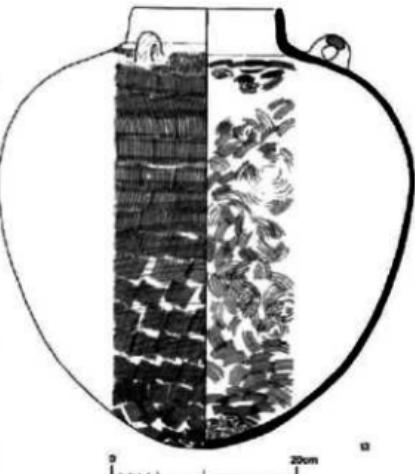
復原腹径は6.8cmでミニチュアのものといえよう。口縁部は付け根部分から破損しており頸部の形態は不明であるが、外方向にのびるであろう痕跡が残る。体部外面の中ほどに刻目を施す。

脚部(11・12)

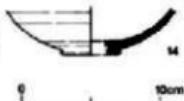
010は底部の復原径8.0cmを測る。破損部は脚部のほぼ上端と思われ残存高5.8cmで下方向に広がり底部下端の側方をナデる。なお壺(10)と脚部010は粘土、焼成ともに状態が一致しており、出土位置も西側壇場と同じであり、同一個体であることが推測される。この形態はいわゆる台付長頸壺といわれるものであるが脚部にくらべて体部が小さくアンバランスである。010は残存高3.6cm程度で少ない。下へ反り気味に下りて稜をもって1条の沈線を巡らし更に内凹気味に端部に至る。稜線のうえに円孔透かしの一部を残す。この形態は台付壺の脚部と思われる。

三耳壺(13)

全高47.1cm、腹径45.0cmを測る。口径は15.6cmで上方向には直立



第137図 7号埋須恵器実測図(2)



第138図 後世の土器実測図

第11表 7号出土須恵器概観表

No.	断面	色調	焼成	胎土	法量(cm)	形 貌	社 法	法量の()数字は残存高・復原径	
1	蓋	内)灰白色 5GY8/1 外)灰白色 7.5Y8/2 ~明緑灰色 7.5GY7/1	良	7mm大の石 粒含む。	口徑 14.3 底高 4.7	全体に丸く、天井部と口縁部との間に1条の沈線を巡らす。口縁部の内面には細い凹線をもつ。	天井部1/2程度回転ヘラ削り、口から口縁部及内面はヨコナデを行う。	ほぼ 完形	

No.	器種	色調	焼成	胎土	法量(cm)	形態	技法	備考
2	壺	内)灰白色 外)灰白色 N8 -灰色 N5	堅織	長石及び8 mm大の石粒 を含む。	口径 14.6 器高 4.2	やや扁平である。天井部と口縁 部との間に綫をもって沈線を成す。 端部は内方をナデて三角形 を呈する。	天井部は回転ヘラ削り、口縁部 から内面にかけてヨコナデを行 なう。	口縁 部約 1/2 残存
3	壺	内)灰色N6 外)明緑灰 7.5GY7/1 -灰色N6	良	白い砂粒含 む。	口径 15.0 器高 4.0	全体に扁平である。天井部から 1cm程度下りたところに沈線を 巡らす。	天井部は回転ヘラ削り、沈線の 上1cmから口縁部をして内面に かけてヨコナデを行なう。天井 部内面に同心円文叩きを施す。	ほぼ 完形
4	壺	内)灰白色 7.5Y8/2 外)淡黄色 7.5Y8/3 -灰色 5Y7/1	やや 軟質	石英の小石 粒を含む。	口径 14.6 器高 4.5	天井部はほぼ平らで丸みをもつ て口縁をなす。	天井部には回転ヘラ削りの痕跡 を残す。口縁部及内面はヨコナ デを行なう。天井部内面には一方 方向の仕上げナデを行なう。	ほぼ 完形
5	杯身	内)灰色 N4 外)灰色 N7	良好	長石の石粒 含む。	口径 12.2 器高 4.7	体部は丸みをおびる。立ち上 がりは1.5cm程度で外反氣味にの びて端部を内方向につまみ出す。	底部から1/2程度回転ヘラ削り、 口縁部から内面にかけてヨコナ デを行う。	完形
6	杯身	内)黄褐色 2.5Y5/4 外)明青灰 10BG7/1 -灰色N4	良好	密	口径 12.6 器高 4.3	底部は平らで体部は丸みを帯び る。立ち上がりは内方向に外反 氣味に端部に至る。	底部から口縁近くまで回転ヘラ 削り、口縁部及び内面はヨコナ デを行なう。底部外面にはヘラ状 工具による平行線を認める。	ほぼ 完形
7	杯身	内)青灰色 5BG6/1 外)明オリ -ブ灰色 5GY7/1	良	長石の小石 粒含む。	口径 (12.0) 器高 (4.0)	底部から外方向には直真に開 き体部を成す。立ち上がりは直 線的に上方に向かって伸びる。	底部の回転ヘラ削りは粗く口縁 部から内面にかけてヨコナデを行 なう。	体部 約 1/4 残存
8	高杯	内)明緑灰 7.5GY7/1 -灰色 N3 外)灰白色 2.5GY8/1 -灰色 N4	堅織	密	口径 11.3 器高 (9.4)	脚部は長脚となる。杯部は半円 球を成す。杯部の底部に2条の 凹線をめぐらす。	杯部の底部は回転ヘラ削り、口 縁部及び内面はヨコナデを行なう。 底部には四線の間に斜線文を施 す。	脚部 下半 欠損
9	短頸 壺	内外)灰白色 N7	良好	チャート・ 長石の小石 粒含む。	器高 (2.2) 腹径 4.15	やや大きめである。全体に丸い 印象を与える。	底部から体部下端近くは回転ヘ ラ削り、体部及び内面にかけて ヨコナデを行なう。体部外面全体 的にカキ目を施す。	体部 のみ 残存
10	壺	内外)明オ リーブ灰 5GY7/1 -黒N2	堅織	密	器高 (4.7) 腹径 (6.85)	体部は丸い感じで、頸部は破損 しているが、外方向にのびてあ ろう痕跡を残す。	体部は下から1/3程度回転ヘラ 削り、ほか体部と内面はヨコナ デを行なう。体部中ほどに刻目を 施す。	若干 残存

No.	器種	色調	焼成	培土	底量(cm)	形態	技法	備考
11	脚部	内)灰色N5 外)明オリ 一ノ灰 5GYY7/1	堅練	密	器高 (5.8) 底径 (8.5)	脚部は下方向に広がり、端部側方をナゲて方形を呈する。	内面にしばり痕を認める。	底部 1/3 程度 残存
12	脚部	内)灰色N5 外)暗紫灰 5P4/1 一灰色 N5	良	密	器高 (3.6) 底径 (12.1)	下方へそり気味におりて1条の沈腹をめぐらすことにより腰をして底部下端にいたる。較練の上に円孔通しの一部を認める。	全体にヨコナデ。	脚部 のみ 下半 残存
13	三耳壺	内)灰白色 NB 一淡黄色 5Y8/4 外)淡黄色 5Y8/4 一暗オリーブ 7.5Y4/3	堅練	密	器高 (47.1) 口径 (15.6) 底径 (45.0)	口部は高さ4cmではば直立して肩部丸くおさめる。肩部には3方に環状の把手を貼り付ける。	体部外面は平行叩きの後、カキ目を施す。内面は同心円文を施す。	口部 部のみ 程度 残存

して端部に至る。肩部には三方に環状の把手をもつ。体部外面は平行叩きの後カキ目、内面は同心円文を施す。

(2) 後世の土器

椀

残存高は3.3cmで口縁端部近くは欠損する。復原の底径は4.0cmを測る。色調は内・外ともに灰色に近い黄灰色で焼成は良好といえよう。底部は糸切り底で体部は水挽き痕がよく残っている。東播系須恵器の可能性が高い。

(3) 鉄器

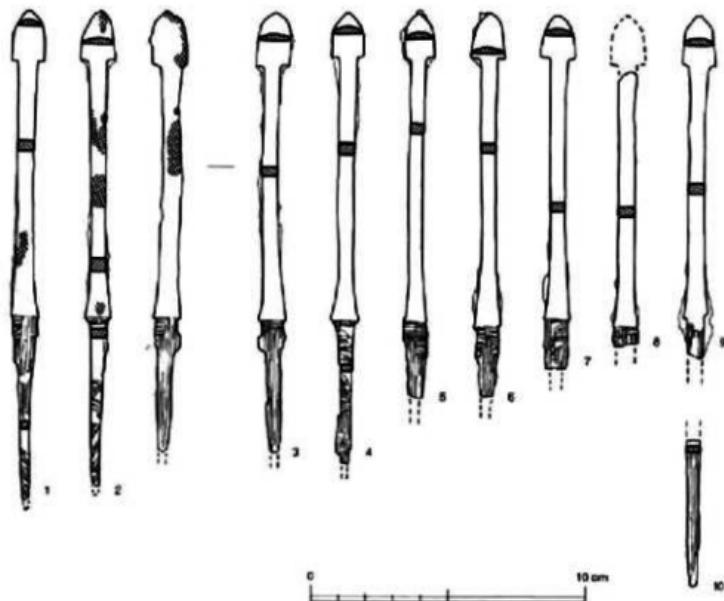
鉄鎌(1~10)

7号墳からは10点の鎌が出土した。全て棺内北西隅から一括して出土している。完存するものは無いが、(1)(2)が最もそれに近い状態であろう。(1)~(3)の鎌身部および笠被部に織物片が付着している。これは、副葬時に9本の鎌を一束にまとめて、その上から織物で包んでいたと考えられる。織物の種類については、織目の細かさから紺帛であると思われる。

9本とも同形式の鎌で、鎌身長1.6~1.9cm、鎌身幅1.1~1.3cm、笠被長9.0~9.5cmを測る。鎌身は片丸造りで、脇抉をもたない三角形を呈する。革部には10点全てに木質が残っており、柄を装着した状態で副葬されていたことを示す。

小型で狭鋒の鎌身と、長い笠被部をもつこのタイプの鎌は、より遠く、より正確に飛び、敵の体内に深く刺さることを目的とした実戦的な鎌の形態である。

刀子(11~13)



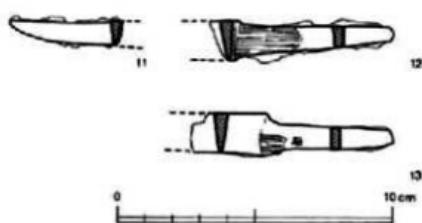
第138図 7号墳鉄器実測図(1)

7号墳からは3点出土している。
01002は出土状況からみて同一個体と思われるが、接合はできなかった。
01003は刀部のみ、02004は間部及び茎部のみ残存している。02003は共に茎部に木質が残っており、柄が装着されていたことがうかがえる。間の形態は木質のため明瞭ではないが、いずれも両開造りであろう。

(4) 玉(1~39)

7号墳からは総数39点が出土している。全て棺内より一括して出土した。内訳は、ガラス小玉28点、管玉9点、ガラス玉1点、水晶玉1点である。

ガラス小玉(1)~(3)は、特に残りの25点に比べて径が2.6mm~3.1mmと小型で、色も透明な緑色



第139図 7号墳鉄器実測図(2)

第12表 7号墳出土鉄器計測表

No	種類	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	形 式	備 考
1	鉄鎌	棺内	17.4	1.25	0.4	11.17	籠被状鋸片丸造三角形式	布付着木質残存
2	鉄鎌	棺内	16.9	1.3	0.5	10.57	籠被状鋸片丸造二角形式	布付着木質残存
3	鉄鎌	棺内	15.7	1.2	0.35	11.71	籠被状鋸片丸造三角形式	木質残存
4	鉄鎌	棺内	16.1	1.2	0.4	10.47	籠被状鋸片丸造三角形式	木質残存
5	鉄鎌	棺内	13.8	1.1	0.35	8.75	籠被状鋸片丸造三角形式	木質残存
6	鉄鎌	棺内	13.7	1.25	0.35	10.28	籠被状鋸片丸造三角形式	木質残存
7	鉄鎌	棺内	12.6	1.3	0.35	9.17	籠被状鋸片丸造二角形式	木質残存
8	鉄鎌	棺内	10.15	1.0	0.3	6.72	籠被状鋸片丸造二角形式	木質残存
9	鉄鎌	棺内	12.2	1.2	0.4	9.92	籠被状鋸片丸造三角形式	木質残存
10	鉄鎌	棺内	5.2	0.5	0.2	1.58		木質残存
11	刀子	棺内	4.1	0.8	0.35	3.11		
12	刀子	棺内	6.65	1.5	0.45	8.92		木質残存
13	刀子	棺外	7.3	1.5	0.5	8.27		木質残存

*鎌の形式分類は後藤守一「上古代鐵器の年代研究」『日本古代文化研究』1942による。

を呈する。(4)～(6)は、大きさ、重量ともほんかわりなく、色はやや暗めの青緑色である。玉の内部に孔と並列して気泡がのびていることから、細い管をまず作り、それを切り離す方法で製作されたとみられる。

(7)はガラス玉であるが、表面の剥離が激しく原形をとどめていない。色は濃い紺色を呈している。

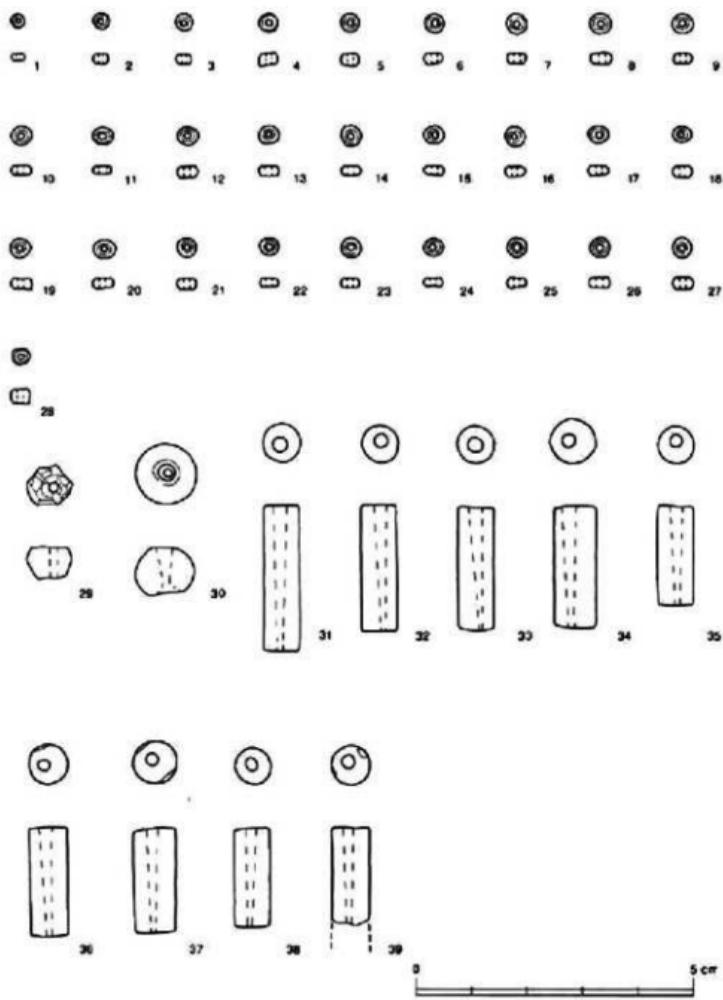
水晶玉(8)は1点のみ出土した。表面はやや荒れているが、現存状態はよい。穿孔は一方から施されている。

管玉(9)～(13)は、(7)を除いて完存している。全て灰色がかかった緑色の碧玉製である。穿孔方向は、X線透過写真からみて、一方方向から穿たれたことがわかる。断面はほぼ円形を呈し、丁寧な研磨が施されている。また、側面両端は、研磨のために丸味をおびている。

以上の玉類は、出土状況からみて、首飾りであったことがうかがえる。

7. 小結

7号墳は、半田山山腹に立地する後期古墳である。南向きの緩斜面に位置していることから北側への視界は遮られている。南西方向も養久山によって遠望は出来ない。東西の2方向の視



第141圖 7號玉佩實測圖

第13表 7号墳出土玉類計測表

No.	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
1	2.60	1.45		0.012	うすい紺色	ガラス製
2	3.00	2.15		0.024	紺色	"
3	3.10	2.00		0.025	うすい紺色	"
4	3.70	2.25		0.031	暗い青緑色	"
5	3.65	2.10		0.040	"	"
6	3.85	2.15		0.042	"	"
7	3.60	2.25		0.038	"	"
8	3.90	2.15		0.038	"	"
9	3.45	2.20		0.037	"	"
10	3.85	2.00		0.037	"	"
11	3.80	1.80		0.026	"	"
12	4.10	2.40		0.044	"	"
13	4.00	2.25		0.039	"	"
14	3.90	1.95		0.037	"	"
15	3.65	1.90		0.031	"	"
16	4.00	2.00		0.038	"	"
17	3.85	2.30		0.039	"	"
18	3.45	2.50		0.036	"	"
19	4.05	2.40		0.043	"	"
20	3.90	2.10		0.037	"	"
21	3.60	2.40		0.035	"	"
22	3.65	1.90		0.029	"	"
23	3.85	1.95		0.037	"	"
24	3.80	1.70		0.028	"	"
25	3.80	2.15		0.034	暗い青緑色	"
26	3.85	2.10		0.038	"	"
27	3.70	2.50		0.041	"	"
28	3.60	2.75		0.046	"	"
29	(7.60) (5.40)			(0.334)	濃い紺色	"
30	10.6	8.00	(+)0.31 (-)0.10	1.258	半透明	水晶製
31	6.95	26.2	0.275 0.14	2.2	灰みの紺色	碧玉製
32	6.75	23.0	0.26 0.145	1.8	"	"
33	6.60	22.15	0.29 0.125	1.75	"	"
34	8.30	21.7	0.24 0.12	2.6	"	"
35	6.75	17.9	0.23 0.12	1.4	"	"
36	7.45	19.7	0.25 0.11	2.0	"	"
37	7.85	19.05	0.21 0.105	2.15	"	"
38	6.60	17.7	0.22 0.13	1.35	"	"
39	7.40	(17.0)	0.235 0.115	(1.45)	"	"

墳群である。また、南方では指保川を通して袋尻浅谷・櫛現山古墳群が眺められる。

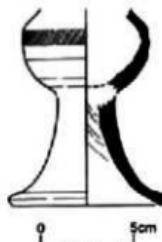
外形は、径12mの円墳で、比高差の最大値は5.35mである。斜面に立地していることから、実際の墳丘以上に大きく感じる。標高の高い部分に埴掘円周の約2分の1掘り割りが認められる。高いところは地山も掘り下げているが、高い部分に限られている。旧地表面から墳丘を構築しているが、土壤化した層や灰層などの整地した面は認められなかった。墳丘の構築は地山土と粘性を持った灰褐色土を互層としている。明瞭な外部施設ではないが、埴掘部分に幾つかの壁が置かれている。多くて3石であるが、墳丘構造に関連しているものと思われる。

主体部は木棺直葬で、1墳1主体である。調査を行った半田山の墳丘墓・古墳が全て複数埋葬であるのに対して、7号墳は単独埋葬である。墳丘構築後に主体部を築いており、墳頂は平坦ではない。比較的大きな墓壙を掘り込んでいる。平行四辺形に近い歪んだ隅円方形のプランで、長さ3.2m、幅2.6m、深さ1.1mを測る。断面の形状は異なっており、短辺はU字形、長辺は箱形をしている。木棺はほぼ中央に位置する箱形木棺で、長さ2.5m、幅0.9m、深さ0.7mを測る。小口の幅が異なることから、一般的に考えて幅の広い西側小口が頭位と推定される。棺中央部に擾乱層（盗掘層）があることから全容はつかめない。墓壙の埋め戻しは棺周囲と他では土質が異なっている。

出土遺物は、棺内遺物・棺上遺物と埴掘出土遺物に分けられる。棺内遺物は中央から東側が擾乱を受けていることから、床面の全体は残っていない。西半だけの出土遺物であるが、須恵器杯身と玉類（碧玉製管玉・ガラス玉・水晶玉）が頭位推定部分から出土している。杯身は上から移動したかもしれない。北西コーナー付近で鉄鏃が一塊りの状態で検出されている。鏃の方向が逆であることから棺側に立て掛けている可能性が高い。全てに木質が残っており、3点には布の付着が見られることから、布に巻いて副葬されたものであろう。棺上遺物は須恵器杯蓋と刀子が出土している。埴掘出土遺物は東側の掘り割りが消失する部分で破碎された須恵器の中型壺が出土している。壺の南側埴掘部分に礫が置かれており、深い間違があるものと思われる。

出土遺物は、須恵器・玉類・鉄器である。鉄器は、鏃・刀子で時期を決定出来る資料ではない。玉類も碧玉製管玉がやや古相を示すかも思われるが、決定資料ではない。時期決定については、残る須恵器の年代に頼らざるを得ない。1墳1主体であることから、埋葬時期は1時期である。新しい時期を考えると、TK43型式の時期が与えられる。埴掘部分出土土器には、その前代の土器もあるが1時期と考えた場合、この時期になろう。

半田山南側斜面では1基しか認められない。後期の古墳ではあるが、3号墳より先行する古墳である。指保川流域の大半の後期古墳が築造



第142図
台付壺復原図

されるのは、3号墳築造の時期で、7号墳は前出する古墳として数少ないものである。さらに古い段階の6世紀前半の古墳は菱久山41・43号墳や長尾タイ山2・3号墳など幾つかの古墳が知られている。これらは、すべて木棺直葬で7号墳と共通している。横穴式石室を内部主体とする古墳は6世紀中葉の西宮山古墳が最初である。7号墳は、西宮山古墳と築造時期においてほとんど差がない古墳と思われ、その主体部の相違は興味を持たれる。菱久山から統く木棺を主体とする葬法の終焉時期の古墳と想定され、揖西平野の南北の古墳築造の在り方を考えるうえに重要な意義を有する古墳と考えられる。



第143図 半田山遠景

第7章

自然科学からの遺物の検討



第7章第1節～第4節は
公開していません

第5節 半田山3・7号墳、片島1号墳出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学 三辻利一

1)はじめに

全国の窯跡出土須恵器を分析した結果、窯跡出土須恵器の化学特性には地域差があること、それも窓の後背地の地質構造に関連した地域差があることが見つけられてから、窯跡出土須恵器の化学特性に対照することによって、遺跡出土須恵器の産地が推定できる可能性がでてきた。一方、須恵器の需要・供給の関係が成立するためには、遺跡（供給先）と窯跡（生産地）が同時期にあったことは当然である。その結果、産地推定は考古学者による年代推定と分析化学者による胎土分析の共同作業によって行われることになった。

产地推定を行う基本的な考え方まずは、地元産と搬入品の須恵器を識別することである。運搬力の非力であった古代社会では地元で須恵器生産が開始されれば、当然、地元産の須恵器が使われていたという考えである。この考えに基づいて、まず、胎土分析によって地元産の須恵器を探し出す作業から始められる。この結果は考古学者による器形観察によって吟味されなければならない。地元産の須恵器の器形観察は地元の考古学者によって詳しく行われているからである。外來品は近距離の窯跡群の須恵器に逐次対応させていく、対応する窯跡群を探す。窯跡群こそ外部へ須恵器を供給するための大量の生産地と考えられるからである。これが現在とされている須恵器产地推定的一般的方法である。

半田山3・7号墳、片島古墳群出土須恵器の胎土分析の結果について報告する。

2)分析結果

兵庫県内の6世紀代の須恵器の伝播状況については未だ十分には把握されていないので、判別分析による定量的な产地推定は行わず、図面上で定性的に推定するに止めた。

図1には、6世紀前半と推定されている片島遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。大阪陶邑領域とともに、対照とする地元窓として九山領域を示してある。そうすると、4点とも九山領域には分布せず、大阪陶邑領域に分布することがわかる。この結果、片島遺跡出土須恵器は大阪陶邑窯群産の可

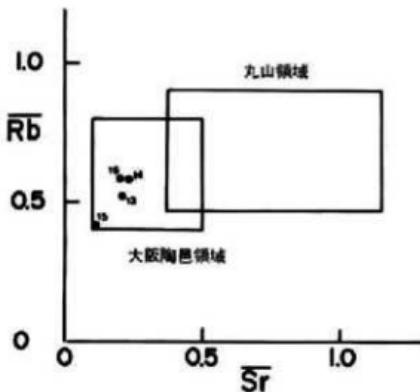
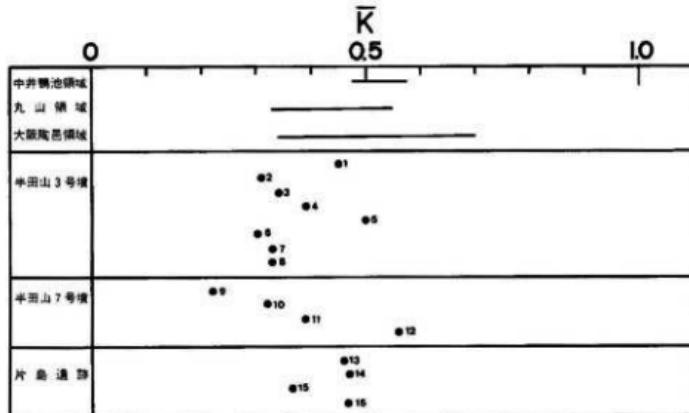
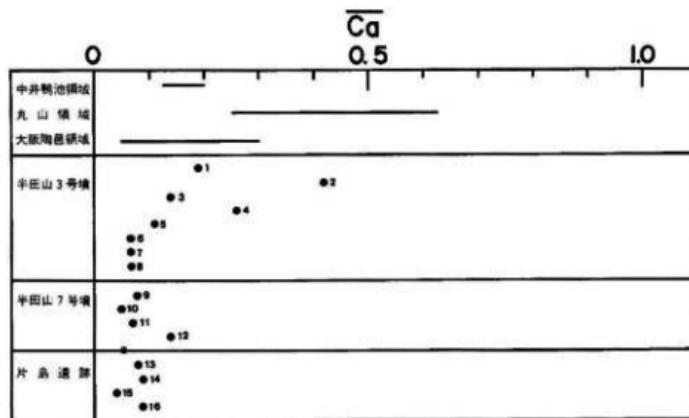


図149 図 片島遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図



第150図 K因子の対比



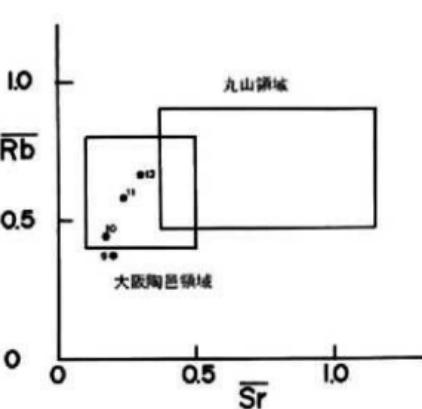
第151図 Ca因子の対比

能性が出て来たので、図2、3にK、Ca因子を対比してみた。これら4点はK、Ca因子でも大阪陶邑領域に対応することがわかる。この結果、片島遺跡出土の4点の須恵器は大阪陶邑産の可能性が大きいと推定された。

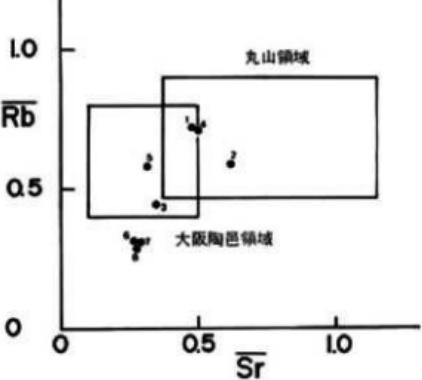
図4には、6世紀後半と推定される半田山7号墳出土須恵器のRb—Sr分布図を示してある。4点とも丸山領域には入らず、大阪陶邑領域に分布する。ただ、No.9のみは大阪陶邑領域も若干ずれる。このことは図2のK因子でも確認される。また、図3のCa因子では4点ともCa量が

少なく大阪陶邑的であることを示す。な
お、地元、中井鶴池窯の須恵器についても分析点数が少ないので、その分布領域は十分把握されていないとは言い難い。今後、分析点数を増やすと、分布領域は若干広がる可能性はある。とは言うものの、中井鶴池窯の須恵器は大阪陶邑的であることは確かである。したがって、半田山7号墳の4点の須恵器は地元、丸山窯跡産ではないことが確かであるが、大阪陶邑産の可能性をもつと共に、地元、中井鶴池窯産の可能性もつことになる。今後、考古学的器形観察でもこの点をチェックする必要がある。

図5には6世紀末と推定される半田山3号墳出土須恵器のRb—Sr分布図を示す。No.2、4の2点は丸山領域に、No.3、5の2点は大阪陶邑領域に分布するが、No.1は丸山領域と大阪陶邑領域が重複する領域に分布する。そして、No.6、7、8の3点はいずれの領域からもずれる。次に、図3をみると、予想どおり、No.2、4の2点はCa因子でも丸山領域に分布し、丸山窯跡産の可能性があることを示す。他の6点はいずれもCa量が少なく、丸山窯産の可能性はない。このうち、No.1、3、5の3点はK、Ca因子で



第152図 半田山7号墳出土須恵器のRb-Sr分布図
なお、地元、中井鶴池窯の須恵器については分析点数が少ないので、その分布領域は十分把握されていないとは言い難い。今後、分析点数を増やすと、分布領域は若干広がる可能性はある。とは言うものの、中井鶴池窯の須恵器は大阪陶邑的であることは確かである。したがって、半田山7号墳の4点の須恵器は地元、丸山窯跡産ではないことが確かであるが、大阪陶邑産の可能性をもつと共に、地元、中井鶴池窯産の可能性もつことになる。今後、考古学的器形観察でもこの点をチェックする必要がある。



第153図 半田山3号墳出土須恵器のRb-Sr分布図

も大阪陶邑領域に対応する。これらは大阪陶邑産の可能性をもつが、地元産の可能性も否定し切れない。No.6、7、8の3点は同一産地産の須恵器であるが、Rb-Sr分布図よりみて大阪陶邑産の可能性は少ない。これらの3点の須恵器の産地は不明としておく。

第17表 半田山3・7号墳、片島1号墳出土須恵器の分析値

(岩石標準試料SG-1による標準化値で示す)

遺跡名	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	推定産地
半田山3号墳	1	0.449	0.191	1.65	0.722	0.476	中井鶴池、大阪陶邑
	2	0.308	0.422	2.03	0.588	0.617	丸山窯跡
	3	0.341	0.138	2.80	0.441	0.354	大阪陶邑
	4	0.388	0.262	2.12	0.708	0.797	丸山窯跡
	5	0.503	0.106	2.27	0.581	0.315	中井鶴池、大阪陶邑
	6	0.302	0.069	3.50	0.314	0.271	?
	7	0.328	0.074	3.38	0.307	0.285	?
	8	0.330	0.067	3.41	0.285	0.280	?
半田山7号墳	9	0.221	0.081	1.83	0.374	0.196	大阪陶邑的?
	10	0.317	0.052	2.45	0.442	0.174	大阪陶邑
	11	0.390	0.067	1.97	0.582	0.236	大阪陶邑
	12	0.560	0.141	2.35	0.660	0.304	大阪陶邑、中井鶴池
片島1号墳	13	0.457	0.077	2.78	0.517	0.207	大阪陶邑
	14	0.470	0.087	2.75	0.577	0.227	大阪陶邑
	15	0.365	0.038	3.38	0.412	0.108	大阪陶邑
	16	0.469	0.085	3.19	0.583	0.198	大阪陶邑

第8章

おわりに



約98日間の半田山墳墓群の発掘調査ならびに、その後の日数を特定出来ない整理調査の成果は数多く列挙出来る。今までの成果・問題点を現時点で理解・指摘出来る範囲で箇所書きに記してみると、以下のようになる。

1. 半田山は、中世代に中国山地の隆起現象に伴う揖龍低地の沈降作用によって形成された独立丘陵上に築かれた弥生時代前期から古墳時代後期にかけての墓域である。
2. 南側には、同じく独立丘陵である斐久山があり、また北側には中国山地から派生した丘陵が迫っており、揖面平野の東限となる丘陵となっている。揖保川西部（揖西平野）の歴史を考える上に重要な地理的要因を抱有している。
3. 半田山丘陵では、確認された遺構はすべて墓であり、生活遺構が確認されていない点は興味深い。偶然ではあるが、現在においても墓としての機能が主で、地蔵信仰や薬師信仰の社があり祭祀の対象とはなっているが、生活の痕跡は看取出来ない。
4. 半田山山塊では、確実な古墳・墳丘墓は今回報告した7基である。ただ、明覚寺に保管されている家形石棺があることなどから他に古墳・墳丘墓が存在した可能性は十分に考えられる。
5. 現時点では、墳丘墓5基、古墳2基の7基が認められる。墳丘墓では時期差を指摘することは困難であるが、古墳は1世代の時期差が認められる。
6. 5基の墳丘墓については、切り合いや出土遺物から時期差の検討は不可能であるが、立地から見て2号墓だけは後出して築かれたものと思われる。
7. 5基の墳丘墓のうち、1・2号墓については発掘調査を実施し、4~6号墓は測量調査のみ行った。ただ、4・6号墓は土器を表面採集していることから、ほぼ同時期と考えた。
8. 1号墓は立地から見ても支尾根頂上という好位置を占めており、先行して構築された可能性が高い。
9. 1号墓は、複数埋葬で6主体を確認している。墓壇の規模も変えており、大きく2時期に分けられる。主体部の種類は1基だけ土器棺で他は木棺である。
10. 1号墓第1主体は、最初に構築された主体部で、棺内遺物として鉄剣を、棺上遺物として小形彷彿鏡・銅鏡を保有している。明らかな伴出土器は認められなかった。
11. 第1主体は、棺内に一握りの水銀朱を置いている。当時期の葬送儀礼を考える上で興味深い資料と言えよう。
12. 第1主体と第2主体は当初から埋葬することを企図して構築されたものと思われる。同様に第4主体と第5主体もその可能性が高い。
13. 第3主体は墳丘中心から離れた位置に築かれている。だが、棺長は最も長く、小口穴を有している。伴出遺物として鉄鏡が出土している。
14. 第6主体は土器棺で2個体の土器で構成されている。棺身は壺で、棺蓋は把手付きの鉢で

- ある。壺には埋葬用の特殊な土器であろうが、鉢は日常の土器を転用したものと思われる。2個体ともに完形である。半田山周辺の弥生後期の土器棺墓出土の壺の大半は口縁部を欠いている。完形品の資料は数少なく、貴重である。
15. 第4主体と第5主体は土壤を伴っている。棺上の祭祀形態の好資料と言える。
 16. 1号墓主体部は岩盤を堀り込まれている。ただ、周囲に岩を残しており、墓域を表す意図があるのかもしれない。
 17. 2号墓は、尾根鞍部という立地条件の悪いところに位置している。3基の主体部はすべて木棺直葬である。
 18. 2号墓第1主体は中心主体で、墓墳周囲に溝を有する特殊な埋葬形態を採っている。
 19. 2号墓は主体部構築前に地山を堀り込んで土壤を築いている。2基の土壙で、葬送儀礼の一形態かと思われる。
 20. 2号墓出土土器は、2個体ともに搬入品で、共に東四国の人器である。
 21. 3号墳は、横穴式石室を主体部とする通有の円墳である。石室は崩壊していたが、床面の保存状態は良好で、多数の遺物が副葬されていた。
 22. 7号墳は、木棺直葬を主体部とする僅かに規模の大きい円墳である。1墳1主体である。主体部は擾乱を受けていたが、棺の規模は把握出来る。棺内遺物と棺外遺物があり、玉類・一塊りになった鐵鏃・刀子・須恵器が出土している。横穴式石室採用前の古墳として、揖西平野での位置づけが可能である。
 23. 弥生時代前期の墓の検出例は稀少である。掛保川流域で確認されている前期の土器棺例のなかでは最も新しい要素を持っている。また、4基という数の墓の確認例も貴重である。
 24. 1号墓周辺では弥生時代末の土壤墓が確認されている。また、1号墓東方の尾根上ならびに3号墳南東斜面でも土器が散布していることから、多数の墓が築かれていたものと思われる。

このように多くの成果があり、その問題点も多岐にわたるものと思われる。その幾つかについて考えてみてまとめとしたい。

第1節 半田山周辺の遺跡分布について

半田山周辺の道路については、第2章で詳述し、また「龍子向イ山」の報告書のなかで揖西平野を中心とした道路の消長について記述している。ここでは、全体の道路についての流れの概略にとどめ、弥生時代末の揖西平野の状況を見ていきたい。

揖西平野での最も古い足跡は、龍子向イ山遺跡のナイフ形石器である。縄文時代も遺構は検

出されておらず、遺物が小大丸遺跡で見られる程度である。弥生時代になってからの最初の遺跡は、半田山である。前期の土器棺墓などの遺物が揖西平野では弥生時代最古の遺物である。この時期の遺跡は、揖保川流域でも数少なく不明な点が多い。半田山下流約2.1kmの袋尻浅谷遺跡で同様の土器棺墓などが検出されている。その他では太子町常全遺跡でやはり前期の土器棺墓が検出されている程度である。現段階では、遺跡分布などを論じるには資料が少なすぎるようである。中期になっても前半はほとんど遺跡は確認されていない。後半になって始めて、遺跡が増加しミクロなど視点をとれば、変化が生じ始めてくる。それは、揖西平野の南縁で多くの集落跡が営まれることである。西から片島・龍子向イ山・養久乙城山の各遺跡である。片島・龍子向イ山の2遺跡は、さほど比高差のない丘陵上の遺跡であり、日照時間も長く条件的には恵まれている。しかし、養久乙城山遺跡は標高65mを測る高所に立地し、立地条件が良いとは思われない。比高48mを越える急斜面があることからも、高地性集落と考えられる。平野西縁では、長尾タイ山遺跡が存在する。同時期の丘陵上の遺跡である。平野北縁には日山遺跡が存在している。この時期から古墳時代中期までは、遺跡の分布だけから見れば、南縁の方が優勢である。墳丘墓・前期古墳は、養久山墳墓群・龍子三ツ塚古墳で代表されるように、南縁に多く栄かれている。

しかし、古墳時代後期になって、西宮山古墳が北縁（揖西町日山）に構築されたのを二期として、北縁の方が優勢となっていく。それは、後期古墳から次代へと継ぎ、山陽道も北縁の山裾を通っている。古代寺院も同様で、北縁に集中している。

揖西平野の歴史的变化を概略すると、このようなものである。そこで、半田山はどのような位置づけか可能であろうか。

半田山の遺構の時期は、3時期である。弥生時代前期と弥生時代後期そして古墳時代後期の3時期である。遺跡の性格は同じで、すべて墓である。

弥生時代前期の墓は、前述したように揖西平野で唯一の例であることから、比較対象することは出来ない。最も類似した遺跡は、揖保川町の袋尻浅谷遺跡である。やはり、墓しか確認されていない丘陵上の遺跡である。ただ、土器を見ると袋尻浅谷遺跡の方がやや古いように思われる。ともに丘陵上に生活の痕跡を認めることができず、周辺でも確認されていない。半田山からは眺望関係のない養久谷遺跡から前期の土器が出土している。約1.8km南南西に位置している。養久山墳墓群の母集落とか考えられている遺跡である。現状では他に遺跡は知られていないが、直接的な関係があるとは考えられない。もう1つ養久山墳墓群の母集落とか想定されている清水遺跡などから新しい資料の提起を待って考えることが妥当かと思われる。

次の弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、半田山周辺は墓（墳丘墓）の稠密遅滞である。養久山墳墓群で代表されるが、他にも多くの遺跡が存在している。そのうち発掘調査が行われたのは、養久山墳墓群をはじめ赤山墳墓群・白鷺山墳墓群など僅かである。養久山墳墓群

は、一部後期の古墳を含むものの、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての経緯の留める数少ない遺跡である。また、早くに調査されたこともあるて代表的な墳丘墓群として知られている。現在45基の墓が確認されている。その内、1号墳が前期古墳、41・43号墳が後期初めの古墳、19号墳が後期の横穴式石室、39号墳が埴輪を保有する古墳である。それ以外の40基は時期不明のものもあるが、大半は弥生時代後期の墳丘墓と考えられている。しかし、5号墓のように双方中円形という墳形をとる大型の墳丘墓と一般的な通有の墳丘を持つものがある。大型の墳丘墓は4基確認されている。5号墓以外は前方後円形である。調査された限りにおいては、大型のものも通有の墳墓も複数埋葬である。木棺・石棺・土器棺と各種葬法が行われている。これら墳丘墓から竪穴式石室を主体部とする前方後円墳である1号墳への変化は重要なものである。さらに、西側丘陵上に位置する龍子三ツ塚古墳（1号墳）の存在も意味深いものがあろうと思われる。養久山1号墳が、複数埋葬であるのに対して、龍子三ツ塚1号墳は竪穴式石室のみの单次埋葬の前期古墳である。ほぼ、同じ丘陵で弥生時代末から古墳時代前期にかけての系譜がたどれることは、大きなポイントである。半田山墳墓群は、その龍子・養久山丘陵の延長上に立地している。主軸方向は、ほぼ直交しているものの、両者の親縁性は無視できないものと思われる。次に、白鷺山墳墓群は半田山墳墓群の北方約1kmに位置している。不時発見によって調査された墳墓であるが、多大な成果を上げている。特に、半田山墳墓群と比較して指摘されるのは小形仿製鏡が出土していることである。九州製の東限と考えられる遺跡が、ほぼ同じ位置に揖保川を望むように立地している点は、もっとも類似した性格を持っているものかもしれない。他に、平面形が糸巻形になる方形をとる新宮東山墳墓群なども、揖西平野周辺に構築されているが、半田山墳墓群との関係を考える上では、養久山墳墓群と白鷺山墳墓群の影響が強いものと思われる。

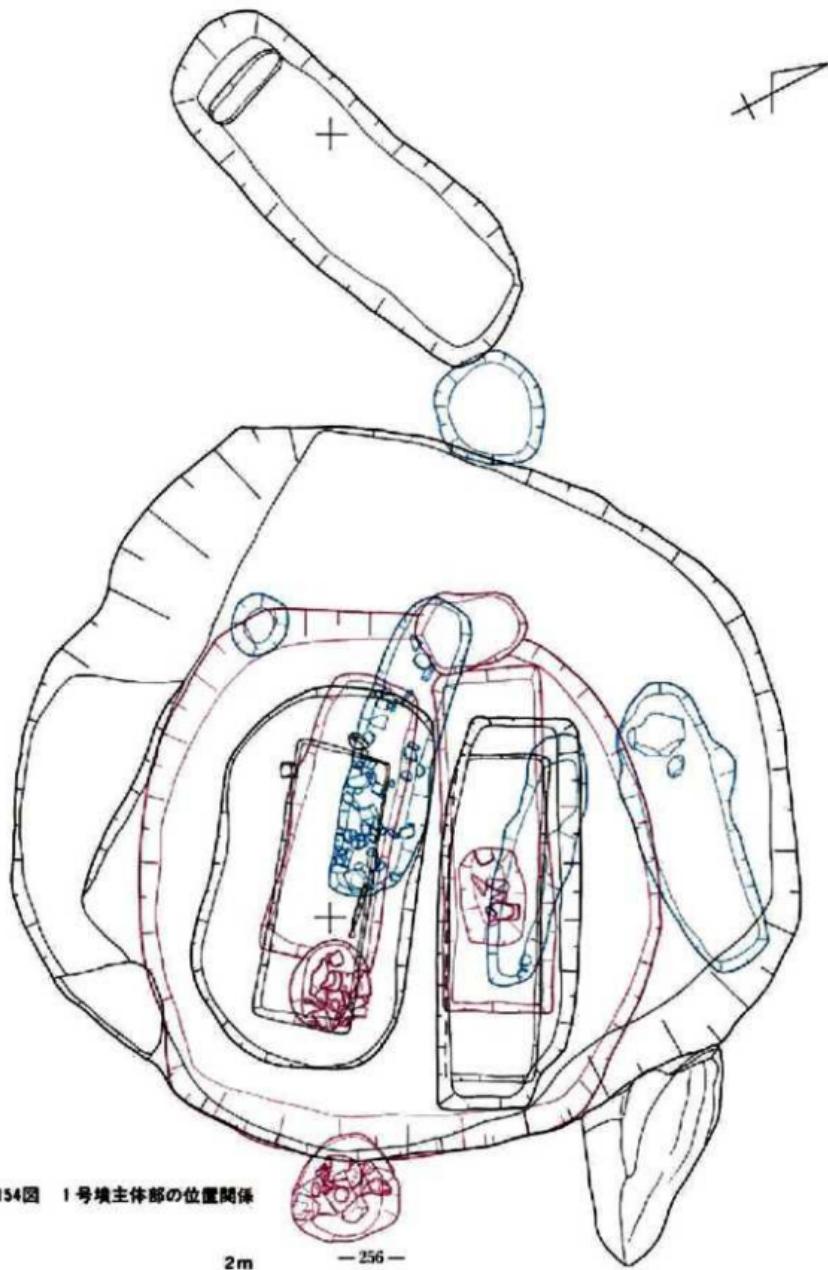
最後に古墳時代後期は、3号墳と7号墳では僅かに時期差が認められる。7号墳が先行して築かれている。7号墳の時期は、揖保川流域に横穴式石室が採用される時期である。ほぼ真北に位置する（7号墳は眺望関係はない）西宮山古墳に穹窿式の石室が構築される墳である。養久山41・43号墳などの古墳に続くものであろう。長尾タイ山古墳群の古墳も前代から同時期にかけて構築された古墳である。長尾タイ山古墳群では1号墳が穹窿式の石室を保有していた可能性があり、西宮山古墳とともに横穴式石室を採用した最初の古墳と考えられている。半田山7号墳は横穴式石室採用の過渡期の古墳と言える。墳丘は、他の時期の墳丘とは異なっている。後期の古墳と比べて、大きく墳丘高は上回っている。墳裾を画する掘り割りも丁寧である。盗掘を受けていることから、出土遺物の比較を出来ないのが残念である。西宮山古墳とは最後の前方後円墳ということで性格が異なることから、出土遺物の内容に当然変化があろうが、長尾タイ山1号墳とも質的に大きな差を生じている。やはり、横穴式石室採用の有無は出土遺物内容にも変化を与えてるものと思われる。ただ、前代の古墳と比べるとやや遺物量は増加して

いたのではないかと想像される。この時期の相西平野の南北の消長を如実に表した結果かと思われる。古墳時代前期まで明らかに南縁の方に遺跡は集中していたが、この時期を境として北縁が主となっていく。古代山陽道がその代表であるが、その画期は西宮山古墳にあるように思われる。最後の前方後円墳という意味は深いようと思われる。古墳時代前期の豪久山1号墳以降相西平野では前方後円墳は構築されていなかった。それが構築され、それによって文化的な変化が生じたのは事実である。その根本が古墳構築にあるのなら、南から北への移動は政治的なものと考えても大過ないものと思われる。その原因が、古代山陽道敷設によるものか氏族間にによるものかは今後の問題としたい。3号墳は、その後に築かれた円墳である。7号墳の上方に位置している。立地は、終末期の古墳に近い占地で、尾根頂部から一段下がったところに築かれている。この時期は、すでに北縁が優位になった時期で、群集墳も北縁には見られるが、南縁では龍子向イ山古墳群の5基が最高である。古墳教も全体的に少なくなっている。ただ、幸いなことに床面が完全に保存されていた。側壁や奥壁は崩壊していたにも関わらず、旧態を保っていたことは、葬送形態を考える上の好資料であろう。

古墳時代後期以降、北縁の方に遺跡が多く見られ、古代山陽も東西に通っているが、南側でも龍子向イ山古墳群の横穴式石室内での火葬や窓跡群が構築されることや龍子長山1号墳の石室再利用などの貴重な例や文化が見られる。さらに莊園となり、個々の特徴は薄れていくものと思われるが、現在に至るまでの歴史には特徴的なことも多々ある。今後、調査が進むと新たな事実もつかめるようになるであろう。

第2節 半田山1号墓の主体部について

半田山1号墓には、6基の主体部が築かれている。木棺5基と土器棺1基であり、層的には3時期に分けられる。主体部構築の順序は、1→2→5→4→6となり、第3主体は第1主体の後か第2主体の後に築かれたものと思われる。大きくは、1・2・3のグループ、4・5・6のグループに分けられる。換言すれば、築造時と追葬時とも言える。後者はさらに第4・5主体と第6主体に分けられよう。最も遅れて構築された第6主体だけが土器棺墓である。さらに上層に土壙墓群に築かれているが、尾根上にも土壙墓が存在することなどから、墳丘墓のうちの時期と考えているので、除外するものとする。ただ、位置関係は第154図の通りである。



第154図 1号墳主体部の位置関係

最初に埋葬されたグループは、大型の二段墓壙を設けた第1・2主体と墳丘盛土下に築かれた第3主体である。第1・2主体は、最初から2体（棺）埋葬を企図したものと思われるもので、計画性があったものと思われる。他の主体部と比べると埋葬形態も立派で丁寧に築かれている。最も深く主体部を置いていること、二段墓壙を設けていること、少量とはいえ水銀朱を棺底に撒いていたこと、副葬品（鉄劍）を保有していること、などと他の主体部と比べて卓越していることが指摘出来よう。その条件によって、さらに棺上遺物として鏡・銅鏡が、棺内遺物として精製鏡が置かれていたものと推測出来る。鏡は第4主体墓壙埋土から、銅鏡は第4・5主体の上段墓壙埋土から出土しているが、ともに出土位置として良好な位置とはいはず、また数点に分かれていたことから、第1主体棺上遺物が移動したものと考えている。第3主体は墳丘下という特殊な位置に築かれた主体部である。しかし、棺の規模は2.75mと6基の主体部の中で最も規模が大きい。また、棺内遺物（鉄鏡）を保有していることも、第1主体以外では見られないことである。最初に埋葬されたグループは、副葬品を保有していることと、規模が大きいことが特徴として指摘できる。

次に埋葬されたグループも当初は木棺である。主体部は築造時と同じであるが、形態・規模や平面位置が異なっている。全体的に縮小しており、約1m以上(1.2~1.45m)径が小さくなっている。大きな差は築造時は二段墓壙であるが、追葬時は明らかに、二段墓壙であるとは言えない点である。築造時と同様に2棺並立して置かれているが、僅かな埋土の変化から第5主体が先行して埋葬されたものと思われる。この主体部の特徴は、土壙を伴っていることである。3基の土器が2主体の木口部などに築かれている。各土壙とともに土器が置かれており、墓上祭祀の一形態かと思われる。どの土器にも完形の土壙が置かれていたものと思われる。棺内には副葬品を置かず、墓上に供獻土器を置くことは注目される。また、最終の埋葬施設は土器棺である。埋葬方法を変えたのは意味があるのだろうか。ほんの僅かではあるが、追葬時の墓壙を切っている。その点からは、少なくとも前段階の埋葬を墓壙全体にまでは意識していなかつたのではないかとも考えられる。しかし、外れた位置に構築している点からは埋葬施設を意図したことかとも考えられる。

さらに次の時期になると、土壙墓を多数構築しているようである。1号墓墳丘上にも3基存在するが、下方の平担面にも認められる土壙墓と同様の性格の墓と考えている。そのため、弥生時代末の集団墓と報告している。横保川に向かう尾根上にも広く土器が分布していることから、多数の墓が営まれていたものと思われる。

このように見ていくと、埋葬施設は第1主体から徐々に規模・内容ともに縮小していることが明らかである。周辺集団関係での位置づけは下降線をたどっているのは明白であろう。

次に主体部の時期であるが、出土遺物から見てみると、時期的に大きな幅を持っているわけではない。遺構の上下関係から築造順の墓壙出土の斐(26)が最も古く、土器棺として使われ

た土器(1)(2)が最も新しいことは明白である。ただ、形式的に順序だてることは可能であっても、器種が異なることから個々の比較として良好な資料とは言えない。大局的に後期後半の範囲であろうことは問題ないものと思われる。第1主体の棺上遺物と考えている鏡もこの時期に入る小形仿製鏡である。重圓文日光鏡に分類されるもので、漁隱洞系の元の鏡に近い仿製鏡であろう。文様が不明確であるが、復原すると第155図のように嚴手文にならうかと思われる。九州で作られたと言われている仿製鏡で、北側に立地する白鷺山墳墓とともに伝播している東限の遺跡である。後期後半よりも古い時期で問題のない鏡である。後期後半でも終末まではいかない時期に埋葬が行われた墳墓と考えている。集団墓出土の土器には、これら土器よりも下るものが含まれており、次代の遺構と考えて問題がないであろう。

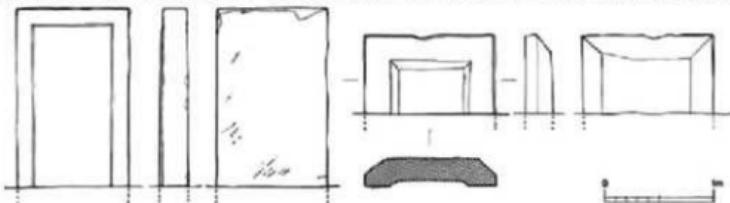
第3節 墓としての半田山について

前述した内容と重複する部分もあるかと思われるが、墓域として利用された半田山丘陵について見てみたい。調査の結果、調査範囲内においては墓以外の性格を明らかに出来る遺構は検出されなかった。生活を予想される遺物も確認出来なかった。しいて挙げれば、丘陵裾における瓦生産者の存在と近世末の土器の出土だけである。それまでは、調査範囲内においては少なくとも墓以外の遺構は存在していない。現実的に眺望は良いものの、生活に適した場とは言い難いかもしれない。しかし、生活に適さないことがその最大の遺跡の特徴とともに、逆にこの丘陵を墓域として利用した理由かもしれない。

検出された墓は大きく3時期から成っている。弥生前期、弥生後期そして古墳後期である。弥生前期は4基の墓を調査している。同じく前期の墓である揖保川下流域の袋井浅谷遺跡も似



第155図 半田山1号墓出土鏡復原図



第156図 半田山8号墳石棺実測図



第157図 半田山8号墳石棺

た立地を示している。時期的には半田山例が後出の遺構である。

次の弥生後期は5基（調査は2基）の墳丘墓と集団墓である。墳丘墓から集団墓へと変化していくようである。1号墓と2号墓の前後関係は断定出来ないものの立地から1号墓の方が先に築かれたと考えるのが一般的であろう。1号墓の埋葬は大きく2時期に分けられることはすでに述べたとおりである。この2時期と2号墓の3種の性格は異なっている。まず、1号墓の築造時は墳形こそ斐久山5号墓・12号墓のように特殊な形態ではないが、鏡・銅鏡を保有していることは大きな意味を持っている。通例これらの遺物の保有は特殊なものと考えられ、有力者に限られるものである。すなわち、斐久山墳墓群・白鷺山墳墓群とともに特別な勢力を保持していたものと思われる。両墳墓群を含めた位置づけが必要であろうと思われる。それに比べて僅かに遅れて築かれた2号墓は尾根筋の鞍部という悪い立地条件もさることながら、2個体の土器しか持っていないという隔絶の感があり、1号墓とは大きく見なっている。出土遺物の内容が2点の土器がともに阿波・讃岐系統の土器であることは注目されよう。それに対して1号墓の追葬段階の土器は基本的には地元の土器であるが、内容的には西國（吉備）の影響を強く受けている。また、棺内に副葬せず、棺上での供獻形態を採用していることも指摘出来る事実である。このように、始めは九州系の小形彷彿鏡を持つ首長墓であったが、次には勢力を擴

少し、西方（吉備と阿波・讃岐）の影響を受けた葬送儀礼を行い、最後には集団墓という小規模な墓を営むという下降線をたどる消長を示す墓域であったようである。

古墳時代になっても美久山丘陵では古墳を構築している。また南西の三ツ塚でも前期の古墳（三ツ塚1・2号墳、鳥坂1・2号墳）が見られるが、半田山丘陵では造墓活動を休止している。中期になども鳥坂3号墳が三ツ塚山麓には築造されるが、半田山丘陵には古墳は営まれていない。古墳が造営されるのはまもなく横穴式石室が採用されるという7号墳からである。歴史的には横穴式石室採用前の古墳ということで興味はあるが、取り立てて特殊な古墳というわけではない。3号墳も同様である。後期の通有の横穴式石室である。ただ、床面での遺物の廟葬状況が良好な資料ではある。古墳後期の墓は確實な資料はこれだけであるが、半田の明覚寺に保管されている石棺（第156図・第157図）がある。凝灰岩質流紋岩製の石棺で、蓋・底・側の3石が残っている。寺北側に元々高い部分があったということで、ここに古墳時代後期末の古墳が築造されていた可能性が高い。

半田山丘陵とくに西側にも墓が築かれていたかもしれない。ただ、現時点において調査者として明らかな墳丘を確認出来なかったことから触れなかっただけで、十分に墓が存在している可能性は考えられる。

調査段階においては、いつものことながらすぐにも報告書を刊行しようと意気込んでいた。しかし、早いもので数年が過ぎてしまい、刊行までの日時（年月）は長い方かもしれない。時間があれば、良いものが出来るわけではないのだが、ついつい遅くなってしまった。すべて担当者の怠慢ではあるが、しかし、なかなか諦め切れないのは遺跡に内在する力があったからでもある。今後、このような遺跡は調査することは出来ないだろうと思うと、やはり考えてしまうものである。ご寛恕戴くとともにご教示賜りますようお願い致します。また、調査を担当できる状況になったことに感謝するとともに、これだけの遺跡でありながら保護することもできず、十分に咀嚼活用出来なかったことを遺跡に対して詫びる気持ちでいっぱいです。十分に報告出来なかったところを多くの方々に活用戴けることによって報いられることを願っています。

兵庫県文化財調査報告 第65号

1989年3月31日発行

早　田　山

—山陽自動車道埋蔵文化財調査報告書—

編集 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

兵庫県埋蔵文化財調査事務所

〒652神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

TEL 078(531)7011

発行 兵　庫　県　教　育　委　員　会

〒650神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL 078(341)7711

印刷 日　本　写　真　印　刷　株　式　会　社

〒604京都市中京区壬生花井町3

TEL 075(811)8111
